

御中軍先鋒へ被差加。

○大河内輝照、右京亮、高崎藩主、軍費金及ヒ銃器ヲ督府ニ獻ス、氷川神社ノ祠官モ亦神符ヲ獻ス。

記

一馬上元込銃 貳拾挺 一彈藥 千發 一金壹萬兩
右ハ兼テ御布令之御趣旨ヲ奉シ、爲軍費用、書面之通指上申候也。

三月十二日

松平右京亮家來
堤 金一郎

大河内輝聲家記

○輝聲家記ニ云、三月十二日、爲軍資國力相應金穀調達可致旨、兼テ御布告有之ニ付、東山道總督下向之節、右之通差出候處、岩倉殿執事方御落手相成。

○今般 官軍爲 御先鋒御下向被遊候ニ付、武州一宮御本社靈主宮於神前、天下泰平御陣中御安全御祈禱奉抽丹誠、右神札献上仕度、此段奉願上候、以上。

辰三月十二日

武州一宮筆頭神主
角井出雲印
總督府叢紙

十三日、二督、蕨驛ヲ發シ、板橋驛ニ抵ル、諸藩兵皆來會ス、乃チ之ヲ犒ヒ、分テ四近ヲ巡警セシム。

○總督府日記ニ云、三月十三日申前刻蕨御出馬、日暮板橋御著陣ニ相成候事。

一金二枚 彦根 一同十兩 岡田 一同一枚宛 岩村

飯田 岩村田 加納

須坂 岩城平 西大路

右ハ日々精勤之段、苦勞ニ被 思召候ニ付、爲御酒料被下置候事、諸藩巡邏斥候夫々被仰付候事、但番兵モ同様之事、

右御陣後番兵五ヶ所、

岩村 岡田
薩州 長州 大垣 彦根

右巡邏斥候、

永井以下ハ便利所々巡邏斥候。

○東山道戰記ニ云、總督、岩倉殿ノ二公及隨從ノ兵數百人、三月武州板橋驛へ到著相成、暫ク同所ニ逗留有之、驛ノ四方へハ番兵ヲ出シテ、各藩、持口ヲ相固メ、東海、北陸等ノ兵到著ヲ被相待候。

○親子内親王、靜寬院宮、手書ヲ總督ニ致シテ、江戸物情洵々ノ狀ヲ報シ、姑ク進軍ヲ緩クセンコトヲ請フ、總督復書シテ、軍國ノ事、一ニ大總督ノ指揮ヲ仰クヲ以テ、私ニ其命ニ應スルコト能ハサルヲ答フ。

返すく御征伐御止の様願候にては、決して無之ま、あしからず御聞取の様、御頼申入々、めて度かしく、追く春暖催々、彌御機嫌よく成らせられ候、めて度忝り々、左様に候へは、此度は誠に恐入候事件に付、此程藤上京

致し、東歸の上委細承り候處、實く恐入候事共に候、慶喜事、悔悟伏罪、東叡山に謹慎罷在候、官軍、御進に相成候ても、不敬之義無之様、嚴しく申付御座候へ共、何分四方の士民輻輳之土地にも候へは、多人數のうちには心得違の者候て、其邊より恭順之意取失候ては、朝廷へ恐入候已ならず、當家の安危にか、はり候事と、其邊深く心配致し、鎮撫の事に付願之義有之、大總督宮殿、府中に御滞陣の御様子故、藤事、此日出立致し、何卒く右御返答伺候迄の處、其御手の御軍勢御進は、しはし御猶豫の事、ふして願、右の次第、急便にて、

大總督宮殿へ申入置候ま、何卒御著府の處御猶豫願上、双方共下輩の所より大事を引出し候ては、實以残念至極に存、ま、私心中御憐察成下され、御勘辨の様くれくも御頼申入、委細は玉島より御聞取の様と存、いそぎ大々らん書、よろしく御はんし御頼申入、先は早々申入、可祝。

三月十一日認

靜 寬 院

いは倉大夫殿へ參る 總督府叢紙
靜寬院宮日誌

○本書、日誌載スル所、叢紙ト小異アリ、今、叢紙ニ從フ。

○くれくも御用はんにあらせられ候御中ながら、よろしく御さたの御事御頼申入、めて度かしく。

御まへ様かた迄申入、彌御機嫌よく成らせられ、御沙た御めて度有難、
岩倉大夫殿にも御機嫌よく入らせられ候御事、御めて度御歡申入、さやうに候へは、ま事に此度の御次第、何共仰上られやうも無深く恐入、右に付御鎮せい御頼のため、靜寬院宮様より 岩倉大夫殿へ御書進られ候御使 玉島をさしたたられ候ま、御都合の御よろ敷御場所にて、御逢遊はし戴度存上、此由よろしく御さた御申入被成下され候やう、御頼申入、何かたえにても御さし圖のかたへまいり、心得にて、此宿にむかへ居、よろしく御さし圖遊はし戴度、何も御取計ひの御事御頼み申入、かしく。

靜寬院宮様にて

玉 し ま

岩倉大夫様 御雜しやう中に

用事

○今般 靜寬院宮様爲 御使、御年寄玉島並附添之者共、當宿迄罷越候處、今日 岩倉様、大宮宿御晝休之由承候ニ付、御文玉島ヨリ申上度儀御座候間、爲持差上申候、可然御披露之段、宜御取計之程奉願候、以上。

靜寬院宮様御附 番之頭

三月十二日

波多野 忠之丞
本多 傳十郎

岩倉様 御雜掌中様以上總督
府叢紙

○總督府叢紙ニ云、三月十三日、和宮之御直書、老女玉島ナル者持來ル也。

○總督内親王へ復書

謹て御文奉拜見候、其後は久々 御機嫌も不奉伺深恐入、扱此度ははからさる御大變に立至り、主上にも御配慮不淺、私共にも深奉恐入候、夫に付、東山道の總督被 仰付、不得止事下向仕候事にて、決て無法のあらしくしき輕卒之所業仕候次第は毛頭無之候間、御心安く被 思召候よふ奉願上、誠にく御心痛の御趣意、私共にも嚙々御心配の御事にもと、乍恐奉存上候、此上は慶喜に於て、謹慎之廉相あらはれ候は、決て戰爭を好のみ候譯には無之、何分にも此方にては、す、むもしりそくも大總督の御さしつをうけ、間、御沙汰の御趣は、私共よりいかよふとも相決御答申上兼候へ共、御趣意之處は深く恐入、幾重にも相守り居候間、御配慮不被爲在候様奉願候、先年兒中種々 御高恩蒙り、御事

故、とふそく御沙汰の通り御返事申上度存上り得共、右申上候通り、私一人の計らひにも参り兼、誠に殘念之事に御座候、私共、此度之御用被 仰付候も、心にまかせざる事ながら、御存知も被爲在候通り、父事も 宮様之御事に付、長々のつゝ、しみの所、此度御免被 仰付候次第にて、私此度の御用御請不申上にては、又々いかよふの御沙汰奉蒙候もはかりかたく、旁心痛のみつかまつりやむことを得す下向仕候譯にて、其邊御推察被下置、不惡思召被下置候様、偏にく願上り、先は御返事迄あらくめて度かしく。

三月十三日 總督府 叢紙

○本書、原記草稿ト題スレトモ、下ニ載スル所ノ靜寛院宮日誌、返書文言大略云々ト合ス、蓋シ、現ニ此書ヲ呈セシナルヘシ。

○靜寛院宮日誌ニ云、三月十日戌刻、板橋宿薩、長隊長へ大目付、歎願持参に付返答書もち歸り、岩倉大夫近日著府の由故、女使差立御止願吳候様、錦を以、田安より頼、承知の趣返答す、玉島へ申付、

十一日、午刻過、玉島出立、直書持参、

十三日酉刻過、玉島歸参、板橋本陣へ今朝玉島出、岩倉大夫、同八千丸面會、返書持歸る、返書文言大略、大總督御下知次第の事故、私に取計は相成難候へ共、御下知迄は當宿に滞留のよし申越さる、并に當地の人氣、精々鎮撫可致様、官軍下々へも申付られ候趣、文并に玉島へ口上にて申聞られ候事。

○靜寛院宮日誌ニ云、三月十日、此度東山道より御す、みの官軍へ、何卒人氣や和らき、官軍よりむほう有らせられぬ様御頼みに相成候、右御使玉しま殿へ仰付られ候事。

○督府、川越藩ニ命シテ、役夫及ヒ薪ヲ供給セシム。

松井周防守へ

御軍用ニ付、精選人足五十人、并薪壹萬束、早々可指出旨 御沙汰候間、御達申入候也。

東山道總督府

辰三月十三日

執

事

總督府諸達留
川越藩記

○川越藩記ニ云、三月十三日、右御達ニ付、川越表へ申遣、同十五日、精選人足五拾人差出、同十九日、薪一万束取揃、御總督府金穀方へ相納申候。

○松井康英家記ニ云、三月廿二日、先般 御用ニ付、人足五拾人差出置候處、右人數之内拾人殘置、餘ハ差歸不苦、尤御用之節ハ、無差支至急差出候様、藤井九成丞ヨリ御達有之。

○新田俊純、手兵^{五十六人}ヲ率テ、板橋驛ニ至ル、會マ其采邑土民蜂起シ、徳川氏連竄ノ徒ト共ニ、傍近ヲ劫掠スルヲ以テ、督府、俊純ニ命シ、住キテ之ヲ鎮輯セシム。

○新田俊純從軍事蹟ニ云、三月八日、官軍へ隨從被仰付候ニ付、舊臣等、且有志之者引率、同月十三日、中山道板橋驛御本營へ參陣仕候所、在所表土兵之蜂起甚敷、不容易事變ニ立至リ、村々頑愚ノ者共猛勢不可制事ト相成、江戸脱走之歩兵共、追追相加ハリ、村々横行致シ、人家打毀、既ニ諸候之居城ニモ可討入勢相成候ニ付、右鎮撫方被仰付候ニ付、速ニ歸國仕、新田郡、山田郡之内六十八ヶ村家來共巡邏爲致、右村々ヨリ請書ヲ爲差出及靜謐候段、總督府へ御届申上候事。

○附錄一條

先刻歎願書奉差上候ニ付、奉蒙御達重々奉恐入候、右歎願之趣意ハ、只々深 朝廷ヲ尊敬仕候之餘リ、不肖之私、不調法之儀出來仕候テハ重々奉恐入候ニ付、別紙之趣奉歎願候儀ニ御座候、御達之趣一々奉恐入候、過日御渡相成候御達書、^{蓋八日}ヲ指^ス、只今家來、在所表へ差遣シ取寄候上返上可仕候、夫迄之處御猶豫之儀偏ニ奉願候、右之趣奉蒙御達候之上、又々奉歎願

候儀深奉恐入候得共、斯奉蒙御達候上ハ、不及是非候次第、元ヨリ軍用等之儀差支御座候間辻モ、今度之御軍役行届申間敷ト奉存候得共、行届不申候迄モ相勤申度心底ニ御座候間、何卒出格之 思召ヲ以、此度之御軍役被 仰付被成下候ハ、難有仕合奉存候、乍恐、此段奉歎願候、全私心得違ヨリ右之奉蒙御達、重々奉恐入候、依之、御採用無御座候迄モ奉歎願度奉存候、偏御憐愍之程奉願上候、此段謹テ奉歎願候、以上。

三月十五日

新田 滿次郎

總督府叢紙

○本書中、所謂前請書ハ之ヲ佚ス、因テ姑ク此ニ附記ス。

○上野ノ亂民、信濃地方ニ闖入シ、良民ヲ劫掠スルヲ以テ、小諸藩兵ヲ封疆ニ出シテ之ニ備フ、是日、書ヲ督府ニ上テ、其狀ヲ申ス。

上州南牧邊村々百姓共、多人數致蜂起、内山峠ヲ越、追々信州佐久郡近領迄暴行、質屋、酒屋、穀屋、蠶種絲師、其外有德之者共ハ融通掛合、及異儀候得ハ直打毀シ、或ハ致放火等候由、次第ニ人數相集、領内ヘモ入込可申風聞モ有之、甚不穩勢ニ相聞候間、爲鎮靜人數、領分中山道筋其外ハ分配操出シ申候、此段不取敢先御届申上候様申付候、以上。

三月十三日

牧野 遠江守内

隈野 司馬之助

總督府叢紙
牧野康民家記

○康民家記ニ云、三月十三日、上州百姓トモ多人數暴行、追々近傍ヘ相迫リ候様子ニ相聞、甚不穩、依之、爲鎮靜人數領内佐久郡森山村、並相濱村ヘ分配差出候ニ付、上州御出陣先總督府岩倉殿ヘ、左之通御届書、使者ヲ以差出ス。

○松平忠誠、銃器ヲ督府ニ獻ス。

○總督府日記ニ云、三月十三日、ミネール銃十五挺、但附屬之品三ツ股ニツ玉取付、歩兵元込銃十五挺、但附屬之品三ツ股ニツ、元込四百廢、附、彈藥六千五百發、右品々、松下總守ヨリ差出候事。

○參謀板垣正形等、進テ府中驛ニ至ル、東叡山ノ僧徒、人道公現親王ノ使ト稱シ、軍門ニ來リテ進軍ヲ止メンコトヲ請フ、正形、之ヲ却ク。

○山内豐範家記ニ云、三月十三日、八王子驛ヲ發シ、府中驛ニ泊ス、時ニ薩人某、大總督府ノ命ヲ奉シ來報ス、諸道官軍、三月十五日ヲ以テ齊ク江戸ニ入ル、其ノ時、田安家、和宮様ヲ奉護シ、甲府ニ御立退ノ密策ニ付、當手ノ軍、道ヲ開キ猥ノ義無之様、隊長而已ニ心得サセ置クヘシト、此ノ時ニ海道ノ兵、戸塚近傍ニ在リ、我軍已ニ府中驛ニ至ル、僧侶二三輩來リ、我軍ヲ迎ヘ、上野ノ宮ノ令ヲ傳ヘ云、宮ヨリ東海道總督府ヘ歎願ノ筋有之ニ付、其中、當道ノ兵モ先ツ進軍ヲ止ムヘシト、則答テ曰、我等、朝命ヲ受ケ進發ス、東海、東山兩道ノ總督ノ命ニ非サレハ、敢テ命ヲ不奉、況ヤ貴僧二三ノ言、其ノ信偽亦、猶未タ知ルヘカラサルヲヤ、僧、畏縮シテ去ル。

十四日、督府、薩摩、長門、彦根、大垣四藩兵ニ令シ、明日ヲ以テ江戸ヲ進撃セシム、會マ徳川慶喜ノ臣勝義邦、^{安房}大總督府參謀西郷隆盛^{吉之助、薩藩士}ニ就キテ、慶喜謝罪ノ條款ヲ陳シ、且申請スル所アリ、隆盛乃チ二督ニ牒シテ、假ニ明日ノ進軍ヲ止ム、尋テ大總督、二督ニ令シテ、江戸進撃ノ期ヲ延フ。

一大垣 一中隊 一彦根 一中隊 一薩州 一小隊 一長州 一小隊

右、江戸御進軍ニ付斥候被 仰付候、尤勞佚御繰替ニ相成候ニ付、先達テ於梁田表令戰爭候隙ハ差扣ヘ、餘隊ヲ以相勤候様

可取計旨被 仰出候間、比段御達申入候也。

三月

總督府

參

謀

薩州 長州 彦根 大垣 御人數中 總督府諸達留 大垣藩記

○ 斥候隊へ御旗被相渡候ニ付、右御旗守衛トシテ、家來四人、長一人可被差出候、尤壯健之人ヲ相撰可申様被 仰出候事。
座光寺 盈太郎

總督府

參

謀

辰 三月

總督府諸達留

○ 大總督宮ヨリ御下知被爲在候ニ付、明十五日進軍被 仰出、辰刻斥候隊御繰リ出ニ相成候間、人數相揃候上可被届出候、其節、右隊中へ御旗御渡可相成候、右之外、先手並中軍之諸隊ハ出陣用意ニテ御下知可被相待候事、
一小荷駄ハ列藩相應之警衛人數相添、先當宿ニ殘シ置候様、可被相心得候、
一出陣之兵士ハ、各貳度分之腰兵糧用意ニテ可被罷出候、
一兵糧差繼之節、中途難儀ニ及候ハ、警衛隊ヲ付可差通候、
右之通被 仰出候事。
追テ先達ヲ被下置候錦御肩印、明十五日ヨリ改テ左肩ニ附可申様被 仰出候間、此段御心得可被成候事。

辰三月十四日

總督府

參

謀

薩州 長州 彦根 大垣
岩村 飯田 岩村田 加納
西大路 磐城平 右御人數中 總督府諸達留 大垣 飯田藩記

○ 東山道總督江戸進撃ノ節、手配草稿、

第一 斥候隊繰出

第二 御手配仰渡

飛鳥山人數、上野ヨリ繰出無他故候ハ、筋違邊ヨリ入城、
大垣人數、加州屋敷邊ヨリ神田筋違迄之邊出張之事、
薩、長數隊、護國寺方ヨリ押寄ル事、

右通、砲聲聞へ次渡、御繰出之御内達、

一 斥候隊繰出候ハ、直ニ座光寺隊ハ護國寺へ繰込、御本陣場取堅ノ用意可有之事、
一 砲聲聞へ候ハ、御本陣護國寺へ御進、並長州一小隊御中軍ヲ以テ御警衛之事、
一 遠藤人數へ板橋宿警衛被 仰付候事、
一 斥候隊御繰出相成候ハ、因、土之方ニモ砲聲繼ニ聞へ次第、見込ヲ以テ相働候様被仰達候事。 總督府 濃紙

○ 諸藩兵へ達書

過日大總督府ヨリ被 仰出候通、明十五日、斥候隊繰出候へトモ、尙 靜寛院宮様ヨリ 大總督へ御申立ノ次第モ有之、一

先徳川家來共へ應接ニモ可相成候間、戰爭取掛候儀ハ、何分御下知可相待、疎忽之働無之様、兵士一同へ可申達事。

三月十四日

右之趣、御沙汰ニ付御達申入候也。

總督府

參

謀

池田輝知家記

○御書辱拜誦仕候、御軍務益御多端奉遠察候、大總督宮御沙汰之趣奉拜承候、件々遵奉可仕候、扱當道寄手、昨十三日、中軍板橋驛着陣、明十五日ヨリ前軍斥候隊相進メ可申心得ニ候、過日來處置仕候軍中之件々、委曲取調追テ言上可仕候、恐惶謹言。

辰三月十四日

八千九百具定

大總督府 參謀御中 總督府諸達留
東征總督記

○明日江戸打入之儀相達置候得共、大總督宮ヨリ被仰越候次第モ有之、明日之處先相見合セ可申、尙日限之義ハ、追テ可及沙汰候間、此旨可相心得候事。

三月十四日

右之通被 仰出候間、御達シ申入候也。

總督府

參謀

薩州 長州 彦根 大垣

西大路 岩村 加納 飯田

岩村田 岩城平 右御人數中 總督府諸達留、池田輝知家記、大垣、飯田藩記

○按スルニ、西郷隆盛進軍ヲ止メシノ令、別ニ見ル所ナシ、本書中大總督宮云々トアレトモ、其實此時ハ隆盛ノ假令ニシテ、大總督ノ真令ハ十七日ニアリ。

○總督府日記ニ云、三月十四日、明日斥候隊進軍被仰出候處、大總督宮ヨリ御沙汰之御次第モ有之、先御見合セニ相成候事。

○二十四日、二督、軍防局ニ遺ル書節錄

三月十三日、板橋驛へ着ス、賊情不容易之勢ニ付、嚴重手配等致候處、同十四日、大總督府ヨリ明十五日江戸進擊之儀、追テ沙汰有之迄可相見合旨、被 仰越候事。上下略

斥候隊へ被下置候御旗守衛之儀、過日被仰附置候處、思召モ有之、右守衛之儀ハ被免候條、此旨可被相心得候事。

總督府

參

謀

三月十七日

座光寺盈大郎 以上總督府諸達留

○十七日、二督へ達書

三月十五日、江城進擊之布令致シ置候處、方略之義モ有之、改テ期限可申達候、其内諸兵嚴肅輕舉無之様可爲肝要旨、大總督宮被 仰出候事。

大總督府

三月

參

謀

總督府叢紙

○諸軍へ達書

三月十五日、江城進撃之布令致シ置候處。以下、上文ニ同シ、

右之趣從 大總督府被 仰出候條、諸軍一同心得違無之様可致旨 御沙汰ニ付、此段御達申入候也。

東山道總督府

參

謀

總督府諸達留
池田輝知家記

戊辰三月十九日

○二督、薩摩、長門、大垣三藩兵ノ梁田驛ノ役ニ從ヒシ者ヲ召見シテ、之ヲ犒フ。

○總督府日記ニ云、三月十四日、薩、長、大垣三藩之梁田驛戰爭之兵士へ、兩總督公御對面被爲在、八千丸様御手自御酒瓶ヲ御取ニ相成賜リ候事。

○督府、岩槻藩ニ令シテ、管内ノ兇徒ヲ緝捕セシム。

○大岡忠實家記ニ云、三月十四日、東山道御總督岩倉様、板橋宿御本營へ重臣被召呼、岩村精一郎左之通被仰渡候、市中近郷近村、逆徒共立廻リ候ハ、先可及應接、及亂妨候ハ、召捕、又ハ討捨、及砲發候共不苦、召捕ハ兵器等取揚候ハハ預置、追テ相届可申旨、

右被仰付候ニ付、岩槻ヨリ三四里四方之所ヲ持場ト相定、晝夜巡邏人數差出申候然ル所、處々百姓共黨ヲ結ヒ、有福之者へ押入、及強談、加之、放火致シ候ニ付、持場内へハ諸方へ人數ヲ配リ、右崩シ有之分、夫々教諭ヲ加へ、又ハ重立候者共、一時心得違ヲ募候得ハ、答申付及鎮靜申候。

○堀之美、金穀ヲ督府ニ献ス。

○堀之美家記ニ云、三月十四日、東山道先鋒總督府板橋御本營へ金千兩、米七百俵ヲ江戸邸ヨリ重臣ヲ以テ上ツル其證、
證、
一金 千兩 一米 七百俵 代金七百兩
右差出、慥致落手候事。

東山道總督府

執

事判

辰三月十四日

堀 右京亮殿

○參謀板垣正形等、進テ新宿驛ニ至リ、千駄ヶ谷、泉二村ノ火藥庫ヲ封ス。

○西尾爲忠事蹟ニ云、三月十四日、内藤新宿ニ着ス。原註、是日、全軍此ニ著陣ス、

○池田輝知家記ニ云、三月十四日、内藤新宿ニ達シ宿陣、同所滞陣中、左ノ箇所ニテ、左ノ通見當リ封印附置候事。

千駄ヶ谷鐵砲場ニテ 一銃砲器械彈藥庫數棟 井上靜雄隊

泉村ニテ 一右同斷 同前

山根留次郎隊

○山内豐範家記ニ云、三月十四日、府中ヲ發シ、江戸四ツ谷新宿ニ著ス、我全軍、内藤藩邸ニ入ル、始メ諏訪ヲ發スルニ當リ、

復古外記 東山道戰記 第七 明治元年三月十四日

高島、高遠ノ二藩、因、土兵食方ノ命アリ、故ニ兩藩ノ官吏、我軍ニ屬ス、内藤藩邸ニ入ル、亦其緣故ニ依ル、然ルニ因軍獨リ新宿ニ泊ス、我軍、邸内ニ露營シ、兵ヲ宿ノ兩端ニ出シ、以テ武家ノ出入ヲ偵視ス、同十五日、兵食方ノ乞ニ依リ、我軍亦、新宿ニ泊ス、而シテ別ニ數隊ヲ邸内ニ交番セシメ、不時ノ據ル所トス、

復古外記 東山道戰記 第七 終

元修史局掌記 豊原資 清纂輯

復古外記 稿本

東山道戰記 第八

自明治元年三月十五日
至同 二十五日

三月十五日、督府、松平忠誠ノ請ヲ聽シテ、藩兵ヲ二小隊、砲四門徵シ、之ヲ長門藩兵ニ屬ス。

松平下總守

今度、其藩出張之人數、長州藩へ附屬申付候間、諸事彼藩之指揮ヲ受ケ、精々可致盡力候事。

戊辰 三月 總督府諸達留
松平忠誠家記

○本條、家記十六日ニ收ム、今達留ニ從フ。

○忠誠家記ニ云、三月、東山道 總督府、領分熊谷驛御通行ノ節、同月十二日ヨリ板橋驛御滯陣中、爲御警衛貳小隊、大砲四門、其外附屬役員出張中、同月十六日右ノ通御達。

長州藩

今度、松平下總守出兵之儀願出候ニ付、其藩へ附屬申付候間、右人數一同 朝威ニ服從シ、實効相立候様、精々可致指揮候事。

戊辰 三月 總督府
諸達留

○二十三日達書ニ通

復古外記 東山道戰記 第八 明治元年三月十五日

長州附屬先被 仰付候事。

三月

忍 一 小 隊

忍 一 小 隊

御中軍附屬被 仰付候事。

三月 以上松平 忠敬家記

○松平直克、大和守、前橋藩主、秋元禮朝、安藤信勇、吉井信謹、銃器及ヒ金穀ヲ督府ニ獻ス。

○總督府日記ニ云、三月十五日、馬上元込銃五挺、短ミネール銃二十五挺、胴亂三十、彈藥、但雷管共五千、鞍置馬、但口付共二匹、右之通、松平大和守ヨリ指出シ候事、

同二十五日、二十寸白砲二丁、彈藥並道具付、松平大和守ヨリ差出ス。

○秋元與朝家記ニ云、三月十五日、東山道總督府行營先へ、重臣齋田明善ヲ以、四斤施條砲二門、金貳萬圓ヲ軍資ニ供ス、以テ寸効ヲ表ス、依テ砲手十五名、板橋宿本營へ可出之御達有之候事、

十七日、去ル十五日重臣へ御達有之候通、砲手拾五名、板橋宿御本營へ出張爲致候事。

○市橋長義家記ニ云、三月十五日、安藤理三郎ヨリ左之通御用立申度段、願之通被仰付候、

玄米貳百四拾俵 但三十三升六合入

右納方大垣、西大路へ申談候様、御沙汰之趣申出候ニ付、明日ヨリ當驛加州邸へ積送り可申様申聞。

覺、

一鉛 拾貫目餘 一合藥小粒 拾貫目餘

右之通、就 御沙汰、用意之内取分相納申候、以上。

辰三月十五日

吉井鉄丸家來

小原麻次郎

總督府叢紙

十六日、督府、大垣、西大路二藩ノ、力ヲ信濃諸藩、金穀按檢ノ事ニ竭セシヲ賞ス。

各通 大 垣 藩へ

市橋下總守へ

今度、信濃國大小名之金穀、彈藥取調方、其藩へ被申付置候處、殊ニ盡力之趣神妙ニ候、尙此上爲國家諸事精々可被致勉勵候事。

戊辰 三月

東山道總督府

參 謀

總督府諸達留、戸田氏共市橋長義家記

○桶川、鴻巢傍近平定ニ就クヲ以テ、大監察北島秀朝、須坂藩兵ト共ニ督府ニ詣テ、復命ス、督府乃チ藩兵ノ功勞ヲ褒慰ス。

○總督府日記ニ云、三月十六日、北島仙太郎、祖式金八郎、右一揆鎮定成功之上、歸著致候事。

○堀直明家記ニ云、三月十六日、以御剪紙、隊長小林要右衛門、劔持由右衛門兩人、御本陣へ被 召出、御目見被 仰付

復古外記 東山道戰記 第八 明治元年三月十六日

御懇之蒙 上意、
上意寫、

此度、一揆鎮撫トシテ差向候處、一同究力精義、依テ早速鎮靜、満足ニ存ル、此上盡力頼入、
右主意ヲ蒙リ、隊長兩人へ金貳千正宛、兵士一同へ金三拾七兩貳步、於御前拜領被 仰付。

○督府、勘合印鑑ヲ碓氷、板橋間各驛ニ下付シ、傳遞ヲ請フ者ハ、之ヲ照シテ後供給セシム。

東山道總督御印鑑 二十餘枚

別紙之印鑑、宿々へ渡置候間、引合シ之上、人馬繼立可致候、若無印鑑ニテ通行之者ハ、人馬繼立決テ致間敷、萬一及亂妨候者、無用捨召補置、總督御本陣へ可訴出、手ニ餘リ候ハ、討取候テモ不苦候間、此旨可相心得候事。

東山道總督府

執

事

三月十六日

板橋ヨリ碓氷峠迄 宿々間屋 役人中總督府諸達留

○德川氏ノ臣大森某達太郎、精銳隊士以下三人、粗暴ノ徒ヲ鎮制スルト稱シ、來テ庚申塚ニ屯ス、督府、敵情測ルヘカラサルヲ以テ、諸軍ヲ戒メテ不虞ニ備フ。

○諸軍へ達書三通

德川家來 精銳隊

大森 達太郎

押田 六藏

中島 橘三郎

右之者、明十七日ヨリ、當驛ヨリ十八丁程前路、庚申塚ト申處ニ出張致シ居候趣届出候、右ハ粗暴之徒、万一官軍へ對シ無

禮有之候テハ恐入候儀ニ付、爲警衛罷出候儀ニテ、往來之人數篤ト相改メ、別テ江戸方ヨリ參り候者ハ、嚴重取調可申、粗暴之徒、若多人數參り候節ハ、早速官軍へ相報シ、右精銳隊上野ニ罷在候者共呼寄、雙方ヨリ取押致シ度趣ニ候間、此旨可被相心得候事。

追テ右之者共ヨリ差出シ候挑灯印、并合印等、別紙回達致シ候間、熟知可被致候事。

御本陣

執

事

三月十六日

薩州 長州 大垣 彦根

岩村 飯田 須阪 岩村田

西大路 加納 磐城平 高須

郡上 右御人數中

○別紙、提灯印、合印ハ之ヲ略ス。

○別紙前條之通、德川家來申出候趣、敵情不可測候條、諸軍一同油斷無之様、精々可心掛旨 御沙汰候事。

御本陣

執

事

三月十六日

○總督府日記ニ云、三月十八日ヨリ、庚申塚ニ詰ル人數、姓名、參謀へ出。

德川家來 目付

夏目次郎左衛門

川勝藤兵衛

徒目付

伴 國太郎

猪飼甚三郎

復古外記

東山道戰記 第八 明治元年三月十六日

以上總督府諸達留、大垣藩記、内藤正誠家記

小人目付 内田幸太郎 石野平一 鈴木半兵衛
池永丹次郎

○本多助成、軍費金ヲ督府ニ献ス。

證、

一金子壹万五千兩

右差出、慥ニ落手之事。

辰三月十六日

本多 豊後守 彦飯山藩記

東山道總督府

執

事

十七日、督府、薩摩、長門、彦根、大垣四藩兵ヲ分チテ飛鳥山及ヒ王子、巢鴨二村ニ駐屯セシメ、岩村、飯田、岩村田三藩兵ヲ遣シテ、庚申塚ニ屯據セシム、又、軍中警報ノ制ヲ定ム。

先鋒四藩之内、一小隊宛、飛鳥山、王子邊へ差出シ置候様可致、尤本陣ヨリ德川目付之輩へ談判之上、出張可致候事。

三月十七日

右之通、被 仰出候條、御達申入候也。

總督府

執

事

薩州 長州 彦根 大垣 御人數中

長州藩 彦根藩

右兩藩之人數、薩州、大垣ト相合シ、飛鳥山、王子邊へ出張可致旨申付置候處、四藩之人數一同彼地ニ在陣致シ候テハ、至極混雜之趣ニ相聞へ、且僉議之次第モ有之候間、兩藩之儀ハ、改テ巢鴨邊へ出兵申付候條、此旨可相心得候事。

戊辰三月十七日

右之通、被 仰出候間、御達申入候也。

總督府

參

謀

長州

彦根 御人數中以上總督府諸達留

○總督府日記ニ云、三月十八日、薩、大垣ハ飛鳥山、王子邊へ、長州、彦根ハ巢鴨邊へ、各一小隊宛出張致候事。

○慶應出軍戰狀ニ云、三月十三日、江戸板橋宿ニ著陣、同十八日飛鳥山金輪寺へ致轉陣、四月廿四日迄滯陣。

○松平乘命家記ニ云、三月十七日、徳川家人數庚申塚ニ出張、陽ニ鎮靜方ト唱候得共、陰ニ斥候隊ト被察候付、官軍ヨリモ斥候隊無之テハ應稱如何ニ付、飯田藩、當藩申談、斥候隊差出シ、庚申塚ニ轉陣、見張番所補理警衛ス、且晝夜共王子、巢鴨邊斥候ス。

○十八日達書二通

飯田藩へ

軍議之次第モ有之、長州、彦根兩藩之人數、巢鴨邊へ出張申付候間、其藩之人數ハ庚申塚迄退キ、岩村藩ト一同、彼地ニ在陣可致候事。

戊辰三月 總督府諸達留

德川家來精銃隊ヨリ届出候庚申塚警衛之義、右ハ守禦不可欠之地ニ候間、彼者共談判之上、中軍隨從之内、其藩及飯田之人數出張被 仰付候事。

總督府 參 謀

辰三月

岩村田藩 隊長中内藤正誠家記

○諸藩兵へ達書三通

一 徒賊襲來火急有事之節、本陣ハ勿論、何レ之隊ニテモ、敵之様子見付候方ヨリ、號砲ヲ以テ相示シ候様可致候事、但シ、手配等出來候暇可有之見込モ候ハ、不取敢本陣へ届出候様可致候事、

一 賊徒襲來手配等出來候暇有之候節ハ、本陣ヨリ貝聲ヲ以相達シ可申、諸隊ニ於テハ喇叭或ハ貝太鼓之類ニテ合圖致シ、人數揃へ置、指揮相待候様可致候事、

一 諸藩隊長之内一人、毎日申刻前、本陣へ出頭可致候事。

三月十七日

右之通、被 仰出候間、御達申入候也。

總督府 參 謀

薩州	長州	彦根	大垣
岩村	飯田	須坂	岩村田
西大路	加納	磐城平	高須
郡上	右御人數中		

○ 賊徒襲來手配等出來候暇有之節之合圖、竝心得方、今朝御達ニ相成候、右之外、里程隔リ候地ニ於テ戰爭相始リ候歟、或ハ出火等、都テ不急之變事有之節ハ、右同様可相心得 御沙汰ニ候事。

總督府 參 謀

三月十七日

以上總督府諸達留大垣藩記

○ 合圖之儀、火急之節、號砲ヲ用ヒ候ハ昨日御達之通可被相心得、不意變事之節、諸藩ニ於テハ、向後太鼓ヲ用ヒ候様決定可致旨、被 仰出候事。

總督府 參 謀

戊辰三月十八日

大垣、飯田藩記 内藤正誠家記

十八日、戸田光則、内藤頼直ノ家臣、竝ニ書ヲ督府ニ上テ、其主ノ爲メニ哀ヲ乞フ、是日、督府、光則、頼直及ヒ本多助成、内藤正誠ノ謹慎ヲ釋シ、仍ホ頼直ノ入京ヲ止ム。

主人丹波守勤 王尊奉之儀ハ、御兩卿様方、大垣表 御滯陣之砌、以書面奉願候通、何様之御用被 仰付候共、粉骨碎身忠勤仕候心得ニ御座候間、差向實効相立申度、御嶽宿 御旅館以來松本 御滯陣、且出兵等之義奉願候處、御採用不相成、加之、出兵且上京之儀遠慮仕、於在所謹慎可罷在旨、蒙 御沙汰深奉恐入謹慎罷在候儀ニテ、重臣始一同右御沙汰之趣、何共驚愕之至恐懼至極奉存候、丹波守萬一不良之儀有之候ハ、以死諫爭モ可仕候得共、決テ異情無之、何方迄モ勤 王盡力之

外、更ニ他念無御座候、然ルニ前顯 御沙汰之趣ニテハ、差向勤 王之實効可相立道モ無御座候様奉存、重臣ハ不及申、末末之者ニ至迄、一同深心痛仕、臣子切迫之至情、何分難默止候間、何卒寛大之 思召ヲ以、御沙汰之趣 御宥免御採用被下置候様仕度、伏テ奉歎願候、此段宜御執成可然被 仰上被下置候様仕度奉願上候、以上。

戸田丹波守家老

西郷郡右衛門

辰 三月

東山道 御先鋒御總督兼 御鎮撫使 御執事所總督府 濃紙

○申請ノ日ヲ佚ス。

○奉申上口上之覺、

主人丹波守勤 王遵奉之儀ハ、御兩卿様方太垣表 御滯陣之砌、以書面奉願候通、何様之御用被 仰付候共、粉骨碎身忠勤仕候心得ニ御座候間、差向實効相立申度、御獄宿 御旅館以來松本 御滯陣、且出兵等之儀奉願候處、御採用不相成、加之出兵且上京之儀遠慮仕、於在所謹慎可罷在旨、蒙 御沙汰深奉恐入謹慎罷在候儀ニテ、重臣始一同、右 御沙汰之趣何共驚愕之至、恐懼至極奉存候、於丹波守、万一不良之儀有之候ハ、以死諫爭モ可仕候得共、決テ異情無之、何方迄モ勤 王盡力之外、更ニ他念無御座候、然ル處、前顯御沙汰之趣ニテハ、差向勤 王之實効可相立道モ無御座候様奉存、重臣ハ不及申、末末之者ニ至迄、一同深心痛仕、臣子切迫之至情、何分難默止候間、何卒寛大之思召ヲ以、 御沙汰之趣 御宥免、御採用被下置候様仕度段、於中山道追分宿、重臣西郷郡右衛門ヨリ奉歎願候處、御否不被 仰出、重臣始孰モ、彌恐懼心痛罷在候、御煩勞之御中、再應奉歎願候段奉恐入候得共、臣子之至情切迫、悲泣之至ト 御宥恕被下置、前書奉歎願候處、寛大之 御處置ヲ以、御採用被下置、勤 王筋實効相立、丹波守素願行届候様、御執成宜被仰上被下置度、此段伏テ奉歎願候、以上。

戸田丹波守 家老代

辰三月十七日

眞木二右衛門

東山道 御先鋒御總督兼 御鎮撫使 御執事所總督府 濃紙 戸田光則家記

○主人若狹守儀、入京御差留、在所表ニ謹慎罷在候様、於木曾路被 仰出、當時若狹守以下舉藩一同謹慎罷在奉恐入候、然ル處、私共ヨリ奉懇願候ハ、甚以奉恐入候得共、臣子之情實難忍、此段御憐察被成下、幾重ニモ寛大之以御所置、前條之次第御免被成下候様仕度、御取成偏ニ奉願候、以上。

内藤若狹守家來

岡村權左衛門

河野泰司

内藤頼直家記

三月十七日

○本日達書二通

各通 戸田丹波守

本田豊後守

内藤志摩守

謹慎之義ハ令免許候間、士民 王化ニ服シ候様、爲國家可致盡力事。

戊辰 三月總督府諸達留、戸田光則 本多助順、内藤正誠家記

○本條、助順家記ハ十七日、正誠家記ハ二十一日ニ收ム、今達留ニ從フ。

内藤若狹守

先達テ於在所謹慎罷在、入京遠慮可致旨 御沙汰之處、今般家來共勤勞之廉有之、且歎願ニ付、格別之思召ヲ以、謹慎被免候、但入京之儀ハ、尙遠慮可致旨 御沙汰候事。

戊辰 三月

東山道先鋒總督府

大 監 事

高遠藩記

○高遠藩記ニ云、入京之儀ハ、右被 仰出候ニ付テハ、入費モ相嵩ミ候旁、立テ御願御心配ニハ、不及、兵喰御賄之方、盡力可然段被仰聞候。

○ 然ハ、戸田丹波守儀、勤 王實効無之ニ付、譴責之趣固ヨリ至當之儀ト存候ニ付、右次第ニテ彼是申入候ニハ決シテ無之候得共、先達中、正親町三條ヨリ、如何ニモ致シ勤 王之儀相立度趣、始終申出居候、且今度薩、長始人數通行之節、万事丁寧ニ取扱ヒ、右藩々ヨリモ褒詞ニ預リ、尤總督府へモ厚御用筋伺候處、前文之通御沙汰ニ相成、心配之趣ニテ、同家々來當家へ出願、尙又正親町三條ヨリモ頼ニ倚頼之次第ニ有之候ニ付、有體之通申入候間、熟慮之上、ナタメラルヘキ筋ハ被宥度、乍去、私情ヲ以テ公ヲ誤候儀ハ不可有儀ニ付、尙輔翼始熟談可有之候、小子ニハ畢竟、正親町三條ヨリ依頼付難默止申入候也。○中略

三月 六日

具 視

大 夫 齋
八 千 九 齋總督府
叢 紙

○兇徒、信濃地方ヲ横行シ、良民ヲ劫掠スルヲ以テ、督府、信濃諸藩ニ令シテ、之ヲ鎮撫セシム。

廻章、

大政御一新之折柄、未タ御政事向不行届ヲ幸トシテ、無頼之惡徒共愚民ヲ欺キ、徒黨ヲ結ヒ、恐多クモ官軍之内命、或ハ薩

長ヨリ被申付候杯ト偽リ唱へ、無罪之富家へ押入、強談難問ヲ申懸、加之放火致シ、日々亂妨相募、生民全ク塗炭ニ陥リ候段、於 總督府モ深く御憂慮被爲遊、一日モ難捨置、依之、信州一國之賊徒鎮撫向當國列藩へ被 仰付候間、各藩申合、夫々持場ヲ定メ、諸方へ人數差出シ置、賊徒之亂妨ヲ防キ、惡徒ヲ召捕、諸藩脱走人、或ハ無宿者ニ至リテハ速ニ於其藩可處死刑候、尤雖百姓頭立候徒黨之向ハ、平日之行ヒ、人物之正邪ヲ糺シ、夫々可致所置候、元來無頼之惡徒共徒黨ヲ結ヒ蜂起致候儀ニ候得ハ、大義條理ヲ以テ鎮定致候儀、一朝一夕ニ不可行者ニ候間、勅命之旨申觸シ、以兵威鎮撫可仕候、但年貢、諸運上、總テ租稅向之儀ハ、近々御確定之上御沙汰可有之候間、其迄之處ハ只管鎮撫民政ニ心ヲ用ヒ、万民其業ヲ安シ候様精々可致盡力旨更ニ被 仰出候間、此段相達候也。

東山道總督府

執 事

辰 三月

眞田 信濃守殿	諏訪 因幡守殿	堀 左衛門尉殿
内藤 若狹守殿	戸田 丹波守殿	藤井 伊賀守殿
堀 恭之進殿	本多 豊後守殿	牧野 遠江守殿
内藤 志摩守殿	大給 縫殿頭殿	右重職衆中

○ 廻覽留リ之藩ヨリ、追テ 總督府迄可被返者也。眞田幸民家記
上田、高島、龍岡藩記

高札、

村々 百姓 共へ

此度百姓共黨ヲ結ヒ、有福之者へ押入、強談ニ及ヒ、加之放火致シ候儀、定テ深キ子細可有之候間、一々望之趣可申出候、理非明白ニ相糺シ、屹度百姓共行立候様致シ可遣候、若御訴不申、御總督様御下向之御時節モ不憚、猥ニ亂妨於有之ハ、朝

敵同様之罪難遁、依之、兵力ヲ以テ御討取可被遊旨被 仰出候條、此段相心得、早々願之趣可申出候事。

東山道總督府

執

高島藩記
上田藩記

戊辰三月

○以上二條、上田藩記ハ十九日、幸民家記ハ二十七日ニ收メ、高島、藩記ハ日ヲ俟ス、今龍岡藩記ニ從フ。

○是ヨリ先、督府、大垣藩命シテ、笠松領地ノ高須藩管内ニ在ル者ヲ管セシム、是ニ至リ高須藩ノ請ヲ以テ、假ニ其地ヲ管セシメ、大垣藩ノ管理ヲ罷ム。

高須藩

高須一曲輪之中ニ有之候 天朝御料、右ハ是迄笠松陣屋支配ニテ、當分大垣藩へ取締申付置候處、水害防禦之儀ニ付、其藩申立候次第モ有之、今般改テ其藩へ取締申付候間、精々盡力、諸民艱苦ヲ免レ候様可相計候事、但シ他日從 朝廷御沙汰之儀モ可有之、夫迄之處右之通可相心得候事。

戊辰三月 總督府諸達留
松平義生家記

大垣藩

高須一曲輪之中ニ有之候 天朝御料、右ハ過日其藩へ取締申付置候笠松陣屋支配地ニ候處、水害防キ方之儀ニ付、松平範次郎ヨリ歎願之次第モ有之、今般改テ彼藩へ取締申付候間、此旨可相心得候事。

戊辰三月 總督府諸達留
戸田氏共家記

○督府、高崎、岩槻、岡部三藩ニ令シテ、役夫ヲ供給セシム、又高須藩兵ニ命シテ、進軍ノ際、糧

餉ヲ護送セシム。

松平右京亮

御軍用ニ付、精選人足五十人、早々可指出旨 御沙汰候間、御達申入候也。

東山道總督府

執

總督府諸達留
高崎藩記

戊辰三月十八日

各通 大岡主膳正 安部攝津守

御軍用ニ付、精選人足貳拾五人、早々可指出旨 御沙汰候間、御達申入候也。

東山道總督府

執

總督府諸達留
岩槻半原藩記

戊辰三月十八日

○岩槻藩記ニ云、三月十八日、板橋宿 御本營ヨリ精撰人足貳拾五人可差出旨 御沙汰ニ付、速ニ右人足召連、掛之モノ御同所へ罷出處、道中方山本次郎助、中村總次郎、先御用無之、猶追テ御沙汰次第召連可罷出旨ニテ、一ト先引取申候、其後四月十二日、宿繼急御用狀ヲ以右人足早々可差出旨御沙汰ニ付、前同様召連罷出、御用相勤申候、其後同月廿二日、人足交代トシテ召連候處、人足御入用ニ付増人可差出旨、小監察方ヨリ御沙汰有之、其節ヨリ拾人相増、都合三拾五人差出置、閏四月二日御用相濟、不殘引取申候。

○本日達書

右ハ、御進軍之節、兵糧運送ニ付、護衛可致旨被 仰出候事。總督府諸達留 松平義生家記

○督府、高遠、高島二藩ノ力ヲ甲州口、官軍供帳ノ事ニ竭セシヲ褒ス。

諏訪因幡守
内藤若狹守

右出張家來共へ

今度、甲州口討手 官軍糧食人馬繼立等取計、無手落相動來候趣及言上候處、於 總督府モ御満足被思召候、尙此上勉勵周旋可致旨 御沙汰候事。

東山道先鋒

大 監 軍

高遠藩記

戊辰三月

○内藤頼直家記ニ云、別段御口達ニテ、孰モ骨折相動、多人數之糧食無差支當所迄御着、段々之周旋之次第、岩倉殿迄相達候處、御感心被 思召、是迄御添罷越、骨折候御家來共へ御酒ニテモ可被下處、御軍中之儀 思召ニモ不被任、甚御少分ニハ候得共、左之通被下旨御達、

御酒料 金貳千疋
右御禮申上、出張之面々へ配分頂戴仕候。

○參謀板垣正形等、進テ江戸ニ入り、尾張藩邸市ヶニ次ス。

○十六日達書

尾 州 藩へ

當道寄手之内、甲州口へ出張致シ候土、因兩藩之人數、近日新宿驛ニ屯集致シ居候處、其藩上邸へ移陣致シ度趣ニ候間、暫之内右邸彼兩藩へ借與へ候様致シ度候事、但シ右邸之儀ハ、大總督宮御下向之節、御本陣ニモ可相成旨御内意被爲爲在候趣ニ相聞へ候、宮御着之前ニハ無相違明ケ渡シ可申候、此旨可相心得候事。

戊辰三月總督府 諸達留

○西尾爲忠事蹟ニ云、四月十八日、江戸市ヶ谷尾張藩邸ニ移陣ス。原註、全軍 此ニ移ル、

○池田輝知家記ニ云、三月十八日、市ヶ谷尾州邸へ轉陣、土州兵合營、右宿陣中青山銃砲場ニテ左ノ通見當リ、封印付置候事。

一銃砲器械庫 數棟 一火藥庫 一棟

砲隊長 佐分利 欽次郎

○山内豊範家記ニ云、三月十八日、我全軍隊伍ヲ整頓シ、錦旗ヲ擁シ、市ヶ谷尾邸ニ入ル、時ニ海道、山道稍ヤ意見ヲ異ニスルアリ、蓋シ海道ハ専ラ和講ヲ主トシ、戰ヒナキヲ頼ム者ノ如シ、山道ハ其ノ途ニ不戰ハ止マサルヲ議ス、故ニ尾邸ニ砲臺ヲ築キ、各所ニ哨兵ヲ出シ、日ニ戰報ヲ待ツ、同十九日、因ノ全軍亦四ツ谷宿ヨリ移陣シ、同シク尾邸ニ入ル。

○高島藩記ニ云、三月十九日、市ヶ谷尾州邸へ因、土兩藩一同繰込。

十九日、東海道先鋒副總督柳原前光侍、書ヲ督府ニ致シ、本日ヲ以テ甲府ニ赴クヲ告ク。

春暖増加益御勇壯御進軍奉賀候、陳ハ甲斐國之儀ハ東海道管内之國柄故、先般水野出羽守城代太田總次郎援兵等申付候得共、小藩不安心候得共、御聞及通、當道ハ函嶺其外海岸等咽喉切所、夫々軍配多端行届兼候、乍併其從御手御分兵相成候處、賊徒襲撃ニ付テハ、奇功御捷奏ニ相成候段、御策慮之程深感佩爲 皇家欣悅不斜候、其後彼國情承及候處、元來頑健加之、高松左兵衛佐亂妨、且ハ戰爭後人心感動不可忽之勢之趣ニ付、前光今十九日沼津表發途、彼地へ罷越、乍愚弱可加鎮撫心得候、就

テハ東海、東山兩道ヨリ、政令並出候テハ民情不一途不宜哉ト考候、希クハ前件申入候通、東海道管内之國緒之事故、自來總テ東海道へ御委任之様所祈候、尙又貴府麾下之人々、過日來處置振萬一不都合之事宛有之候節ハ、乍憚改正候廉モ難計候條、此段御領掌可給候、何分御互ニ去私、只管爲國家盡力、邦内早速平定之様願存候、公私繁務、不文御垂察令懇禱候、先ハ要々計如是候、誠惶謹言。

三月十九日

再啓、江城進擊延期ニ付テハ、實梁朝臣ニハ暫時沼津滯陣、其後進發之儀ニ候、前光ニハ甲州鎮定次第、早速於何地モ橋本合兵之心得候、此段モ申入候、且亦風聽候處、其御手於熊谷、高崎邊戰爭有之候趣、如何哉容躰承度候、尙又千縷於江戸表御出會御面談冀望候、不具。

柳原侍從

東山道 總督府總督府 叢紙

○板倉勝殷、彈藥ヲ督府ニ獻ス。

一彈藥 四千卷 一雷管 四千箇
右ハ兼テ御達之御趣旨ヲ奉シ、爲御軍用献上仕候也。

四月十九日

板倉主計頭

證、

一彈藥 四千卷 一雷管 四千箇
右爲御軍用差出、樋ニ落手候事。

東山道總督府

執

事

以上板倉種家記

辰四月十九日

二十日、是ヨリ先、大總督府、東海道官軍饋餉ノ費額ヲ増加シテ、之ヲ督府ニ報ス、是日、督府モ亦、本道饋餉ノ費額ヲ増加ス。

彌御勇壯御行軍珍重存候、然ハ諸道官軍兵食之儀、兼テ御賄諸藩へ被 仰付置候、御定通ニテハ宿々之者モ難澁ニ及候趣ニ付、左候テハ 朝廷之 御趣意ニモ相違候事故、於當道ハ別紙之通増方之儀、大總督官ヨリ被 仰渡候間、東山通之處モ實地御見聞之上、同様相成候方可然哉、參謀之者へ御談之上御治定可有之存候、仍早々申入候也。

大總督府

參

謀

三月二日

岩倉大夫殿

同 八千九 殿

○別紙

一御晝兵糧 壹人分 米 二合 錢 二百文
一御泊兵糧 壹人分 米 八合 金 壹朱
一馬壹疋分 晝米 四合 錢 四百文 泊米 一升六合 金 貳朱
右之通、御治定相成候事。東征總督府 叢紙

○市橋長義家記ニ云、三月廿日、御本陣ヨリ御達、今日ヨリ相改左之通、

復古外記 東山道戰記 第八 明治元年三月二十日

畫兵糧壹人前	米	貳合	錢	貳百文	
泊兵糧壹人前	米	八合	金	壹朱	
馬壹疋分	畫	米	四合	錢	四百文
泊	米	壹升六合	金	貳朱	

右之通、御治定ニ相成候事。

同廿九日、御本陣ヨリ左之通御達、

出張之斥候隊ヨリ願出候夜食、壹人分米貳合宛願濟ニ相成候事、右ニ付出張之人数ヨリ申出候ハ、相達候様御達有之。

○兵食之儀ハ、兼テ御達相成候通、一汁香之者可限旨、更ニ被 仰出候ニ付、兵食取扱方へ相達置候間、此段御心得迄御達申入候也。

總督府

執

事

三月二十三日

薩、長、垣、彦宛 右御人数中大垣藩記

○本條、所謂兵食取扱方へノ達書ハ見ル所ナシ。

○川口村武藏ノ農民蜂起スルヲ以テ、督府、監察兼應接掛岩村高俊ヲ遣シテ、之ヲ鎮撫セシム、加納藩兵之ニ屬ス。

○總督府日記ニ云、三月二十日、武州川口村百姓一揆ニ付、加納之兵ヲ率ヒテ、香川敬三、岩村精一郎爲鎮定ニ參候事。

○鎮撫ノ顛末ハ見ル所ナシ。

○戶田忠友、土佐守、宇都宮藩主○時ニ西上シテ、大津驛ニ在リ、老臣ヲ遣シテ、二督ノ起居ヲ候ス、乃チ命シテ金穀及ヒ銃器ヲ供給セシム。

○戶田忠友家記ニ云、鎮撫總督岩倉少將殿、副將岩倉八千丸殿御本陣板橋驛へ家老伺御機嫌旁罷出候處、當節金穀武器御差支ニ付、急々取調貢獻可仕旨被 仰渡候ニ付、不取敢江戶表有來之武器並其外共取調、家老左之書面持參、御取次澤井徳右衛門へ相渡候處、兩三日之内御沙汰可有之旨御達有之。

○今般就 御親征、金穀武器急々取調可申上旨被 仰渡奉畏候、當時江戸屋鋪へ有來候武器兵糧米其外共不取敢取調候處、別紙之通御座候、右之品々御用立相成候ハ貢獻仕度、尤在所表へ差置候金穀、武器之儀ハ急速取調可申上候得共、少々延引可仕ト奉存候、此段申上候、以上。

戶田土佐守家來

堀

藤

助

三月廿日

○別紙

一兵糧米	五百俵	一馬	一十五寸短忽微煩	一挺	
一十二寸船忽微煩	一挺	一五百目玉野戰筒但一本臺	二挺	一百五十目同但鹿繪圖付	二挺
一百目玉自在砲	一挺	一壹貫目和砲車臺付	一挺	二三斤迦炳煩	一挺
一三百目玉野戰筒但一本臺	一挺	一ミニール銃	二十挺	一二ツハントミニール銃	十九挺
右玉數左之通、					
一十五寸空丸	九十九	一船玉	九十		

復古外記

東山道戰記 第八

明治元年三月二十日

- 一同數玉 三十七
- 一同數玉 七十
- 一百五十目玉但鐵丸入鉛玉 百七
- 一同數玉 三十五
- 一三斤鐵丸 六十内コロス付十八
- 一三百目玉 百三十五内鐵玉六十二
鉛玉三十七
數玉三十六

大小砲合藥

大砲附屬之品

- 一大胴亂 八ツ
- 一火門針 七本
- 一鷺管大小 千本
- 小銃附屬之品
- 一西洋胴亂但管入付 二十
- 一銃脊負革 二十筋
- 一雷管 千五百

- 一五百目石入鉛玉 百三十二内鉛玉四十七
- 一同鐵玉 二十二
- 一百五十目玉鐵丸 八十四
- 一百目鉛玉 百四十
- 一同數玉 十四
- 一壹貫目玉 七十五内鐵玉七十一
鉛玉四ツ
- 元高三百四十貫目内小銃藥百貫目
大砲藥百貫目
同ミチン藥四十貫目

一鷺管入胴亂 五ツ

一ボート筒胴亂 二ツ

一玉藥長掉 五掉

一玉藥箱 十荷

一ミニール玉 六百

右之通、武器並其外共取調、此段申上候、以上。

三月

土佐守在所表有來之武器其外共取調之儀御達御座候ニ付、別紙之通申越候間、右武器ニテ御用立相成候ハ、獻納可仕候、尤

兵糧之儀ハ家來爲扶持米貯置候得共、御入用之儀ニ候ハ、獻納可仕候、右ハ當時有高取調、此段申上候、以上。

○別紙

三月廿六日

戸田土佐守家來
堀 藤 助

- 一兵糧米 七千俵
- 一同三斤山迦灼車臺仕掛銃 一挺
- 一三斤銃車臺 一挺
- 一百目銃車臺 四挺
- 一青銅二百目銃同斷 三挺
- 二百目銃同斷 三挺
- 一百目銃同斷 一挺
- 一佛蘭西ボルト銃 一挺
- 一青銅五寸玉砲錄銃 一挺
- 一同三百目銃 二挺
- 一銃張二百目銃 二挺
- 一同五十目銃 十一挺
- 一同二十目銃 八挺
- 一西洋八匁銃 百十挺
- 一七匁銃 一挺

- 一青銅六斤短迦炳車臺仕掛銃 一挺
- 一銅百目銃仕掛打 一挺
- 一三百五十目銃車臺 一挺
- 一三百目銃野戰煩車臺仕掛打 二挺
- 一三百目銃新筒車臺 二挺
- 一三百五十目銃古新筒 一挺
- 一百目銃古筒自在仕立車臺砲 三挺
- 一十三寸白砲銃 一挺
- 一同五百目銃 一挺
- 一青銅百目銃 十一挺
- 一同百目銃 八挺
- 一同三十目銃 八挺
- 一同十匁銃 九十六挺
- 一六匁銃 二十一挺
- 一四匁八分銃 六十一挺

- 一四匁三分銃 百二十九挺
- 一四匁銃 六十挺
- 一三五分熊打銃 二十挺
- 一三百目玉 三百三十六
- 一一百五十目玉 百六十六
- 一五十目玉 二百六十
- 一二十目玉 五百四十七
- 一八匁玉 一万五千五十三
- 一四匁八分玉 六千四十一
- 一三匁五分玉 六百九十三
- 一空彈 五十發
- 一鷲管 千四百
- 一小銃藥 五百三十一貫七百目
- 一胴亂 二百四十四
- 一口藥入 四百五十
- 一白檜火繩 八百二十一抱
- 一三五分銃 百七十六挺
- 一三匁銃 二挺
- 一五百目玉 四十八
- 一二百目玉 八百七十八
- 一百目玉 七百九十二
- 一三十目玉 九百二十四
- 一十匁玉 千七百
- 一六匁玉 百六十
- 一四匁三分玉 一万五千二十二
- 一散彈筒 十五發
- 一雷管 三萬三千
- 一大銃藥 六百二十九貫三百六十目
- 一大胴亂 十一
- 一西洋胴亂 七十九
- 一竹火繩 千四百七十四抱
- 一木綿火繩 三百五十二抱

右ハ在所表有來武器其外共取調候處、書面之通御座候、以上。

三月 以上上戸田 忠友家記

○按スルニ、以上錄上スル所ノ軍糧、及ヒ銃器ハ、蓋藩境有虞ノ故ヲ以テ、遂ニ貢獻スルヲ果サ、リシナラン。

二十一日、遠藤胤城、江戸ヲ去テ蕨驛ニ至リ、屏居シテ罪ヲ待チ、書ヲ督府ニ上テ、王事ニ勤メ
ンコトヲ請フ、乃チ命シテ戸田川渡口ヲ警守セシム。

十四日達書、

昨年來 御大政 御一新被 仰出候ニ付テハ、私儀ニモ上京可仕様奉蒙 朝命、冥加至極難有仕合奉存、急速上 京邊奉
可仕心底ニ御座候處、不得止情態モ御座候得共、右等ニ拘泥不仕當春早々斷然馳登リ、第一遲滯之罪狀可奉謝存込之折柄、
當春之形勢ニ立至リ、彌以苦心無遣方、兎モ角モ上 京仕、右謝罪歎願且奉勤 王度心底ニテ御座候處、江州愛知川驛 御
本陣へ重立候家來之者共可罷出様、同國三上陣屋へ 御沙汰御座候處、近年海岸爲取締、泉州知行所へ假陣屋取建、重役共
差遣置、三上陣屋之儀ハ小役人土着之者而已爲詰合置候ニ付、右 御沙汰之節、從來私申付置候旨趣之通、右様之御時節ニ
差向候テハ、不奉待 御沙汰迅速罷出、御用向相伺、勤 王一途ニ相心得罷在處、爲 御鎮撫 御下向有之、右ニ付乍聊
御用ヲモ、相勤度配慮御座候處、何分三上陣屋之儀ハ小役人共計ニテ、甚不行届、就中前文 御沙汰之儀ニ付、泉州假陣屋罷
在候重役罷出候儀モ、路程懸隔及遲滯候内、三上陣屋始同國知行御召上之儀被 仰渡、且家來共身分進退之儀再可奉待 御
沙汰之處、不奉存寄意外寛大 御仁惠之以 沙汰家來共早々東下仕、委細申聞謹承之仕、愕然奉恐入候次第ニ御座候、右様
奉蒙 勅勘候儀、悲歎痛哭之至可申上様モ無御座、重々奉恐入候儀ニ御座候、右東下仕候家來共へ、爲路費御金拜領被 仰付、
且家來妻子並土着小前之者迄無所洩 御扶持方等迄被下置、右様廣大之蒙 御仁政候段、重々難有仕合之義ハ、難盡紙上候
儀奉存、依之道中差急大垣表 御旅館迄罷出、勅勘之儀奉蒙 御仁恕度歎願仕候心得ニテ、同所迄罷登リ候處、最早 御發
途モ被爲濟候ニ付、猶又御出張先 御旅館迄罷出奉懇願候間、厚 御憐察ヲ以 御仁惠之 御沙汰謹テ奉待候、誠恐謹言。

三月

達 藤 但 馬 守 印

總督府叢紙 遠藤胤城家記

○本條、家記載スル所、叢紙ト同カラス、今叢紙ニ從フ。

○胤城家記ニ云、正月廿八日、東山道鎮撫御總督ヨリ、但馬守領分江州三上陣屋被 召上候節、同所詰合家來へ被 仰渡候御達旨、家來共即日出立、早追ニテ東下致シ、但馬守へ申聞候處、重キ罪狀誠ニ以奉恐入痛哭悔悟仕、勅勘之身分ニ御座候得共、不願恐謝罪爲歎願至急上 京仕度段舊幕へ申立、水口城主加藤能登守殿へ取絶、其筋へ之周旋謝罪歎願之儀依頼仕度家來ニ申付、早追ヲ以テ爲差登置、但馬守儀ハ二月廿一日、東海道斷登候、途中 東征將軍御先鋒隊御發向ニ付、名古屋ヨリ美濃路へ相越、大垣城主戸田家ハ縁類由緒モ有之、同家へ止宿、此度奉蒙 勅勘候詳細之件、謝罪歎願之儀相談仕候處、東山道鎮撫御總督岩倉殿ヨリ罪狀御達ニ付、右御旅館御立拂之上ハ、御跡ヲ追慕、御進發先へ推參仕候方至當之儀ト衆議ニ付、大垣出立仕、信州路へ突出仕候處、御陣拂相成、武州蕨驛へ到着謹慎仕候、但シ、此節大垣驛ヨリ家來之内、松井宗兵衛、畑佐秋之介兩人早追差立、武州熊谷驛ニ於テ御總督様へ奉追付、大監察衆迄、但馬守歎願書前以差出之、

又云、三月十四日、家來兩人早追ニテ熊谷驛ニ於テ奉追付、板橋驛御本陣へ罷出、歎願之趣大監察香川敬三殿ヲ以、御惣督様入 御聽候處、兎ニ角但馬守參着之上可被仰出ト之儀ニ付、兩人退參、同夜亥ノ刻過左之再願書、右兩人ヨリ押テ大監察岩村誠一郎殿へ進達ス、

先刻ハ、御目通被 仰付、段々厚 御教諭之 御沙汰之條々難有謹テ奉恐承、此上何共可奉申上様無御座奉恐入候處、主人但馬守事不日奉慕 御總督様罷出儀ニテ、御沙汰之趣爲申聞候ハ、差當途方ニ暮候儀ト於私共深恐惑仕候次第ニ御座候、尤御沙汰之趣ハ屹度相心得罷在候得共、何卒非常出格之以 御憐愍、相應之 御用向被 仰付被下置度、先刻 御沙汰之趣モ御座候處、不願恐押テ奉願候段重々奉恐入候得共、各様方迄只管奉懇願候、誠恐謹言。

三月十四日

遠藤但馬守家來

畑佐秋之介
松井宗兵衛

東山道 御先鋒 御總督様 御執事衆候

○私儀去月廿一日江戸表出立、濃州大垣表 御陣營へ向罷出候處、先達テ彼地 御發途被爲遊候趣ニ付、猶又奉慕 御跡、今十七日蕨驛へ參着仕、奉謹慎罷在候、此殿御届申上候、以上。

三月十七日

遠藤但馬守

○今般東山道爲 御鎮撫 御發向被爲遊候趣奉恐入候御儀ニ御座候、然ル處、私領分江州三上陣屋詰之者被召出御尋御座候節、心得違甚不都合之御請方等仕候儀ニモ御座候哉、領分等御召上之蒙 御沙汰、奉驚恐謹慎罷在候、私儀素ヨリ勤 王仕度、聊一心無御座、實効相顯度奉存候間、何卒出格之以 御憐愍、相應之御用被 仰付被成下置候様只管奉歎願候、此段宜御執成之程奉願上候、以上。

三月十八日

遠藤但馬守

東山道 御先鋒御總督殿

同 副御總督殿 御執事衆中 以上總督府叢紙
遠藤胤城家記

○本日達書

遠藤但馬守

爲國致盡力度旨歎願ニ付、戸田川渡船場之固メ申付候條、精々可致勉勵事。

戊辰 三月 遠藤胤城家記

○私儀戸田川渡舟場へ唯今參着警固仕候、此段御届申上候、以上。

三月廿一日

遠藤但馬守

復古外記 東山道戰記 第八 明治元年三月二十一日

總督府叢紙

記、

侍 五拾人 銃砲足輕 二十人 小者 三拾人 馬 三疋

右之通、人數着揃候間、此段御届申上候、以上。

四月三日

遠藤但馬守家來

粥川 小十郎

遠藤胤城家記

○督府、諸藩兵ヲ慰勞ス。

○總督府日記ニ云、三月廿一日、薩州、長州、大垣、彦根、岩村、飯田、岩村田、須坂、加納、岩城平、高須、郡上、西大路等へ御酒被下候事。

○二十二日、軍防局、書ヲ二督ニ致シ、車駕親征、昨日ヲ以テ京師ヲ發セシヲ告ク。

聖上益御機嫌克被爲成恐悅奉存候、昨廿一日御親征大坂 行幸被爲 在候間、此段申入候、尙亦 御宸翰寫、誓文之寫、日誌五六等爲持差出候、御落手可被下候、以上。

三月廿二日

尙、日々軍事御繁務御苦勞存候也。

軍防局

岩倉 大夫 丞
岩倉 八千丸 丞 總督府叢紙

○督府、信濃諸藩以下ニ令シテ、其貯フル所ノ金穀ヲ本府ニ送致セシム。

大垣 西大路

其藩へ先達テ信州大小名並支配諸所金穀取調被 仰付候分、早々 御本陣へ差越候様可被相達候、尤穀之儀ハ遠路之儀ニ付、其所々相當之價金ニ應シ、同様上納可致旨 御沙汰候、此段申入候事。

但、彈藥之儀ハ、先其儘差置、御沙汰相待可申事。

總督府

執事印

市橋長義家記
上田、高遠、小諸藩記

三月

○長義家記ニ云、三月廿二日、信州路金穀之分御入用ニ付、則御印書右之通、右ニ付信州路へ申遣候處、追々調達左之通。

一金二百三拾八兩壹步三朱ト錢貳百五拾二文 右信州佐久郡根々井陣屋

一金五百兩 右信州佐久郡岩村田

一金千九百兩 右信州伊奈郡上市田村陣屋

一金六百九拾兩 右信州伊奈郡飯島陣屋

一金百貳拾五兩貳分ト銀七匁六分八厘八毛 信州地御取締掛附屬

一金千兩 右信州伊奈郡山吹

一金三百兩

阿部美作守
尾州藩
座光寺右京

一金百九拾貳兩三步ト百九拾四文

右信州伊奈郡山本陣屋

近藤利三郎

一金千五百五拾八兩三步ト銀七分八厘七毛

右信州飯田

堀三之丞

一金千貳百七拾三兩壹分壹朱ト銀壹匁八分七厘

右信州伊奈郡竹佐陣屋

松平範次郎

一金六拾兩壹分貳朱ト錢四拾貳文

右信州伊豆木

小笠原兵庫介

一金百八拾三兩三分貳朱ト銀壹匁貳分七厘

右信州阿島

知久左衛門五郎

金穀取集總高

メ金七千五百貳拾三兩 銀拾壹匁六分壹厘五毛

錢四百九拾三文

右之通取集 總督府へ相納候處、御軍用ニ相成、金穀方へ御下ニ相成申候、右之外高遠藩、高島藩之儀ハ書上ケ致置候處、

甲州路ヨリ市ヶ谷之方、因州、土州賄方相勤罷在候ニ付、歎願ニテ御免ニ相成申候ニ付上納不仕候、

一信州北部之方ハ、大垣藩之關係ニ御座候。

○大垣藩徵收ノ金額ハ攷フル所ナシ。

○上田藩記ニ云、三月中、金穀共早々板橋驛 御本陣へ差出候様、尤遠路ニ付、穀之儀ハ其所相當之價ニ應シ金納可仕旨大垣、西大路兩藩ヨリ通達有之候ニ付、左之通差上申候、

一金千五百九拾兩 穀代

一金千三百四兩壹步壹朱

但、旋條銃彈壹万員、火藥拾五貫目、於追分宿ニ御本營へ差上申候。

錢三百拾四文

分知

一金三百兩 穀代

松平欽二郎

一同百八兩貳步三朱

但、鉛拾貫目、火藥五貫目、夫々用意仕置候得共、未御達無之候ニ付、上納不仕候、

右之通、御本陣へ夫々相納候。

○四月三日上申書

覺、

一金七百兩 一金千貳百兩

玄米三百石代

一金千九百兩

右ハ、兼テ御總督府ヨリ家祿石高ニ應、金穀儲置、御用之節差出候様御達ニ付、前書之通御請仕置、則此度差出候様被 仰

付候ニ付、家來之者差添奉差上候、以上。

戊辰 四月

○

口上之覺、

御親征被 仰出候砌、藩力相應金穀用意仕置、臨時御用可達旨、東山道從 御總督府蒙御達候ニ付、則用意仕置候處、米穀

上達方隔地之儀ニ付、乍恐代納仕度奉伺候處、御聞濟被下置候、依之、金子米穀代、且御永陣恐察仕、御用途爲御足加、旁金

壹萬五千兩奉獻納候、以上。

戸田丹波守家來

○

辰 四月 四日

名越與五右衛門

證、

一金 子 壹萬五千兩 但米穀代共

復古外記 東山道戰記 第八 明治元年三月二十二日

四〇一

牧野遠江守

牧野康民家記

右爲御軍用差出、慥ニ落手之事。

東山道總督府

執

事

戊辰四月四日

戸田丹波守以上松本藩記

○總督府日記ニ云、四月六日、金四百六十五兩三分二厘米穀料、右眞田信濃守ヨリ上納之事、同七日、金千五百六十二兩、右松代預リ所高井、水内兩郡村々殘金上納之事、同二十日、金貳百兩、米二百俵、近藤利三郎ヨリ差出シ候事。

○飯山藩記ニ云、三月三日、大垣、西大路兩藩士、弊藩へ罷越、東山道先鋒 御總督府ヨリ金穀玉藥等臨時御用御差支無之様用意可致置旨御達之趣申聽、其後四月朔日、右之御達書首條ノ達書ヲ指ス、以宿繼、右兩藩ヨリ致到來候、

右ニ付四月十日於武州板橋驛、東山道 御總督府御本陣へ相納申候、其節御渡之證書左之通、

證、

一金二千五百九拾五兩拾四匁二分九厘 但穀代共

右爲御軍用差出、慥落手之事。

東山道總督府

執

事

戊辰四月十日

○内藤正誠家記ニ云、三月廿八日、東山道諸藩金穀玉藥御用懸田中浪人、清水貞之丞、吉田助四郎彦ヨリ兼テ御達ニ相成居候内、今度ハ金計御用相成候旨被中越候ニ付、四月十日、於板橋宿御總督府へ金五百兩致上納候處、御請取證トシテ御印紙御下ケ渡相成候。

○高遠藩記ニ云、四月十五日、兼テ御沙汰相成居候御圍金穀上納之儀、兵喰御賄等本會三宿並甲州路猿橋宿迄之處、尙又江

戸表迄被 仰付、莫大之入費相嵩ミ、小藩之微力必至ト難澁仕候付、一旦御請書迄差出候上歎願申上候ハ、實以奉恐入候得共、諸宿御賄へ遣拂之思召ヲ以、上納之儀何卒 御赦免被成下候様奉願上候處、尤之儀ト中村範五郎左被仰聞、被仰達候上ニテ 御免被 仰出候付、其段御用掛兩藩大垣、西大路二へ相斷候之様被 仰聞候付、御禮申上罷歸、其後兩藩へ相斷申候。○大給恒家記ニ云、四月廿日、總督府板橋宿御本陣へ米五百俵代金ニテ上納ス、但代金高並上納濟御渡御書付等散逸シ無之。

○ 覺、

一金貳百兩 一玄米貳百俵 但四斗入 此代金百九拾貳兩三分ト錢百九拾四文 但所相場兩ニ四斗壹升五合替

右之通貯金穀御取調之節申上置、御用之節早速上納可仕旨、陣屋家來共へ申渡置候處、去ル四月十九日、東山道 御總督府板橋宿御本陣へ、以使者上納仕候旨申越候、此段御届申上候、以上。

下大夫

近藤利三郎

辰 六月 七日

辨事 御役 所辨事局 叢書

二十四日、督府、祖式某金八郎、長門藩士ヲ以テ、内參謀ト爲ス。

長藩

祖式金八郎

本陣軍務多端ニ付、其方儀内參謀申付候條、晝夜旗下ニ相詰、精々盡力頼入候事。

戊辰 三月

總

督印 毛利元德家記

二十五日、二督、書ヲ大總督府ニ致シテ、勝沼、梁田二驛ノ戰捷ヲ報シ、且速ニ江戸城ヲ進討セ
ンコトヲ請フ。

三月朔日、於信州下諏訪驛軍議仕候處、甲斐國ハ東海道管内ニ候得共、當道ヨリモ關係可仕旨、兼テ從 朝廷御沙汰モ被爲
在候處、頃日賊徒之陰謀不容易ニ付、因、土兩藩之兵向候處、同六日甲州勝沼ト申ス所ニテ果シテ及戰爭、賊徒大敗走、數十
人討取候、依之、不取敢真田信濃守ヘ甲府城守衛申付候、因、土之兵四谷迄進發、夫ヨリ尾州本邸ヘ繰込候事、
一同七日、徳川歩兵隊江戸脱走之者一千餘、武州羽生陣屋ヘ屯集致シ、大砲其外數多之兵器相備候、已ニ慶喜恭順之由申
立候折柄、如何之次第ニ候、恭順實效之爲メ右賊徒退散セシメ、大砲其外兵器差出候様、徳川目付櫻井庄兵衛ヘ當道先鋒一
ノ先キ隊長ヨリ相達候處、來ル九日迄ニハ右之通り可取計旨、庄兵衛承諾ニ候處、惡徒共、江戸其外ヨリ羽生ヘ追々馳參、
剩ヘ同八日、右人數大砲押立、高崎本營ヲ目掛ケ襲來之勢ニ付、一ト先兵隊ヲ以尾擊致サセ候處、賊徒共梁田驛ニ止宿致シ
居候ニ付及戰爭候、賊徒敗走、七八十人討取、數百人手負セ、兵器彈藥等夥數分捕、一先鎮定之姿ニ相成候、以上。

三月廿五日

東山道總督府

拜呈、時下春暖 大總督宮倍御勇健被爲決軍機恐悅之至ニ奉存候、諸公倍御多務奉遠察候、扱過日被 仰出候期限ヲ相守、
十五日ニハ是非進擊之策ヲ定メ、十三日板橋ヘ着陣仕候處、進擊之儀ハ再度御沙汰有之候迄見合候様被 仰出奉畏候、尤
右次第ハ勝安房ヨリ歎願事件ニ付被 仰出候趣ニ候得共、實ハ外夷ヘ關係之事ト奉承知候、然ルニ頃日承り候ニハ、外夷
之應接モ相濟候哉ニ候得共、未何等之御沙汰モ不被爲在、日夜痛心罷在候、一體十五日之期限有之事故、諸軍競進士氣相振
居候處、俄ニ御延期被 仰出、今以何等之御沙汰モ無之、重地中之重此間蓋地、數日兵ヲ暴シ居候様ニテハ、日々數千之金ヲ

費シ候ハ申迄モ無之、情氣ヲ生シ候邊ヨリ、心得違之者無之トモ難申、何分ニモ不肖之小臣等痛歎此事ニ御座候、トテモ罪
極リ候朝敵慶喜之事ニ御座候得ハ、御英斷ヲ以速ニ御決策被爲在候様奉懇願候、左モ無之曠日彌久之内、万一モ兼テ之詐
謀ニ陥リ候様ニテハ、御復古之御大業ニモ關係可仕ト杞憂之餘リ、不顧多罪言上仕リ、實ニ若輩之小臣等言上之程ハ深恐
懼之至ニ候得共、一道之將命ヲ奉蒙候上ハ、御大業ヲ奉助之一端ニモ可相成ト存込候間、獻芹之微衷言上仕候、不惡奉達御
聽候様奉希上候、誠惶誠恐謹言。

三月廿五日

八千九百具定

大總督宮 參謀御中以上東征
總督記

○督府、諸藩兵ニ令シ、協心戮力以テ成功ヲ奏セシム、又諸軍ヲ戒メテ、私ニ先鋒軍營外ヲ遊
歩スルヲ禁ス。

當地滯陣日數相重リ候ニ付テハ、間暇之餘リ諸軍情氣ヲ生シ、自然心得違之者モ可有之、万一藩々確執ヲ生シ、區々タル小
事ヨリ終ニ國家之大事ヲ誤リ候様之場合ニ立至リ候テハ、不容易儀ニテ、賊徒之誹謗モ難免次第ニ候、何分列藩一和同心協
力緩急相救ヒ、十全之功ヲ奏シ候様勉勵可致旨夫々可申論候事。
右之通被 仰出候間、御達申入候也。

三月廿五日

總督府

參

謀

薩州奉 長州承知仕候 彦根奉 大垣奉
岩村奉 飯田奉 須坂奉 岩村田奉

復古外記 東山道戰記 第八 明治元年三月二十五日

加 納 奉 西大路奉 磐城平奉 高須奉
郡 上奉 右御人數中

○諸軍へ達書

滯陣中之法令ハ各藩其心得モ可有之候得共、探索方等之役儀有之者之外、斥候隊陣營ヨリ先へ私ニ往來致間敷候、右之趣末々迄心得違無之様可申聞旨 御沙汰候事。但シ、江戸表ニ屋敷有之藩タリ共可爲同斷候事。

三月廿五日

總督府

參

以上總督府諸達留
飯田藩内藤正誠家記

○松平忠恕、銃器ヲ督府ニ獻ス。

○松平忠恕家記ニ云、三月廿五日、板橋宿岩倉殿御滯陣中御本營へ獻納、左之通仕候、參謀祖式金八郎殿請取ニ相成候。一短ミチエール 十挺 彈藥管共 千發

戊辰三月廿五日

使者 平 子 子 平
添 宮 下 龜 十 郎

元修史局掌記 豐原資 清纂輯

復古外記 東山道戰記 第八 終

復古外記 稿本

東山道戰記 第九

自明治元年三月二十六日
至同 四月 七日

三月二十六日、是ヨリ先、青山幸宜、譴ヲ督府ニ獲ルヲ以テ、京師ニ至リ、屏居シテ命ヲ待ツ、是ニ至リ幸宜ノ家臣、書ヲ督府ニ上テ、其主ノ爲メニ哀ヲ乞フ、督府乃チ幸宜ノ謹慎ヲ釋ス。

○二十五日申請書一通

主人峯之助儀、去月廿日江戸表發途、途中藤枝驛御礎陣迄使者差出候ニ付、御指揮之品モ可有御坐奉存、名古屋城下ニ滯留仕候得共、最早御總督府江城近ク御進軍之趣承知仕、御親征行幸御間合モ不被爲在候様承知仕、旁一ト先奉伺 天機度相心得上京仕、其段太政官へ其届申上置候儀御座候、然處、翌九日下諏訪迄差出候使節致參着、峯之助儀在所表ニテ謹慎罷在候様 勅書之趣實以奉恐懼候、就テハ入京之上右御沙汰承知仕候ニ付、猶又進退之儀差向太政官代へ御伺申上候處、同十五日以御附札、使節往復驅違、既ニ上京候上ハ、於在所謹慎同様於京地差扣居候様被 仰渡候ニ付、其儘謹慎罷在候儀ニ御座候、右ハ於旅中復命相待進退可仕管ニ御座候處、無其儀上京仕候段、畢竟私共不都東ヨリ右様不都合生シ、何共申上様モ無御座次第、重々奉恐入候、何卒出格之以 御仁恕御許容被成下様伏テ奉歎願候。

三月

青山峯之助
家老共

主人峯之助義、去月廿日江戸表發途、去ル八日上京仕候、然處、翌九日、途中藤枝驛ヨリ 御礎陣迄差立置候使者致京着、峯之助儀、正月三日之變動後、猶賊地ニ罷在、天氣モ不奉伺段、奉對 朝廷、全君臣之道不相立、依之於在所表謹慎罷在候様、勅書之趣實以奉恐入候、右ハ全ク重臣共不盡力ヨリ斯因循仕候儀ニテ、主人儀ハ乍若年兼々勤 王之志厚、今般使節行違、既ニ上京仕、相應之御用筋相勤度存居候處、前文奉蒙 御怒命恐歎謹慎罷在候情實、愍然被 聞召、何分謹慎之儀ハ被爲 免被下候様奉愁訴候、右御許容被成下候ハ、感謝無量、闔藩精忠可奉報 御鴻恩候、以上。

三月

青山峯之助

家來共

以上青山幸宜家記

○本日達書

青山峯之助へ

謹慎之義ハ令免許候間、士民 王化ニ服候様、爲國家精々可致盡力候事。

戊辰 三月 總督府諸達留

○議定徳大寺實則、二督ニ遺ル書

聖上益御機嫌克令渡給、不斜恐悅御安意可給候、隨テ兩公御壯健、御軍旅珍重存候、抑青山峰之助御所置ニ付、別紙差出候 間入御覽候、尤三道之鎮撫使夫々御委任ニ相成候儀、人々之存意ニテ一様ニハ不相成儀ト存候、併峯之助儀、其地之情實ハ 分カテ候へ共、被 仰渡候外ニ異事モ無之候ハ、御差許ニテハ如何哉、猶御賢考可有之候、仍別紙三通令進達候也。

三月 廿一日

○本條、總督府叢紙ニ三月二十八日夜來狀トアリ、又別紙三通ノ内、一通ハ原記ヲ佚シ、一通ハ本月三日督府幸宜ニ謹慎ヲ命スルノ宣達書ナルヲ以テ之ヲ略シ、一通ヲ下ニ存録ス。

○別紙

去ル十日、太政官へ御届申上候通、主人峰之助儀、去月廿日江戸表出立、東海道通罷登候處、道中差支、漸ク當月八日上京仕候、尤道中藤枝驛ヨリ使節ヲ以、東山道總督府岩倉殿迄彌以尊 王仕候ニ付、御指揮次第奉 命可仕段申達候處、中山道下諏訪驛ニテ右使節へ御達書御渡御座候ニハ、今日ニ至迄賊地ニ罷在、天氣モ不候付、在所ニ於テ謹慎仕候様、別紙之通御達御座候ニ付、主人始私迄愕然奉恐懼候之次第ニ御座候、御照知モ被爲在候通、弊藩儀ハ當正月廿一日太政官ニテ 御懇之蒙 朝命、其後逐次飛州取締、濃州笠松取締被 命候付、夫々人數等差出、盡藩力相勤居候之處、不圖右兩様共被爲 免、東山道出兵被 仰出候ニ付、尙又人數差出、總督府御後軍相勤居候事ニ御座候、右人數之内ニテ高松殿御守衛護送等モ無滯相勤申候、右之通藩力之及候丈ハ精々相勤候志願ニ付、總督府ニテモ專奉 命仕候段ハ御洞察被成下、今般寡君上京モ仕候得ハ、諸藩之並ニ御處罷可被成下ト奉存居候處、賊地發足遅々相成候蒙 御咎、何共恐縮悲歎ニ堪兼、頃日太政官へ歎願仕候處、京地ニテ謹慎仕候様御指圖、御仁惠之程難有奉存候、其後追々諸藩模様承候處、寡君ヨリ相後レ江戸出立之諸候モ不少候得共、却テ右等ハ上京等御構モ無御座、謹慎之沙汰モ無御座候趣追々承知仕候、寡君へ之 朝命之趣ニテハ、全ク賊地ニ滯在仕候置狀ヲ以謹慎被 仰出、外々賊地ニ因循滯在仕候候ニテモ、別段御沙汰モ無御座候段、私共ニ於テ悲歎痛哭仕候次第ニ御座候、右、主人久敷賊地ニ滯在仕候モ、全私共不盡力ヨリ斯相成行吳々奉恐怖候、併追々被 仰出候通、天下之公論ヲ以 御大政御一新被遊候御儀ニモ御座候得ハ、寡君ヨリ相後レ賊地出立仕候藩々ト同様、謹慎御赦免被 仰付候得ハ、公平之 御政道故ト難有奉拜服候得共、寡君而已右様被 仰付候ト申様ニテハ、恐多申分ニハ御座候得共、公明之 御政道共不奉伺候、尤七道總督府へ 御委任之御廉モ御座候ニ付、御處置振少々宛御相違ハ可有御座ト奉存候得共、御賞罰等之義ハ一様ニ不被 仰付候テハ、億兆之人民 朝命ヲ奉輕、頑愚之野心ヨリ追々歎訴筋等申上候様相成候テハ、折角簡易之 御新政モ却テ御多端ト相成、人心向背一様不相成候様成行候テハ遺憾之次第ニ御座候間、仰願、朝命一途、公平之御處置ニ被成下候得ハ、四海一般感謝無量、遵奉

王事仕候ハ必然之義ト奉存候、弊藩痛歎之餘申上候テハ、私情愁訴而已申上候様 御聞取之程奉恐縮候得共、天下之御大政ニモ相涉候義ニ付、卑賤之小臣不願借越奉歎願候、御寬量被爲 聞食被下置候様奉專禱、萬々一 御仁恕之御處置モ被成下候得ハ、無量可奉感荷候、越俎之段死罪死罪、誠恐誠惶頓首。

青山峰之助内

鈴木兵左衛門

總督府叢紙

三月

○是ヨリ先、山内豊福、攝津守土佐藩支封主督府ニ就キテ、東征ノ軍ニ從ハンコトヲ請フ、之ヲ聽ス、是日、豊福ノ養子豊誠薰豊福ニ代リ、藩兵ヲ率キテ尾張藩邸ニ至リ、土佐藩兵ニ屬ス。

○山内豊誠家記ニ云、三月十六日、今般 聖斷ヲ以テ 御親征被 仰出、宗藩ニ於テモ東山道官軍先鋒ヲ被命、既ニ此程四ツ谷内藤驛迄進軍ニ相成、豊福ヨリモ 御軍列ニ被召加度段 總督府へ奉願、今日内藤宿へ出兵、同月廿六日、豊福爲名代、豊誠更ニ家兵召連、市ヶ谷尾州邸東山道先鋒本營へ出加御軍列。

○山内豊範家記ニ云、始メ徳川慶喜伏見ニ敗シ、江戸ニ歸ルヤ在府ノ諸侯ヲ召シテ方向ヲ問ヒ、且ツ意見ヲ述フルコトアリ、我支藩山内攝津守亦在府ヲ以テ召中ニ在リ、退キ而シテ自ラ案ス、幕議ニ同スル時ハ朝敵ノ汚名ヲ受ケ、且ツ宗藩ニ背ク、素ヨリ人間ニ立ツ可ラス、雖然微力以テ幕議ニ抗シ難シ、只一死ヲ以テ本心ヲ明サン而已、終ニ自刃ス、而シテ妻某氏亦同ク死ス、遺臣等支族薰、豊誠君ヲ推シ家事ヲ攝セ含ム、本藩ニ依リ誠意ヲ京師ニ奏ス、我カ軍ノ四ツ谷宿ニ着スルヤ、重臣細井某等ヲシテ來ラ令メ、且ツ云、微力ト雖モ簿カ家人ヲ出シ、以テ宗藩ニ尾シ、故攝津守ノ志ヲ達セン、則チ自ラ五十餘名ヲ率ヒ來リ尾邸ニ投ス、家人多クハ江戸産タルヲ以テ専ラ地方ノ探偵ニ任ス。

○西尾某、錦三郎西尾某、健次郎大島某、攝津守並ニ舊旗下士督府ニ詣テ、勤王ノ意ヲ陳シ、東征ノ軍ニ從ハンコト

ヲ請フ、徳川慶喜、既ニ降ヲ乞フヲ以テ、令シテ其采色ニ歸リ、後命ヲ俟タシム。

口上之覺、

不願恐奉申上候、私共主人錦三郎始メ支家健次郎トモ勤 王之赤心貫通仕度ニ付、漸ク今日

御陣門迄參着仕候、尤日數延引之儀ハ、全ク私共共相心得罷在候ニハ、錦三郎共儀ハ直々 御陣門へ參上仕候儀ハ、實以重々恐多キ御儀ト而已奉存候ニ付、尾藩荒川彌五右衛門殿方へ罷出、萬端請御指揮、勤 王盡力可仕儀ト一圖ニ相心得候之折柄、尾州表ヲ指テ東海道筋ヲ馳登リ、當月十五日午ノ刻右表へ着仕、其上於待賓館被仰渡候旨奉謹承、同廿日同所出立、御添翰持參只今是迄參着仕候、依之直様 御本陣へ參上仕候テモ不調法之次第無御座候儀哉、恐多モ宜御下知奉願上候、此段御届ケ旁奉伺上候、以上。

尾州御取締所 濃州大野郡中之元村 西尾錦三郎家來

原 熊 治 郎

辰三月廿五日

添書、

謹奉、春和之砌御座候處、日々御軍勞可被爲在ト奉恐察候、然ハ西尾錦三郎并健次郎儀當地へ罷出、何國迄モ勤 王遵奉仕候底意ニ付、御軍門へ相加實効相立度旨申聞候付、則 御馬前へ差出申候間、宜御採用可被成降候様仕度候、先ハ右之段申上度如斯、恐惶謹言。

三月十九日

荒川彌五右衛門

宇田 栗園 校 侍史以上總督府叢紙

西尾錦三郎
西尾健次郎

是迄朝敵德川慶喜ニ屬シ居候處、今般勤 王之實効相立テ候爲メ、官軍隨從之儀願出候得共、頃日慶喜恭順之趣申立、且謹慎罷在候間、御進撃ハ御見合セニ相成居候、依之、采地へ引取り、再度之御沙汰ヲ奉待候様被 仰出候間、此段可被相心得候事。

東山道總督府

執事

大島攝津守

戊辰三月廿六日
○二十七日達書

是迄朝敵德川慶喜ニ屬シ居候處。以下、上文ニ同シ
○以上總督府諸達留

二十七日、酒井忠強ノ家臣、書ヲ督府ニ上リ、兇徒、伊勢崎地方ヲ劫掠スルヲ以テ、忠強ノ謹慎ヲ釋シテ、封疆鎮撫ノ事ニ服セシメンコトヲ請フ、督府、乃チ忠強ノ謹慎ヲ釋ス。

奉歎願口上覺、

下野守儀謹慎被 仰付、家來未々ニ至迄奉恐入相愼罷在候、然ル處、此節領分近邊惡徒徘徊仕、百姓共黨ヲ結ヒ、打毀シ所々有之、下野守初一統深心痛罷在候間、何卒格別之以 御憐愍謹慎 御免之蒙 御沙汰、快御差圖ヲ請、乍人少他領迄モ人數差出、賊徒一揆討取、潛伏罷在候惡徒共探索仕、召捕鎮靜仕候様盡力仕、王化服シ候様一同勉勵忠勤仕度奉存候間、何卒謹慎 御免被成下候様偏奉歎願度、宜御執成被下候様奉願候、以上。

酒井下野守家來

三月廿七日

岡田新九郎
長屋保次郎
總督府叢紙

○本日達書

酒井下野守へ

謹慎之儀令免許候間、士民 王化ニ服シ候様、爲國家精々可致盡力候事。

戊辰三月 總督府諸達留
酒井忠強家記

○督府、軍中ニ令シ、意見ヲ開陳シテ、忌憚スルコト勿ラシム。

○諸軍へ達書

御滯陣中、御取締並御手配向等、其他何事ニヨラス御爲筋ニ付、所存有之向ハ、不憚忌諱一口御本陣へ可被申出旨 御沙汰ニ候條、此段御達申入候也。

總督府

執事

總督府諸達留

辰三月廿七日

○督府、梁田驛傍近ノ兵燹ニ罹リシ者ヲ賑恤ス。

○總督府日記ニ云、三月二十七日

目錄 梁田驛其外村々
一金四百拾兩 燒失寺院一ヶ所、民家四十軒、一軒ニ付十兩宛 一同 三十拾兩 死人三人 一人ニ付十兩宛

復古外記 東山道戰記 第九 明治元年三月二十七日

一同二十八兩 怪我人四人
一人ニ付七兩宛
右被下置候事。

右兵變ニ罹リ候民家、死人御救、且御憐之爲被下候事。

二十八日、松平乘命、江戸ヲ去テ其封邑ニ歸リ、入覲遲延ノ罪ヲ引キ、屏居シテ命ヲ待ツ、是日、督府、藩兵東征ノ軍ニ從フヲ以テ、其罪ヲ寬宥シ、命シテ勤王ノ實效ヲ奏セシム。

去冬、列藩上京可仕旨 朝命御座候砌、主人能登守儀、於江戸雉子橋外警衛被申付、上京仕兼候段、於京地御斷奉申上、御聞届ニ相成候旨、稻葉美濃守ヨリ達有之候付、其儘罷過、上京及運々ニ深奉恐入、去月廿九日江戸出足、當月十四日歸邑謹慎罷在候旨申越候、此段申上候、以上。

岩村重役

小管五平次

三月廿七日

主人能登守儀、爲勤 王歸邑ニ付、先達テ板橋宿へ問合候處、旅宿並人馬差支候ニ付、東海道通去月廿九日江戸出足、當月十四日歸邑謹慎罷在候得共、今般當道御總督様蒙 御免、乍延引モ上京仕、勤 王報國之實効相立申度奉存候、併彼是及遲運候罪科、何分奉恐入候付、各様以御取持、上京之儀御聞届被成下候様奉懇願候、以上。

岩村重役

小管五平次

三月廿七日

板垣退介 榎
宇田栗園 榎

香川敬三 榎以上總督
府叢紙

松平能登守

是迄賊地ニ罷在、歸邑及遲延候段不埒之儀ニ付、謹慎可申付筈之處、家來之者共官軍ニ屬シ、歎願之次第モ有之、其儀ニ不及候間、爲 國家奮發勉勵、士民 王化ニ服シ候様精々可相計候事。
但シ、臨時申付候儀モ可有之、上京之儀ハ、差扣居候様可致候事。

戊辰三月 總督府諸達留
松平乘命家記

○海軍先鋒總督大原俊實、使ヲ督府ニ遣シ、本月二十三日ヲ以テ、品川驛ニ抵ルヲ告ク。

○總督府日記ニ云、三月二十八日、海軍先鋒總督使國枝小膳謁見之事、但當月二十三日、海軍先鋒總督大原前侍從殿品川御着之趣申上候事。

二十九日、是ヨリ先、勅シテ薩摩、長門、因幡、土佐、大垣五藩兵、勝沼、梁田二驛ノ戰捷ヲ賞ス、是日、督府、之ヲ五藩兵ニ傳フ。

因州 土州 薩州 長州 大垣

右、甲州勝沼驛、武州羽丹生村兩所ニオイテ賊徒屯集、砲銃ヲ以テ要地ニ據リ、官軍ヲ相抗シ候處、遂勇戰忽及掃擊、殊ニ初戰之儀、三軍之氣鋒ヲモ興シ、現地之情實達 叡聞、御満足ニ被 思食候、猶此上擢精忠、速ニ賊巢令平定、可奉安 宸襟旨被 仰出候、此段戰士へ可相達様 御沙汰候事。

三月十九日 官中日記、池田輝知家記、大垣藩記

○按スルニ、薩摩、長門、大垣三藩兵ノ古屋某等ヲ破リシハ梁田驛ニ在リ、故ニ本條、武州羽丹生村ハ、宜シク野州梁田驛ニ作ルヘシ。

○總督府日記ニ云、三月二十九日、北面藤木肥後守爲御使太政官ヨリ參到之事、甲州口勝沼、武州梁田之戰爭勝利ニ付、御褒詞被賜候事、右ニ付、早々薩、長、垣三藩へ其趣相達候、尤總管之者共被召候也。

上、扱甲州勝沼、武州羽丹生兩所之戰爭 官軍御勝利ト相成候ニ付、以格別之思召、藤木肥後守爲御使御褒詞下シ賜リ、早々御沙汰之趣各藩戰士へ申傳候處、一同感戴仕候義ニ候、就テハ、賊徒之首級並生捕等不殘護送可致旨、謹テ拜承仕候、右戰爭討取候賊徒之死骸ハ一穴ニ埋メ置候由、其後日數相重リ候事故、如何可有之哉取調、追テ言上可仕候、生捕人之儀、是又取調之上可申上候、右御請迄如斯御座候、誠恐誠惶謹言。

三月三十日

八千丸 具定

軍防局御中

追テ、兩地戰爭之節、出張仕候官軍隊長、及ヒ討死手負之者等姓名、委細書取テ以近日言上可仕候、以上。總督府諸達留

○大總督府、書ヲ二督ニ致シテ、松井康英、松平忠誠、反正歸順ノ實ヲ推覈セシム、是日、二督、復書シテ、二人歸順ノ狀ヲ報ス。

上、先達テ松井周防守儀ニ付、段々被仰越候趣モ有之ニ付、當時尾州ニ滞在被 仰付有之候處、異心無之條其後度々書付テ以敷願致候得共、先其儘ニ被差置候、其後在所表之模様如何候哉、反正歸順無相違儀ニ候ハ、外々之振合ヲ以御所置モ可

有之儀ニ候哉否、早々御申越可給候、且松平下總守別紙之通敷願書差出、東山道ニ於テ兵食御用意米等被 仰付候趣届出候、右藩ハ御不審之藩ニモ候得共、最早反正歸順之實行屹ト相立候歟、又ハ 朝廷ヨリ御不審相晴候趣ニテモ被 仰下候儀ニ候哉、當御陣ニ於テ一切承知不仕候間、巨細御申越可給候、仍如之候也。

大總督府

參 謀

三月廿六日

岩倉 大夫 殿

同 八千 鷹 殿

○別紙

謹テ奉言上候、今般徳川慶喜奉蒙 御宸怒、御征討被 仰出候段恐懼泣血他事無之候、慶喜儀ハ如何御處置被 仰付候共、可申上様無御座候得共、徳川家系之儀ハ、祖先以來累代之勳功 御亮察被成下、何卒出格之以 思召、寛大之御處置奉懇願候、弊藩之儀ハ、格別之筋目モ有之、別テ不堪悲歎候間、不願恐奉歎願候、此段越格之御評議ヲ以、御奏問之儀偏ニ奉願候、誠惶頓首。

辰 三月

松平 下總守

東征總督記、總督府諸達留、總督府叢紙

上、松井周防守儀、其後在所表之模様如何候哉、反正歸順相違無之哉、御尋問之所、右藩ハ近隣之事故、兵食取扱等申付候所、略無二念盡力之躰ニ付テハ、御宥免被 仰付候テモ子細有之間敷哉ト奉存候、尤前件慶喜初メ御宥免被爲在候程之儀ニモ有之、周防守等ニ至候テハ、畢竟枝葉之事ニモ有之、被 仰越候通御宥免被 仰付候テモ、可然哉ト奉存候、一松平下總守儀ハ、朝廷ヨリ被 仰出候事モ無之候得共、是モ當道近藩之事故、兵食取扱申付候事ニ御座候、素ヨリ東海道

總督府之管國故、謾リニ所置仕候次第ニハ無之候間、其邊不惡御執成之程、偏ニ奉希候、右得貴意度言上如此御座候、頓首謹言。

三月廿九日

具 八 千 九 定

大總督府 參謀御中

○松平下總守儀、是迄御不審有之趣ニ候得共、東山道近藩之義ニ付、藩論試之爲、兵食人馬取扱、一揆鎮撫向等申付候處、無他念相勤、一揆鎮撫ニ至テハ、朝意之趣、愚民共深ク教諭ヲ加ヘ、諸方へ人數差出シ盡力致シ候故、夫々探索仕候處、在國之者共一統、王事ニ勤勞シ、向後徳川之家系丈ケハ相立候様數願可仕旨、一藩唱居申候、然レ共、未々眞ニ實效相顯レ候ハ、無之、當道ニ於テ何レトモ所置致兼候へ共、賊魁慶喜サヘ寛典ニ被處程之思召ニ候ハ、下總守儀ハ、關東御平定迄ハ、是迄之通所領與へ置候テモ可然歟ト奉存候、尤其内反逆之意顯レ候ハ、即時ニ東道ヨリ追討可仕候、猶委數確說御探索ニ相成候テ、嚴重御處置被遊候様、於當方奉懇願候。

三月二十九日

具 八 千 九 定

大總督府 參謀御中

追呈、右藩之内ヨリ梁田戰爭之節、賊徒ヲ助ケ候者有之候間、取糺候處、右ハ脫藩之趣申出候、乍併尙疑敷候間、長藩數名忍城内へ罷越、下總守へ直ニ面會致候處、實病餘程疲勞之體ニテ、病床ニ平臥ニ付、家老中ヨリ誓書ヲ取、引取申候事ニ御座候、右等モ御心得迄言上仕候。以上總督府諸達留 東征總督記

○本條、東征總督記載スル所、達留ト小異アリ、今達留ニ從フ。

○督府、秋元禮朝ノ謹慎ヲ釋ス、又禮朝ノ父志朝刑部大輔ニ命シテ、藩政ヲ與聞セシム。

秋元但馬守

謹慎之儀令免許候條、士民 王化ニ服シ候様、爲國家精々可致盡力候事。

戊辰 三月

秋元刑部大輔

○隱居罷在候趣之處、自今國政ニ致關係、父子一和主從戮力、王事ニ勤勞可致候事。

戊辰 三月以上總督府諸達留 秋元興朝家記

○附錄一條

上、抑頃日別紙之通、秋元但馬守ヨリ差出候間、別紙之附紙ニテ返答致候處、右ハ償金並大砲等モ差出居候事故、格別御不審之廉モ無之候ハ、謹慎御許免ニ相成候様致度候、此段御勘考可給候。

堀田出羽守
内藤若狹守
永井肥前守
小笠原兵庫介

右、於在所謹慎御申付ニ相成居候處、是モ秋元但馬守トハ違ヒ候得共、同様之儀ニ御坐候間、何卒格別之御憐愍ヲ以、御許免ニ相成候ハ、如何哉、乍併御不審之廉々モ不少候得ハ、難致候、吳々モ御勘考ニテ謹慎被免候ハ、宜敷ト存候、今一應否御返事早々承度候、殊ニ秋元但馬守ハ、金、砲共差出候事故、何卒、此人體丈ニテモ早々被免候様致度候、仍早々如此候

也。

四月四日

追テ、秋元但馬守之處ハ、何卒被 免候様致度候、爲念別紙入御覽候也。中略

内 國 局

東 山 道

鎮 撫 使 全 權 御 中

○別紙

奉 歎 願 口 上 覺、

但馬守儀、兼々勤 王厚心得罷在、既當正月中、不取敢河州分領ヨリ夫、人足奉差上置、御用向被 仰付難有仕合奉存候、引續急速上京仕、相應之御用向奉願候志願ニ御座候處、東山道出兵之儀被 仰出ニ相成候付、人數差配等取調罷在候折柄、所勞ニ付旅行モ難溢仕、追々延引ニ罷成奉恐入候間、不取敢、私儀爲伺 御用上京被申付、着京之節御届申上、御用相伺罷在候處、但馬守儀所勞快方テ付、去ル三日押テ江戸表出立仕、中山道筋罷登候處、旅中武州深谷驛ニテ、岩倉様斥候隊御人數御操込ニ付、御旅中御差障ニ相成候テモ奉恐入、幸ヒ菩提所上州總社之儀ハ近間ニモ御座候ニ付、同所へ相開罷在、追テ御本陣へ爲窺 天機可罷出管ニ御座候得共、所勞押テノ旅行、長髪ニテ罷在候付、重役之者爲伺 御用御本陣へ差出候處、早歸國之上謹慎罷在候様、意外之奉蒙 御沙汰誠ニ以驚愕奉恐入候、勤 王之儀ハ、前書ニモ申上候ノ通り、抑志願ニ御座候得共、押テ申上候モ却テ奉恐入候儀ト相心得、御請仕、早々歸國之上深く謹慎罷在候、然ル處、前件之奉蒙 御沙汰候次第ニ立至リ、寸志モ難相立、誠以奉恐入候儀ニ付、慎中ニハ、御座候得共、乍聊金二万兩並大砲二門進献之儀奉願上候處、御聞濟ニテ御受納被成下、隨テ砲隊之儀モ差出可申旨御達御座候ニ付、未熟ニハ、御座候得共、大砲隊二組奉差上候段申來、一ト廉之誠意モ相立難有仕合奉存候、右様主人儀深心痛仕候情實、臣子之際難默止、悲歎ニ堪兼苦心罷在申候、何卒厚御汲取

被成下、此上之以御憐愍、彌勤 王誠意之程貫徹仕候様、慎 御免被 仰付、入京之儀 御許容被成下候様御取成被下置度、幾重ニモ奉歎願候、以上。

秋元但馬守家來

岡 村 左 京

三 月

○三月二十四批紙

先鋒總督府へ向ケ、品々進献、御用勤等之儀被聞食置候、慎御免入京等之儀ハ、追テ可被 仰出候事。總督府叢紙

○是ヨリ先、督府、内藤頼直ノ謹慎ヲ釋シ、仍ホ其入京ヲ止ム、是ニ至リ頼直、上書シテ入京ヲ請フ、之ヲ止メ、命シテ本府ニ屬シ、王事ニ勤メシム。

私儀、先達テ於在所謹慎罷在、入京遠慮之奉蒙 御沙汰、深奉恐入相慎罷在處、此度不存寄格別之 思召ヲ以、謹慎 御免被成下、誠以難有仕合奉存候、右様厚奉蒙 仰候上、直奉歎願候ハ、奉恐入候得共、何卒上京勤 王仕度志願御座候間、右赤心厚御汲取被成下、此上出格之 御慈悲ヲ以、入京遠慮之儀偏ニ 御赦免被成下候様、平ニ奉歎願候、以上。

内 藤 若 狹 守

總督府叢紙
高遠藩記

内 藤 若 狹 守

甲州路寄手之人数兵食取扱方之儀ニ付、不容易盡力、赤心相顯候趣神妙ニ候、然ル上ハ、關東平定迄總督府ニ附屬致シ、可抽忠勤者也。

戊 辰 三 月 總督府諸達留
内藤頼直家記

復 古 外 記 東 山 道 戰 記 第 九 明 治 元 年 三 月 二 十 九 日

○賴直家記ニ云、三月廿九日、右之通、岩村精一郎殿、侍座北島仙太郎殿ヨリ御達、就テハ御上京之儀ハ必御心配ニ不及、關東御平定之上ニテ可然旨被申聞候。

○四月十四日上申書

今般、上京之儀ニ付、勤王之赤心ヨリ謹慎、御赦免、間モ無御座、入京之儀奉歎願候處、厚蒙御沙汰難有仕合奉存候、依之、關東御平定之上、被遊御歸京候節、御陪從上京之儀被仰付、重疊難有仕合奉存候、何レ御道筋へ罷出扣居、御様子奉伺御供仕候心得ニ御座候、此段兼テ奉願置候、以上。

四月

内藤若狹守

高遠藩記

晦日、是ヨリ先、板倉勝靜伊賀、舊備中江戶ヲ去テ日光山ニ匿ル、會津、桑名ノ兵、及ヒ舊幕府遺黨ノ徒等之ヲ奉シ、將サニ進ンテ宇都宮ニ逼ラントス、宇都宮藩老臣、督府ニ詣テ急ヲ報シ、援ヲ乞フ、時ニ藩主戸田忠友、西上シテ大津驛ニ在リ、督府、乃チ忠友ノ父忠恕越前守時ニ在リ、ニ命シテ、藩政ニ參シ、賊徒ヲ勦蕩セシム、又書ヲ軍防局ニ致シテ、宇都宮及ヒ結城地方騷擾ノ聞アルヲ報シ、更ニ長門藩兵ヲ發遣センコトヲ請フ。

○總督府日記ニ云、三月三十日、野州宇都宮ヨリ縣勇記參上、會賊備中松山父子、桑賊等、宇都宮城ヲ襲ハントスル勢ニ付、援兵願度旨也、夜五ツ時頃、菅沼勸介參上、宇都宮迫近ニ付、援兵急々願度旨也。

○戸田忠友家譜ニ云、三月晦日、是ヨリ先舊幕府彰義隊、其外脫走ノ賊徒、兩總二野ノ間ニ出沒シ、諸所要地ニ據リ、會津之兵ニ合シ、既ニ宇都宮ヲ屠ラント欲スルノ機切迫ナルニ由テ、縣信緝ヲ以テ武州板橋驛東山道總督本營ニ訴フ、參謀伊地

知正治、其他列座ニテ、時ノ情態、近國諸藩ノ形勢ヲ尋ラル、ニ由テ、具サニ演說スル處、猶其概略ヲ書シ、即時建白ス可キ旨命セラレ、薄暮旅寓ニ歸リ、其夜一通ノ書ヲ上ル。

○宇都宮藩縣勇記歎願書、

國事情態愚存御尋ニ付、左ニ奉申上候、今春以來、會津家ニ於テ、奉對朝廷大逆無道之儀仕、至極恐入謹慎罷在候ニ付、弊藩近親之由緒ヲ以、朝廷へ歎願之筋周旋仕吳候様、先方重臣共ヨリ、弊藩重役迄賴談御座候、手續ヲ以愚存仕候得ハ、万事謹慎可罷在下心得候處、近頃ニ相成、桑名之人、其他江戸歩兵之内、奉對官軍大不敬仕候者、或水藩重臣之市川三左衛門之徒ニ至迄、領内ニ屯集爲致候風說相聞、近來ニ相成、宇都宮舊領、當時分家、大和守領分高德村、大原村等ニ人數差出、日光山守衛杯ト唱、日光山今市宿ニ多人數入込、剩秋元但馬守、日光ニ差置候大砲借受候趣風聞モ有之、猶又今市宿蓄穀數千俵、俄ニ日光山ニ引上候杯、趣意不相分處置仕、近日下總結城ニ一戰之砌モ、纔之人數之由ニ御座候得共、會藩之士加勢トシテ、江戸彰義隊士ト同様一戰之上、城内ニ入り、今以罷在候趣相聞候儀、謹慎中不都合之次第ニ奉存候、虛實未定ニ御座候得トモ、野州黒羽城借受度杯申入候ヨシ相聞候、右様不審之情態御座候上、日光近邊ニ多人數繰出候得ハ、宇都宮之儀ハ迫近之場所、殊ニ要害便利、近隣ニ冠タル地ニ御座候得ハ、万一會津家異謀ヲ抱キ候得ハ、宇都宮ニ雄據シ、強暴ヲ以テ、近隣之小諸候ヲ威服併有仕候上、凶焰ヲ以テ煽動仕候儀ト奉存候、左候得ハ、關東疲弊之大小名一時阿附仕、是迄勤王ト決定仕候諸藩モ、自然心ニ途ニ相成、王化ヲ被爲行候巨障ヲ生シ、御鎮撫之御成功ハ、百倍之御艱難ニ可相成哉ト不堪杞憂奉存候、是所謂二葉之内ニ心ヲ用ヒサレハ、斧ヲ用ニ至候儀ト奉存候、左候得ハ、當今差當リ宇都宮へ不拔之鎮ヲ被爲置候儀第一之御急務ト奉存候、右城ハ弊藩ニ於テ幾重ニモ守衛等可仕ハ勿論之儀ニ御座候得トモ、關藩老若合セテ一千ニ不滿、寡弱疲弊之兵力ヲ以テ、手廣之城郭戰備普ク行届兼、且封境ハ南小山、間々田兩宿へ八九里北、會津境迄十八里餘、西鹿沼へ三里、東氏家宿迄五里御座候故、非常之節彼是へ手配仕候得ハ、前文之少兵故、守

備手薄ニ相成引足不申、旁以豫必勝之算無覺束奉存候、然處、會津家事情難心得條々前文ニ御座候得ハ、何時大兵ヲ以テ、卒然強暴之事ヲ加ヘ候哉モ難測、自然右之節ハ、城中之士快ク一戰斃而已矣ト申外定策無御座、當今唯一戰之決議仕候事ニ御座候、右死ヲ以テ勤 王之微意奉表候上ハ、弊藩之一分ハ申譯相立候得トモ、右關東御鎮撫ニ付、制御要害便利第一之城ヲ敵之有トナシ、王化御宣布之障ヲ引出シ、又關東ニテ勤 王ヲ表シ候得ハ、強暴之爲ニ斃候杯ト心得、關東之諸藩勤 王確守之意、自然相弛候様成行候哉ト奉存候、右様相成候ハ、朝廷之御不爲無此上儀ト奉恐察候、依之、仰願御鎮撫之御成功迄ハ、弊藩之微忠御恕察被下置、領内之民強暴之害ヲ免候様、御鎮撫之御所置奉懇願候、右ハ此度國事情態申上、一藩危亡之御救助奉願罷出候折柄、私一分丈之愚存御尋ニ付奉申上候處、猶其旨書面ニ相認差上候様被仰渡候ニ付、此段奉申上候、乍併、全是私一己狂愚之妄論ニテ、奉汚高聽候段、誠ニ恐懼戰栗之至ニ不堪、罪當萬死候、唯獻芹之微忠ト御憐察御海涵之御沙汰奉仰候、恐懼恐惶頓首。

○ 慶應四年戊辰三月晦

縣 勇 記

今般縣勇記ヨリ委細書面差出置候處、追々切迫相成候風聞等モ御座候趣、尙亦申越候間、何卒早々援兵御人數御差向被成下置候様奉歎願候、以上。

三月晦日

戶田土佐守家來

營 沼 勘 助

以上總督府叢紙

○本日達書

戶田 越 前 守

隱居罷在候趣ニ候處、今般賊徒近境ニ屯集シ、不容易折柄ニ付、向後國政ニ關係シ、主從戮力 王事ニ勤勞可致候事。

戊辰 三月 戶田忠友家記

○忠友家記ニ云、四月三日、越前守忠恕儀、岩倉少將殿ヨリ御達ノ趣モ有之ニ付、今日在所へ發途候。

○二督軍防局ニ遺ル書

一三月廿三日ヨリ廿五日比ニ至リ、下總結城主水野日向守、徳川家來彰義隊ト申者ヲ相率ヒ歸邑致シ候ニ付、在城之家來共、官軍へ之聞ヘテ憚リ拒戰致シ候處、衆寡不敵、城ニ火ヲ放チ立退候、日向守儀ハ、右城之燒跡ニ在陣致シ居候由ニ候、日向守之男城中ニ罷在候處、去ル九日、家來共計ヒテ、尾州表へ落シ遣シ候趣ニモ相聞ヘ候、

一昨廿九日七ツ時、下野宇都宮城主戸田土佐守家來馳參リ報知致候次第ハ、會賊、水藩脱走之者、備中松山父子、桑名等之賊ヲ相語合、半ハ日光山ニ據リ、半ハ道路所々ニ屯集シ、已ニ宇都宮城ヲ襲ハントスル勢、顯然タル趣ニ候、右兩地之義ハ、尙探索之上言上可仕候事。

三月晦日

追テ、本文之次第ニテハ、追々戰爭モ可有之哉ト被察候、就テハ長藩之人數些少ニテ往々不便之儀モ有之候間、彼藩之人數、今少々御差下シニ相成候様奉渴望候、前後合シテ一大隊ニモ相成候様仕度、急々御評決之程奉懇願候、以上。總督府諸達書

○是ヨリ先、督府、竹澤邦光ヲ捕ヘテ、加納藩ニ幽ス、是ニ至リ岡田善長ノ兵ニ命シテ、之ヲ牙營ニ押送セシム。

○岡田善長從軍事蹟ニ云、三月中、竹澤寬三郎儀、飛州高山表ニテ御召捕、加納藩へ御預ケ相成居候處、私兵隊へ護送被仰付、加納宿ニテ同藩ヨリ請取之、板橋宿御本陣へ差出申候。

○邦光ノ罪狀及ヒ處分ハ、諸書見ル所ナシ。

復古外記 東山道戰記 第九 明治元年三月晦日

○松平忠誠、大岡忠貫主膳正、岩槻藩主、疾ヲカメテ江戸ヨリ其封邑ニ歸リ、老臣ヲ督府ニ遣シテ起居ヲ候ス。

下總守儀、元來多病質ニ御座候處、昨夏頃ヨリ脚氣症、其上齶症之體ニテ、追々容體衰弱ニ及候間、種々療用差加候得共、春來不陽氣故、別テ出來不出來有之候ニ付、病間相見合在邑仕候心得之處、追々疳癆之症ニ推移、聊之儀モ支塞、不容易病體ニテ、乘輿之儀、醫師共ヨリ堅差止候得共、今般御進軍被爲在候折柄ニ付、押テ弊邑迄罷歸、天恩奉戴之微衷ヲ顯候素志ニ御座候處、旅行差障、疲勞相増、以之外之病勢ニテ、聊モ進歩難叶候間、甚奉恐入候得共、小臣へ命、御總督様迄御機嫌奉 伺候様申付候間、右病體切迫之情實徹底仕候様、御内々厚御指令被下置度 奉懇願候、誠惶頓首。

戊辰三月

松平下總守内 山田大隅

○此度、御下向之趣相伺候ニ付、以名代奉伺御機嫌候、主膳正儀所勞罷在、此節少々快方御座候ニ付、中山道筋上京可仕ト出立仕候處、病後旅行仕候故歟、再發難儀仕候ニ付、不得止事在所岩槻表へ立寄、療養手當仕、少々モ快御座候ハ、早速出立可仕奉存候、此段以名代申上候。

三月

大岡主膳正名代 兒玉宗吾 以上總督府叢紙

○松平某、人、準、太田某榮之丞、並ニ舊旗下士、書ヲ督府ニ上テ、勤王ノ意ヲ陳シ、公事ニ服センコトヲ請フ。松井某信濃守、舊旗下士モ亦書ヲ上リ、疾ヲ以テ入觀遲延スルノ狀ヲ陳謝ス。

乍恐奉歎願候、私儀從來勤 王之志ニ罷在候ニ付、早速上京、相應之御用筋奉蒙度志願ニ御座候處、先達テ、大垣表 御本陣へ家來共ヨリ奉歎願候通、舊年來病氣罷在、心外之延引仕候、漸此節快方ニ付、不取敢參上仕候、勤 王相應之御用奉蒙度奉存候、何卒寛大之御趣意ヲ以、微哀之程御諒察被成下、願之通御聞濟被成下候ハ、重々難有仕合奉存候、此段宜御執成被下候様奉頼候、以上。

辰三月

松平 準 人 ○

東山道御鎮撫 御總督 御執事 中 抄

○今般、御達相成候 朝命之趣、固奉敬承候、榮之丞儀モ勤 王遵奉之外他念無御座候ニ付、最早江戸表出立、近日歸邑仕、證書奉差上候、於家來共モ、聊別心無御座候間、是迄之通、知行被下置、相應之御奉公相勤度、此段於私共モ奉願上候、以上。

慶應四辰年三月

太田榮之丞家來 矢島金右衛門 土屋市太郎

○以上二條、並ニ指令ヲ佚ス。

○今般、以 勅書海内御布告之趣、敬慎奉畏候、速采地へ罷越、朝命遵奉可奉寸志、艸莽之私素願御座候處、生質多病、家相續之後、撒兵頭相勤候得共、痾被阻、同僚共受助力候而已、往々勤續出來兼、仍之、當正月中退役仕、猶更加療養候得共、只今以快復不仕、上京遲延仕、如何ニモ奉恐入候、此上病痾少愈仕候上、勤王之赤心相顯可申、俯テ奉存候、只々以

御總督府之仰、御憐情 御奏聞之儀被成下候ハ難有仕合奉存候、此段奉願上候、誠恐敬白。

松川 信濃守 印

以上總督府叢紙

四月朔日、大總督、手書ヲ二督及ヒ薩摩、長門、因幡、彥根、土佐五藩兵ニ下シテ、勝沼、梁田二驛ノ戰捷ヲ賞ス、又高島藩兵、勝沼服役ノ勞ヲ犒フ。

今度、高崎、勝沼於兩所ニ賊徒襲來之處、早速擊戰被致、賊兵敗散、官軍勝利之趣、殊ニ被得首級數十、分取數十品、畢竟鼓軍指揮行届、一段之事候、猶軍機勉勵可有之、此段賞狀申入候、依如件。

慶應四年四月一日

大總督 大宰帥 熾仁

岩倉 大夫 殿

岩倉 八千九 殿 東征總督記

○按スルニ、高崎ハ宜シク梁田ニ作ルヘシ。

今度梁田、勝沼於兩所賊徒襲來之處、早速擊戰、官軍勝利之趣、各隊憤發一段之事ニ候、猶可勵忠戰、此段賞狀申聞候、依如件。

四月一日

大總督 御 印

東山道 各藩 諸隊中 東征總督記、池田輝知、戸田氏共、家記

上略、感狀一通、同諸隊ヘ一通、右達可申被命候間、則差進候、御入掌可給候、

四月朔日

岩倉 大夫 殿

同 八千 鷹 殿 東征總督記、總督府叢紙

大總督 府

參 謀

○督府、高島藩兵ヘ達書

過日、甲州於柏尾村テ戰爭之砌、盡力勉勵、終ニ賊徒及敗走ニ、一段之事ニ被 思召候、依テ慰勞トシテ兵隊ヘ、大總督府ヨリ御酒被下候事。

三 月 高島藩記

○本條、日ヲ佚ス、因テ此ニ合叙ス。

○高崎藩記ニ云、大監軍西尾遠江介丞ヨリ、隊長之者罷出候様御達ニ付、内藤新宿御旅館ヘ罷出候處、御口上御達、右之通。扱、過日梁田、勝沼兩所之戰爭ニ付、私共並諸藩士迄御感狀下賜リ難有拜見仕候、彼戰爭之如キハ、實ニ區々タル事ニ候處、深厚之 御沙汰ヲ蒙リ、生涯之光榮不過之、感激之至ニ奉存候、早速兵士等ヘモ相達候處、一同感喜踊躍、謹テ拜戴仕候、右御禮迄如此候、薰沐敬白。

四月十四日

具 八千 丸 定

大總督府 參謀御中 上下略、東征總督記

復古外記 東山道戰記 第九 明治元年四月朔日

○督府、香川廣安、敬三、水戶藩士、和太郎、土佐藩士ヲ以テ軍監ト爲シ、内參謀祖式某郎金八ト共ニ彦根、岩村田、須坂三藩、及ヒ岡田善長ノ兵ヲ率キテ、宇都宮ニ赴援セシム。

香川 敬三

軍監被 仰付候事。

四月

東山道總督府

香川敬三事蹟

○平川某ノ宣達書ハ、之ヲ佚ス、蓋、廣安ト同文ナラン。

○岩村田藩兵ヘ達書

宇都宮邊ヘ斥候隊トシテ出兵被仰出候間、須坂藩へ申合可相勤候事。内藤正誠家記

○從今日宇都宮表へ爲斥候、軍監以下百人餘出兵ニ相成候ニ付、兵糧金穀取扱、其兩藩申合、金子持參ニテ同様出張可致旨被仰出候事、

右相達候ニ付、早々金子千兩計持參候テ可然哉存候間、御用意可被成候事。

總督府

執事

四月朔日

大垣藩

西大路藩

右兵糧掛御役中義家記

○總督府日記ニ云、四月朔日、宇都宮へ出兵左之通、

大軍監 香川 敬三(三隊)

同 有馬 藤太

右、彦根二小隊、須坂一小隊、岩村田一小隊、岡田人數一小隊ヲ率テ出張之事。

小軍監 平川 和太郎

斥候 祖式 金八郎

○香川敬三事蹟ニ云、コレヨリ先キ、松平容保上國ノ軍敗レ、大坂ヲ去リ本國ニ歸ルヤ、益逆意ヲ逞シ、兵ヲ下野ノ日光近傍ニ出シ、將ニ謀ル處アラントス、時ニ下野國宇都宮ノ城主戸田越前守、其家士縣勇記ヲシテ板橋驛ニ來ラシメ、急ニ總督

ニ報ス、コ、ニ於テ東山道官軍ノ内、彦根、岩村田、須坂ノ三藩及ヒ岡田某之兵等凡二百人ヲ發ス、四月一日、敬三、平川和太郎原註、元土州ノ人、祖式金八郎原註、長州ノ人、有馬藤太原註、薩州ノ人、上田楠次原註、土州ノ人、南部靜太郎原註、同上、等ト共ニ板橋ヲ發ス。

○井伊直憲家記ニ云、三月晦日、宇都宮藩ヨリ、頃日會人近邊ニ致徘徊、可襲當城之勢ニ候間、急速援兵之儀、東山道御總督へ願出候ニ付、翌四月朔日、須坂、岩村田、揖斐等之藩々ヨリ一小隊ツ、弊藩ヨリ一中隊差向候様被 仰付、則物頭小泉彌

一右衛門、青木貞兵衛一中隊、斥候西村捨三、今村彦四郎、堀部彌二郎並附屬役々、外ニ豫備隊物頭渡邊九郎左衛門一小隊、即刻板橋驛ヲ發。

○堀直明家記ニ云、四月朔日、宇都宮邊賊徒屯集ノ報告有之、同日夕板橋驛ヲ發シ、千住驛へ進。

○岡田善長從軍事蹟ニ云、武州板橋宿御滯陣中、野總表ニ屯集之賊徒有之候ニ付、御總督御軍監香川敬三出張ニ付、御旗爲御警衛半隊進軍被 仰付、四月朔日板橋宿出立。

二日、是ヨリ先、内國局、督府ニ移牒シテ、戸田忠友ニ謹慎ヲ命シ、且其父忠恕ヲ召スヲ告ク、

是日、督府、書ヲ三職ニ致シ、宇都宮地方騷擾スルヲ以テ、姑ク忠恕赴召ノ期ヲ緩クセンコト

ヲ請フ、又北陸道先鋒總督ニ移牒シテ、宇都宮ノ警ヲ報ス。

復古外記 東山道戰記 第九 明治元年四月二日

愈御清榮令恐賀候、抑今度戸田土佐守義、於大津驛謹慎罷在候様被 仰付候、並隱居越前守義ハ、依御用上京之義被 仰付候間、此段爲御心得申入置候、仍早々如之候也。

三月廿二日

内 國 局

岩倉 大夫 丞

同 八千 丸 丞總督府 叢紙

○ 御用有之、戸田越前守儀御召被仰出候趣ニ候處、此度、會、桑始諸方脫走シ賊徒等、下野日光山其他所々ニ屯集シ、動モスレハ宇都宮城へ襲來可致ノ勢顯然ニ付、彼藩ヨリ援兵歎願申來候間、旁以難捨置、則援兵差出シ申候、右ニ付、越前守在國指揮不仕候テハ、兵士ノ進退深ク心痛ノ趣ニ候、万一彼地賊手ニ陥リ候ハ、不容易大害ヲ可生、眼前ノ大敵未亡ニ、盜賊四方ニ蜂起致シ候テハ、國家ノ御大事ト奉存候、何卒右賊徒平定致シ候迄、同人上京ノ義、御猶豫被 仰付候様奉懇願候、誠恐誠惶謹言

四月二日

八 千 磨 具 定

總裁御中 議定御中 參與御中辦事局叢書 總督府日記

○復書

依御用、戸田越前守被召候處、此度諸方脫走之賊徒等、野州日光山、其他所々屯集、動モスレハ宇都宮城襲來之勢モ有之候間、彼藩ヨリ援兵願候ニ付、援兵被差出候處故、越前守在國指揮不仕候テハ、深心配、萬一彼城賊手ニ陥リ候テハ、不容易儀ニ付、越前守上京之儀御猶豫被 仰付候様被仰越、御尤ニ承候得共、於越前守ハ段々難去儀モ有之、是非上京可有之被召候事故、彼地鎮定候上ハ、早々登京ハ、勿論、粗取締モ附候ハ、重役共へ申付置、於越前守ハ迅速上洛可有之候様存候、此旨本人

へ御達有之候様存候、先此段及御答候也、謹言。

四月十日

參 與 局
議 定 局
總 裁 局

岩倉 大夫 殿

八 千 磨 殿

○ 至尊益御機嫌克被爲涉候條、御放意可有之候、隨貴君方愈御壯健、御軍旅珍重不斜候、抑、今般戸田越前守、依御用上京被仰付候處、自國賊徒蝟集致候ニ付、越前守在國不致候テハ、指揮行届兼候ニ付テハ、願出之趣御申越之旨承候、然處、戸田大和守へ委敷事情承候處、格別之儀ニモ無之、遂ニ靜謐ニ及候趣ニ候間、重臣殘置、取調申付置、越前守早々登京可致旨 御沙汰ニ相成候間、此段申入候、仍如此候也。

四月十日

實 則

岩倉 大夫 殿

八 千 磨 殿以上總督府叢紙

○ 按スルニ、忠恕、遂ニ召ニ赴カス、五月二十八日ニ至リ病歿ス。

益御勇健御進軍奉賀候、然ハ、今以大總督府ヨリ進撃ノ命令無之、一日千秋之思ニ罷坂候、扱又會、桑其外諸方脫走之賊徒等、下野日光山、其他所々ニ屯集シ、動モスレハ宇都宮城へ襲來可致之勢顯然ニ付、彼藩ヨリ援兵歎願申來候、旁以難捨置、爲斥候不取敢人數四小隊差出シ申候、於貴府モ宜ク御賢慮ヲ被運候様奉頼候、右申入度大略如此ニ候、頓首敬白。

四月二日

四三四
八千九
具定

高倉三位殿
四條大夫殿

追テ委曲ハ、使者中井範五郎ヨリ御聞取可被下候也。總督府叢紙
北陸道先鋒記

○復書

貴翰令拜讀候、彌御勇健、御軍務御繁用ト存候、然ハ大總督宮ヨリ御進擊之命令不被爲在候ニ付、御歎息之由御尤ニ存候、
扱會、桑其他賊徒、日光山、且處々ニ屯集致、宇都宮城ヲ可襲來顯然ニ付、彼藩ヨリ援兵願出候旁存付候、不取敢四小隊御操
出シ相成候ニ付、於當府モ可致盡力之旨御沙汰令敬承候、猶範五郎へ御答申入置候間、委細御聞取可給候、仍早々粗答如此
候也。

四月二日

隆平
永祐

東山道 兩總督府總督府
叢紙

○内參謀祖式某金八郎等進テ粕壁驛二次シ、賊勢鴟張ノ狀ヲ督府ニ報シテ、後援ヲ乞フ、督府乃
チ彦根藩兵ニ命シテ赴援セシム。

○總督府日記ニ云、四月二日、香川敬三、祖式金八郎ヨリ報知之書來ル、賊徒處々ニ潜伏有之、曠原平野之儀候間、少人數ニ
テ手配兼候趣、依之、彦根一小隊、又々繰出シ候事。

三日、督府、館林藩ニ令シテ、兵ヲ結城傍近ニ出サシム。

○秋元興朝家記ニ云、四月三日、東山道總督府御達ヲ受、二小隊總州結城邊へ出兵候事。

○内參謀祖式某金八郎等粕壁驛二次ス、賊兵、流山驛下ニ嘯聚スト聞キ、兵ヲ分テ之ニ向フ、賊將
近藤昌宜等、兵器ヲ致シテ降ヲ乞フ、乃チ昌宜ヲ捕ヘテ督府ニ押送ス、尋テ之ヲ斬リ、首ヲ京
師ニ傳フ。

○香川敬三事蹟ニ云、四月一日、粕壁驛ニ至ル、是ノ夜告ル者アリ、賊軍流山ニ向ト、急ニコレヲ襲フ、賊徒爲スアタハス、
賊長近藤勇ナル者、出テ降ヲ請フ、即夜近藤勇ヲ引テ越ケ谷驛ニ至リ、明日、板橋驛帶陣ノ總督府ニ護送ス。原註、近藤勇後
首シ、首ヲ京師ニ送り三條河原ニ梟首ス、勇往年京師ニ在リ、新撰組ノ長タリ、暴威ヲ逞シフシ、擅
ニ正義ノ士ヲ斬害ス、其好惡世ノ能ク知ルトコロナリ、蓋新撰組ハ徳川將軍ノ設タルトコロナリ、

○井伊直憲家記ニ云、四月二日、粕壁宿陣ス、然ル處賊徒下總國流山宿ニ屯在之趣相聞へ候ニ付、三日曉越谷宿へ操返シ、
利根川ヲ渡リ、申刻頃總軍流山宿へ相向ヒ候處、賊兵所々へ致分配候内、督府斥候有馬藤太及ヒ弊藩斥候西村捨三、引續キ
渡邊九郎左衛門一小隊、直ニ賊之本陣ニ迫リ、賊長ヲ呼立候處、内勝隼太ト申者、外ニ兩人罷在候間、何レ之兵ニテ、何等之
故ニ致屯集候哉相尋候處、此程江戸表ヨリ歩兵共脱走、所々及亂妨、且此邊農民一揆蜂起之趣相聞へ候ニ付、爲取締致出張
居候儀ニテ、奉對官軍聊不敬不仕旨申答候間、今時、江戸表謹慎恭順之折柄、取締之儀申唱候得共、兵威ヲ張リ罷在候事、甚
以難得其意、尤亂妨一揆之者等於有之ハ、督府ヨリ御鎮定被爲在候儀ニテ、其方共之預ル所ニ無之、依テハ即刻兵器等差出
シ、無一之誠意ヲ表シ候ハ、處置方モ可有之候得共、萬一及遲延候ハ、忽可加誅罰旨申渡候處、賊徒速ニ奉命可仕ト申
答、無程賊長大久保大和ト申者、木陣并分隊之兵器悉ク取集メ、大砲三門、小銃百十八挺差出候ニ付、則弊藩へ請取、前件再
ヒ大和へ及詰問候處、前同様申答候、然ルニ右大和儀ハ、近藤勇變名致居候事、渡邊九郎左衛門見顯シ候ニ付、尙御推糺之
次第モ有之間、督府へ可罷出旨申渡、同夜越谷驛へ召連、翌四日渡邊九郎左衛門隊下護送、板橋驛御本陣へ差出候。
○山内豐範家記ニ云、賊益跋扈、宇都宮ノ城主戸田某、其ノ臣縣勇記ヲシテ援ヲ板橋ノ督府ニ乞ハ令ム、事甚々急ナリ、乃

チ東山遣ヨリ彦根、須坂、岩村田ノ諸藩並ニ岡田將監ノ兵ヲ付シ、本月朔ヲ以テ板橋ヲ進發ス、内參謀祖式金八郎、同香川敬三、斥候上田楠次、平川和太郎等之レニ屬ス、原註、上田楠次ハ我軍ヨリ、下總流山ニ賊軍屯集スルノ聞ヘアルヲ以テ、直ニ進督府ヘ差出シ置ク者ナリ、テ流山驛ヲ圍ミ、祖式、上田等直ニ入テ賊長大久保大和ニ面會シ、其ノ兵器ヲ携ヘ、屯集ノ所以ヲ詰責シ、速ニ兵器一切、官兵ニ交付スヘシ、万一異議アラハ戰爭ニ及フヘキ旨、手強ク談判ニ及ヘリ、大和答テ曰、輕輩ノ者トモ無遠慮ニ兵器ヲ携ヘ脱走ス、故ニ我レ取締ノ爲メ立チ越セリ、決テ官軍ニ抗拒仕ルノ所存ナシ、兵器ハ命ニ從フヘシト、乃チ一切官兵ニ交付ス、賊固ヨリ事ヲ起ス含ノ所、官兵不意ニ乘シ、彼レ未タ戰備不調、彈藥缺乏、戰ヲ欲シテ不能、不得止此ニ至ルト云、其ノ隊長大和或ハ近藤勇ナルヲ疑フ、然レトモ確證ナシ、且ツ彼レ亦多人數ナレハ、直ニ補縛スレハ、徒ニ變ヲ激スル、策ニ非ス、則チ上田等相議シ、大和ニ謂曰、器械一切差出ス上ハ、固ヨリ其儘差置クヘシ、然レ共、汝ハ隊長ノ儀ニ付、一應督府ニ參リ、始末ヲ言上シ、且ツ御詫ヒ可申、我レ同道セン、大和畏リ、楠次ニ從ヒ板橋ニ來ル、上田則其ノ始末並ニ疑フヘキヲ督府ニ上申ス、是ヨリ先、伊東甲子太郎ノ勇等ノ爲メニ京師ニ横死スルヤ、其ノ徒薩藩ニ投ス、此ノ役從テ薩軍ニ在リ、彼レ本新撰組ニ入ルヲ以テ、能ク勇ヲ識ル、乃チ彼ヲシテ大和ヲ視セ令ム、果テ勇ナリ、於是縛シテ獄ニ投ス、實ニ寸兵ヲ不勞、卒ニ各藩立合ヲ以テ、督府小監察脇田賴藏之レヲ糺彈ス、我藩乃チ谷守部安、岡亮太郎之レニ蒞ム、上田楠次ハ直ニ祖式等ノ跡ヲ追フ。

○岡田善長從軍事蹟ニ云、四月朔日、板橋宿出立、總州流山ニ屯集罷在候大久保大和、原註、原名近藤勇事、私兵隊ヲ以押寄候處、降伏仕、依テ私殘兵隊ヘ御預ケ相成、其後依御下知刀取、元家來横倉喜三次刎首仕、右首級京都表ヘ御差登相成候節、私兵隊ヘ護送被仰付相勤申候。

○總督府日記ニ云、四月四日、上田楠次歸ル、流山屯集賊兵之長大久保大和守之義ハ、新撰組隊長近藤勇ニ付、彦藩ヨリ應接之上、召捕リ送り付ケ候事、

同五日、近藤勇儀、詰問之上、入獄申付候、

右勇ヘ、賊黨松波權之丞ヨリ、相馬肇書狀持參ニ付、是又召捕候事。

○過日、宇都宮ヘ出張致候 官軍御人數、流山ト申處ニ於テ、賊兵之長大久保大和、實ハ近藤勇ト申者ヲ召捕候ニ付、當驛獄中ニ被繫置候、然ル處、賊黨松波權之丞ヨリ、相馬肇ト申者ヲ使トシテ、右勇ヘ書狀持參致シ候ニ付、是亦御召捕ニ相成候、右之次第ニ付、尙此上賊黨當驛ヘ入込、自然非常之儀可有之哉モ難計候間、諸軍一同兼テ承知之儀ニハ候ヘトモ、廻番等疎略無之様、一段嚴重ニ可相勤旨、御沙汰候條御達申入候也。

四月五日

御礎陣

執

事

十 三 藩

宛總督府諸達留
大垣藩記 松平乘命家記

○日記又云、四月二十五日、近藤勇並附屬之新撰組一人、斬罪ニ處ス。

○北島秀朝事蹟略ニ云、三月、賊兵總、野二國ノ間ニ起リ、勤王ノ藩々ヲ苦シメ、或ハ民物ヲ掠ム、岩倉具定兵ヲ出シテ之ヲ伐ツ、一方ノ賊魁、幕臣近藤勇ナル者、姓名ヲ變シ大久保大和ト稱シ、下總國葛飾郡ニ起ル、岩倉總督ノ前軍、彦根藩兵之ヲ虜フ、即チ督府ニ囚ス、四月督府隨兵岡田整之介ノ兵ニ命シテ、近藤勇ヲ板橋驛外ニ斬リ、其首ヲ樽ニ納ム、秀朝ノ上京スルヤ、傍ラ之ヲ護送スヘキノ旨ヲ受ケ、秀朝日夜兼行シテ、二條城太政官代ニ至リ、委サニ東國ノ狀ヲ奏シ、又賊首ヲ刑法官ニ出ス、樽ヲ開ケハ則首猶生ルカ如シ、百官見テ以テ奇トナス、是レ火酒テ以テ之ヲ浸セハナリ、五月、秀朝江戸ニ歸ル。

○二督太政官ニ呈スル書

今度檻送仕候囚人近藤勇、在京中之所業今更申迄モ無之、東下之後、私ニ兵隊ヲ率ヒ、甲州ヘ出張致シ、官軍因、土兩藩之人數ト及戰爭ニ候處、敗走シテ江戸地ヘ退キ、大久保大和ニ變名シ、又候兵ヲ率ヒ、器械彈藥等相備ヘ、下總國流山ト申驛ニ

屯集致シ居候處、當手之人數、不意ニ押寄セ召捕ヘ、板橋陣所ヘ送り越シ候ニ付、詰問仕候處、徳川家來大久保一翁ヨリ被申附、爲鎮撫甲州並ニ流山ヘモ出張致シ候旨申立候ニ付、徳川目附兵ヲ呼寄セ、大久保大和ト申者有之哉ト相尋候處、右様之者徳川家來中ニハ無之趣相答、又近藤勇ト申者ハ、何方ニ罷在候哉及訊問候處、右ハ疾クヨリ脱走ニ及ヒ、近來徳川之事ニ關係致シ候儀ハ少モ無之由ニ候、畢竟彼ノ者之罪跡ハ、天下之士民遍ク知ル所ニテ、今度私ニ兵ヲ率ヒ、官軍ト及戰爭ニ候段、慶喜恭順之意ニモ相戻リ、天地不可容之大罪ニ候、尤彼ノ者之申候ニモ、甲州及ヒ流山ノ義ハ、何分ニモ恐入候次第、如何様御置被 仰付候テモ不苦ト、既ニ及伏罪ニ候、官軍之諸藩士、從來彼カ肉ヲ食ハンコトヲ欲シ居候ニ付、一時モ早ク可被處嚴刑ニ旨申出候得共、何分天下之大罪ニ候間於京師市中引廻シ之上令梟首、聊天下義士之心ヲ慰メ候様仕度奉懇願候、右様之大罪人、萬一寛大之 御處置杯被 仰付候ハ、天下之有志都テ望ヲ失フ而已ナラス、當道官軍之如キハ、一同切齒憤怨可仕義ト被察候、何分賞罰ハ經國之要務、方今御一新之折柄、刑措ヲ不用ト申、至治之世トハ同日ニ論シ難ク、濫殺ハ可慎儀ニ候得共、一人ヲ誅シテ千萬人喜フト申御處置不被爲在候テハ、乍恐天下之士民、朝廷ヲ奉懇願、頓首謹言。香川敬三私記

○本書、原記月日ヲ佚ス、按スルニ、總督府ノ議、中コロ變シ、是書ハ蓋上ラサリシナリ、然レトモ、其昌宜ノ罪跡ヲ叙スル稍詳ナルヲ以テ、此ニ附記ス、又閏四月七日ニ至リ、昌宜ノ首ヲ京師ニ條積ニ梟ス。

四日、東海道先鋒總督、江戸城ニ入り、勅旨ヲ田安慶頼中納言、徳川氏三卿ノ一ニ傳ヘ、徳川慶喜ノ死一等ヲ減シ、命スルニ五事ヲ以テシ、七日ヲ期シテ奉答セシム、慶頼、謹テ命ヲ奉ス、督府乃チ之ヲ諸軍ニ布告シ、且不虞ニ備ヘシム。

彌御安全御滯陣珍重存候、然ハ別紙之通、慶喜眞實謹慎恭順之由ニ付、於 朝廷格別之御憐愍ヲ以、寛典御所置被 仰出候間、此旨御心得可有之候、猶自後舉動之儀モ難計、其邊ハ東海道先鋒總督ヘ御打合可有之候。中略

三月廿六日

大總督府

參

謀

岩倉 大夫 辰

同 八千 磨 辰

○別紙

第一條、慶喜、去十二月以來奉欺 天朝、剩ヘ兵力ヲ以犯 皇都、連日錦旗ニ發砲シ、重罪タルニ寄、爲追討官軍被差向候處、段々眞實恭順謹慎之旨ニテ、謝罪申出候處、家康以來二百餘年治國之功業不淺、格別深厚之 恩召被爲在、殊水戸贈大納言積年勤 王之志業不少、旁以左之條件實効相立候得ハ被處寛典、徳川家名被立下、慶喜死罪一等被宥、水戸表ヘ退キ謹慎可罷在候事、

第二條、城明渡シ、尾州藩ヘ可相渡候事、

第三條、軍艦、銃砲引渡可申、追テ相當可被差返候事、

第四條、城内住居之家臣共、城外ヘ引移謹可罷在事、

第五條、慶喜叛謀相助候者、重罪タルニ寄リ、可被處嚴科之處、格別之寛典ヲ以、死一等ハ可被宥候間、相當之處置致シ可申出候事、

但、萬石以上ハ、以 朝裁御處置可有之候事。東征總督記(此ノ別紙ハ、第三册二八三頁所載ノ勅書ト尙文タルヘキモノナレト)總督府諸達留(モ、異同十數ヶ所アリ、勅書ハ太政官日誌所載ノモノト略同シ。)

○ 然ハ進擊之儀再度御布令有之候迄可被見合旨、御命之趣御達申置候處、御見込之邊巨細被示越、逐一 大總督王ヘ及言上候、何分段々之事情モ有之、不得止 朝廷ヘ御伺定ニ相成、御決定之御處置、西郷吉之助伺取令歸陣候間、御處置振一紙、則使番津金甲太ヲ以差進候、則前月廿六日當城發途候間、必定御落手ト存候、當道先鋒總督、既ニ江戸地進入被 仰付有之

候間、尙此末之處御打合可有之候。中略

大總督府

四月朔日

參

謀

岩倉 大夫 彦

同 八千 麿 總督府叢紙
東征總督記

○ 愈御清健珍重存候、陳ハ這回依 大總督宮令旨、明日爲 勅使兩官入城候間、此段爲可得各高慮如斯候也。

四月三日

前 實

梁 光

岩倉 大夫 殿

同 八千 丸 殿

○ 追テ入城之旨趣ハ、大總督府ヨリ定テ御達有之儀ト存候間、別段不申入候。

○ 愈御安全御在營恐賀候、御軍務御繁多恐察候、抑、今四日兩人西城へ爲 勅使出張、田安中納言出會、慶喜御處置ケ條之御一紙、別紙口達書ヲ以相達候處、謹拜承、猶早々慶喜へ相達御請可申上由ニ候、仍早々此段申入候也。

四月四日

前 實

光 梁

追テ口達一紙寫入御披見候、御處置ケ條書ハ、從大總督府被達候儀ト存候間、別段不差出候、以上。

岩倉 大夫 殿

同 八千 丸 殿 以上總督府叢紙

○別紙

德川慶喜奉欺罔 天朝之末、終ニ不可言之所行ニ至候段、深被爲惱 宸襟依之 御親征、海陸諸道進軍之處、悔悟謹慎無二念之趣被 聞食、被爲垂皇惑之餘、別紙之通被 仰下候條、謹テ御請可有之候、就テハ本月十一日ヲ期限トシ、各件處置可致様 御沙汰候事。

右限日、既ニ寬假之 御沙汰ニ候上ハ、更ニ嘆願哀訴等斷然不被 聞食、恩威兩立確乎不拔之 寂慮ニ候、速ニ拜膺、不可

東海道
先鋒記 有異議者也。

○諸軍へ達書

今四日、橋本、柳原御兩卿爲 勅使江戸御入城、詔命之趣被 仰渡候處、承服仕候ニ付、御兩卿共直様御歸館被遊候由ニ候、此段爲御心得御達申入候也。

追テ、本文之通、慶喜ニ於テハ益恭順之趣ニ候得共、尙臨時如何様之儀出來可致哉モ難計、諸軍一同油斷無之様、嚴重ニ可申渡旨被 仰出候事。

四月四日 總督府諸達留、大垣、飯田藩記、松平乘命家記

總督府諸達留ニ云、右列藩へ申渡ス、御本營ハ左之文附、

附、右之通り列藩へ御布告有之候條、御本營ニ於テハ別テ無懈怠、深夜早晨、何時變事有之候テモ、狼狽不致様精々可被 心掛候事。

○堀田正頌、銃器ヲ督府ニ獻ス。

證

一短ミニーヘル 四拾挺 一胴亂 四拾箇 但彈藥、雷管附屬之品一式
右爲御軍用差出、慥ニ落手之事。

東山道總督府

執事印

戊辰四月四日

堀田攝津守殺佐野藩記

○正頌家記ニ云、御達ニ付、常備之彈藥取調之上、家來ヲ以テ三月廿八日、板橋驛 總督府御本營へ上納方奉伺候處、實備
不相成ニ付テハ、委細、器械掛坂戸周助へ可申談旨御差圖ニ付、即刻坂戸周助へ右之段相伺候處、常備之内、短ミニー銃
四拾挺、並彈藥始メ附屬之器械代金七百兩上納可致旨御達シ有之、四月四日、重臣並ニ家來之者差添、坂戸周助へ出會、右
之通上納、其節兼テ御布達之御趣意遵奉、近郷鎮靜方專要之旨御達有之。

五日、是ヨリ先、結城藩主水野勝知日向守、江戸ニ在リテ、徳川氏ノ臣隸彰義隊ト通シ、窃ニ徳川氏ヲ扶
持センコトヲ謀ル、老臣之ヲ諫メテ歸藩ヲ勸ム、聽カス、是ニ於テ老臣等相謀リ、將ニ勝知ヲ
廢シテ、義叔父勝寬助ヲ立テントス、勝知乃チ徳川氏ノ臣隸ト共ニ、藩城ヲ襲ヒテ之ヲ取ル、
是日、内參謀祖式某金八郎、館林、須坂二藩及ヒ岡田善長ノ兵ヲ督シ、結城城ヲ攻メテ之ヲ陥ル、
勝知等江戸ニ走ル、某乃チ關宿藩ニ令シ、兵ヲ堺驛ニ發シテ、其餘黨ヲ緝捕セシメ、又藩兵ヲ
結城ニ徵シ、且軍費金ヲ課シ、古河藩ヲシテ管内ヲ鎮撫セシム、軍監香川廣安モ亦古河藩ニ命
シテ、軍費金ヲ供給セシム。

○香川敬三事蹟ニ云、四月四日、五日、祖式金八郎、須坂藩ノ兵ト共ニ、下總國結城ノ城ヲ陥ル。原註、先是、結城ノ城主水野日向
士ハ官軍ニ應セント欲ス、日向切ニコレヲ鯨ミ、上野山内ニ屯集スル所ノ彰義
隊ヲ率ヘ、國邑ニ歸リ、正義ノ家士ヲ殺戮シ、居城ニ割據ス、故ニコレヲ討ス

○秋元興朝家譜ニ云、四月、二小隊參謀祖式某ニ屬シテ、總州結城城ヲ責テ是抜ク。

○堀直明家記ニ云、四月五日、結城ノ城主水野日向守、賊徒彰義隊ヲ誘引シ、城内ニ屯在ス、由テ野州小金驛ヨリ館林一小
隊、弊藩一小隊、大礮一門城下ニ進ミ、城西横ヨリ本丸ヲ目的ニ散彈打掛、大手口ヨリ館林、弊藩ノ人數、小銃打掛、城内へ
攻入ル處、城主並賊兵、砲聲ニ懾怖シ、終ニ巢窟ヲ脫ス、城内武器、糧米等盡ク分捕シ、同所ニ宿軍ス。

○岡田善長從軍事蹟ニ云、四月六日、五日、私分隊大砲方、長藩祖式金八郎へ附屬、結城之城ヲ攻撃、賊徒敗走仕、祖式ト籠
城罷在候。

○水野忠愛家譜ニ云、明治元年三月十七日、勝知結城ヲ鎮撫ト號シ、彰義隊數十名ヲ率ヒテ、下野州小山へ着、暴威ヲ示シ入
城セントス、素ヨリ入城ハ是家臣ノ冀望スル所ナリ、依テ賊徒ヲ掃攘之上、入城ヲ乞フト雖、賊徒支ヘテ聞入レス、應接往
復數回、終ニ重臣小場兵馬ヲ捕縛シテ、結城へ戻サス、此ニ於テ往復拒絶ス、素ヨリ一藩舉テ力ヲ 王事ニ盡サント肺肝ヲ
碎クト雖、奸邪道ヲ蔽ヒ、誠意一モ徹底セス、同月廿五日拂曉、勝知賊徒ヲ引卒シテ、結城城下へ押寄せ、直ニ砲發ス、同時
ニ城中裏手ヨリ賊徒亂入、放火ス、城中之者是ヲ掃攘シ、火ヲ鎮メテ、城下西町ニテ賊ト防戰數刻、午後ニ到リ勝知出馬ヲ
報知スル者アリ、依之、衆議ヲ決シテ開城ス、此時双方死傷アリ、翌廿六日、勝知始メ彰義隊等入城ス、四月六日、五日、内參
謀祖式奎之丞、結城之賊ヲ討ツ、賊城ヲ棄テ、遁走ス、奎之丞、結城ヲ鎮撫ス、自是先ニ首謀水野甚四郎ナル者、奎之允ニ
召捕レテ割腹ス、勝知ハ疾ク結城ヲ脱走シ、下總州久保田河岸ヨリ乗船、上總州成東村へ潜伏シ、又成東ヲ發程、上野山内
へ潜匿ス。

○忠愛家記ニ云、四月五日、官軍祖式奎允殿討入ノ節、水野甚四郎、阿知波祐仙、上條幸吉郎召捕ニ相成、甚四郎ハ城下光福
寺ニ於割腹仰付ラレ、阿知波祐仙ハ屹度實効相立候旨、篤ク説諭之レ有、捕縛ヲ免シ、日向迎トシテ遣サレ候處、終ニ官

軍ヲ欺キ、其儘脱走、祐仙ノ所爲惡ムヘキノ甚シキ也、其後尙又祖式氏ヨリ、弊藩士族竹本左門、蟹江三郎使トシテ、日向へ御達狀ヲ送ス、持參ニテ差出サレ候處、所在相分ラス、然ル處、二本松邸ニ在留ノ趣ニ付、右御用狀相達シ候事。

○總督府日記ニ云、四月六日、夜子刻比、古河ヨリ香川敬三、平川和太郎之報知來ル、昨五日、結城城中へ彰義隊、並會賊六人計立籠リ、近在所々へ金策相働候間、祖式金八郎、館林五十人一隊、大砲一門、須坂一小隊ヲ率テ進軍之處、賊ヨリ一戰請候ニ付、及戰爭候處、賊徒敗走、城中へ放火ニ及ヒ、城主日向守モ脱走之事。原註、彰義隊二人、結城、城、賊徒一人、打捕候事。

○十四日、二督、大總督府參謀ニ遺ル書節略、

過日、日光山邊賊徒屯集致シ、何時宇都宮城へ襲來可致哉モ難計、彼藩ヨリ危急ヲ報シ、援兵數願申出候ニ付、要地之事ニモ有之、旁以難捨置、斥候隊トシテ人數少々差出候、其後小山驛ニ右斥候隊止宿致シ居候處、近傍之諸村一揆蜂起之趣、百姓共罷出嘆願イタシ候ニ付、鎮靜ノタメ、一手之人數出張致候處、途中ニ於テ不圖結城之賊徒兵ト出會、彼ヨリ戰ヲ請候ヨリ、不止得及接戰、遂ニ城内へ攻入候處、賊徒共城ニ火ヲ放チ退去仕候、右結城之賊ハ彰義隊、及ヒ會藩之由ニ相聞へ候、尙委曲之儀ハ追テ可及言上候、早々以上。東征總督記

○先般、結城領主水野日向守、城下へ彰義隊ヲ誘引、加之自己之了簡ヲ以、父子及戰爭候段、不謂次第、天地ニ耻チ人倫道ヲ失シ、賊徒ニ相成候ニ依テ、天朝ニモ難被差置、無餘儀兵隊ヲ以追討被仰付候條、於其藩ニハ勤王之志アラハ、堺海道へ出張シ致、散亂候賊徒之往來ヲ止メ、取調之上、實正勤王之輩ハ捕置、本陣へ申出、何分之御沙汰相待候様可被致處置者也。

四月

久世隱岐守 御重職中

東山道總督府

内 參 謀

○其藩人數百五拾人、不殘小銃持參、四斤旋條砲壹ツ、榴彈百發、榴散彈百發、其外彈藥等右ニ准シ用意セシメ、重職之者差添、結城表へ早速可被相越候様存候、猶又軍用金貳千五百兩申付候條、是又持參、早々可相越候、此段急度申入候者也。

四月

久世隱岐守 重臣中以上關宿藩記

東山道總督府

内 參 謀

○以上二條、發令ノ日ヲ佚ス、因テ此ニ合叙ス。

○土井利與家記ニ云、四月五日、古河表御出張之官軍 御總督祖式金八郎殿ヨリ、中柴中ト申仁ヲ以被相達候、一當邊屯集之者有之歟、又ハ無賴之徒相集リ亂妨等相働候者有之節ハ、早々鎮撫方取計捕押候様、若手餘候儀ニモ有之候ハ、討取候テ不苦旨、且其段早々官軍方へ申出候様、

但、領分而已ニモ不限、他領トイヘトモ出兵鎮靜候様、
一無賴之徒、薩、長等之名目ヲ唱へ、惡業相働候者有之候ハ、早々取押、又ハ官軍方へ申出候様、
一先達テ結城戰爭有之、其後右怪我人、此邊通行致シ候趣、以後右様之儀ハ早々官軍方へ申出候様、
下ケ紙、
是迄城下并領分内、夫々手當人數出張ハ爲致置候得共、條々御達ニ付、猶又嚴重增人數出張申付候事、

同五日夜、香川敬三ヨリ被相達候趣、左之通

一會藩所々屯集致候趣相聞、萬一當邊通行致候ハ、朝敵ノ隨一ニ有之候間、タトヘ壹人タリ共早々捕押、手餘候ハ討取候儀ハ勿論之儀、嚴重取計候様、且松平越中、板倉伊賀等、是同様之儀、其外朝敵之分ハ、何レモ同様相心得候様、

○古河藩記ニ云、金壹万兩、右ハ辰四月五日、東山道 御總督府參謀衆香川敬三殿、平川和太郎殿、南部精太郎殿、在所古河町宿陣之節、御軍備金御用立可仕旨、御掛合ニ付御引渡申候。

○總督府日記ニ云、四月六日、香川敬三、平川和太郎ヨリノ書狀ニ曰、日光山ニ板倉父子據リ、小山ヨリ宇都宮邊迄賊兵屯集ニ付、直様進軍候、且總勢モ五百人計ニ相成リ候間、古河城主土井大炊頭ヨリ一萬金借入候事。

六日、大總督府、書ヲ二督ニ致シ、松平忠誠勤王ノ實蹟アルヲ以テ、其入京ヲ許セシヲ報ス。

拜見候、彌御勇剛御在陣珍重存候、抑忍藩事情御示、遂一大總督王へ令言上候、尙山田大隅ヨリモ、段々忍父子並藩論言上候、至極尤ニ相聞候間、別紙之通被仰渡、同人上京被差免候、且織部正儀ハ、兩野州鎮定筋粗見込相立候ハ、少人數ニテ可登京被 仰付候、仍御報迄如此候也。

四月六日

岩倉 大夫 殿
同 八千 麿 殿

大總督府

參 謀

○別紙

松平 下 總 守

其許方向御疑念モ有之ノ處、段々定論申出、勤 王一途ニ君臣共決心之趣ニテ、朝廷之御趣意相守リ、官軍御用ヲモ相勤候、段神妙之事ニ候、猶此上忠勤勉勵可致旨、大總督宮被 仰出候事。

四月

參 謀

總督府叢紙

○是ヨリ先、堀田正養、謹ヲ督府ニ獲テ、其封邑ニ屏居ス、是ニ至リ、書ヲ督府ニ上リテ、入京ヲ請フ、是日、其謹慎ヲ釋ス、

奉歎願候口上覺、

不堪悲歎謹テ奉再願候、去ル二日、東山道御鎮撫使御進先、信州下諏訪驛 御本陣エ罷出候節、御書付ヲ以被 仰渡候趣奉畏、翌三日、尙又家來ヲ以奉歎願置、道中謹慎、去ル十日采地宮川陣屋へ着仕候段、辨事御役所へ奉言上、被 仰渡之通彌以奉畏、恐惶罷在勿論、家來共ハ不及申、領分中小前末々之モノ迄、嚴重爲相慎置申候、情方今 九重之大變革、浪華表へ 御親征 御行幸被爲遊候御儀奉謹承候ニ付テモ、斯謹慎罷在候身分ニ無御座候ハ、輦轂之下ニ罷在、中古御稀成 御親征 御行幸之 御盛典、乍恐奉拜觀候事モ相叶可申ト、泣血悲歎之外更ニ他事無御座、右ニ付テハ、謹慎中トハ乍申、徒ニ坐食安眠仕候儀モ、何分無冥加次第ニ御座候得ハ、何卒登 京ヲ被差許、洛外之地ニタイテモ謹慎罷在候様奉歎願候、然ル上ハ、御行幸御留守中、心得違之者有之、非常之儀出來候節ハ、私始召連候者共、諸人ニ先立必死ヲ以防禦仕、罪狀之萬分一ヲモ奉謝度赤心ニ御座候間、何卒小臣之微志御愛憐ヲ以御高察被成下、速ニ登 京之儀御差許御座候様、乍恐 京都へ被 仰立被爲下置候様、御取成之程俯伏奉懇願候、恐惶謹言。

三月二十六日

堀田 出 羽 守

東山道鎮撫 御總督府 御參謀中 堀田正養家記

○本日達書

堀田 出 羽 守 へ

謹慎之儀令宥免候條、士民 王化ニ服シ候様、爲 國家精々可致盡力候事。

戊辰 四月 總督府諸達留堀田正養家記

○按スルニ、二十四日ニ至リ、正養更ニ書ヲ朝ニ上テ、入京ヲ請フ、之ヲ聽ス。

○海軍先鋒總督大原俊實、督府ニ來リテ軍事ヲ議ス。

○總督府日記ニ云、四月六日、海軍總督大原前侍從殿、御軍務之事ニテ御成之事。

○秋元志朝、督府ニ候シ、前日ノ恩命ヲ謝シ、且銃器ヲ献ス。

○總督府日記ニ云、四月六日、秋元刑部大輔拜謁之事、鳥銃二挺、彈二百四十發添献上之事。

○秋元興朝家記ニ云、四月三日、隱居從四位志朝、去月廿九日御達之儀ニ付、館林城ヲ發シ、同五日板橋宿ニ着、翌六日參營、御禮申上、同八日歸邑候事。

七日、督府、前橋、忍、川越三藩士、供帳措辦ノ勞ヲ慰ス。

既 橋 藩 忍 藩 川 越 藩

右、藩々爲御賄役出張之銘々へ、勤勞可被爲問候ニ付、參謀面會候間、明七日辰ノ刻、壹人ツ、出頭可致事。

御 礎 陣

執 事

辰 四 月 六 日

松平忠敬家記
川越藩記

○本條、川越藩記載スル所、忠敬家記ト小異アリ、今家記ニ從フ。

○總督府日記ニ云、四月七日、賄方前橋、河越、忍之三藩士、勤勞可被問ニ付、宇田栗園面會之上、伊丹壹挺ツ、三人へ被下候モノ也。

○松平忠敬家記ニ云、四月七日、宇田栗園ヨリ、兵食之儀ニ付テハ深ク注意致シ、至極御都合ニ相成リ、太儀ニ 思召、尙此未精々盡力致候様演舌有之、目錄之通被下置候事。

目錄、

一 丹酒 壹樽

○松井康英家記ニ云、四月七日、御總督府へ御呼出ニ付罷出候處、參謀方宇田栗園へ、大監察藤井九成へ出會有之、栗園へ

ヨリ在之御達有之、御目錄之通、家來之者へ被下置之、

御目錄

丹酒 一樽

久々勤勞御満足 思召候、尙此上盡力候様可致、乍聊御目錄之通被下置之。

○是ヨリ先、督府、金穀出納所三井某^{三郎}等二人^{鳥田八郎左衛門、並ニ京師ノ商}、ニ諭シ、金穀ヲ江戸ニ豫備シテ、不時ノ需ニ供セシム、是日、某等金二萬五千兩ヲ献ス。

三井手代共 鳥田手代共

右者、爲御陣所御手當、於江戸表金穀用意可致置候、尤 御沙汰候節ハ、其御陣所へ持參可致者也。

東山道總督府

戊辰三月十三日

執 事

總督府諸達留

○總督府日記ニ云、四月七日、江戸表ニテ三井、鳥田、爲替金二萬五千兩持參之事。

○軍監香川廣安、平川某^{和太}、彦根、岩村田二藩及ヒ岡田善良ノ兵ヲ率テ、宇都宮ニ至リ、岩村田藩兵ヲ分テ壬生ニ赴カシム。

○香川敬三事蹟ニ云、四月八日、^{七日}ノ誤、敬三等宇都宮ニ至ル。

○池田輝知家記ニ云、宇都宮四方三四里ノ間、土民動搖シテ、所々ニ屯集シ、屋ヲ摧キ、火ヲ放チ亂暴至ラサル所ナシ、宇都宮内外ノ患ニ困弊シテ、官軍ノ入城ヲ促ス事頻ナリ、四月七日、大監察香川敬三、薩藩有馬藤太等、宇都宮ニ達ス、依之、土

民ノ人氣少ク安穩。

○ 明八日、例刻當地出立壬生表へ 御進軍可被成候、尤館林藩モ當地へ罷越候間、御心得迄ニ申入候也。但シ、有馬藤太、南部靜太郎出張致候間、萬端御和談可被成候。

四月 七日

本 陣

岩村田藩 御人數中内藤正誠家記

復古外記 東山道戰記 第九 終

元修史局掌記 豊原資清纂輯

復古外記 稿本

東山道戰記 第十

自明治元年四月八日 至同 十六日

四月八日、海軍先鋒總督、書ヲ督府ニ致シ、徳川氏ノ心情測ルヘカラサルヲ以テ、嚴ニ警戒ヲ加ヘシメ、又軍費金ヲ借シコトヲ請フ、督府、乃チ金二千兩ヲ貸與ス。

○大原俊實督府ニ遺ル書

令拜見候、益御安泰珍重存候、然ハ過日ハ參上得拜面畏存候、其上御飯、御菓子等拜受畏存候、將圖ラスモ爲御挨拶御使給、痛入畏存候、仰之通り期日モ相迫リ候得共、何分恭順々々ト申、陽ニ相唱居候事故、何等之事モ雖出來、内實相調候得ハ、實ニ不容易儀相工居リ、必戰之覺悟之趣ニ承候得共、何分可然人々奸徒ニ被欺誑候様ニ被察心痛仕候、彼是心配仕、家來共奔走仕ラセ候得共、何分ニモ行届不申、實以心痛無此上候、是非々々一戰之覺悟ニ存候、只々歎ケ敷存候ハ、江城内外之人民、塗炭之苦ニ陥リ候ヲ深ク相歎候儀ニ候得共、是又不得止儀ト存候、既ニ昨夜、橋本ヨリ相達有之、軍艦ハ小子附屬之藩へ舊幕ヨリ引渡ニ相成候趣ニ申來、城ハ今日之内ニ尾州へ明渡シ、器械ハ肥後へ相渡候旨ニ承候、定テ尊營へモ、右之都合被申上候事ト存候、乍併、決テ々々安心ハ難相成、却テ謀策ニモ哉ト一入々々心痛仕候、軍艦モ相渡候ト申計ニテ、小子方へハ未タ何等之沙汰モ無之、時ニ不審ニ存候、吳々御用意之様希候、就テハ小子進軍之塗御尋承候、尤何レノ手へ屬候ト申事モ無之、只々其勢ノ薄キ所へ進メ、弱ヲ助ケ強敵ヲ挫ノ心得ニ候間、戰爭之始リ候處ハ、何共申上兼候、尤御殿山ヲ本陣ト相居へ、其ヨリ諸方へ幾隊ニモ致シ進發致サセ候心得ニ候、昨夜モ少々怪數事有之、今曉ハ如何哉ト心痛仕候、猶又、申上

度事種々有之候得共、御使相待セ恐入、匆々如此候也。

四月八日

追テ本文之儀、北島、宇田兩氏へ宜御鶴聲奉希候、並ニ相願置候軍用云々、御廻シニ相成畏令落手候、證書差出候、北、宇兩氏、段々心配之御蔭ヲ以、夥敷御廻シ、深ク畏安心仕候、猶拜面方々御禮申入候、猶又、兩氏へ吳々畏安心之段御申通希入候、右薩藩へハ、内々相遣シ拜借之證書取置、餘ハ肥前へ軍用、東山道ヨリ御廻シト申預置候、左様御承知希入候也。

俊 實

○按スルニ、本書ハ報復ニ係ル、而シテ督府ノ移牒ハ見ル所ナシ。

○總督府日記ニ云、四月八日、大原前侍從殿へ金二千兩、多田左市、新井三郎ヲ以テ御用立ニ相成候、是ハ彼御卿ヨリ之御頼ニ因テ也。

證書

金子 貳千兩

右爲軍用拜借正令落手候也

四月八日

俊 實

東山道 先鋒總督御府總督府 叢紙

○賊徒、武藏、上野、下野ノ舊幕府領地、及ヒ舊旗下士采邑ニ潜匿スルノ聞アルヲ以テ、督府、三州諸藩ニ令シテ、嚴ニ之ヲ緝捕セシム、又江戸市中訛言百出、物情騷擾スルヲ以テ、諭令シテ各其堵ニ安セシム。

上野、下野、武藏等之國中、徳川故領並旗本領之内、賊徒共、往々潜伏致シ、兵器等竊ニ運ヒ入候趣相聞へ候、右ハ近日、江戸城之動靜、官軍之進退ヲ伺ヒ、一時蜂起可致由ニ被察候、依之、追捕之義、其藩々へ申附候間、同心戮力 朝廷之御爲勲勵可有之、万一手ニ餘リ候様之義モ候ハ、急々總督府へ可申出候、僉議之上夫々處置可致候事。

四月八日

右之通被仰出候間、御達申入候也。

追テ、上野、下野兩國之諸藩へモ達置候間、此旨可被相心得候事。

東山道總督府 參 謀

松平大和守 齋

松平下總守 齋

松平周防守 齋

安都攝津守 齋

大岡兵庫頭 齋

米倉丹後守 齋

右重職衆中

右刻附ヲ以、急々順達可有之、尤止ヨリ可被致返上候事。總督府諸達留 前橋半原藩記

○ 上野、下野、武藏等之國中。以下、上文 同シ

追テ、下野、武藏兩國之諸藩へモ相達置候間、此旨可被相心得候事。

東山道總督府 參 謀

大河内右京亮 齋

秋元但馬守 齋

土岐隼人正 齋

板倉主計頭 齋

松平攝津守 齋

酒井下野守 齋

吉井鏡丸 齋

前田丹後守 齋

右重職 中

復古外記 東山道戰記 第十 明治元年四月八日

右刻附ヲ以テ。以下、上文ニ同シ、○總督府諸達留、大河内輝聲、酒井忠彰家記、沼田、安中、小幡藩記

○上野、下野、武藏等之國中。以下、上文ニ同シ

追テ、上野、武藏兩國之諸藩ヘモ相達置候間、此旨可被相心得候事。

東山道總督府

參

謀

戶田土佐守敬	戶田長門守敬	有馬兵庫頭敬
大久保三九郎敬	堀田鎮太郎敬	鳥居丹波守敬
大田原飛驒守敬	喜連川左馬頭敬	大關肥後守敬
		右重職衆中

右刻附ヲ以テ。以下、上文ニ同シ、○總督府諸達留、黑羽、佐野藩記、足利聽氏家記

○今般、徳川慶喜謀叛之罪狀明白ニ付、朝廷ニ於テモ不被爲得止御追討被 仰出、三道之 官軍一同御打入ニ可相成、右ニ付浮説流言等モ有之趣、江戸市中之者共大ニ動搖致シ、家財等持運ヒ、或ハ他所ヘ引移リ候者モ有之哉ニ相聞不便之事ニ候、然ル處、慶喜恭順之模様、上野表ニナイテ謹慎罷在、謝罪之儀段々歎願モ有之ニ付、大御總督ヨリ御沙汰ヲ以、打入御延引相成候事ニ候、既ニ去四日、敕使御入城、寛大之 思召ヲ以テ御處置之簡條被 仰渡候處、慶喜ニ於テモ承服仕、日限之通實効可相立由ニ候、右謝罪之實効無相違相立候上ハ、追々解兵之御沙汰モ可有之、百姓町人共ニ於テハ、元來 天子ノ御民ニテ、萬民塗炭之苦ヲ被爲救候ハ、朝廷素ヨリ之御趣意ニ候間、右等之次第篤ト相心得、平日之通無掛念渡世可致候、此旨、市中并近在ヘモ不洩様、急々可觸知モノ也。

四月八日

追テ、官軍ニ於テハ、兼テ嚴重之御法令被爲在候得共、下輩之者共、萬一亂妨等之儀有之候ハ、早速最寄陣所ヘ可訴出、僉議之上至當之御處置可有之候事。

東山道總督府

參

謀

江戸市中
并近在
百姓町人共

總督府諸達留
大垣藩記

○總督府日記ニ云、四月九日、江戸市中ヨリ數所人心搖動ニ付、往々歎願之次第モ有之候間、昨八日、江戸市中並近在ヘ布告書、札場ニ相掛候事。

○大垣藩記ニ云、四月八日、從總督府右之通見張番所等ニ張出シ可申、且江戸表ヘモ、精々早急布告相成候様御達シニ付、江戸町人出入之者共ヘ數冊渡候事。

○附、中外新聞ニ云、駒込、巢鴨、小石川、音羽、大塚、谷中、本郷、菊坂邊町々町、人總代名主加判、先鋒督府ヘ差出シタル歎願書寫、

乍恐以書付奉歎願候、

私共儀、下賤ノ身ヲ以、恐ヲ不顧奉嘆願候儀ハ、甚以奉恐入候御儀ニハ御坐候得共、是迄數年來、泰平ノ御恩澤ニ浴シ候モ、全ク 天朝并ニ徳川家ノ御德澤ニ御坐候處、今日之御場合、下賤ノ身ニテハ更ニ奉存候儀ニ無御坐候得共、追々町奉行所ヨリ江戸市中ヘ觸出サレ候書付等ノ趣ニテハ、乍恐東叡山ニ御謹慎、罪ヲ御一身ニ御引請、諸人ノ苦ヲ御救ヒ被遊度厚キ思召ノ程、如何ニモ難有奉有奉恐入、涕泣ノ至ニ御坐候、然ル處、追々御先鋒御練人相成候ニ付、市中一同、晝夜寐

食ヲ忘レ恐縮罷在候、何卒廣大之御慈悲ル以テ、下々ノ者マテ安心仕候様、御憐愍之御沙汰被成下置候様、一同奉願上候、以上。

慶應四年辰四月五日

連名九十餘人

○大久保忠告、駿河守、舊督府ニ就キテ、手兵ヲ出シ官軍ニ從ハシメンコトヲ請フ、之ヲ聽シ、其兵一ヲ以テ因幡、土佐ニ藩兵ニ屬シ、江戸ノ形狀、及ヒ諸藩ノ向背ヲ諷察セシム。

大久保駿河守

其方儀、勤王之志ヲ立、官軍ニ屬シ盡力致シ度趣ニ付、屹度實効相立候上ハ、家名之儀格別之御沙汰モ可有之候間、愈以憤發可勵忠精旨、總督御沙汰候事。

東山道先鋒

戊辰四月

大監軍

大久保忠告從軍事蹟

○忠告從軍事蹟ニ云、私儀、戊辰春、東征ノ官軍、始テ陣ヲ甲州口四ツ谷内藤新宿ニ設ケラル、時、徳川慶喜謝罪ヲ哀願仕候處、東山道 御總督府外交方ヨリ、天下ノ形勢ヲ指示シ、大義ヲ以説破致サレ、勤王ノ志益感激シテ已マス、願クハ私情ヲ置テ國家之爲メ出兵盡力センコトヲ哀訴ス、是ニ於テ、同年四月八日、官軍陣營市ヶ谷尾州邸ニ召サレ、官軍附屬ヲ命セラレ、實効ヲ立ツル上ハ、格別ノ御沙汰之レ有ル可ク旨、東山道大監軍ヨリ書付ヲ以相達サレ、彌感奮ニ堪ス、私儀ハ幼少ニ付、長臣匠差郷輔ヲ代理總長トナシ、百事委任仕、家來共一小隊餘出兵致サセ、鳥取、高知兩藩ノ兵隊ニ屬シ、内參謀等ノ指揮ヲ奉シ、府下ノ形狀及諸藩ノ方向等ヲ探偵、日夜周旋奔走。

○池田輝知家記ニ云、四月十一日、徳川旗下大久保駿河守儀、勤王之赤心致貫徹度段及歎願、大監軍ヨリノ差圖ヲ以、當

藩へ附屬候事。

○山内豐範家記ニ云、四月、旗下大久保駿河守ナル者アリ、家人匠差郷輔ヲシテ、因人河田ニ依リ其ノ意ヲ致ス、云今、慶喜悔悟恭順、而テ激徒、主命ニ背キ事ヲ起ス、徒ニ朝廷ノ罪人而已ナラス、實ニ徳川氏ノ罪人ナリ、然レトモ力微ニシテ如何トモスルナシ、只官兵ニ屬シ誠意ヲ致サン、則河田、板垣、其ノ誠實ヲ察シ、之レヲ督府ニ達シ、許可ヲ得テ臣下三十餘名ヲ出シ、因軍ニ屬ス。

○内參謀祖式某、金八結城ニ次シ、笠間藩ニ令シテ、封邑傍近ヲ鎮撫セシム。

越中守領分近邊一揆相起候節鎮靜被致、不得止候得ハ、兵力ヲ以テ討取鎮靜可有之、猶官軍ヨリ之御沙汰ト被相觸、鎮靜之手段可有之候様存候條、此段相達置候者也。

東山道總督府 内參謀

戊辰四月八日

祖式 奎之允

牧野越中守殿 重職中

猶々、他領タリ共、前文之通可被相心得候事。牧野貞寧家記

○按スルニ、奎之允ハ、即チ金八郎ナリ、蓋シ當時、兩名ヲ併セ用ヒシナラン。

○貞寧家記ニ云、結城表へ御出張内參謀祖式奎之允殿ヨリ、領分近邊鎮靜候様御達ニ付、四月十一日ヨリ境界へ人數操出置候處、近邊所々百姓一揆相起候儀ニテ、無程相鎮リ、其後、水海道邊、並下館邊所々賊徒屯集、下館へハ五百人餘之勢ニテ、諸藩士モ相見候趣、探索ノ者申出御座候ニ付、猶又、境界へ増人數差出申候。

○軍監香川廣安、宇都宮ニ次シ、笠間、壬生ニ藩ニ令シテ、兵ヲ宇都宮、及ヒ今市驛ニ出サシム。日光近邊不容、易趣ニ付、總督府御軍勢御差向相成候、然ハ於其表藩力相應之御人數、急速宇都宮迄御出兵可被成候也。

東山道總督府

軍

監

戊辰四月八日

牧野 越中守殿牧野貞寧家記

○貞寧家記ニ云、四月十三日、隊長種村深右衛門、中島主税上下五百餘人ヲ率テ、宇都宮へ出陣ス。

○御軍用ニ付、雷フルニ挺、玉藥砲手附借用致度候間、其表在合候者、今夜中、今市本陣迄御差出被成候也。

東山道總督府

軍

監

戊辰四月八日

鳥居 丹波守殿鳥居忠文家記

○壬生藩記ニ云、慶應四戊辰年四月八日、東山道總督府御軍監ヨリ飛檄到來ニ付、隊長高須嘉司馬、目付山口謹一郎、大筒奉行友平慎三郎、大砲二門、砲士十四人、中筒士六人、重推足輕十六人、鼓手壹人、勘定方貳人、醫師一人、小役之者三人、其他小者迄總計五十八人、翌九日朝出張、同日夕今市宿へ着、其段御本陣へ及御届。

九日安部正靜美作守、瀬倉藩主軍費金ヲ督府ニ献ス。

○總督府日記ニ云、四月九日、阿部美作守ヨリ百二十五兩二分七匁六分八厘八毛差出候事。

○軍監香川廣安、平川某和太彦根藩、及ヒ岡田善長ノ兵ヲ率キテ、宇都宮ヲ發シ、進テ日光山ニ向フ、是日、今市驛ニ至ル、板倉勝靜、其子勝全萬之進ト日光山ヲ出テ、軍門ニ詣テ降ヲ乞フ、乃チ二人ヲ宇都宮藩ニ、其臣隸五十餘人ヲ壬生藩ニ幽ス、日光ノ賊、亦風ヲ望テ遁逃ス、尋テ廣安、軍ヲ宇都宮ニ收ム。

○香川敬三事蹟ニ云、四月八日、敬三等宇都宮ニ至ル、聞ク賊徒、日光山中ニ屯集スト、九日日光山ニ向フ、時ニ板倉伊賀父子主従、原註、備中國松山ノ城主山中ニ在リ、原註、日光山南照院ニ潛匿ス出テ降ヲ請フ、直ニコレヲ戸田越前守ニ預ク、十一日、宇都宮城ニ入ル。

○井伊直憲家記ニ云、下野國宇都宮へハ、督府軍監香川敬三、平川和太郎、斥候上田楠次、南部靜太郎、弊藩小泉彌一右衛門、渡邊九郎左衛門、青木貞兵衛三小隊、並大砲一門及ヒ岩村田、揖斐等之人數出張、追々進軍候處、同國日光邊ニ屯集罷在候會賊、及ヒ浮浪之徒、奥州之方へ退去、於日光板倉伊賀父子、弊藩ニ依テ降伏、則督府軍監ヨリ父子ハ宇都宮、從者ハ壬生へ被預、下野國既及鎮定候、奥羽ハ別ニ鎮撫使ヲ被置候儀ニ付、四月十一日、總軍一先宇都宮へ引揚相成候。

○戸田忠友家譜ニ云、四月八日、日光山ノ邊賊徒暴行ス、由テ兵ヲ出ス、十一日、日光山へ出ス所ノ兵歸ル。

○板倉勝弼家記節略ニ云、勝靜儀、戊辰之春徳川慶喜ニ隨從東下仕候、初ヨリ悔悟謹慎、恭順無一念罷在、依之、官軍御進向之砌、御府内ニ罷在候家來末々、心得違候者有之候テハ、奉恐入候儀故、此段徳川家へ申達、差圖ニ隨ヒ、父子日光山宿坊へ立越、東山道 御總督軍門へ罷出、降伏謝罪仕候。

○岡田善長從軍事蹟ニ云、野州日光ニ屯集罷在候板倉伊賀父子降伏候ニ付、私兵隊へ御預ケ、其後、宇都宮藩へ引渡申候。

○戸田忠友家記節略ニ云、四月十日、板倉伊賀、同萬之進降伏ニ付、軍監香川敬三ヨリ右同人共御預被仰付候間、守衛之用意致シ、即時日光表へ罷出候様、飛報有之候ニ付、家來差出シ請取護衛、直ニ宇都宮英嚴寺へ差置キ候。

○板倉伊賀、同萬之進儀、日光山内ニ潛匿罷在候處、今度官軍發向ヲ承リ、軍門ニ降伏致候ニ付、右家來共、其表へ御預ケ申候間、不都合無之様御取計可被成候也。

但、今市本陣迄、迅速御人數御差出可被成候事。

東山道 總督府

軍

監

辰 四月 九日

鳥居丹波守鳥居忠文家記

○忠文家記節略ニ云、四月九日、東山道總督軍監ヨリ、右之達有之、依之、請取人數隊長淵本藤一郎、以下警衛ノ士卒合テ五十一人、翌十日、壬生ヲ出發、今市ニ着、板倉伊賀家來板倉内匠初筆五十一名御預人請取トシテ、警衛ノ者、壬生ヨリ着ノ旨御本陣へ届、明日出發、護送ノ儀伺濟、十一日、今市ヲ出發、同日夕壬生ニ着、城中北條ニ禁錮シ、士卒ヲシテ衛ラシム。
○總督府日記ニ云、四月十二日曉、宇都宮ヨリ香川、平川兩人ヨリ書狀來ル、九日、日光山ニ據リ候板倉父子並家來共、軍門ニ降參テ乞フ、依之、板倉ハ戸田越前守へ預ケ、家來ハ鳥居丹波守へ預ケ候、明十日ハ日光山へ進軍之趣也、有馬、南部之兵ヲ進メ候處、所々屯集之會賊モ恐怖シ散亂候テ、終ニ會之國境迄進軍候趣也。

○今日日光山巡邏本陣人數丈罷越候間、爲御心得申入候也。

但、板倉父子主從處置方之儀ニ付、今日ハ滯陣致シ、明日例刻出立、宇都宮迄引揚候條、此段モ申入候也、尙々隊長壹人ツツ御出張可被成候、期限ハ四半時出立ニ候間、爲御心得申入候也。

四月十日

本陣

岩村田藩 御人數中内藤正誠家記

○鳥居忠文家記ニ云、四月十一日、今市ノ官軍宇都宮ニ陣替ノ事、昨夜令アリ、本日總軍、今市ヲ出發、宇都宮ニ進、當藩兵隊、命ヲ蒙リ殿ス。

○乍恐以口上書奉歎願候、先般板倉伊賀事、朝敵之命ヲ奉蒙、對天朝深奉恐入、右ニ付爲恭順謹慎野院へ罷越、御沙汰奉待居候處、此度當地爲御鎮撫官軍御發向被爲在候ニ付、以拙僧決然異心無之候間、何分ニモ寛大之御所置被成下置候様、偏ニ奉歎願吳候様、只管頼ニ付奉歎願候處、願書御差戻ニ相成、甚奉恐入居候、然處、其内同人主從儀、戸田、鳥居兩家へ御預

被 仰付候段、御沙汰ニ付難有仕合奉存候、就テハ當人事、固ヨリ恭順謹慎之外、全異心無之、且王命歸順之儀、顯然之儀ニモ御座候間、何分此上寛大之御所置被成下置候様、幾重ニモ奉哀訴歎願候、此段宜御沙汰奉頼候、以上。

四月

日光山 南照院

御總督 御役人中香川敬三私記

○本條、申請ノ日ヲ佚ス。

十日、是ヨリ先、水野勝知ノ義叔父勝寛、亂ヲ避ケテ江戸ニ在リ、是日、板橋驛ニ至テ、二督ニ謁ス、乃チ命シテ結城ニ復歸シ、士民ヲ鎮輯セシム、勝知ノ養祖父勝進攝津守モ亦、亂ヲ上總ニ避ク、尋テ督府ノ命ヲ以テ結城ニ歸ル。

○總督府日記ニ云、四月十日、下總結城々主之男水野禊之助儀、拜謁之事、是ハ過日來義兄水野日向守儀、會賊徳川彰義隊等ヲ引キ歸城之節及一戰候處、禊之助始家臣、不利ニ付外へ遁候、今度當道ヨリ結城城ヲ拔キ候間、跡之鎮撫ニ歸國候ニ付、御禮參上候也。

○水野忠愛家記ニ云、三月十七日、禊之助藩地發足、東京市ケ谷尾州邸へ十九日ニ到着ス、四月五日、官軍結城へ御討入、城地御取戻シ相成候ニ付、早々歸邑致スヘク旨、王子宿陣薩州藩四番隊河村與十郎ヨリ、八日午後書狀ヲ以申越候、且小場兵馬ヨリモ同様書狀ヲ以、禊之助義、早々歸邑鎮撫イタシ候様、内參謀ヨリ御達申越候、河村與十郎ヨリノ書狀、左ノ通り、昨日ハ御出ノ處、甚失敬ノ至御海宥下サルヘク候、然ハ粗御咄申上候先日當所ヨリ操出ノ兵隊、昨六日御領内へモ取掛申候處、彰義隊ヨリ砲發ニ及ヒ一戰相成、終ニ城中入込人數ハ落城ニ相成、都合三人程賊討取相成候段、只今弊藩出張ノ者ヨリ申越候ニ付、何レ早々御領内御鎮撫トシテ御歸國、且此上、賊黨御誅罰モ御座有度、此段御知ラセ申上候、尙細事ノ義ハ、御面談旁申シ述可、此ノ如クニ御座候、頓首。

四月七日

河村與十郎

吉田 豐太夫様

光岡 多治見様

右ニ付、取敢ス御禮トシテ即刻小川鈴之、吉田豊太夫、光岡多治見、鈴木與八郎、其外王子宿陣河村與十郎方へ罷越候處、面會之有、就テハ禊之助始一同、早々歸邑鎮撫コレアリ候、申聞サレ候ニ付、何レモ明朝、出立歸邑致候旨御届申述引取候、翌九日、禊之助義、板橋宿 御總督 御本營へ御禮參上候處、薩州藩平田九十郎計ラヒテ、岩倉公へ拜謁 仰付ラレ、尙早々歸邑致シ、夫々鎮撫ノ上ハ、勤 王ノ義盡力之レ有候様、御總督府ヨリ 仰付ラレ候段、平田九十郎ヨリ御達シ之レ有、即日發足、同十一日、結城へ着候處、内參謀長州藩祖式全允手ニテ城地取戻相成候、

隱居攝津守義、賊難ヲ避ケ南總ニ立退罷在候處、内參謀ヨリ御達ニ付、同月十五日夜、結城へ到着ス。

十一日、二督、書ヲ大總督ニ上リ、江戸城ヲ收ムルノ後、直ニ牙ヲ本城ニ建テ、諸道總督ヲ會シテ軍議ヲ開キ、速ニ會津ヲ討センコトヲ建議ス。

臣等弱齡不肖之身ニハ候得共、一道總督之大任ヲ蒙リ居候ニ付、爲國家見込之處言上不仕モ、却テ不忠ト奉存候間、不憚忌諱奉建言候、過日橋本少將、柳原侍從爲 勅使入城有之 御沙汰之趣、田安中納言ヲ始メ拜承仕、慶喜へモ申達候上、御請可致旨御答申上候由、於慶喜ハ恭順之折柄承服可仕ハ、勿論ニ候得共、兼テ詐謀不可測之老賊ニ候間、偏ニ御配慮被爲在候様奉希候。

右十一日之期限相違不仕、御沙汰之件々實効相立候ハ、江城之義ハ尾藩ヨリ請取可申趣奉拜承候、何分江戸表ハ士民幅濶之地、殊ニ從前王化ニ遠キ國柄ニテ、頑陋難諭人心ニ候、尤頃日ハ市中一同洶々罷在折柄ニ付、城明渡シ候上ハ、大總督宮ニモ御入城被遊、民政軍務諸事御指揮被遊候ハ、諸軍之氣モ奮起可仕、万民之心モ安堵可仕義ト奉存候、何卒速ニ

御入城ニテ、諸道之總督一同被召寄、大御軍議被爲在候様仕度候、尤江戸御處置相定リ候上ハ、迅速會城へ進軍可被仰出儀ト奉存候、右會賊御征討ニ付テハ、陸路ヨリハ、勿論、海路ヨリモ御進軍被遊、軍艦之儀ハ徳川ヨリ差出候品ヲ御用ヒ可相成哉ト奉存候、其節ハ當道ニ於テモ、右軍艦拜借ニテ一手之人数、海路ヨリ爲進候様仕度、此儀ハ兼テ願上置候、會賊之如キハ實ニ慶喜之逆謀ヲ助ケ候罪魁ニテ、徳川氏之爲ニモ大不忠之者ニ候間、斷然御追討不被遊候テハ、滿天下之士、向後、朝廷之御爲盡力仕候者ハ、有之間敷ト奉存候、元來奥羽之義ハ、當道之管國ナカラ、別段鎮撫使被差立候上ハ、兎角申上候モ如何ニ御座候得共、見込之處一應及言上候、右等之義ハ、參謀諸公夫々御僉議モ可被爲在候、黄口之小兒謾リニ建言仕候段、僭越不敬、罪當万死候儀ト奉存候、誠恐誠惶頓首謹言。

四月十一日

具 八 千 九 定

大總督府 參謀御中 總督府 諸達留

○東海道先鋒總督、書ヲ二督ニ致シテ、江戸城ヲ收ムルノ狀ヲ報ス。

彌御勇壯御在營令恐賀候、抑今日、當府參謀兩人差遣シ、江城軍器等請取無異相濟、於城ハ尾藩御預申上、器械ハ肥後藩爲受取當分預申付候間、早々申入候、一手無異變落着之條、皇威赫々御互ニ恐悅、先令安堵候、軍艦之儀、俊實朝臣可被申入ト存候、將又來十三日、一應爲點檢入城候、尤雨天ニ候得ハ、順延候間、御含迄ニ申入置候、先早々無異之條申入度、勿々如此候也。

四月十一日 酉刻

追テ小銃之儀、徳川家臣申願候子細有之、歩兵共請取候、人數之儀ハ、即今不分明ニ候、且又歩兵二千人計、今朝脱走之由、徳川家臣届出候間、此段モ爲御心得申入置候、早々大亂書可被免候也。

實 梁

岩倉大夫殿
同 八千丸 殿總督府
叢紙

十二日、徳川氏歩兵ノ田安門傍近ニ屯スル者、歸順ヲ肯セサルヲ以テ、東海道先鋒總督、將ニ明日ヲ以テ之ヲ招諭シ、如シ命ニ從ハサレハ、則チ之ヲ討セントス、因テ督府ニ移牒シテ、兵ヲ要地ニ配置シ、不虞ニ備ヘシム、督府乃チ薩摩、長門、因幡、彥根、土佐、大垣、忍七藩兵ニ命シテ、赤坂、喰違、四谷、市ヶ谷、牛込、小石川、水道橋諸門ヲ警守セシム、既ニシテ歩兵順ニ歸スルヲ以テ、令シテ其兵ヲ撤ス

田安門邊明地ニ屯在之歩兵等、凡六百人歸順不服之様子相見候ニ付、當手先鋒六藩へ別紙之通今日相達候、就テハ不虞之暴舉、何方ヨリ差起候哉モ難計存候間、其御手ニ於テモ、別啓之箇所へ御出兵、臨機之御處置被下度、此段得貴意候様、當府兩總督被申付候、仍テ如此候也。

東海道先鋒總督府參謀

木梨精一郎
海江田武次

四月十二日

東山道 總督府 參謀御中

○別啓、
赤坂見附 喰違門 四ッ谷門 市ヶ谷

牛込 込 小石川 水道橋

右各所御出兵被降度候、尤本文明地之歩兵敗走之節ハ、牛込又ハ水道橋方角へ落去可致ト相察候間、可然御配運可被下候、北陸道御出兵之箇所書、是亦入貴覽候間、御落手可被下候。

○別紙三通

田安門近邊之明地ニ屯在候歩兵共、歸順不服之形容相見候ニ付、明十三日、早朝今一應及諭誨、其上ニモ猶不順伏之様子有之節ハ、速ニ可打取之旨被 仰出候、就テハ砲聲等相聞候節ハ、他之暴徒等、何方ヨリ突起候モ難計候間、諸隊申合、別紙之各處、夫々配兵警衛臨機之處置可有之事。

四月十二日

○東海道先鋒 配兵場所

虎門	新橋	幸橋見
山下門	數寄屋橋	鍛冶橋
常盤橋	神田橋	一橋
清水門	田安門	半藏門
馬場先見附	櫻田門	和田倉
右		日比谷門
		雉橋
		吳服橋

一會藩人處々潜伏之儀、彌以相違無之趣、其心得可有之事、
一田安門邊明地之歩兵及砲擊候節ハ、多分牛込、又ハ水道橋方角へ散落可致ト被察候條、其旨、東山道官軍へ申入置候條、爲心得猶申入候也。

復古外記 東山道戰記 第十 明治元年四月十二日

四六五

北陸道 出兵場所
昇平橋 筋違橋 和泉橋 新橋

淺草見附 兩國橋 柳橋

右 以上總督府叢紙
東海道先鋒記

○本日督府達書

赤坂門へ 彦根藩 喰違門 四ッ谷門 市ヶ谷門へ 土州藩 因州藩
牛込門へ 長州藩 忍藩 小石川門へ 大垣藩 水道橋門へ 薩州藩

別紙之通、東海道總督府ヨリ被仰越候間、各藩明早天ヨリ一所ニテ貳小隊位ツ、警衛被 仰付候、大砲等持越候儀ハ、可爲勝手候事。

四月 松平忠敬家記
大垣藩記

○東海道總督府ヨリ御達ニ付、昨十三日、出兵被 仰付候處、今日ニ至リ、先無事之姿ニ候間、人數引揚候様可被 仰出儀ニ候得共、東海道へ御尋合之次第モ有之、今一應御沙汰有之候迄、其儘差扣居候様可致旨被 仰出候間、此段御達申入候也。

四月 十四日

薩長彦垣宛 御人數中大垣藩記

○再達書

步兵鎮撫無事ニ相濟候ニ付、當道之兵隊可引揚旨、東海道總督府ヨリ御沙汰候間、此段申入候也。

東山道總督府

謀 參

四月 十四日夜

參

松平忠敬家記
大垣藩記

○總督府日記ニ云、四月十二日、子刻東海道督府ヨリ使者來ル、是ハ田安門明地ニ步兵屯在リ不服之由、且會賊等モ潜伏罷在候ニ付、明十三日早朝、東海、東山、北陸三道之兵ヲ進メ、諷誨イタシ不服ナレハ打取候様、御決定之旨申來ル、即刻右儀ニ付、薩、長、因、土、彦、垣六藩へ夫々手配之由申付ル事、
同十三日、曉天諸隊繰出候、

同十四日、夜步兵鎮定ニ付、兵隊繰上ケ候事。

○池田輝知家記ニ云、四月十三日、田安御門邊明地屯在之步兵凡六百人、不伏ノ形容相見不虞ノ暴舉難計由、東海道總督府ヨリ報知有之旨ニテ出兵被命、早旦、喰違へ池田攝津守人數、四ッ谷へ佐分利鐵次郎砲隊一分隊、本内金左衛門一小隊、市ヶ谷へ池田相模守人數出張、同十八日、御達ニ付三所共引揚候事。

○山内豐範家記ニ云、四月十三日、朝命アリ諸道ノ兵ヲシテ諸郭門ヲ守ラ令ム、我兵各一小隊ヲ出シ、市ヶ谷、四ッ谷、喰違ノ三門ヲ守衛ス、因兵亦同シ、蓋シ幕兵、其屯所ヲ退キシヨリ所在沸騰、變計リ難シ、若シ教諭ヲ聽カサレハ、直ニ之レヲ討スルノ議ナリト云、時ニ府下洵々、幕ノ各隊、兵器ヲ携へ公然脱走スル者日夜相續ク、我本營、尾邸ニ向ヒ銃射スルコト數次、因人、害ヲ蒙ル者三四名。
原註、幕兵ノ相續テ脱走スルヤ、板垣等、其後害ヲ慮リ、速鎮制センコトヲ請フ、大總督府、之ヲ許サス、板垣等、後漸ク川々ノ警察ヲ許ス、果テ賊ノ彈丸兵仗ヲ奪ヘリ、
川々ヲ警視センコトヲ論ス、公、大ニ之ヲ容レ、數次上請スレ共許サレシ、
○市橋長義家記ニ云、四月十三日御達。

田安門邊明地ニ屯有之步兵等凡六百人、歸順不服之様子、就テハ不慮之暴舉、何方ヨリ差起候哉モ難計、臨機之御處置有之趣御達有之、

右ニ付、左之通今日出張ニ付、金穀割渡可然取計候様御達、

復古外記 東山道戰記 第十 明治元年四月十二日

赤坂門	彦根百八十人	小石川	大垣百六拾人計	牛込	長州百貳人
同所	忍五拾人下貳拾人	水道橋	薩州貳百三拾人	市ヶ谷	因州
喰違	土州			四ツ谷	

右ニ付、頭役之内壹人、少々人數召連、江戸表へ出張萬事取計候事。

○飯田藩記ニ云、四月十三日、御用廻章ニテ隊長壹人罷出候處、田安御門前屯集罷在候歩兵六百人計、承伏不致越ニ付、東海道御總督ヨリ精々御説得被遊候思召御座候得共、萬一不聞入候節ハ、速ニ打捕可申旨、夫々持場堅相守居可申候、且仕宜ニ寄候得ハ、御總督御進ニモ相成可申候得ハ、左様承知可致旨御達有之。

○松下重光、加兵衛、舊高家老臣ヲ督府ニ遣シ、手兵ヲ出シテ官軍ニ從ハシメンコトヲ請フ、之ヲ聽シ、命シテ賊情ヲ調査セシム。

○山内豐範家記ニ云、四月十二日、是レヨリ先キ、高家衆松下嘉兵衛、采邑伊豆ニ就ク、本ト我藩ノ縁家タリ、其ノ老吉井顯藏ハ、我藩士ニシテ松下家ニ借ス所ノ者ナリ、松下氏ノ意ヲ以テ、來リ官兵ニ依頼ス、則之レヲ山道督府ニ達シ、其微力ニシテ一方ニ任シ難キヲ以テ、專ラ賊情ヲ探偵セ令ム、且ツ本藩ヨリ稍ヤ兵器ヲ分與シ、以テ不慮ノ變ヲ待タ令ム。

十三日、笠間藩兵、五百七十六人、宇都宮ニ至ル。牧野貞寧家記

十四日、秋元禮朝、督府ニ候シ、宥罪ノ恩ヲ謝ス。

○秋元興朝家記ニ云、四月十二日、禮朝、去月廿九日謹慎被免候爲御禮、館林城ヲ發シ、翌十三日板橋宿着、翌十四日參營御禮申上、同十五日歸邑候事。

十五日、徳川氏連竄ノ徒、古河城ニ逼ル、古河藩、急ヲ宇都宮ノ官軍ニ報シ、援ヲ乞フ、軍監平

川某、和太乃チ彦根、笠間、壬生三藩兵ヲ率キテ之ニ赴ク、因テ古河藩ニ令シ、兵ヲ發シテ賊徒ヲ剿討セシム。

○井伊直憲家記ニ云、下總國小金宿ニ賊兵屯集罷在候處、船ニテ利根川ヲ遡リ、關宿寶珠本邊へ相進候趣、四月十五日、軍監平川和太郎、斥候上田楠次、南部靜太郎、弊藩渡邊九郎左衛門、青木貞兵衛、並大砲組及ヒ笠間、壬生等ノ人數、宇都宮出立。

○鳥居忠文家記ニ云、四月十五日、當藩ノ大砲隊彦根、笠間兩藩ノ兵、俱ニ小軍監平川和太郎ニ屬シ、軍ヲ下總國古河ニ進ムヘキノ指令ニ付、直ニ宇都宮ヲ發シ石橋ニ至。

○古河、關宿邊賊徒共屯集、不容易形勢之趣ニ付、爲鎮撫致出兵候條、於其藩モ早々人數差向、討取或ハ召捕等、臨機之御所置可被成候也。

辰 四月 十五日

土井大炊頭殿 重職衆中 古河藩記 土井利興家記

○總督府日記ニ云、四月十六日、午刻香川敬三ヨリ報知來ル、其次第徳川家來會賊水脫人等、古河城へ及應接借受度趣申候ニ付、古河ヨリ宇都宮滞在之官軍へ援兵請ヒ候間、平川、南部、上田三人五小隊ヲ率ヒ出張、今十六日、申刻賊ト一戰ニ必定之趣ナリ。

十六日、大總督、江戸ニ入り、増上寺ニ次シ、諸道總督、及ヒ參謀ヲ行宮ニ會シテ、軍事ヲ議ス、二督、之ニ蒞ム。

東山道 總督府 軍 監

彌御勇健御在陣珍重存候、然ハ明十六日、御軍議被爲在候間、已刻大總督宮、御本陣芝増上寺へ御參陣可有之候、尤參謀御引卒可有之候、此旨大總督宮被命候、仍申入候也。

大總督府

參謀

四月十五日

岩倉大夫殿

同 八千丸 殿東征總督記
總督府叢紙

○總督府日記ニ云、四月十六日、御軍議ニ付、芝増上寺御在陣ニ相成候大總督宮へ、兩總督様御成之事、亥刻總督様御歸館之事。

○大垣藩記ニ云、四月十六日、卯刻御供揃、東山道總督府御兩卿、芝増上寺へ御入、大總督宮御逢ニ付左之通御供御達、

薩長藩御供 彦垣藩散兵

右ニ付左之通被下之。

御酒料 金拾兩

○大總督、將ニ明日ヲ以テ牙ヲ江戸城ニ移サントス、東海道先鋒總督、乃チ江戸城諸門警守ノ部署ヲ定メテ、督府ニ牒知ス、是日、督府、薩摩、長門、彦根、大垣四藩兵ヲ遣シテ、田安、清水、赤坂、喰違、四谷、市ヶ谷、牛込、小石川、水道橋諸門ヲ警守セシム、既ニシテ大總督、故アリテ移營ノ期ヲ延フ。

明十六日、四時 大總督宮御入城ニ付テハ、三道之兵隊、別紙之各處へ夫々配兵警衛可有之、吟味イタシ候間、左様御納得可被下候、若外ニ御心附之儀モ御座候ハ、早々承度候事。

東海道總督府 參謀

木梨精一郎

海江田武次

四月十五日

東山道 總督府 參謀御中

○別紙

東山道官軍警衛所、

半藏門 田安門 清水門 赤坂門 喰違門

四ッ谷門 市ヶ谷門 牛込門 小石川門 水道橋

右

東海道同斷、

和田倉 薩州 馬場先 佐土原 日比谷 長州 外櫻田門 肥後

虎ノ門 伊州 山下門 大村 幸 橋 紀州 鍛冶橋 備前

數寄屋橋 同

右 但常盤橋 雄橋 閉切

北陸道同斷、

昌平橋 筋違門 神田橋 吳服橋 一橋門

右 總督府叢紙

○ 東海道先鋒記

○大總督宮、明十六日御入城可被爲在之旨、御達ニ相成候處、明後十七日ト改メ被 仰出候、尤門々警衛之儀ハ、過刻御談申入候通り、明十六日ヨリ御守衛ニ相成候様、御取計可被下候、此段更ニ御達申入候事。

東海道總督參謀

四月十五日

木梨精一郎
海江田武次

東山道 總督府 參謀御中總督府叢紙

○大垣藩記ニ云、四月十六日、大總督宮、江戸御入城ニ付、左之通出兵可致旨、東山道總督府ヨリ御達、

清水門 田安門

大垣藩

右一ヶ所ニ付一小隊充出兵。

○按スルニ、下條載スル所、十七日ノ達書ニ據レハ、薩摩、長門、彦根三藩兵モ亦、大垣藩兵ト同シク諸門警守ノ命アリシナリ。

○明十七日、大總督宮御入城之儀御延引被 仰出候、日限之儀ハ追テ可被 仰出之旨ニ候、仍此段可得貴意旨ニ付如此御座候、以上。

東海道總督府 參謀

木梨精一郎
海江田武次

四月十六日

東山道 總督府 參謀御中總督府叢紙大垣藩記

○明十七日 大總督宮御入城之儀。以下、上文ニ同シ、右之通、從東海道總督府參謀衆申來候間、爲御心得御達申入候也。但門々警衛之兵隊進退之儀ハ、何之 御沙汰モ無之候事。

總督府

參謀

四月十七日

○按スルニ、大總督、本月二十一日ヲ以テ、牙ヲ江戸城ニ移ス。

○督府、吹上藩兵ノ江戸藩邸ニ在ル者ヲ徴シ、之ヲ因幡藩兵ニ屬ス。

吹上藩

其藩、當地有合之人數至急出兵被 仰付候事。

四月吹上藩記

○吹上藩記ニ云、四月十六日東山道 御總督府參謀河田左久馬ヨリ、市ヶ谷尾州邸へ重役之者可罷出旨、御達ニ付罷出候處、右之通御達ニ付、不取敢人數百三十、差出、因州藩へ附屬繰出シ候事。

○戶田忠行、長門守、足利藩主彈藥ヲ督府ニ獻ス。

○總督府日記ニ云、四月十六日、彈藥六千六百發、金管八千五百粒、戶田長門守ヨリ差出候事、

○戶田忠行家記ニ云、四月原註、日不詳、東山道總督府へ、板橋驛ニ於テ小銃、彈藥、雷管等ノ代價幾許原註、員數不詳、ヲ納ム。

○大鳥純彰、圭介、舊幕府其黨千六百許人ト下總ニ走り、進テ結城ニ逼ル、内參謀祖式某金八、館林、結城、須坂三藩兵ヲ武井驛下ニ出シテ、之ヲ邀フ、克タス、適軍監平川某、和太彦根、笠間、壬生三藩兵ヲ率キテ古河ニ赴カントシ、結城ノ急ヲ聞キ、轉シテ之ニ赴キ、賊ト小山驛下ニ戰フ、利アラス、明日、結城ノ軍ト合シ、再ヒ小山ニ戰フ、軍監香川廣安、彦根、宇都宮、岩村田三藩、及ヒ岡田善長ノ兵ヲ率キテ、宇都宮ヨリ來リ援フ、賊銳ヲ盡シテ抗拒ス、官軍復タ利アラス、廣安等乃チ軍ヲ宇都宮ニ收メ、祖式某ハ古河ニ退守ス、結城城援絶エ、水野勝進、其子勝寛皆遁ル、賊進テ壬生ニ逼リ、又轉シテ宇都宮ニ向フ。

○秋元興朝家記節略ニ云、東山道御總督様ヨリ之御差圖ニテ、結城城之方ヘ持筒組壹組、先手組壹組差出、夫ヨリ野州小山宿在所々ニテ、四月十六日、十七日戰爭有之候處、者頭壹人、足輕兩人討死、持筒組壹人手負、其他、持筒頭行衛相知不申。

○興朝家譜ニ云、四月武井村ニ戰フ、官軍利アラス、石川定靜コレニ死ス、傷者數人。

○水野忠愛家記ニ云、四月十日頃ヨリ賊徒、古河領磯部村ヘ追々屯集致シ、同十五日、小金井宿屯集ノ賊徒、關宿境町ニテ合併シ、結城ヘ襲來ノ模様報知有之候ニ付、祖式某允指揮ニテ、弊藩ノ者探索トシテ出張候處、同夜ハ賊徒境町ニ止宿相成、翌十六日、未明ヨリ結城ヲ襲候趣ノ風聞ヲ注進ス、且又、右ノ模様、宇都宮ヘモ相聞ヘ候ニ付、同日、軍監平川和太郎、上田楠次、南部靜太郎、其外彦根、笠間、壬生等ノ人數宇都宮出立、其夜石橋宿ニ宿陣候由、之レニ依テ、内參謀祖式氏ヨリ應援申遣、境町街道武井宿ヘハ、十五日夜中ヨリ館林、須坂ノ人數ヘ弊藩人數合併シテ罷出、同十六日午時過、武井宿北茂呂ノ間、字臺仙坊ト申所ニテ戰爭相成、死傷尤多シ、同日、小山口ヨリハ彰義隊、帥風隊等、結城ヘ襲來ノ風聞有之、吊川東、關本口ヨリハ賊兵襲來ノ由報知之レ有、須坂隊長小林要右衛門始メ館林人數、久保田川岸ヘ出張ニ付、弊藩人數モ少々附添出

張、小山口ヘモ出張イタシ候、併シナカラ素ヨリ小藩ノ上、三月廿五日、戰爭ニテ敵味方相分レ、其上戰死手負ノ者モ之レ有、別シテ少人數ノ處、小山口、武井口、久保田口三ヶ所ヘ出張、殊ニ器械、彈藥等ハ甚乏ク、諸川口ヨリ襲來ノ賊兵凡千人餘ノ人數ニテ、結城在留ノ官軍、並弊藩人數合セテ二百ニ不足ノ人數ニ付、防禦行届キ難、再應援兵ノ義、石橋宿陣ノ官軍ヘ、内參謀方ヨリ頼遣シ候ニ付、笠間隊先陣ニテ結城道ヘ相進ミ候處、賊兵小山宿東裏麥畑ニ潛伏シ、笠間通行ノ横合ヨリ、頻リニ發砲致シ候處、賊ハ山畑中ニテ其在ル所ヲ知ラス、官軍ハ道路ニ在テ楯ト成スヘキノ處ナク、甚惡地ニ付死傷尤多ク、殊ノ外苦戰ニテ、遂ニ結城ヘ引取、同夜小山、諸川、關本三方ヨリ襲來ノ報知頻リ也、依テ内參謀ヨリ武井宿、並關本邊放火ノ義指揮有、同夜七時頃、諸川宿屯集ノ賊兵、武井宿ノ放火ニ驚キ、器械等取落シ、夜中宇雨具村ヘ逃去リ候、吊川東ヲ押來ル賊兵ハ、關本村ノ放火ニ驚キ、字上野ニ止宿也、同十七日、小山宿屯集ノ賊追討トシテ、内參謀祖式氏、竝上田楠次ヲ始、笠間、館林、須坂、弊藩等ノ人數相隨、小山街道ヲ相進候處、同宿裏手ヘ賊徒追々相見ヘ候ニ付、須坂先鋒ニテ戰爭相成、双方小銃ニテ烈戰、其内、賊七八百人程モ南北ヘ相分レ、追々湊迫三方ヨリ相迫リ、諸隊甚苦戰、死傷モ之有、外ニ應援ノ兵之レオク、退口難戰、遂ニ結城迄引揚、此日、上田楠次重傷ヲ負フ、軍議ノ上、一旦開散、諸方ヘ立退候ト云ヘトモ、賊兵襲來之レナク、僅々二百有餘ノ人數ヲ以テ、三方賊衝ノ地ニ孤立シ、少兵ヲ挈シテ出戰、其衝ニ當リ、開散ノ後ト雖トモ、終ニ賊兵結城ノ地ヘ入ル能ハスシテ、市中一字モ兵變ニ罹ラサルハ、偏ニ祖式氏ノ方略ニ由ルト云フヘキ也。

又云、賊兵襲來ノ模様、間諜報知ニ付、官軍祖式金八郎指圖ヲ以テ、隱居勝進義、戊辰四月十七日、結城立退キ、上總國舊領成東村陣屋ヘ到着、閏四月十日、結城表ヘ歸邑仕候、

右同様ニ付勝寛義、同日結城立退キ、野州大島村々長五郎左衛門ナル者方ヘ潛居、同月廿五日、結城ヘ歸邑仕候。

○掘直明家記ニ云、四月十五日、賊兵千八百人堺道結城ヘ侵入ノ趣、小山驛ヘ賊兵八百人程宿陣、是亦小山ヨリ結城ヘ押寄ル風聞有之、結城々下並ニ小山ヘ警衛人數繰出シ、堺街道ノ賊ハ諸川仁連驛ニ宿陣スルニ付、結城ヨリ二里南ノ方武井驛ヘ、館林人數一小隊繰出ス、同日夕刻、賊、鬼怒川東ヨリ多人數押寄スル旨報告有之、弊藩隊長小林要右衛門、半小隊大砲一

門引纏メ、久保田川岸へ出張、翌十六日朝、諸川ヲ探索スル處、賊七百人も屯集、結城へ可押寄體ニ付、久保田川岸出張人數ハ、間道ヲ押シ諸川驛横合ヨリ打出シ可申、時刻相約シ、武井驛へ援兵トシテ、弊藩隊長劍持由右衛門、人數半小隊引纏、武井驛ヨリ四五町繰出シ、間道夫々番兵差出ス處、小山驛戰爭砲聲相響、火ノ手モ相見ヘ、九ツ時過頃、賊徒斥候ト相見ヘ、一騎五六町先へ進來ルニ付、兵士兩三人爲應接差出ス處、二三町先ヨリ馬引返シ逃去、追懸小銃打掛ルト雖トモ、間隔有之、打留ルコトヲ得ス、久保田川岸ヨリ相廻リシ隊長小林要右衛門ヨリ、使ヲ以テ諸川驛モ程近ニ相成ル間、當手人數モ一同繰出ス様申越ニ付、斥候兩三人差出シ、引續キ館林ノ人數、及ヒ弊藩人數大砲廿丁餘繰出ス處、茂呂村外レ並松ノ邊迄、賊兵追々進來ニ付、大砲打掛、往還左右ヨリ撒兵布列シ相進ミ、小銃打掛ル處、賊兵ヨリ頻リニ打掛、双方烈敷砲戰相響ミ、味方館林人數ノ内死傷有之、且敵方多人數、駭ト打留ルト雖トモ、烈戰中故首級ヲ扛ルノ間無之、諸川驛横合ヨリ相進ム、小林要右衛門隊、本街道ニテ砲聲相響キシ故、急歩ニテ相進ミ、途中賊徒傷者等相見ヘ戸板ニ載セ、外ニ警衛數人有之、生捕可申ノ處、何分敵合相迫リシ場所ニ付、一應相尋ヌル處、賊ニ相違無之ニ付、一人ハ要右衛門拔討ニ致シ、外逃去ラントスルヲ小銃ニテ一人打留ム、是亦敵合間近ニ付、討捨ニ致シ諸川驛入口手前七五三場村迄相進ムニ、賊兵追々進來リシ故、人數撒兵ニ布列シ、双方小銃打掛、烈戰ニ及ヒ賊兵數十人、隨ニ打留ルト雖トモ、是亦首級扛ルコト能ハス、同處要右衛門隊ニテ死傷十名、死六人、士族土屋要助、銃手武田幸三郎、同竹田源九郎、小林要右衛門家來藤澤八作、石川鐵太郎、太田家來雨宮六五郎、土屋金生家來塚内半平、傷三人、士族土屋金生、軍夫吉之助、同武平。有之、本街道並七五三場村兩陣共至テ微勢、且ツ應援ノ兵無之、賊徒大勢故、三方へ人數相迫リ、既ニ背後立切體相見ヘ、猶戰爭ニ及ハ、微勢ノ味方人數損亡モ多ク、勝利ノ程モ無覺束、兩道人數不得已引揚、賊徒大勢相襲、退口甚難戰、同月十七日、小山驛ノ賊徒追討、笠間人數二百五十人程先鋒ニテ、弊藩一小隊、大砲一門、館林半小隊、結城街道ヨリ小山驛入口東裏ヨリ大砲打懸、然ルニ先鋒笠間人數及蹶踏ニ付、弊藩、先鋒へ可相進、參謀衆指揮ニ付、急歩ニテ先鋒へ相進ム處、驛裏へ賊徒追々相見ヘ候ニ付、弊藩人數、一町半程手前田畑へ撒兵ニ布列シ、雙方小銃烈戰ニ及ヒ、賊徒大凡六七百人、南北之方へ回兵シ、追々間合相迫リ、三方ニ大勢引請甚苦戰、於同所死銃手中、傷銃手八、各一名。

○岡田善長從軍事蹟節略ニ云、私分隊、長藩祖式金八郎へ附屬、結城籠城罷在候處、水野日向、再ヒ賊徒語合、結城之城ヲ襲フ、城中無勢難敵、城ヲ捨古河へ引揚ケ申候。

○按スルニ、水野勝知ハ、本月六日江戸ニ走リ、尋テ彰義隊ニ東叡山ニ投ス、本條、勝知、再ヒ藩城ヲ襲フトアルハ誤ナリ。○香川敬三事蹟ニ云、四月十一日、宇都宮城ニ入ル、是ノ時ニ當テ、徳川ノ臣隸、王命ニ服セサル者數千人、總、野兩國ノ間ニ横行シ、官軍ニ抗衛ス、其一軍、宇都宮ニ逼ル、敬三等、コレト下野ノ小山驛ニ戰フ、十七日、戰不利、退テ宇都宮城ヲ保チ、急テ板橋滯陣ノ總督府ニ報シ、援ヲ請フ。原註、祖式金八郎、上田楠次ハ結城ニ在、有馬藤太ハ板橋ニ行ク、敬三、平川和太郎ト城中ニアリ。

○井伊直憲家記ニ云、四月十五日、軍監平川和太郎、斥候上田楠次、南部靜太郎、弊藩渡邊九郎左衛門、青木貞兵衛、並大砲組及ヒ笠間、壬生等ノ人數宇都宮出立、其夜、石橋宿ニ陣ス、翌十六日、未明同所出立、既ニ小山、間々田邊迄相進候處、結城ヨリ祖式金八郎、以飛使賊兵五六百人、諸川宿ヨリ結城ヲ可襲之勢、孤城寡兵不可防禦、迅速應援可有之申來候ニ付、渡邊九郎左衛門隊爲斥候、直ニ結城へ發向、無程總軍進發之處、賊兵小山ノ方へ進來候由、探索之者注進致候ニ付、總軍再分配之内、賊兵既ニ相近付、忽互ニ發砲、笠間、壬生之勢、槍ヲ入接戰候得共、衆寡難當引揚候折柄、青木貞兵衛隊大砲組等踏堪、頻ニ放撃相支候處、終ニ彈藥彈果候ニ付、不得止結城之方へ引揚候途中、渡邊九郎左衛門隊、此戰爭ヲ聞付、馳返リ候間、再小山へ相向候處、賊兵既ニ大行寺ノ渡ヲ越ヘ、栃木宿ノ方へ引揚候由、且及日暮候間、弊藩人數、小山、新田兩宿之間ニ野陣ヲ張ル、此日、青木貞兵衛隊、賊七八人討取候得共、其暇ナク僅ニ一首級ヲ揚ル、翌十七日朝、諸川宿ニ留リ居候賊二千人計、小山へ操込候趣注進之折柄、宇都宮ヨリ軍監香川敬三、弊藩小泉彌一右衛門隊、足利足利、恐クハ、宇都宮ノ誤、岩村田、揖斐等之人數ヲ率ヒ、爲應援來レリ、則弊藩大砲一門、小泉彌一右衛門隊、並諸藩之兵、小山宿之正面ニ向ヒ、渡邊九郎左衛門隊宿之東裡手、青木貞兵衛隊西之裏手ニ向ヒ、分配既ニ相定リ、正面之兵直ニ進撃、賊兵ハ撒兵ニ配リ、頻リニ新手法入替候ヘ共、味方ハ代援之兵モ無之、諸藩苦戰、終ニ宿外迄引揚候處、青木貞兵衛半小隊、賊中ニ被取圍引揚兼候様子ニ付、小泉彌一右衛門、渡邊九郎左衛門兩隊、是ヲ救ハント再ヒ宿内へ討入候得共、賊兵衆多、砲丸烈敷打立候ニ付、無據引揚申候、青木貞兵衛始メ半小

隊ハ、賊中ニ陥リ彈藥彈キ候處ヨリ、短兵接戰、終ニ盡ク致討死候由、一人重圍ヲ切抜ケ罷歸リ報知仕候、此日、七ツ時官軍兵ヲ收メ、宇都宮へ引揚ケ、賊兵ハ朽木へ引取候由、弊藩死半小隊八人、物頭青木貞兵衛、小泉彌一右衛門、隊塚越三郎、渡邊九郎、嘉四郎、飯塚平輔、安田覺三郎、傷十二人。渡邊九郎左衛門、隊塚松下專之介、星野八十太、中谷元之進、小泉彌一右衛門、隊塚柳瀬儀右衛門、田部萬之助、林九左衛門、梅本磯次、河内半太夫、川瀬柳藏、岩崎久馬次、野田延次郎、伊藤壽右衛門。

○牧野貞寧家記ニ云、四月十二日、越中守人數砲隊、槍隊上下五百人餘、宇都宮へ出兵仕候處、同月十五日、隊長之者御呼出有之、總州古河驛へ屯集之者有之ニ付、砲隊、槍隊共出勢可仕候様、御達ニヨリ十六日、官軍彦根藩、壬生藩、並弊藩人數、古河表へ出兵仕候處、跡ヨリ以御使番、總州結城表へ賊徒多數屯集罷在候付、人數差向候様御差圖有之、依テ小山驛ヨリ一同、結城ノ方へ凡十町餘リ罷越候、於途中賊方大砲一聲相響キ、夫ヨリ杉森、或ハ畑中ヨリ大小砲一度ニ打出シ、槍隊、砲隊ニテ凡半時計リ及戰爭候處、戰死十人、番頭川崎忠兵衛、目付藤江右膳、職上中村莊三郎、大砲方秋元金吾、川崎保藏、手負五人、尾瀬助、後藤益三、醫師原松榮、戰士堀勇輔、等之難及力戰、依テ結城、宇都宮ノ方へ人數引揚ケ、其段、隊長ヨリ宇都宮御軍監へ御届申上、然ル處、猶又雀ノ宮へ小銃隊三隊差出候様、御差圖ニ付、直様御軍監御一同操出、十七日曉、石橋宿ヨリ結城、小山ノ方へ差向候様、又々御差圖ニ付相進候處、同宿東裏ニテ、又々戰爭相成、是又半時餘モ相戰、結城ノ方へ一ト先引揚、御指揮相待居候處、御軍監ノ御方、何處へ御引揚相成候哉、御行衛不相分、依テ伺候義モ出來兼候ニ付、領分眞壁陣屋へ引取。

○鳥居忠文家記ニ云、四月十六日、石橋ヲ發小山ニ至、此驛ヲ過、南ニ進ムコト二拾七八町許ニシテ、(武藏)賊、竹井邊襲來、此間アリ、急キ兵ヲ小山引揚ヘシト、小軍監ノ指揮ニ仍、兵ヲ揚、結城街道ニ進四五町許、砲聲頻リニシテ、(武藏)賊、竹井邊襲來、此道左右樹木繁茂、且細路ニシテ戰ニ便ナラス、依テ笠間勢ト共ニ兵ヲ小山ニ揚、賊、既ニ此地ニ襲來ル、内參謀南部靜太郎ノ令ニヨリ、驛ノ東ニ兵ヲ回、四斤線條砲ヲ以テ賊ニ當ル、驛中擧テ進來、我大砲五六拾連發甚苦戰ス、車推川中子德之助、疵ヲ負、鎗持鶴松戰死ス、彼我互ニ進、其間ツマリ砲手車推等、大砲ヲ小銃ニ換テ砲戰ス、終ニ彈藥盡ルニ至、此時、幅重隔絶シテ彈藥不至、其上、彦根勢ハ引揚テ驛ノ南口ニ在、我兵ト笠間勢ノミニテ、寡兵ニシテ後詰ナケレハ、小軍監ニモ無余儀、兵ヲ揚テ結城ノ町口ニ至ル、干時斥候某日、因循スルト首ヲ刎ト、我藩兵太憤怒不止、隊長高須嘉司馬、衆ヲ諭、且其狀

實ヲ斥候ニ演說シ、彈藥ヲ借テ兵ヲ盛返シ小山ニ至、是ヨリ先、賊、西川ヲ渡、大光寺村ヲ指シテ退シ由ナレハ、彦根藩ハ御本陣へ、我兵ト笠間勢ハ西裏ニ至警衛シ、薄暮總軍大町新田へ引揚宿陣ス。

十七日、宇都宮一小隊外二隊ヲ率シ着陣、此時、脫賊、結城ニ回ル由ニテ、援兵ヲ本營ニ乞來、又小山ヨリモ襲來難計ト告ク、故ニ總軍、喜澤邸ニ進軍ノ令アリ、我兵、既ニ繰出サントス、然處、壬生城ヨリ使番山田槍之進到着、賊、近傍ニ在、壬城ニ襲來ノ模様アリ、兵ヲ引揚ヘシト申來、仍テ本營ニ請、續テ賊、喜澤ヨリ半田ニ赴由注進アリ、再度請テ許可ヲ得、兵ヲ揚、先斥候ヲ壬生領ノ堺半田ノ川岸ニ出、藤葉ト云處ニ隊ヲ駐、未ノ半ニ壬城ノ南下川岸ニ引揚、北岸ニ陣、此日午後、隊長淵本藤一郎、銃手ヲ率テ同所ニ出張ス、隊長高須嘉司馬等、宇都宮ナル參謀香川敬三へ檄ヲ飛、其文ニ曰、數百ノ脫賊、既ニ我壬生城ニ襲來セント、其模様虛ナラス、乞迅ニ援兵ノ到ル事ヲ、左ナキニ於テハ、我藩素寡兵ニシテ、防戰ノ程覺東ナシ、若後援ナクンハ、假令防戰スト雖、益ナキニ似、戰ハシカ將和シテ其銳ヲ挫暫時避シカ、此儀如何ト、香川參謀ヨリ、方今賊徒、宇都宮ニ攻入ノ勢、切迫ノ折柄、援兵差出難シ、依テハ何等ノ策ヲ用共、不戰シテ一時避ルノ應接ニ及トモ妨ナシトノ返報アリ、此ヨリ増々兵備ヲ嚴ニス、此日、賊長大島圭介、一聯隊ヲ率、川ヲ渡シテ飯塚驛ニ至、賊使宮川六郎、毛利三之助、長沼某、下河岸ノ南岸ニ來、我隊ヨリ高須藏人、友平慎三郎、茂木源太、松本尙一等、川ヲ渡テ應接シ、其來旨ヲ問、曰、吾輩ハ徳川家旗下ノ士也、志願アリテ日光ナル東照宮ヲ拜セント、江戸ヲ發シ數日ナリ、途ニ不慮ノ難事アリテ寢食ヲ安セス、鳥居侯ハ我大君徳川氏譜代ニシテ、殊ニ東照宮ト彦右衛門元忠君トハ、水魚ノ中ナレハ、今、此地ニ至始テ安堵セリ、自今兩三日、城下ニ休息シ、沐浴ヲモシテ日光ヲ拜セント、且人夫及馬百疋ヲ用意アラシコトヲ乞旨ナリ、高須等答、頃日慶喜君、恭順謹慎ノ際ニ當リ、其意ヲ誤、朝廷寬仁ノ御趣旨ニ戻リ、粗暴ノ舉動有之ハ、徳川家ニ對シ不濟義ト、是我藩主ノ深恐處ニシテ、嚴備固守スル所故也、是非ニ城下ニ至ントナラハ、官軍着陣モ程ナカラン、必兵ヲ以對ニ至ヘシ、然時ハ、互ニ無益ノ刀鎗ヲ交ヘ、城下ノ人民ヲ苦シムル實ニ忍サル事也、又日光ニ登ラントナレハ、間道ニ回ルトモ害ナカラン、宜ク推想セヨト云、賊、承諾シ退、然ルニ賊、飯塚ニ繰込、其勢凡千數百人ト注進アリ、仍テ淵本藤一郎、齊藤俊一郎率二人同所ニ至、賊長

ニ會テ云、過刻ハ間道ニ回ルノコトヲ約シ、今、兵ヲ當驛ニ繰込候ハ違約歟、不然ハ直ニ間道ニ回シ、可然ト詰問ス、異事アルニ非サレハ、承諾シテ兵ヲ擧、恩川ヨリ大光寺村ニ渡ル、卒二人ヲ尾シテ渡戸ニ至、賊兵、川ヲ渡ルヲ見、飯塚ニ報知ス、此日、賊合戰場邊ニ於テ、我輕卒四人ヲ捕ルノ由注進アリ、仍テ茂木源太、友平慎三郎士卒ヲ率同所ニ至、賊既ニ金崎ニ越、小倉川ヲ渡檢木ニ至ト云、追テ同驛ニ至、我卒四人ヲ請取ント、友平慎三郎應接ス、然ルニ是ヨリ先、磯邸邊ニテ差返シタリト確證ヲ得、各壬生ニ歸、其旨ヲ報ス、十八日、賊使宮川以下三名、城北新町口ヨリ城下ニ至、臂ヲ擁テ曰、吾輩ト俱ニ兵ヲ擧、君冤ヲ雪キ多年沐浴スル處ノ鴻思ニ今日報サル可ラス、同意ナキニ於テハ、武門ヲ以應接セント、大ニ前日ノ論ト反ス、高須藏人等曰、慶喜君恭順謹慎ノ意ニ戻、官兵ニ抗スルノ曲直ヲ論、賊不伏、今日ノ王師ハ王師ニ非ス、故ニ錦旗モ亦錦旗ニ非ルナリ、全ク薩、長、土藩ノ詐謀ニ出ルト云、彼我其論決セス、故ニ主人ニ達、藩論一定ノ上、和戰共是ヨリ可申入ト答、賊、城下ヲ去、金崎驛ヨリ小倉川ヲ渡、檢木、奈佐原等ノ驛ヲ過、兵ヲ鹿沼驛ニ轉ス、同二十日、午後官軍城着ス、此日、賊ノ使、城東ナル黒川ヲ渡、上川岸口ニ至、前日ノ答ヲ待、官軍着陣ヲ察知セシヤ、馬一匹ヲ捨、竊ニ走行衛ヲ知ラス。

○戸田忠友家譜節略ニ云、是ヨリ先、總督ノ參謀祖式金八郎、結城ノ賊ヲ討ス、賊遁ル、乃チ留テ之ヲ守ル、時ニ賊賊ノ兵五百人、利根川ヲ浜リ、將ニ結城ニ迫ントス、參謀、急ヲ軍監香川敬三、平川和太郎ニ告ク、官軍及ヒ我兵ト應援シテ小山ニ會戰ス、利アラスシテ敗走ス、賊移テ檢木ニ陣ス、軍監之兵、我藩兵ト又諸川屯集ノ賊ト小山ニ戰フ、賊兵三千許リ、官軍寡少ニシテ復タ利アラス、兵ヲ收テ宇都宮ニ退ク、諸川ノ賊、檢木ノ賊ト合ス、時ニ四月十七日ナリ。

○岡田善長從軍事蹟ニ云、四月十七日、於小山彦藩合兵及苦戰彈藥盡候ニ付、夕七ツ時、宇都宮へ引揚、手負一人。折戶

○淺田惟季舊幕府士、北戰日誌節略ニ云、陸軍ノ將大島圭介、憤激報國有志ノ徒ヲ率ヒ、四月十一日ノ夜、都下ヲ脱走シ、黒髮山ノ神廟ニ據リ、討賊ノ義旗ヲ擧テ、興復ヲ計ラントス、余不肖ナリト雖トモ、此時陸軍兵隊指圖役頭取ニ拔擢セラレ、八十人ノ長官タリ、傳習第二大隊ノ官員ニ加ハリテ、碓氷街ノ陣營ニ在リ、大隊ノ將本多幸七郎、余カ同僚山角喜三郎、大川正次郎、山口朴郎、板橋淳次郎等諸官數十人、兵隊四百十一人、死ヲ盟ヒテ悉ク大島圭介ニ屬シ、以テ事ヲ計ル、十二日、下總

市川驛ヲ過テ國府ノ臺ニ抵ル、御領兵七聯隊三百人、其長官加藤平内、副長山瀬主馬、米田圭次郎、頭取小花和重太郎、田澤淳之丞、傳習第一大隊五百人、會津藩士及農兵七十人餘、桑名藩士八十人、幕府士官隊原註、草風、百五十人、天野加賀、副長村上某率之、傳習士官隊五十人原註、第二隊、總括千六百トス、十五日、諸川ノ驛ニ達、十六日、諸川驛ニ止マル、午後謀者報テ曰、在結城ノ敵軍五百人餘、二道ヨリ進撃スト、大島圭介、令テ下シ吾カ傳習隊ヲシテ二軍ニ分チ、之レニ當ラ令ム、右半大隊ハ結城道ニ進ミ、左半大隊ハ小山道ニ進メリ、八ツ半時頃、諸川ヲ發シテ二軍並ヒ進ム、結城道ノ斥候一番小隊、山口朴郎、之レヲ率ヒ本軍ヲ距ル百歩程、先鋒余カ二番小隊トス、三四番ノ小隊ハ、東照宮ノ旗章ヲ護衛シ、瀧川充太郎、軍監ヲ兼テ之レヲ率タリ、其距離五十歩トス、兵總テ貳百人、諸川ヲ發シ進ム事半里、武井邑ト云ヘルニ達ス、近傍叢樹鬱蔥トシテ四境ヲ蔽フ、余等、其伏兵有ラン事ヲ懼レ、暫ク軍ヲ止メ斥候ヲ撒列シテ探ラ令ム、忽然人有リ、右ヨリ出テ左ノ叢林ニ入ル、直チニ聲有リ、撃テト云、敵兵一人、路ノ中央ニ顯レ出テ、我カ斥候ニ放發ス、我軍忽チ撤隊ヲ爲シ三、四番ノ小隊ハ左右ニ埋伏セシメ、二番、一番ノ小隊ヲシテ、前面ノ敵ニ當ル、敵兵、四斤ノ野戰礮ヲ道路ニ備ヘテ、頻リニ榴彈ヲ放ツ、我軍、猥リニ放發スルヲ許サス、蒲伏シテ身體ヲ露ス事ナク、荏苒ニ進テ敵ニ接スル事四五十歩、此時、敵銃連發雨ノ如シ、是ニ於テ、點火ノ號令ヲ下シ、前進ノ喇叭ヲ鳴ラス、戰フ事凡半時ニ至ル、勝敗未タ決セス、余、兵士ノ疲弊セン事ヲ憂ヒ、山口註原、一番、氏註原、一番、小隊ノ長、ト約シ、廿八人ヲ分ツテ藪ノ中ヲ潛リ、敵ノ横ヲ襲ハシメ、烈シク發砲シタリ、敵兵、之レカ爲ニ披靡シ、終ニ兵器彈藥ヲ捨テ走ル、此時、敵兵、我カ後面ヲ絶ント爲テ、三、四番ノ小隊ト戰フ、砲聲雷ノ如シ、余等、前面ノ敵兵ヲ尾撃シテ、之レヲ救フニ暇非ス、暫ク有テ瀧川充太郎、汗馬ニ鞭シ馳來リ呼テ曰、敵軍、我カ脊面ヲ絶ツ、後軍寡兵苦戰ナリ、前面、既ニ捷ヲ得タリ、速ニ兵ヲ反テ救フ可シト、依テ直チニ兵ヲ收メ、急歩ノ令ヲ下シテ趣キ救フ、此時、小山道ニ進ミタル本多幸七郎ノ率ヒシ左半大隊、軍ヲ反シテ救フ、三方合シ撃テ之レヲ敗ル、敵、大ニ狼狽周章シテ散亂ス、我軍尾撃スル事半里、斬首七級、四斤ノ戰爭礮一門、彈藥函七箇、小銃刀鎗等ヲ分取ス、而テ我兵傷ク者四人、戰死スル者貳人也、此日ノ戰爭、敵兵若シ霰彈ヲ放ツニ至ラハ、我軍、豈捷ヲ得可シ乎、其五六十歩ニ接スルニ至テ、尙榴彈ヲ用ヒ、其拙知ル可キ也、爾後野戰

ヲ爲ス者、必ス注意スヘシ、申ノ中刻、悉ク軍ヲ收メテ諸川ニ凱旋ス、大鳥圭介、街外ニ出迎ヒテ軍ヲ勞フ、此夜四更、諸川ヲ發シ徑ヲ繞テ小山驛ニ趣ク、昨十六日、我前軍ノ第一大隊、此所ニ陣シタル敵軍ヲ破リ、下野國大平山ニ據ル、ト云ヘル報告有リ、十七日、我軍進ンテ小山驛ヲ距ル半里餘、一小邑ニ達ス、土人曰、十六日ノ敗兵、近國諸侯ノ援兵ヲ促シ募テ小山ニ會ス、兵總テ千餘人、先敗ノ恥辱ヲ雪ン事ヲ欲ス、猥リニ進ム時ハ、必ス大ナル敗有ント云、大鳥氏、令ヲ下シテ曰ク、正面ハ御領兵七聯隊ヲシテ戰ハ令ン、傳習一小隊ヲシテ其横ヲ襲ハント、則余カ引率シタル二番小隊ト、大川正次郎ノ率シタル八番小隊ヲシテ、之レニ當ラ令ム、是ニ於テ、二人ノ土人ヲ教導トナシ、隘道ヲ進テ小山街ノ南方ニ出ル、先ツ其地形ヲ見ルニ、郊原茫茫麥黍暢茂シ、數里外一望一點ノ障物ヲ見ス、左ノ方半里程ニシテ、葦葭ノ繁茂スル有リ、伏兵ヲ置クニ屈強トス、則チ大川正次郎、八十人ヲ率ヒテ此數ニ潜伏シテ、敵ノ舉動ヲ窺フ、余、六十人ヲ率ヒ、黍麥ノ畑ヲ潛リテ進ム事十丁、忽チ前面田畦ニ三四百人ノ敵有リ、距離四五百步、我軍ノ抵ルヲ見テ、直チニ放發ス、此時、小山街外、既ニ戰爭酣ナリ、余、令ヲ下シ猥リニ砲發スル事ヲ戒メ、敵ノ接スルヲ待ツ、暫ク有テ、敵兵、我カ放發セサルヲ見、次第ニ接近スルコト殆ト百步ニ至ル、余、此時的度ナルヲ窺テ、點火ノ令ヲ下シ連發數回、敵砲又銳シ、戰フ事暫時、余、寡兵支ヘ難キヲ知リ、喇叭ヲ鳴サ令メ、葦葭ノ中ニ潜伏シタル八番小隊ヲ援兵ヲ乞フ、大川正次郎、直チニ應シテ烈敷放發ス、余カ兵、大ニ憤激猛烈ニ連發シタリ、須臾大川氏ノ兵、叢林ヲ露レ忽歩シテ敵ノ後面ヲ襲フ、敵軍、披靡終ニ敗走ス、吾カ二軍合擊、北ルヲ追ヒ直チニ進テ小山驛ノ中央ニ突入シ、激烈ニ放發令メテ、敵ノ本營ニ追迫ル、敵兵、周章狼狽シ、兵器輻重ヲ棄テ走ル、我兵、街外ニ追ヒ薄リ、彈藥兵器ヲ奪フ事無數、斬首五級、大川氏ノ隊ヲシテ、分ツテ右方ノ叢林中ヲ探ラ令メ、余カ兵五十八人、街外ヲ守ル、忽チ左ノ方麥畑ノ中ニ、五人ノ敵兵有リ、其一人、長官ナルヘシ、指揮旗ヲ携ヘ來ル、余、其距離近キ故ニ手ヲ舉テ招ク、彼味方ナリト思ヒ、喜ヒ早卒ニ進ンテ十五六步ノ所ニ來ル、余、令ヲ下シテ忽チ狙擊令メタリ、其一卒、終ニ遁レ去ル、長官及ヒ二卒ノ首ヲ斬テ本營ニ送レリ、九ツ時頃ニ至リ、敵兵又來リテ戰ヲ挑ム、此時、街外ヲ守ルモノ余カ一小隊ノミ、殆ト支ヘ難キニ至ル、故ニ騎ヲ馳テ援兵ヲ乞フ、大鳥氏、三小隊ヲシテ直チニ救ハ令ム、我軍憤激、終ニ大ニ之レヲ

敗ツテ追擊スルコト半里、敵、街外ノ一小邑ヲ放火シテ走ル、八ツ半時過、余等、軍ヲ收メテ凱旋シ、本營ニ行テ大鳥氏ニ逢ヒ捷ヲ祝ス、即チ敵首七級ヲ梟タリ、其罪ヲ學ル文ニ曰、

三百年來ノ重恩ヲ忘却シ、君家ニ敵スル人面獸心ノ奸賊、天誅不逖、今日首級ヲ授ク、依令梟首、其罪ヲ正ス者也。

幕府 義士

斯ノ如ク書シ、其首級ヲ青竹ニ貫キ、本營ノ門前ニ梟ル、之レヲ見ル者、悉ク彼ノ面上ニ唾ヲ吐キ罵ル、大鳥氏、兵隊ノ戰勞ヲ賞シ、盡ク酒肴ヲ賜フ、七ツ時過、我傳習隊小山驛ヲ發ス、喇叭ヲ鳴ラシ行軍百步餘、南方叢林中ニ敵兵有リ、砲聲忽然ト起ル、吾兵、直チニ右側戰隊ヲ作り、叢林ヲ激烈ニ連發令メ、急歩均シク進テ麥畑ノ中ニ亂入ス、敵軍、忽チ敗走、砲ヲ捨テ遁去タリ、斬首十餘級、野戰砲十四門、兵器數十ヲ奪フ、此戰爭、敵兵ノ襲來ルヲ知ラス、偶然ト備ヲ設ケテ、行軍ヲ初メタリシニ、一聲ノ砲ニ驚キ、只叢林ヲ目標トシ放發一瞬間ニ、又偶然ノ大捷ヲ得タリ、眞ニ僥倖ト云ツ可シ、此戰爭、實ニ迅速ニシテ兵隊各五發餘ノ彈ヲ發ツ者ナシ、彼先ニ小銃ノ戰ヒニ敗シ、其再舉スルニ至テ、多クノ大砲ヲ用ヒテ我軍ヲ敗ラントス、然リト雖モ、大砲ハ散彈ヲ除クノ他近ニ利有ラス、殊ニ運轉ニ不便ナルヲ以テ、案外功ヲ奏スル事少シ、故ニ我兵、一時不意ノ侵襲ニ困迷スト雖モ、死地却テ生路ヲ得、全軍憤激接近シ、猛烈ノ連發ヲ爲セシニ寄り、彼カ砲丸ハ、多ク頭上ヲ越テ我ニ的中セス、加之、小銃少キノ故ヲ以テ、迅速ノ戰ヲ成ス事能ス、終ニ大敗ヲ釀スニ至レリ、予、佛人ニ教授ヲ受シ時、其說ヲ聞ル事有リ、野戰ハ必ス彈丸二三發ノ間ニ勝敗アリト、今ニ至テ始テ此語の中スルヲ知ル、數百步ノ距離ヲ隔テ、數十發ノ彈丸ヲ費シ、尙勝敗ヲ決セサルハ、互ニ臆意有ル故ナリ、然レ共、地形又人ノ強弱ニモ在ル可シ、佛蘭西人ノ語ハ、野戰ニテ一舉ニ勝敗ヲ決スルノ時ニ在テ、山戰、守戰ハ又之レニ異リ、其法數種有リト云、我軍今日ノ戰ハ、野戰ノ最迅速ナル者也、爾後、斯ノ如愉快ノ戰爭有ル可ラス、又此日、初度ノ戰ヒヲ論スレハ、其捷ハ大川氏ノ兵、敵ノ背面ヲ襲フニ在リ、次ハ予カ兵ノ能ク支ユルニ在リ、故如何ト成ハ、若シ余カ兵、敵ノ衆ニ恐怖シテ敗スル至ラハ、敵軍、直チニ本街道ノ横ヲ襲フ可シ、然ル時ハ豈我軍全カラシ平乎、又余カ兵、能ク戰フト雖モ、大川氏ノ兵、彼カ背ヲ擊タスニハ、衆寡ノ勢終ニ

ハ職ト成シ、二軍ノ合撃其度ニ的シ、忽チ街内ニ突入セシ故ニ、敵、大ヒニ狼狽シテ逃去ルニ至レリ、故ニ八番小隊ヲ第一ノ功トシ、二番小隊ヲ次トス、又敵ニ感ス可ノ一人有リ、忽然樹木ノ蔭ヨリ走り出、本多幸七郎ト余カ行タルヲ見テ、刀ヲ揮テ迫ル、傍ニ在タル兵、狙撃シテ終ニ首ヲ斬ル、七時半時、軍ヲ收メテ小山驛ヲ發シ、行ク事一里半、二更、飯塚邑ニ達シ止宿ス、此日ノ敵兵、彦根、笠間、館林、宇都宮、結城、壬生、岩村田ノ七藩總兵千五百人ト云、我軍戰死三人、傷者拾一人ナリ、十八日、曉七時半時、壬生城ヘ使ヲ遣ル、其辭ニ曰ク、昨十七日、小山驛ニ於テ彦藩、及其他ノ六藩、我輩ノ日光廟ニ詣ル途ヲ遮リ、加之、東照宮ノ旗章ニ發砲ス、是何等ノ暴舉ゾ、我等、敢テ戰爭ヲ好マズ、然リト雖モ、事卒爾ニ出テ止ヲ得ス、終ニ一丸ヲ發ツテ、盡ク賊ヲ走ラス、聞ク、其敗兵、壬生城ニ據ルト、夫レ貴藩ハ幕府恩顧ノ一家ニシテ、其祖彦右衛門元忠ハ、烈祖會津征伐ノ時、伏水城ニ據テ無雙ノ勇戰ヲ遂ケラレシハ、普ク世人ノ知ル所也、今、幕府傾危ノ秋ニ至テ、君家ノ仇タル奸雄ノ徒ヲ佐ケ、正シク幕臣タル孤獨ノ吾儕ヲ擊ツ、是レ何ノ道理ゾ、抑吾等、兵器ヲ携ヘ日光廟ニ抵ルハ、全ク錦旗ニ抗スルニ非ス、只神廟ヲ護衛セン爲メ也、貴藩、若シ先非ヲ悔ヒ我輩ヲ助ル時ハ幸甚シ、又錦旗ニ拘泥シテ奸雄ヲ佐ルニ至ラハ、士道ニ於テ止ムヲ得ス、即時ニ問罪ノ師ヲ發シ、孤城ヲ屠ン事今夕ニ在リ、敵ス可ナラハ、壘ヲ深フシ壘ヲ高フシテ、以テ吾軍ノ抵ルヲ待テ、舊幕ヲ佐ルノ意アラハ、速ニ賊ヲ攘ヒ以テ其首ヲ提ケ來レ、乞有無ノ報告ヲ待ツト、辰ノ刻ニ至テ、壬生城ノ老臣來リ謝テ曰ク、小山驛ノ戰爭、吾藩士曾テ幕府ノ兵ナル事ヲ知ラス、愆テ神靈ヘ放發スルニ至ル、然レ共、其罪遁ル、ニ道ナシ、依テ昨日、出師ノ隊長ヲ爲テ自刃令メ、今其首ヲ提ケ來テ軍門ニ謝スト、則チ是ヲ大鳥氏ニ告ク、大鳥曰ク、是レ僞也、豈將士ノ首級ナラン乎、戰死ヲ遂タル兵卒ノ首也、雖然、彼既ニ此語ヲ吐ク、吾輩元來途中ノ戰爭ヲ好マズ、宜ク對テ而シテ後ニ彼カ狀ヲ窺ント、則チ謁見シテ、敵ノ多寡ヲ問フ、使答テ曰、薩、長ノ兵百五十人餘、十七日ノ敗兵八百人許城外ニ陣ス、幕兵來ラハ、彼等必ス抗撃セン、然ル時ハ、前ニ葵旗在リ、後口ニ錦旗在リ、我藩、中間ニ在テ甚タ困窮ス、若シ進軍セントナラハ、間道ニ行ン事ヲ乞フト、大鳥曰、餘ノ兵ハ免ス共可也、薩、長ハ九世ノ仇タリ、進撃爲スンハ有可ラズ、抑公等、言ヲ工ミニシテ兩端ヲ量リ、勢ヒ微ナルヲ穢サントス、惡ム可シ、兩端ニ心ハ士ノ愧ル所、我輩、豈斯ノ如キ不

義ノ士ヲ頼ンヤ、疾ニ軍ヲ進メテ其城郭ヲ屠ン、直チニ歸テ備ヲ爲セ、使曰、眞ニ困窮セリ、我導引シテ隘道ニ抵ラン、且金穀ヲ贈テ軍費ヲ助ケント、齋ス所ノ一函ヲ開キテ、若干ノ金ヲ出シテ曰ク、輕微ナカラ吾主君ノ贈ル所、宜ク收メン事ヲ乞フト云、大鳥曰、我輩ハ波嶽ニ據ル水藩ノ徒トシカラス、小藩ヲ劫シ人民ヲ掠ルノ不義ヲセン乎、今、天涯據ル處ナキノ一孤客ト雖共、尙舊幕府ノ臣下タリ、豈微少ノ金穀ヲ闕可キ、夫レ我儕ノ日光廟ニ據ン事ヲ欲スルヤ、一ツニハ神廟ヲ護衛シ、二ツニハ君家ノ無辜ヲ訟ヘ、三ツニハ君側ノ惡ヲ攘ヒ、以テ四海ヲ富嶽ノ易キニ置ント欲ス、今、敢テ小事ニ關係シ、道路區區トシテ遲滯センモ益ナシ、公等、斯迄迷惑セントナラハ、隘道ヲ進マン、米穀ハ受ク可ク、金ハ受可ラス、又携來ル首級ハ見ルニ及ハス、善惡共ニ君家ノ爲ニ死スル者、是則チ忠士也、吾等豈軍門ニ梟スルニ忍ンヤ、使、大ニ喜ヒ、隘道ノ導ヲ爲ス、土人ニ命テ糧ヲ炊カ令メ能ク周旋シタリ、

傍見者必ラス曰ハム、此時、直チニ壬生ヲ屠リ、敵ヲ放逐セハ愉快ナラムト、然レ共、本文大鳥氏ノ説ノ如ク、元來一小城ニ關係シテ、日光ノ道路、敵ノ爲ニ絶ル、ニ至ル時ハ、我輩ハ死地ニ陥テ、一人モ存スル者有可カラス、一時モ疾ク峻ニ據居シ、會津城ニ通シテ大事ヲ計ントス、故如何トナラハ、此時、奥羽ハ未タ敵地ニシテ、會藩ト雖共、有無ノ舉動知レ難シ、故ニ我等、疾ニ其基本ヲ固フシテ後、上野ノ一州ヲ下シ、時機ヲ窺テ、都下ヲ回復センノ意有ル故ニ、今彼カ因循ヲ咎スシテ、暫ク其意ニ任セ隘道ニ進ム也。

此日巳ノ刻、壬生使ヲ導者トシテ、飯塚邑ヲ發シ隘道狹略ヲ經テ、午前野州栃木ノ街ニ抵ル、我先鋒傳習第一大隊、桑名士官隊、草風隊總計七百人餘、下總國關宿ヨリ古河ノ間道ヲ經テ、四月十六日、小山驛ノ敵ニ捷チ、一時、下野國大平嶽ニ據リ、十八日ノ夜、宇都宮ヲ距ル一里半、雀ノ宮ト云ヘル驛ニ抵ル。

○慶應兵謀秘錄 舊幕府士田中惠親所著、節略ニ云、四月十二日、大鳥圭介、第二傳習歩兵頭並本多幸七、瀧川充太郎、外役市川表ヘ出勢、此時、大鳥圭介ヲ推シテ總軍ノ長トス、從是諸命令、皆大鳥氏ヨリ出ス、於是第一傳習隊ヲ前軍ト爲、是ニ附スルニ大砲二門、護衛一小隊、桑名士官隊ヲ以テシ、同日、市川ノ驛ヲ發ス、終ニ小金驛ヨリ水戸街道ヘ分ル、傳習第二大隊ヲ中軍ト定メ、

第七聯隊ヲ後軍ト定ム、同日朝、大鳥氏率總軍、市川ノ驛ヲ發ス、中軍ハ山崎ノ驛ヘ泊ル、後軍ハ小金ノ驛ニ宿ス、十六日、草風隊、貫義隊、小山ノ驛ニ至ル、此時、宇都宮、壬生、結城、笠間、薩人數人此驛ヲ守ル、終ニ戰爭ニ及フ、宇都宮、笠間、其他之藩、我カ短兵ニ馳立ラレ、器械ヲ打捨、海道サシテ敗走ス、此處ニテ草風、貫義兩隊ニテ首數十級、大砲八門、彈藥數荷得ル、携テ終ニ大平山ニ寄ル、此日、笠間之隊長打首級、草風隊ニテ得之、翌日、首級ヲ大平山ニ掛ケ、神祖靈ヲ祭ル、味方死傷共七人、勝利得ル、同日、中軍、諸川ノ驛中喰ニテ出發、後軍ハ同所ヘ宿陣之處、中軍ノ先鋒、於中途小山宿ニテ敗走スル處之結城勢ニ逢ヒ戰爭ニ及フ、於之、米桂次郎、後軍之一小隊ヲ引率シ、戰爭ノ様子ヲ伺ハントスル處、並木ノ内ニテ敵兵ニ逢ヒ、少シク戰爭ニ及フ、敵兵退去、依之引揚、總軍、同驛ニ宿ス、撒兵隊第一小隊、諸川橋之樹下ニ陣シ、敵ノ侵襲ヲ防ク、其他所々ノ海道兵隊守之、此日戰爭、大砲壹門、彈藥ヲ得ル、味方戰死壹人、敵兵七人打捕、十七日、晴天無風、總軍諸川出發、間道ヲ廻リ小山ノ驛ニ出ル、此日之先鋒撒兵隊第六小隊井野右近、第一小隊田中雅樂助、第二小隊高種數馬、進テ小山ノ宿ニ入ル、寂トシテ無人跡、依之、夫々手配シ防禦ノ策ヲナス、此日、米田桂治郎手ノ者探索人、敵ノ伏ヲ告、依之、傳習第二大隊ヲ間道ヨリ結城道ニ出發ス、敵ノ後軍ヲ襲フ策ヲ爲ス、撒兵隊頭、並加藤平内ト共ニ驛ニ入り、日光道ヘ趣ク處、敵兵、大砲ヲ打放火シ烈戰ニ及、味方偽テ退去ス、敵兵勝ニ乘テ來ル、城道ヨリ已ニ敵軍之後ヲ掩ヒシ達喇叭ヲ吹キ進撃ス、於此偽テ退去スル味方ノ者引退シ、挾テ敵兵ヲ討撃ス、敵、器械大砲ヲ捨敗走ス、首得數級、七連隊、敵ヲ追ヒ撒兵隊ニ替リ、潜伏ノ敵兵ヲ打ツ、此日、七連隊ハ、應援ノ隊ニシテ、撒兵隊ニ代リ敵ヲ追ヒ、新田ノ方ヘ進、敵、新田ノ農家ヲ放火シ、味方追撃ノ道ヲ斷、壬生、結城、宇都宮ノ諸道ヘ退ク、此時之敵軍ハ、薩、長、彥根、宇都宮、笠間、壬生、結城ノ諸藩ナリ、得ル處ノ敵首軍門ニ晒シ、諸兵休憩、夕八ツ時、既ニ壬生道ヘ發セントスル處、敵、結城道ヨリ驛内ヲ望ミ大砲數發、人家ノ屋上ニ破裂ス、於此傳習隊ヲ先鋒トシテ敵ニ當ル、敵狼狽シ輻重ヲ捨走ル笠間ノ砲兵士ヲ生擒ス、大砲彈藥得ル拾車、首級、十八、我軍得ル器械、必用者撰ヒ、人家之井中ニ投シ、後用ノ害ヲ防ク、終小山ノ驛ヲ去飯塚ニ至ル、哨兵配當シテ此邸ニ宿、十八日朝方、ニ飯塚ヲ出發セントス、此時、壬生ノ城ヨリ壹人之使者有之、右ハ京兵城下ニ屯營スルニ付、家來始農商ニ至リテハ、奉命

中附ヘクトモ、京兵ニ於テハ、如何之事情有之哉難計、若城下ニテ事件等有之テハ、元ヨリ德川家ヘ奉對不濟儀故、願クハ他道ヨリ御出勢可被下旨ニ付、依之、間道ヨリ栃木ノ驛ニ至ラントス、十九日朝合、戰場出發、二連木之驛ニ至ル、此時、壬生之藩士友平新三郎、並某ハ城主ノ命ニテ、降伏之使者參リ味方ニ附屬セン事ヲ願フ、依テ友平氏ヲ留ム、廿日我軍、宇都宮ニ入ル。

○泣血錄舊桑名藩士中村武夫良猛所著ニ云、四月、江戸城已降、於是關東忠義之士、盡出江戸會市川、曰傳習第一大隊、會人秋月登之助將之、第二大隊大鳥圭介將之、曰七聯隊米田桂次將之、曰御領兵加藤平内將之、曰回天隊相馬左金吾將之、曰別傳習會人工藤衛守將之、曰貫義隊松平兵庫頭將之、曰帥風隊天野加賀守、村上求馬將之、曰純義隊會人渡邊綱之助將之、曰誠忠隊山中幸治將之、凡二千餘人、於是衆議推大鳥圭介爲總督、土方歳三爲參謀、各隊作大旗揭以東照大權現之號、發誓誓衆、欲行至日光謁神席以舉義兵、部署已畢、於是一軍進自街道、曰傳習第二七聯分隊、誠忠隊、純義隊、大鳥爲之總督、一軍進自小金、曰傳習第一別傳習七聯分隊、與我兵合千餘人、秋月爲之總督、土方爲之參謀、草風、貫義有故光進、時四月十三日也、當是時、西軍據宇都宮、所在出兵西倚江戸東臨會津、十六日、貫義、草風進至小山、西軍張兵、要之二軍擊而破之、敵走保室川、傳習繼進又破之、十七日、敵又出兵於小山、傳習奮鬪、遂盡破之、斬獲頗多。

○總督府日記ニ云、四月十七日、酉刻宇都宮ヨリ香川敬三ノ報知來ル、昨十六日午刻、小山宿ニ於テ德川家來二千人計ト官軍戰爭、殊ニ苦戰之趣、八ツ時宇都宮ヘ中來候間、香川敬三、御旗ヲ奉シテ出兵ニ相成候、祖式ハ臥病於結城城下甚難儀ナリ、イカリ宿ニ會兵屯集相應スルノ勢、旁以不容易ニ付、薩、長、大垣之兵ヲ繰出シ吳候様トノ趣ナリ、十七日、亥刻、小山驛ヨリ平川和太郎報知來ル、昨十六日九ツ時頃、小山驛ニ於テ草風隊ト唱フ賊徒ト一戰、勝敗不決、互ニ引分レ、一里半計相隔對陣、賊三百人計、官軍彥根一小隊半、壬生原註、鳥居丹波守ナリ、大砲二門、笠間原註、牧野越中守ナリ、鎗隊三十人計ト戰フ、身方六人即死、敵ノ死傷、數多ニ有之、會ノ字ノ袖印之者モ七八人斃居候、此夜、賊ハ生駒宿ニ陣ス、小山ヨリ三里計相隔候諸川ト云處ニ、賊千三百人計屯集、官軍ハ小山並上新田ノ原ニ野陣ス、依之、寸刻モ早ク援兵繰出シ吳レ候趣ナリ、

同十九日、辰刻、大垣探索方報知ス、昨十八日、古河ニテ祖式ニ逢フ、其祖式書曰、昨十七日朝、小山宿ニテ平川、南部兩人二小隊ヲ引キ、祖式、上田兩人モ二小隊ヲ率ヒ戰フ、戰半ニテ賊兵引散シ候ニ付、各夫々へ引ク、敵ハ三千人餘四方ヨリ起ル、官軍ハ二百人不足ニテ孤軍甚奔命ニ疲レ困リ入候、其日ノ戰、須阪、館林兩藩ニテ七十人、内半分ハ即死、平川之隊モ七十人、内半分程即死、香川ハ宇都宮ニ殘リ居候、今十八日朝、祖式又々殘兵ヲ率ヒ、賊之後ヲ襲候處、賊兵散々敗走、乍併小山之陣所ニ有之候荷物、大砲、小銃ハ賊ノ有トナル、何分困兵故ニヨウ々々古河迄引揚候間、精兵三四百人急々御繰出奉願候云云、右祖式ハ僅二十人計ヲ率ヒ、官軍應援ノ來ルヲ待チ、早々不來トキハ、板橋迄引揚候趣ナリ。

戊刻、彦根藩一人、香川之書ヲ携ヘ歸報ス、其書曰、昨十七日モ及戰爭候處、何分ニモ官軍小勢不能克、遺憾ナカラ一先宇都宮へ引取り候、此上ハ死守防戰之覺悟ニ候、早速御援兵無之テハ、宇都宮城モ保ツコト不能候、壬生モ賊兵、城下へ迫リ候趣、今十八日八ツ時ニ注進アリ、實ニ宇都宮近邊之藩々ハ役ニタ、ス、僅手勢ニテ防戰スル而已、且又玉藥モ盡キ、何之致方モ無之候、自然援兵モ時日ヲ延キ候事ナレハ、一同殘念之至ニ御座候云々、再曰、祖式ハ十七日戰爭後、結城ヲ引拂、江戸へ引ク、久保田ト申處ニ居候趣、上田楠次ハ行方不分、定テ戰死ト被察候、岡田人數之内一人手負、彦根藩七人戰死、深手十八人、隊長青木某ハ戰死之由、云々。

十七日、是ヨリ先、軍防局、軍行條規ヲ定メテ之ヲ頒ツ、是日、大總督府、之ヲ二督ニ傳フ。

口述、

別紙三通之通、從軍防局被達候間、諸藩出兵末々ニ至迄不漏様可被達、大總督官被命候間、堅可相守候事。

大總督府

謀

四月十七日

岩倉 大 夫 殿

同 八 千 丸 殿

追テ、外營通兵食之事、附屬之會計へ可被申渡候事。

○別紙三通

別紙貳通之通、今般御規則被爲立候ニ付、三道出兵之藩へ御通達可被成候、以上

四月

軍 防 局

○ 三道出兵之内、間々於驛々姓名ヲモ不申聞、無賃錢ニテ宿駕籠等申付、不法之振舞有之、宿々村々大ニ相苦ミ候段相聞得、萬民御安撫之 叡慮ニ背キ候次第、甚以如何之至ニ候、依之、今般別紙之通、御規則被相立候條、諸軍一同嚴重可相守旨、御沙汰被爲在度事。

四月 九 日

- 一行軍之節、駕籠一切可爲無用事、
- 一 病氣足痛等候テ、驛所へ滞在加療養、平愈次第其手々々へ可致參陣事、
- 一 軍醫診察之上、急ニ出張難調病症之者ハ、夫々へ可送返事、

右規則之通、永世可相守者也。

四月 八 日

軍 防 局

總督府叢紙

○東海道先鋒總督、書ヲ督府ニ致シテ、江戸城外郭諸門ノ譏察ヲ弛ムルヲ報ス。

一 簡拜啓、時下薄暮之節、愈御清健珍喜此事ニ存候、然ハ、處々固場所ニオイテ路人問糺之儀、外曲輪之向ニ四民往來之通路ニ候得ハ、餘リ嚴確ニ過候テハ、公使用便ニ相支ヘ候儀モ有之、苦情之趣モ相聞ヘ候ニ付、當手諸藩へハ、別紙之通相達申

復古外記

東山道戰記 第十 明治元年四月十七日

四八九

候間入貴覽候、其御許ニオイテモ可然思召候ハ、宣敷御取計可被下候、若又御賢慮モ被爲在候ハ、無御覆藏御出諭被下度候、以上。

四月十七日

東海道先鋒總督府 參謀

木梨 精一郎

海江田 武次

東海道總督府 參謀御中

○別紙

凡固所見張之儀ハ、素ヨリ防姦之爲ニ候條、城之内外ヲ論セス、精々嚴確ニ可有之ハ當然之事ニ候、乍然、當城外郭之儀ハ、平常土人之通衢ト仕來リ、朝夕之來往殊ニ不少、處々糾問ヲ歷テ、自然時移リ候テハ、苦情之程モ被察候間、内郭ハ彌以テ嚴密ニ糾察可有之、外郭之向ハ姑ク寛假之意ヲ用ヒ、格別可怪之風姿ニモ相見ヘ不申候ハ、四民ニ不拘一應糾問之上、目裁ヲ以、速ニ通行可差免候、是以佚忘輕忽ヲ示スニアラス、心得違有之間敷トノ御沙汰候事。

四月

參

謀

總督府叢紙
東海道先鋒記

○督府、松本藩兵ノ江戸藩邸ニ在ル者ヲ徵シ、之ヲ因幡藩兵ニ屬ス。

○戸田光則家記ニ云、四月八日、於江戸 御總督府ヨリ 御沙汰之趣ニテ、大監察西尾遠江介ヨリ爲御使、參謀匠瑤郷輔、留守居飯沼熹兵衛方ヘ罷越、激徒之者共所々ニ罷在動搖可致趣相聞候ニ付、有合之人數可差出、尤名前年齢共書出候様御達、同十七日夕、於江戸、御總督府ヨリ彌出兵可致旨御沙汰ニ付、翌十八日曉、隊長野々山忠之進、人數二十人召連、市ヶ谷尾州屋敷迄出兵、因州手ニ屬。

○督府、川越藩ノ餽餉傳遞措辨ヲ罷ム。

厩 橋 藩
忍 藩

松井周防守、兵食人馬繼立方御用御免相成候ニ付、明日ヨリ兩藩ニテ相勤候様 御沙汰候事。

東山道總督府

應 接 方

松平忠敬家記

辰 四月十七日

○小山驛ノ警報到ル、督府、乃チ内參謀河田景與ニ命シ、因幡、土佐、松本、吹上四藩、及ヒ大久保忠告ノ兵ヲ率テ、宇都宮ニ赴援セシム。

因幡藩兵ヘ達書

唯今宇都宮城ヨリ警報有之、昨日戰爭之模様大略相知レ申候、彼城何分危急之由ニ候間、成丈ケ速ニ御進軍相成候様致シ度候、右之趣、御沙汰ニ付相達申入候也。

總督府

參 謀

池田輝知家記

四月十七日西半刻

按スルニ、土佐藩兵モ亦、因幡藩兵ト同一ノ達書アリシナルヘシ、今、見ル所ナシ。

總督府日記ニ云、四月十六日夜、館林之兵人報知、小山驛ニテ賊徒ト一戰、官軍不利之趣也、同十七日、宇都宮方ヘ爲應援、因、土合併一大隊差出ス、土州四小隊内大砲二門、白砲二門、因州四小隊、大砲隊一分隊内ヘ、大久保駿河守一小隊、戸田丹波守

復古外記 東山道戰記 第十 明治元年五月十七日

四九一

二十人、有馬兵庫頭二十餘人付、河田左久馬總管タリ、紅ノ大隊旗ヲ携フ、長熊谷勘助、薩有馬藤太兩人斥候トシテ出張候事。

河田景與事蹟ニ云、四月、野州之賊猖獗、依之、早々出張可致御達有之、同月十八日、因州兵隊、並、大久保駿河守家來一小隊、有馬兵庫頭、戸田丹波守家來合テ一小隊ヲ以テ、野州表へ出張。

池田輝知家記ニ云、辰四月十七日、野州下總邊ノ賊徒、既ニ結城ヲ屠リ、勢ニ乘テ宇都宮ニ迫ル、城中兵士器械共乏敷、不得止自燒シテ、近境館林、或ハ古河ニ走候旨急報有之、右ニ付因、土兩藩へ出兵被仰付、同十八日曉天、内參謀河田左久馬、當藩佐分利鉄次郎砲隊一分隊、天野祐次一小隊、山國隊一小隊、池田相模守人數、並附屬ノ兵大久保駿守人數一小隊、戸田丹波守、有馬兵庫頭人數合一小隊、砲三門、及土州兵四小隊、砲二門、市ヶ谷尾州邸雷發、同廿日壬生城へ著陣。

○按スルニ、賊兵、宇都宮城ヲ陥ル、十九日ニアリ、家記以十七日ト爲スハ誤ナリ。

○山内豐範家記ニ云、四月十七日、賊徒、兩總、二野ノ間ニ散蔓シ、頗ル暴威ヲ震フ、出張ノ官軍、少勢ナルヲ以テ、急テ督府ニ告ク、依之、督府、附屬ノ各藩ニ命シ、速ニ援軍ヲ出令ム、我藩亦出兵ノ命ヲ受ケリ、十八日曉四時、我兵砲隊長北村長兵衛、步隊第一日比虎作、第二小島捨藏、第五宮崎合介、第六眞邊戒作、第十一平尾左金吾、半大隊長祖父江可成帥之、小監察大石彌太郎、秋澤清吉、及徒監安岡亮太郎、大石側左衛門等之ニ屬ス、而シテ因兵四小隊ト同ク尾邸ヲ發ス。

○戸田光則家記ニ云、四月十八日、隊長野々山忠之進人數召連、市ヶ谷尾州屋敷迄出兵、因州手ニ屬、直様野州表へ出張。

○吹上藩記ニ云、四月十七日、弊藩東京有合人數出兵被 仰付候旨、東山道御總督大監軍西尾遠江介殿ヨリ御達之趣、參謀河田左久馬殿ヨリ袂相達、同十八日、因州藩へ附屬、下野へ進軍。

○池田德定家記へ云、四月十七日、江戸出陣、同廿一日晝、壬生城ニ著陣。

○大久保忠告從軍事蹟ニ云、四月、野州へ脱走ノ賊徒、恣ニ猖獗ヲ行ヒ暴橫不少候ニ付、急ニ討伐ノ令ヲ下サレ、因テ家來共、鳥取藩ノ兵隊ニ屬シ、先鋒トナリ市ヶ谷陣營ヲ出發。

○市橋長義家記ニ云、四月十七日、急速日光、宇都宮邊へ後軍出張ニ付、兵糧賄方トシテ、大垣、西大路兩藩モ出張候様御達ニ付、則人數差添出張仕候。

○松平忠誠、軍糧ヲ督府ニ獻ス。

松平忠敬家記ニ云、御總督府金穀方田中善右衛門ヨリ理米壹万俵、御取賄差出候様御沙汰ニ付、四月十七日、右俵數、板橋驛へ差出、其後御用途多ヲ奉恐察獻米仕候。

○軍監香川廣安、黒羽藩ニ令シテ、兵ヲ宇都宮ニ出サシム。

江戸脱走之賊徒共、所々ニ屯集、不容易形勢ニ付、藩力相應之人數並施條砲壹挺、白砲壹挺、砲手共急速御差出可被成候也。但、危急之場合ニ候間、此書到着次第、即時宇都宮表へ御差出可被成、且於當地彈藥不足ニ候間、多分御用意可被成候事。

四月十七日夜

大關泰次郎黒羽藩記 御重職役中

鳥山藩記ニ云、慶應四戊辰年四月十六日、宇都宮へ重臣御呼出ニ付、參政大久保金吾罷出候處、賊徒相迫候ニ付、宇都宮へ至急出兵可致旨、參謀香川敬三百十被相達、同十八日朝十字、二小隊六人、鳥山發、夕五字過宇都宮へ着。

復古外記 東山道戰記 第十 終

元修史局掌記 豊原資清纂輯

復古外記 稿本

東山道戰記 第十一

自明治元年四月十八日
至同 二十二日

四月十八日、督府、永井尙服ノ謹慎ヲ釋ス。

永井肥前守

謹慎之儀令宥免候條、士民 王化ニ服シ候様、爲國家精々盡力可致候事。

戊辰 四月 總督府諸達留
永井尙服家記

○督府、菊章旗ヲ諸藩兵ニ賜フ。

○總督府日記ニ云、四月十八日、各藩へ一小隊ニ付一本宛、菊御印手旗被下置候事。

○總野ノ賊勢、鴟張スルヲ以テ、督府、參謀伊地知正治ニ命シ、薩摩、長門、大垣、忍四藩兵ヲ率
テ宇都宮ニ赴援セシム、因テ薩摩藩兵ノ水道橋、小石川二門警守ヲ罷メ、大垣藩兵ヲ以テ之
ニ代ヘ、大垣藩兵ノ田安、清水二門警守ヲ罷メ、之ヲ東海道官軍ニ交付セシム。

○總督府日記ニ云、四月十八日、早朝薩州一小隊、原註、八人長州二小隊、大砲二門、大垣二小隊、大砲二門、忍藩一小隊餘爲應
援、宇都宮へ向ケ繰出シ候事。

○伊地知正治日記ニ云、四月十八日、板橋在陣、總野之賊徒、追々多人数相成リ、江戸脱走人、會津人等是ヲ指揮シテ、先達テ

ヨリ出張居候官軍原註、彦根、蓋
館林、須坂人数ト戦ヒ、官軍敗走之由相聞得候付、昨十七日、土佐、因州兩藩人数、爲加勢出張候得共、
賊徒之勢彌強大之間へアルヲ以テ、長州一中隊、大垣一中隊、薩州一小隊被差出候段仰付候付、此方ヨリハ五番隊野津七左
衛門隊長ニテ出張、外ニ大砲二門、打手相付差出候事。

○慶應出軍戰狀ニ云、四月、彦根藩小山驛ニテ苦戰之由ニ付、五番、六番小隊繰出ニ相成候。

○戊巳征戰紀略ニ云、四月、徳川殘兵、會賊等、野州ヲ亂ル、壬生、宇都宮、結城邊騷亂、官軍屢賊ト戰フ、不利、十八日、二番
隊、薩州、大垣兵ト板橋ヲ發ス。

○東山道戰記ニ云、四月中旬、江戸脱走ノ賊徒五千人餘、總州船橋及市川邊へ屯集致シ、同十五、十六日頃ニハ、同國小山驛、
結城、或ハ下野宇都宮城へ迫リ、横行亂妨致セシ由、板橋本部へ報知有之、故ニ先達テ參謀祖式金八郎、彦根藩、飯田飯田蓋
須坂ノ
諷、藩、岩村田等ノ兵凡テ一大隊餘ヲ率ヒ、結城、小山邊へ發向有之、十七日、十八日ニハ同所ニテ戰争有之候處、初ノ程ハ官
軍勝利ニ候得共、賊徒追々多勢ニ相成リ、官軍終ニ敗色ニ及ヒ候間、援兵トシテ筈間、館林ノ二藩モ出兵致セシナレトモ、遂
ニ利無クシテ、下總古河へ引上ケ相成シ也、是ニ由テ、急使板橋御本陣へ馳着キ、頻ニ應援ヲ被乞候間、乃チ總督府ヨリ命
令有之、薩、長及吾藩ノ三藩、早々可打向様ト御達有之候間、即時ニ參謀伊地知正治ニ從ヒ、三藩ノ兵板橋驛ヲ立テ、總野ノ
方へ及發向候。

○田安、清水兩門之警固、東海道ヨリ交代ニ可相成趣ニ付、請取被參候ハ、早速引渡シ、其御手之人数ハ水道橋、小石川兩所
へ出張致シ、薩州人数ト交代可被成候、右 御沙汰ニ付、此段申入候也。

總督府

參

謀

四月十八日夜

大垣 人数 御中 大垣
藩記

復古外記 東山道戰記 第十一 明治元年四月十八日

○薩摩藩兵ノ水道橋、小石川二門、警守ヲ罷ムルノ達書ハ、之ヲ佚ス。

○賊兵、大平山下野郡賀郡ニ屯據スルヲ以テ、館林藩、使ヲ督府ニ遣シ、藩兵ヲ發シテ之ヲ討センコトヲ請フ、乃チ賜フニ菊章旗ヲ以テシ、薩摩、長門等諸藩兵ト協議シテ、之ヲ剿夷セシム、既ニシテ賊、大平山ヲ去リ、進ンテ宇都宮ニ向フ。

○總督府日記ニ云、四月十八日、同刻、館林ヨリ使者來リ、賊徒益熾ニ相成リ、大平山へ楯籠リ、犬伏宿近所へ金穀等強情ニ申掛ケ借リ入レ、追々大砲等共ニ携、登山イタシ候ニ付、館林一藩舉ハ大平山へ進軍イタシ攻落候、定論ニ付、官軍之御印頂戴イタシ度旨也、依之、菊花御印之小旗被下置、薩、長、土、因、忍等ノ兵ト申合セ進軍イタシ、輕忽之進退無之様申シ含メ歸シ候事。

○淺田惟季北戰日誌ニ云、我先鋒傳習第一大隊、桑名士官隊草風隊、總計七百人餘、四月十六日、小山驛ノ敵ニ捷チ、一時下野國大平嶽ニ據リ、十八日ノ夜、宇都宮ヲ距ル一里半、雀宮ト云ヘル驛ニ抵ル。

○賊兵大平山へ殘置候器械、早々其御領地迄御取寄被成置候様存候、右爲申入如此候、以上。

四月 廿一日
館林御藩 御重役中秋元興 朝家記
東山道總督府
內參謀 大軍監 小軍監

○久松勝行、大藏少輔、多古藩主使ヲ督府ニ遣シテ、勤王ノ意ヲ陳シ、公事ニ服センコトヲ請フ。

大藏少輔領分、下總國香取郡多古陣屋附本領ニ御座候間、東海道鎮撫 御總督府様へ別紙寫之通、願書、去八日御參謀方御附屬衆稻津甚四郎殿ヲ以進達仕候、就テハ下野國都賀郡、河内郡之内三千石之采地御座候間、同所 御通行之砌ハ、何卒尙

相應之御用被仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、此段以使者奉申上候、以上。

慶應四戊辰年四月十八日

○別紙

先般 王政御復古被 仰出候ニ付テハ、累代奉蒙 天恩候ヨリ、勤 王之外他念無御座候、愈 朝命遵奉仕度赤心ニ御座候、久々病氣罷在候ニ付、先名代重臣之者上京爲仕、身分相應之御用被 仰付被下置候様仕度、願書、太政官辦事御役所へ既ニ奉願置候儀ニテ、奉對御先鋒、御總督へ右同様毛頭ニ心無御座候間、何卒身分相應之御用被 仰付被下置候ハ、冥加至極難有仕合奉存候、恐惶謹言。

慶應四戊辰年四月八日
久松 大藏少輔 印
實名判
久松勝慈家記

本條、指令見ル所ナシ。

○軍監香川廣安、古河藩ニ令シテ兵ヲ宇都宮ニ出サシム。

尙々、此狀參着次第、早々出兵之事、今日、草風隊ト唱候賊徒共、於小山宿及戰爭、賊等敗走イタシ候得共、猶餘徒如何ニ付、急々小山宿迄出兵可被成候也。

四月 十六日
東山道 總督府
土井大炊頭殿 重職衆中
軍 監

過日、小山驛ヨリ御達申候出兵之儀、急速宇都宮へ御差出相成候様可被成候也。

辰四月十八日

東山道 總督府
軍 監

土井大炊頭殿 重職衆中以上古河藩記

○烏山藩兵六十人、宇都宮ニ至ル。烏山藩記

十九日、督府、重ネテ薩摩、大垣ニ藩兵ヲ宇都宮ニ發遣シテ、前軍ニ應援セシム。

○總督府日記ニ云、四月十九日、宇都宮へ薩州一小隊、原註、八人、大砲隊、大垣二小隊、又々繰出シ候事。

○伊地知正治日記ニ云、四月十九日、彌總野ニテ官軍ノ敗報頻成ルヲ以テ、六番隊并大砲半座、大垣一中隊、又々爲應援出陣被仰付、今日千住迄發軍候。

○東山道戰記ニ云、四月十八日夕、總督府ヨリ吾藩へ御達有之、其旨意ハ、今ヨリ薩兵ト俱ニ總野ノ間へ出兵致シ、先ニ出立ノ三藩、原註、薩、ト合併戮力シテ、其邊跋扈ノ賊徒ヲ可討取様被命候也。是ニ於テ薩一小隊、原註、隊長、野津七次、大礮、三門、大山彌助、吾藩二小隊、原註、隊長、長屋益、之進、小出五平次、大砲一門、原註、長、河田忠兵衛。凡テ二百人許、十九日朝、板橋驛ヲ立テ、幸手、關宿ノ方へ及發向候。

○板倉勝殷、彈藥ヲ督府ニ獻ス。

○總督府日記ニ云、四月十九日、彈藥四千發、雷管四千個、板倉主計頭ヨリ差出候事。

○大鳥純彰ノ徒、宇都宮ニ逼ル、軍監香川廣安、平川某和太郎、彦根、宇都宮、烏山、岩村田四藩、及ヒ岡田善長ノ兵ヲ雀宮驛ニ出シテ之ヲ邀フ、克タス、賊直ニ進テ宇都宮城ヲ攻ム、官軍防戰利

アラス、廣安等乃チ軍ヲ收メテ古河ニ退守シ、戸田忠恕館林ニ走ル、板倉勝養父子再ヒ賊ニ陷ル。

○香川敬三事蹟ニ云、四月十九日、賊兵宇都宮城ニ逼ル、官軍奮戰ス、賊火ヲ城下ニ放チ、四面圍ミ攻ム、是ノ日、戰晨ヨリ哺ニ至ル、頗ル苦戰、城將ニ陷ラントス、敬三等衆ニ謂テ曰、宜シク守ルニ死ヲ以テスヘシ、衆曰、援軍不日ニ至ルヘシ、先ツ城ヲ去リ、以テ再舉ヲ謀ルニシカスト、議竟ニ一決シ、圍ミヲ突キ、城ヲ出ツ、是ノ夜、城遂ニ燒ヒス、賊又コレニ據ル。

○井伊直憲家記ニ云、四月十七日、小山戰爭後、弊藩二小隊、宇都宮へ引揚籠城罷在候處、十九日朝、結城邊屯集之賊、眞箇ニ集リ、宇都宮へ襲來之勢ニ付、爲追討城兵及ヒ弊藩二小隊出張候處、賊兵左右之間道ヨリ、直ニ城下ニ迫リ候様子ニ付、城下ヨリ一里半許先ニテ、其來ルヲ待受、未刻ヨリ戰爭ニ及ヒ、必死ノ力ヲ盡シ候得共、何分味方二十倍ノ賊勢ニ付、其所ヲ保チ得ス、城中へ引揚候處、賊兵所々ニ放火、四方ヨリ攻入候間、防禦ノ術ヲ盡シ、彈藥ノ限り放擊致候得共、賊勢倍相加リ、栃木之賊、鹿沼宿ヨリ横合ニ進ミ、會賊三王峠ヨリ繰出シ、大澤ヨリ押來候、城中募兵、持久ノ策ナシ、不得止夜八ツ時、城之南門ヨリ引取候折柄、賊兵追討候ニ付、且戰且退、終ニ古河へ引揚申候、右之節、弊藩死一人、渡邊九郎左衛門、傷六人。渡邊九郎左衛門、傷六人。郎左衛門、傷六人。郎左衛門、傷六人。

○戸田忠友家譜ニ云、舊幕府ノ兵、草風、彰義、七聯等ノ諸隊、四月十九日朝、鬼怒川ヲ渡リ、宇都宮ニ迫ル、官軍我兵ト六百餘人、城ヲ守リ、終日連戰ス、賊火ヲ三面ニ放チ進ム、兇焰甚々熾ニシテ、城中之士卒皆疲レ、日已ニ暮レ、散逸シテ歸ラサル者多ク、城兵ヲ算スルニ僅カニ二百餘人ノミ、然リ而シテ、榎木之賊、鹿沼ヨリ進ミ、會津之兵、日光口ヨリ迫ル、其兵無慮三千人、賊勢彌ヨ張ル、由テ城中持久ノ策ナシ、軍監將士ト相議シテ曰、城中兵寡クシテ大敵頻リニ迫リ、加之、小山以後ノ數度ノ戰ニ、日夜休息スルコトヲ得ス、兵疲レ、力殫キ、彈藥モ亦竭ク、縱ヒ能ク守禦ストモ、唯一死而已矣アリ、然レトモ總督ノ援兵、既ニ江戸ヲ發スルノ報アレハ、三日ヲ出スシテ必ス來ラン、今我兵敗屢ノ餘リ、徒ラニ城ヲ授テ斃レハ、恐クハ官

軍ノ氣ヲ挫ク而已ナラス、却テ賊勢ヲ資クルニ至ラン、如カス唯我師ヲ全フシテ南ニ走り、總督ノ援兵ヲ迎ヘテ力ヲ戮セ、今日ノ恥辱ヲ一洗センニハト、衆議一決シテ、城中ノ兵列ヲ整ヘ、火ヲ我館ニ放チテ自燒シ、上下齊ク城ヲ出テ遁レ、上州館林ヲ指シテ退ク、死十人、石原五郎左衛門、天野六郎、高宮泰三郎、中川祥吉、平山惠介、傷十二人、佐藤銀之助、戸田銳次郎、彦阪新太、高橋唐四郎、下野國河内郡江曾島村百姓定治、翌廿日、賊兵四集、城市村落向フ所剽掠ヲ恣ニス、農商男女皆山林ニ奔リ竄ル、賊勢ニ乘シテ、屋壁府庫ヲ毀チ、金穀器材ヲ掠奪シ、或ハ火ヲ放チテ之ヲ燒ク、其慘毒實ニ極マレリ。

○烏山藩記ニ云、二小隊、四月十八日夕五字過、宇都宮へ著之處、直様出張可致旨、宇都宮藩執政戸田三左衛門申聞、則夜ニ入、城下ヨリ一里有之平松村へ出張、同所宿陣罷在候御軍監平川和太郎へ、隊長罷出相届面會、軍議手筈等打合せ有之、同十九日拂曉、御軍監ヨリ兵隊可繰出旨令有之、則二小隊桑島原へ繰出相屯ス、彦根藩、宇都宮藩、岩村田藩之兵モ同ク屯ス、十字過三箇所ニ伏兵之令有之、松林へ埋伏、十一字頃引揚之令有之候ニ付、引揚候處、賊追々襲來候様子ニ付、築瀨ト申所へ兵隊配布待受候處、宇都宮藩士大砲二門率來相備、無程賊多勢進來候ニ付、大小砲打懸戰爭仕候、此邊左右一圓ニ麥畑ニテ、賊麥畑之中ヲ潜リ、追々進來候ニ付、諸手一同城内へ引揚候處、下河原門邊へ賊烈敷附ケ込、大小砲頻ニ打込候ニ付、諸勢俱ニ於此所終日防戰、夕五字過、官軍一同退城、同夜小山へ引揚、於同驛隊長儀ハ兵隊引集、再度出兵之御達ニテ、御暇被下候ニ付引取、壬生へ立寄、道路爲賊兵壅塞仕候ニ付、經間道烏山へ歸藩仕候。

○堀直明家記ニ云、四月十九日、宇都宮ニテ烈戰。

○岡田善長從軍事蹟ニ云、四月十九日、於宇都宮城外ニ戰爭之節、彦藩合兵及苦戰候處、味方十倍ノ賊勢ニ付、城中へ引揚ケ候處、賊處々ニ放火攻入候間、防禦之術ヲ盡シ候得共、賊倍增加リ候ニ付、不得止夜八ツ時頃、城門ヲ開キ突出、且戰且退、終ニ古河へ引揚、手負一人。小川、大平、

○秋元興朝家記ニ云、四月廿日、宇都宮城へ昨十九日午前十時頃ヨリ賊徒多人數攻寄及砲戰、殆苦戰之由ニテ、彈藥盡キ、午後四字頃終落城ニ及ヒ、城主戸田越前守ヲ初兵士、午後六時頃館林へ落來ル。

○淺田雅季北戰日誌ニ云、我先鋒傳習第一大隊、桑名士官隊、草風隊總計七百人餘、下總關宿ヨリ古河ノ間道ヲ經テ、四月十八日ノ夜、宇都ノ宮ヲ距ル一里半、雀ノ宮ト云ヘル驛ニ抵ル、此時小山諸川ノ敗兵、擧テ宇都宮城ニ會シテ、又我前軍ヲ遮ル、先ツ近國諸侯ノ兵四五百人ヲシテ、辰ノ刻、雀ノ宮ニ進襲ス、我カ前軍、間諜ヲシテ之レヲ知り、雀ノ宮ヲ離ル、十丁ニシテ、兩軍途ニ逢フ、忽チ戰爭トナル、須臾ニシテ桑名隊、草風隊叢林ヲ潛リ、敵兵ノ橫陣ニ突入シ、忽チ亂戰トナル、敵兵狼狽、終ニ大敗シ、巳ノ時過宇都宮城ニ逃ケ籠、我前軍追擊シテ街ニ迫ル、百歩ノ地ニ薄レリ、彼等街家ニ據テ頻リニ防戰ス、吾兵烈シク連發シ、忽チ街内ニ攻入タリ、敵兵抗スル事能ハス、終ニ放火シテ城中ニ逃入ル、此日乾ノ風殊ニ烈シク、四面直チニ猛火トナリ、城中ニ移ル、我軍盡ク閑ヲ發シ、三面ヨリ烈シク霰彈ヲ放チ、一瞬間ニ外郭ヲ破テ亂入ス、敵兵愈周章シテ、兵器ヲ捨逆レ去ル、此戰爭、辰ノ時雀ノ宮ニ起リ、即時ニ一里半ノ路程ヲ追擊シ、巳半ニ至リ其城郭ヲ拔ク、迅速ナル事知ル可キ也、是ヨリ先、舊幕閣老板倉伊賀守俘虜ト爲リ、城中ニ幽居ス、此際ニ乘シ遁テ日光山ニ至ルト云、土人ノ説ニ曰ク、方今宇都宮侯政律援レ、苛政甚ク、酷吏賄賂ヲ貪リ、過分ノ課金ヲ命ス、去ル二月中澆、又一石一兩ノ大課ヲ命シタリ、農民之カ爲ニ沸騰、邑里黨ヲ爲シテ城門ニ愁訴ス、奸吏等砲ヲ發テ、其二十七人ヲ殺戮シ、廿一人ヲ捕ヘテ獄ニ下スト云、我軍城郭ヲ屠ルニ至テ、縛ヲ解キ免ス、彼等大ニ喜ヒ、城中ニ止ツテ驅役サレン事ヲ乞フ、大鳥圭介其直ナルヲ怒テ、金穀及ヒ妻子ヘ扶助ヲ與フ、彼等愈喜ヒ勉強ス、城中蓄穀貳千俵、盡ク分ツテ貧民ニ與フ、

又云、我中軍、四月十八日、午前、野州栃木ノ街ニ抵ル、十九日早起整列、拂曉軍ヲ進テ午時鹿沼ノ驛ニ抵ル、此時東方三里許ヲ距テ火起リ焰煙天ヲ焦ス、土人曰、暮兵宇都宮城ヲ攻ルナリト云、是レ我前軍ナル事疑ヒナシ、直チニ間諜ヲ出シテ戰機ヲ窺ハ令ム、須臾ニシテ報告有リ、我前軍既ニ宇都宮城ヲ攻下シ、敵兵盡ク壬生城へ脱ト云リ、此日ハ鹿沼ニ宿陣、二十日拂曉進軍、宇都宮城ニ抵ル。

○慶應兵謀秘錄ニ云、四月十八日、第一傳習隊並大砲隊、回天隊、下館沼邑へ宿ス、十九日早天、宇都宮城へ押寄ス、敵攻撃ス、不得止戰爭ニ及、大砲、小銃、彈玉無寸暇モ烈戰ニ時、及此時城下市中終ニ砲火ニカ、リ、男女東西ニ奔走シ、夕七ツ

時、本丸へ燒彈打込、燒失落城ニ及此時傳習第一大隊秋月登之助ハ大手ニ向ヒ、大砲一門、小倉源一郎、川崎某ハ先鋒大手ニ向ヒ、同護衛一小隊和田氏、松下氏引卒シ、先鋒大砲ニ附屬ス、大砲隊飯岡嶺次郎ハ川邨氏、濱村某護衛、一小隊松葉、上條兩氏引卒、下河原門ヨリ討入ル、正ニ敵ノ巢元ヲ掃攘シ、下館沼邑へ歸陣スル、此日ノ戰爭ハ味方戰死、手負貳十八人、回天隊ノ長相馬左金吾、大砲隊頭取小倉源一郎ハ討死、敵屍炎火ノ中ニ有リ、不知其數、正八ツ時、總軍入城シ、哨兵守護等手配成リ、城中ニテ得ル處ノ金三万兩、白米三千俵餘、其内二百俵、城下燒失ノ市家ニ施ス、此日撤兵隊ハ城中門々守衛、七連隊、精共隊ハ安塚村へ宿陣ス。

○泣血錄ニ云、四月十七日、間道之兵已進逼宇都宮、十八(日脫)夜秋月登之助與我倉田等渡帛川、次蓼沼、十九日、諸軍結束攻宇都宮、我兵爲先鋒、秋月爲中軍、回天諸隊爲後衛、敵候騎在城曠野、望我至先走、諸軍益進、敵張兵於郭外郊野、以要之、我兵乃大張左右翼、進而環之、砲隊擁神旗、自中央進、敵辟易退走、我兵追躡放火城下、我神山金次追斬一人、敵益潰走保城、乃轉逼城東門、敵必死固守、相距十步、彈銃觸擊、敵舞槍來逼、佐藤武介振應叱之、敵兵逸巡、石井勇次不暇拔刀、揮銃燈之、三木十左衛門進斬一人、小林權六亦斬一人、中丸而死、敵據險苦戰、死傷相當、我知其不可遽拔、乃左轉出敵背、放火郭中、城遂陷、廿日、街道之兵至自小山、大鳥先諸軍鞭馬入城、於是大會諸軍、於牙城置酒舉凱、此役、我兵銳武冠諸軍、其拔城爲先登第一、而號令明肅、於是督市中禁非常、我驍名稍奮。

○總督府日記ニ云、四月二十日、深更、岡田人數、隊長柴山某、宇都宮ヨリ歸府、報知之次第ハ、昨十九日夕方、宇都宮城モ防戰之手段已ニ盡キ、香川、御旗ヲ懷中シ、平川其外戸田越前守ト共ニ落行候、何分ニモ援兵モ延引不來、彈藥モ竭キ、乍殘念右之次第ニ相成候、

同二十一日、岡田之敗卒二人歸報ス、香川、平川等ハ古河迄、敗卒ヲ引テ歸リ居候由也。

○内參謀祖式某金八、古河藩ニ命シテ、軍費金及ヒ銃器ヲ供給セシム。

○古河藩記ニ云、金五百兩、小銃貳拾七挺、ケールケール胸亂貳拾、万力貳拾、三ツ股貳拾、管三千五百、玉藥三千發、乘馬三匹、

右ハ辰四月十九日、東山道總督府參謀祖式金八郎金八、在所古河町宿陣之節、御用立可仕旨、御掛合ニ付御引渡申候。

二十日、督府、大垣藩兵ノ小石川、水道橋二門警守ヲ罷メ、之ヲ板橋驛ニ召還シ、郡上藩兵ヲシテ二門、及ヒ牛込門ヲ守ラシム、又彦根藩兵ヲ宇都宮ニ發遣ス。

小石川、水道橋兩所之警固、郡上藩ト交代被 仰付候間、右藩ヨリ請取ニ參候ハ、早速引渡、其御人數之義ハ、板橋宿へ操揚可申候事。

四月廿日

御礎陣

參

謀

大垣 御人數 中大垣藩記

○小石川、水道橋兩所見附警衛、是迄大垣藩へ被 仰付置候處、今日其藩へ被 仰付候間、早速人數差出、警固可致候事。但、一ヶ所へ一小隊宛詰居可申候、尤蕨宿之儀ハ不殘人數引揚、右警固人數殘ハ、板橋宿へ滯陣可致候也。

四月廿日

東山道總督府

參

謀

青山峰之助青山幸宜家記 人數御中

○幸宜家記ニ云、四月廿日、板橋驛岩倉丞御陣營ヨリ、蕨驛出兵、隊長之者被召呼、別紙御達書前條指ス、之通被仰渡候ニ付、板橋宿へ人數殘シ置、同日同驛出立、同夜、東山道總督府ヨリ左之通御達、

其藩へ牛込警衛被 仰付候ニ付、早々人數相詰候様御達ニ付、直ニ板橋驛引拂、人數致轉陣候事。

○總督府日記ニ云、四月二十日、彦根一小隊、宇都宮へ繰出候事。

○參謀伊地知正治、薩摩、長門、大垣三藩兵ヲ率キテ、關宿久世廣文治所ニ至リ、傍近ノ賊ヲ討シ、大ニ之ヲ岩井驛下ニ破ル。

○伊地知正治日記ニ云、四月廿日、總州岩井驛ニテ一戰、官軍大勝利、打取百餘人、大砲其外分捕多シ、生捕四人、初メ官軍之議定ハ、下總國關宿ハ刀根川ノ流、四方ノ運送無上之要地ナレハ、先ツ彼地ニ據テ、四方ノ形勢ヲ伺ヒ進撃スヘシト、十九日夜着ト均ク、川涯ニ番兵ヲ出シ、船行之人ヲ改メ、遠近ニ斥候ヲ出シテ、賊之形勢ヲ伺シム、賊亦視ル處モ有カ、兼テ關宿ニハ賊徒ニ一味ノモノ多キヲ以テ、夫ヨリ三里原註、但五十一里ト云ナル岩井驛ニ屯集、或ハ此方へ襲來之由ニ付、官軍早天ヨリ進撃、四ツ時分ヨリ軍始リ、直ニ賊徒追落シ、八ツ時半時分、全ク味方ノ勝利ニ相成、其夜ハ餘黨ヲ探索シテ一宿、賊散々成テ四方ニ逃去シト云、賊徒千六百位有之候由、僅ニ官軍三百位故、先十分ノ大勝利ト申事、廿一日、五番隊並長州、大垣人數共、境ノ驛原註、關宿ノ川迎ヒ、迄凱陣、途程四里半位歟、驛中悉逃去リ、居人絶テナシ、尙關宿役人ニ諸人取締等申渡シ、其夜一宿。

○慶應出軍戰狀ニ云、四月十九日朝五ツ半、越谷進軍、九ツ時分關宿へ着、則同所藩杉山對軒外壹人へ曳合、賊情等探索イタシ候處、下總國岩井驛へ一千六百計屯集、追々繰出シ候勢之由申出候付、刀根川筋渡シ舟、悉曳揚、夜五ツ時分、一番分隊ヨリ番兵差出置、翌廿日進撃之策ヲ定、幸手宿へ致進軍居候、大垣、長州之官軍ト約シ、朝六ツ時分關宿ヲ發シ、境驛ニテ會軍、大垣一中隊ヲ以斥候隊トシ、尤驛中之者兩人爲案内召列、五番隊、長州一中隊、二番砲隊二門、合テ三百人計ニテ、大概八字比、岩井驛迄相進候處、賊兵ヨリノ斥候モ直様引返シ、街道筋ヨリ田地ヲ中ニシテ、南北へ散開シ待受居候付、大砲隊並大垣之兵ヲ正面ニ向ケ、五番隊並長州之兵ヲ左右へ相開致進撃候處、彈丸如雨打掛、賊兵モ暫時ハ嚴敷相支候得共、左右之橫撃ニ辟易シ、終ニ及敗走、四方へ致散亂候付、兵ヲ集、再進撃之評議ニ及候得共、賊遠方迄引揚候付、岩井驛へ致一泊候、此

日賊首百三十餘級ヲ得タリ、戰兵河野宗八及ヒ夫卒一人死、戰兵野崎喜左衛門、瀨戶山吉兵衛、鶴木五左衛門、傷翌廿一日、致退散候賊徒及探索候得共、近村へハ不致屯集由ニテ、五ツ時半時分岩井出立、境宿迄引揚候、然處、關宿藩之内、賊徒へ致内通候者有之段、同藩家老杉山對軒申出、尤三人召捕差出候付、糺明之上同藩へ曳渡置候事。

○戊巳征戰紀略ニ云、四月十八日、二番隊、薩州、大垣兵ト板橋ヲ發シ、二十日、岩井邸屯聚ノ賊、千餘ヲ撃ツ、賊一里許進出邀戰フ、攻撃一時許、賊敗走、僵尸六十餘、我兵田中甚吉死、嚮導百邸發藏傷ク。

○大垣藩記ニ云、采女正人數、宇都宮邊繰出候様御達ニ付、四月十八日、鳩ヶ谷宿泊、翌十九日幸手宿泊ニテ、長州人數同道罷越候處、既ニ薩州人數ハ關宿へ繰込候付、打合候處、同宿ヨリ三里計東、岩井村邊ニ賊徒千五百人程泊リ居候由、依之、同廿日朝三字頃、幸手宿出立、三藩合兵、同時ニ押寄、第八字ヨリ十字迄戰爭ニ及ヒ候處、敵散亂致シ、何方へ歟引退申候、敵方討死等多分有之候、尤人數之内、手負一人有之、分取品モ有之候。

○東山道戰記ニ云、四月十八日、薩、長及吾藩三藩ノ兵、板橋驛ヲ立テ總野ノ方へ及發向候、然ルニ賊兵ハ殊ノ外ノ大勢ニテ、諸所ニ分ツテ屯集シ、各攻守ノ術ヲ盡シ候間、容易ニハ難打取候得共、差當リ近キ邊ノ賊ハ、岩井驛ニ二千モ有之由ニ付、先ツ此賊へ可衝入ト、十八日夜鳩ヶ谷ニ泊シ、十九日夜ハ幸手、關宿ノ兩驛ニ泊シ、翌廿日拂曉、利根川ヲ渡リ、巳ノ時岩井驛へ相達シ候、此時賊ノ陣ニモ兼テ用意セシ事ニヤ、此處へ近寄ト均シク、彼レヨリ發砲ニ及ヒ候間、官兵各東西へ撒シ、烈シク發砲打立候處、賊ハ隨分大勢ニシテ、田畑樹木ノ間ニ伏シ、暫ク砲戰ニテ防キシナレ共、遂ニ午ノ時ニハ、賊悉ク敗走シテ、何處へ歟落行候、此日賊兵凡テ千五百餘人モ有之由、其中斃レ在候ハ百三十人モ有之候、皆會兵並步兵等也、此日薩一小隊隊長野津七左衛門、長二小隊長長崎賴三、梨羽才吉、大砲二門、吾藩二小隊、軍帥戸田五郎左衛門、田付兵助、佐竹五郎、銃隊長中島武左衛門、鳥居勘右衛門、大砲一門、長林十太夫、凡テ二百八十人餘也、薩死二人、原註、一ニ九人ト云フ、長死二人有之候ト云。大垣藩銃隊松山幸五郎傷

○東山新聞節略ニ云、總州岩井合戰、官軍二百八十人、薩一小隊、大砲二門、死二人、長二小隊、大砲二門、死一人、垣二小隊、

大砲一門、傷一人、賊軍千三百人餘、江戸脱走死百三十人、會脱走傷數不知。

○久世廣業家記ニ云、四月十九日、官軍薩州兵隊貳百人程關宿城下境町へ到着、其夜止宿、同夜賊徒大凡千五百人程、城下ヨリ三里先、領分岩井驛へ止宿ニテ、明日ハ城下へ繼立之旨注進來候ニ付、其段家老杉山對軒儀、境町旅宿罷越、伊地知正治殿へ面會申上候、就テハ直ニ明早曉進軍被致候由、當藩番兵ハ、城下廻り所々へ出兵申付置候事、同月廿日早曉、薩兵境町ヨリ進軍、岩井驛於テ戰爭。

○慶應兵謀秘録節略ニ云、回天隊ニ黨ニ分レテ、其一黨ナル者、相馬左金吾ヲ隊長トシテ人名四拾員、市川驛ヨリ水戸海道へ入ル、終ニ秋月登之助隊ニ合ス、又一黨ナル者ハ、藤沼幸之丞ヲ隊長トシテ、戰士百餘人、純義隊、誠忠隊、此兩隊ト共ニ同驛ノ寺院ニ滯陣ス、其後岩井ノ驛ニテ、敵ノ策ニ陥リ戰爭ニ及ヒ、隊長藤沼氏終ニ死ス、其他敵味方戰死不知數。

○泣血錄節略ニ云、四月廿日、山中幸治與渡邊綱之助、次關宿、西軍進圍之、幸治遂降西軍、西軍斬而梟之、渡邊走至宇都宮。

○内參謀河田景與等、進テ小山驛ニ至ル、宇都宮城已ニ陥ルト聞キ、轉シテ壬生城ニ入ル、是日、景與、吹上藩ニ令シ、藩兵ヲ壬生ニ發シテ前隊ニ合セシム。

○山内豐範家記ニ云、四月十九日、我兵越ケ谷ヲ發ス、時ニ宇都宮急ヲ告ル者、道路相繼ク、即チ道ヲ倍シテ疾行、古河驛ニ泊ス、彦藩人西村捨藏、我本營ニ來リ、倍程宇都宮ヲ救ハント乞フ、此ノ夜宇都宮ノ方ニ當リ、火勢甚タ盛ナリ、同廿日、古河ヲ發ス、行里許、岩村田藩ノ敗兵ニ遇フ、云、宇城既ニ陥レリ、小山驛ニ到レハ、香川敬三以下敗兵ヲ帥ヒ歸ルニ會フ、云、官軍力戰スト雖トモ、兵少ク、彈藥乏シク、且笠間、宇都宮等ノ兵、弓槍及ヒ火繩銃多ク、所詮支持シ難ク、故ニ自燒シテ退ク、賊今正ニ壬生城ニ薄レリト、即チ轉シテ壬生城ニ向フ、時ニ賊ノ說客已ニ城中ニ來リ、去就ヲ問ヒ、說ニ利害ヲ以テス、未タ答フルニ不及シテ、我兵ノ迫ルヲ聞キ、遁レ去ル、我兵乃チ城ニ入ル、賊近キニアルヲ以テ、哨兵ヲ所々ニ出ス、然レトモ藩人安セス、屢々賊ノ襲來ヲ報ス、兵卒兼行ノ餘、一睡ヲ不得、故ニ甚タ疲ル、而賊不來。

○鳥居忠文家記ニ云、四月二十日、賊徒襲來難計、壬生城防禦、各持口ヲ定、城下上河岸口、臺宿口等砲臺、及口々見張ノ人員ヲ定守衛ス、本日午後、官軍壬生城ニ著、重職以下諸役出迎テ、二ノ丸中丹波守居宅及諸士ノ邸ヲ渡、宿陣トス、周旋方、斥候探索方等ヲ附屬ス。

○吹上藩記ニ云、四月廿日、間々田驛御本陣へ出兵、隊長之者御呼出ニテ、河田左久馬殿ヨリ、私領分野州吹上陣屋表人數、壬生城へ繰込、合兵可仕旨ニ付、同廿一日、壬生表へ著、在所表人數合兵、都合二小隊、大砲貳門、同日夕因州藩へ附屬。

○内參謀祖式某^{金八}、古河藩ニ命シテ、官軍ノ糧餉ヲ措辨セシム。

○土井利與家記ニ云、四月廿日、此度御進發之官軍方御賄被 仰付候段、内參謀方ヨリ御達有之候事。

○黒羽藩兵、進テ白澤驛野^下ニ至ル、宇都宮城已ニ陥ルト聞キ、封疆ニ退守ス。

○黒羽藩記ニ云、四月十九日、宇都宮城危急ノ報アリ、應援ノ爲メニ本藩重臣渡邊記右衛門、一小隊、砲二門ヲ率テ出ツ、翌廿日、白澤驛ニ到ル、宇都宮既ニ陥落、官軍ノ所在ヲ知ラス、姑ク本藩ニ還ル。

二十一日、大總督、牙ヲ江戸城ニ移シ、諸道總督ヲ會シテ軍事ヲ議ス、二督之ニ蒞ム。

明廿一日巳刻、轉陣候間、爲御心得申入候、尤同刻、城内集會可有之候事。

四月二十日

熾

仁

岩倉 大夫 殿
同 八千九 殿

御道筋、

土器町、西之窪、相良小路、虎之門、櫻田。^{總督府 叢紙}

○總督府日記ニ云、四月二十日、酉刻、大總督宮ヨリ御使來ル、明二十一日御轉陣ニ付、城中一同集會之趣キ、御直書ニテ申

參候事、

同二十一日、大總督宮御入城ニ付、會議ニモ候間、總督様御成之事。原註、大總督宮ハ西丸ニ御滞陣ナリ、

○ 明廿一日辰刻、總督様、大總督宮様へ御成ニ付、其御藩へ御警衛被 仰付候、尤過日之通候事。

御礎陣

執事

四月廿日

大垣 御人數 中大垣藩記

○ 督府、高島藩兵ノ官軍嚮導ヲ罷ム。

諏訪因幡守 兵隊へ

是迄、甲州路討手官軍嚮導トシテ出張之段、大義ニ被 思召候、最早御用相濟候ニ付、御暇被下候間、此旨可相心得候事。

東山道先鋒

大監軍

戊辰三月

高島藩記

○ 内參謀祖式某、金ハ古河藩ニ命シテ中田、栗橋二關門、及ヒ房川渡口ヲ警守シ、船舶ノ出入ヲ譏察セシム、軍監香川廣安モ亦本藩ニ命シテ、銃器ヲ供給セシム。

○ 土井利與家記ニ云、四月廿日、古河表ニテ御達、

川筋通船方之儀、嚴重相心得取計候様御達有之候事、

同月廿一日、御總督府御參謀衆ヨリ御達、

房川渡中田御關所、御警衛被 仰付候事、

同廿三日、領分惡戸新田河岸手薄ニ付、家來差出、見張番所取建候様、房川渡船役、官軍タリ共相糺相通、其外ハ勿論、外川

川モ心付候様、

右之通、官軍方ヨリ御達ニ付、相應之人數差出、嚴重手當申付置候。

○ 古河藩記ニ云、栗橋御番所御警衛被仰付候間、早々出張爲致、彦根藩人數ト致交代候様、勤向之儀ハ同藩へ承合相勤候様可致旨、東山道御總督府内參謀方ヨリ、四月廿一日御達御座候付、人數^{百七}差出、

又云、人數八拾三人、右ハ城下鍛冶町口見張番所、並栗橋御關所御警衛被仰付、船改嚴重取計候、就テハ城下最寄河岸々々嚴重無之候テハ取締行届間敷旨、官軍方、場所御見廻リ之上御差圖モ有之、船渡河岸、惡戸新田河岸、野渡河岸、船番所人數御座候、

小銃三拾挺、胴亂管入三拾、方力三拾、三ツ股三拾、才槌三本、西洋流太鼓四、張管壹万三拾八、玉藥千六百八拾發、ミニール玉三千三百貳拾、同コロス三千三百貳拾、右ハ辰四月廿一日、東山道御總督府參謀衆香川敬三、平川和太郎、南部精太郎、在所古河町宿陣之節、御用立可仕旨、精太郎、敬三、御附屬之由、柳田竹槌太郎ト申仁ヨリ掛合有之、則前書之通品々御引渡申候。

二十二日、二督、復々大總督府ニ詣リ、軍議ニ參ス。

○ 總督府日記ニ云、四月二十二日、大總督府へ、總督公御軍議旁、野總出征之御事、御獻言之筋有之ニ付、御成之事。

○ 大垣藩記ニ云、四月廿一日、左之通御口達、

○ 明廿二日 總督様、大總督宮様へ御成ニ付、今廿一日之通之格ニ候、尤散兵ニテハ無之、御先行軍ニテ御供可致旨。

追テ、辰刻 御出馬之事、

明廿二日 總督様御入城ニ付、御供被 仰付候間、卯刻、板橋へ一小隊繰上候様可有之事。

御礎陣

四月廿一日夜

執

事

松平乘命家記

○乘命家記ニ云、四月廿二日、江戸御入城隨從ス、此日、雨中難義ニ付、爲慰勞酒代金壹枚賜ル、同廿三日、菊章御小旗御渡相成。

○德川氏ノ臣隸、相踵テ下野地方ニ逃走スルヲ以テ、東海道先鋒總督松平正親太郎、舊幕府ノ請ヲ聽シ、往キテ之ヲ招諭セシム、因テ書ヲ督府ニ致シテ其狀ヲ報ス。

一簡恭呈、薄暑之節愈御清健珍重之至存候、然ハ德川家陸軍奉行松平太郎、今般悔悟歸順仕候ニ付テハ、暴徒爲取リ鎮、野州邊其外ヘモ罷越度旨願出候條、大總督府ニオイテ 御僉議之上、被爲 聞届候ニ付、當手出張之兵隊ヘハ、別紙之通可申遣候間、其御手御出張之諸隊ヘモ御傳告置被下度、此段得貴意度早々如此ニ御座候、恐々頓首。

東海道 先鋒總督府

參

謀

四月廿二日

東山道總督府 參謀御中

○別紙

松平 太郎

右之者、德川譜代之臣ニテ、是迄陸軍奉行勤居、彼此過激之論モ相唱候趣之處、今般悔悟歸順之場ニ立至候、就テハ野州

邊暴行之兇黨等爲理誨鎮靜、彼地ヘ罷越度願出候間、猶於 大總督府 御僉議之上、被爲 聞届候、依之、太郎以下十三人、通行之印紙相渡置候條、爲心得此段相達候間、猶兵隊一同ヘ早々布告、行違等無之様被取計候様 御沙汰候事。

四月廿二日

總督府 叢紙

○古屋某作左衛門等、越後ヨリ進テ信濃ニ入り、飯山本多助成、城下ニ逗ル、飯山、松代二藩、其狀ヲ督府ニ報ス、督府乃チ信濃諸藩ニ令シテ、之ヲ掃蕩セシム、因テ松代藩兵ノ甲府ニ至ル者ヲ罷歸ス、又尾張藩ニ令シテ、中野關門ヲ嚴守シ、賊徒ヲ緝捕セシム。

○總督府日記ニ云、四月二十一日、松代藩、飯山藩等ヨリ、越後ヨリ信州ヘ賊徒出張之趣報知ニ付、大總督府ヘ御届ニ相成リ、信州一國之藩ヘ防禦ヲ命ス。

○本日達書、

近日、賊徒共、越後ヨリ信州ヘ侵入之趣、自然其國ヲ賊徒之手ニ被陷候テハ、不容易之次第ニ付、圖國之藩々申合セ、應援防禦之兵ヲ配シ、十全之効ヲ奏候様、爲 國家同心協力可盡忠勤候事。

辰 四月

別紙之通、被 仰出候條、御達申入候、各藩宜有勉勵候事。

東山道總督府

執

事

辰 四月廿二日

諏訪因幡守

戸田丹波守

堀左衛門尉

堀 恭之進

本多豊後守

藤井伊賀守

内藤志摩守

牧野遠江守

内藤若狹守

復古外記 東山道戰記 第十一 明治元年四月二十二日

大給縫殿題返

追テ、急々可有廻覽候也。總督府諸達留、上田高島以下各藩々記

○

真田 信濃 守

頃日、越後之賊徒、信州へ侵入可致由、防禦之策甚苦心之趣相聞候、應援之儀、同國諸藩へ申付置候間、其旨可相心得、尤尾州藩ヨリモ人数出張可致管ニ候間、夫々へ申合、手落無之様、精々勉勵可致事。

戊辰 四月

○

真田 信濃 守

甲府城守衛申付置候處、頃日、賊徒共本國へ侵入可致由、防戦之準備急務ニ候條、右守衛之人数、早速引揚候様可相計事。

戊辰 四月 以上總督府諸達留 真田幸民家記

○幸民家記ニ云、四月廿二日、於江戸、東山道總督府ヨリ右之御書付ニ通御渡、右ニ付、於甲府御城代へ其段申立、役員之者少々残置、兵隊役附共同所引揚申候、

○

尾 州 藩

其藩之兵、信州中野へ分隊シ、關門嚴衛、路人取締り有之へク、近日既ニ荒黨^{兇賊}橫行之間へモ有之候條、速ニ進軍、真田信濃守申合、一切追捕、土民安堵可爲致事。

東海道先鋒 總 督 府御印
先 鋒 副 將御印

徳川義宜家記

○本條、家記日ヲ闕ク、因テ此ニ合叙ス。

○二十三日上申書

越後邊へ浪人共通行致シ候由、風聞有之候處、追々領分近邊迄罷越候由ニ付、真田信濃守、堀恭之進へ援兵出張申遣置、領分口々へ人数差出候得共、少人数ニテ差留兼、信濃守、恭之進人数參着以前、飯山城下迄罷越候ニ付、家來之者ヨリ掛合中ニ御座候、不取敢此段御届申上候、以上。

四月

本多 豊 後 守

本多助須家記

○賊徒信濃、下野地方ニ出沒スルヲ以テ、督府、上田、小諸ニ藩ニ申令シテ、碓氷關ノ警守ヲ嚴ニセシム。

○上田、小諸ニ藩へ達書

一野州大平山、日光山兩所へ賊兵楯籠リ、宇都宮、壬生、結城其外城々へ打懸り候ニ付、官軍御發向、度々戰爭有之候事。
一會賊二千人計、越後路ヨリ信州へ侵入之勢、追々注進有之候ニ付、信州路へ官軍御發向被 仰出候事、
右ニ付、關門一際嚴重ニ相備へ、不覺之事無之様可致候、尤信州路之藩々へ、應援防禦之兵ヲ繰出置候様、御沙汰ニモ相成居候得共、其心得迄ニ申入候也。

四月

東山道總督府 執 事

上田藩記 牧野康民家記

○本條、康氏家記ハ二十四日、上田藩記ハ二十五日ニ收ム、皆拜受ノ日ナリ、今下ノ上申書ニ據リテ、本日ニ收ム。

○此頃脱走歩兵ト申候黨、越後路ヨリ信濃路飯山邊へ入來候付、右援兵之儀、真田信濃守様衆ヨリ藤井伊賀守様衆並弊藩へ被申越候之旨、伊賀守様衆ヨリ通達有之、依之、其砌御届申上候通、爲應援不取敢人數松代向寄迄差出シ、尾州様衆、信濃守様衆へ打合之上進退仕、福島村迄相進ミ屯罷在候、然ル處、當廿二日、其御總督府様御執事ヨリ弊藩並藤井伊賀守様衆へ急御達書御渡相成、急速相達候様被 仰渡之、同廿四日、右御達書相達候、右ハ常蓋上野兩州邊屢戰爭有之、且越後筋之沙汰モ有之候付、碓氷嶺新關之儀、一際嚴重警衛、不覺無之様可相心得旨御達ニ付、早々伊賀守様衆へ及通達、即人數増差出置、猶又尾州様衆、信濃守様衆へモ、右御達書之趣示談之上、松代領内へ差出置候應援人數引上、碓氷嶺へ移シ、同所警衛一際入精候様申付置候、此段御届申上候、以上。

四月廿九日

牧野遠江守内

牧野勇馬

小諸藩記

○督府、彦根藩兵ヲ古河ニ發遣シテ、前隊ニ代ラシム。

○總督府日記ニ云、四月二十二日、彦藩三小隊繰出ス、是ハ宇都宮敗卒ト交代之爲ニ、古河迄罷出候也。

○今日宇都宮へ出張ニ付、金穀扱出役人金子持參ニテ、出張可被致候事。

但、出兵ハ彦根人數ニ候也。

四月廿二日

總督府

執事

金穀方 中松井康英家記

○宇都宮藩老臣、督府ニ詣テ、征討先鋒ト爲リ、以テ前敗ノ耻ヲ雪カンコトヲ請フ、慰勞シテ之ヲ遣ル。

○總督府日記ニ云、四月二十二日、宇都宮執政縣勇記參上、此度甚面目無キ次第ニ付、何卒御進軍先鋒被 仰付、耻ヲ雪タキトノ歎願ナリ、爲酒肴料金五十兩被下候事、何分宇都宮ハ丸々燒土ニテ、執政候得共、殆懷中盡候由也。

○土岐頼知隼人正、彈藥ヲ督府ニ獻ス。

○土岐頼知家記ニ云、四月廿二日、東山道總督岩倉大夫殿、板橋宿御本陣へ以使者、左之通獻納仕候處、大監察多田縫殿出會、獻納御挨拶有之、證書一通被相渡之候。

一彈藥 二千五百發 一雷管 四千發
右之通奉獻納候、以上。

四月

土岐隼人正

○大島純彰ノ徒、進テ壬生ニ逼ル、味爽内參謀河田景與、因幡、土佐、松本、壬生、吹上五藩、及ヒ大久保忠告ノ兵ヲ安塚驛ニ出シテ、之ヲ邀フ、賊勢頗ル猖獗、官軍殆ト利アラス、適、景與、因幡藩後軍ヲ率キテ來リ援ケ、奮撃シテ之ヲ破ル、賊壬生ノ虛ヲ偵ヒ、兵ヲ分テ來リ襲フ、守兵撃テ之ヲ卻ク、是日、參謀伊地知正治、進テ結城ニ至リ、壬生ノ急ヲ聞キ薩摩、大垣二藩兵ヲ分テ赴援セシム、二藩兵至レハ則チ賊已ニ去ル。

○内參謀戰報

戊辰四月、野州ノ賊徒勢頗猖獗ニ付、早々出兵可致旨御達シ有之、同日十八日、江戸市ヶ谷ヲ發シ、同廿日壬生城ニ著陣仕候處、翌廿一日、壬生城ヲ距二里許異ニ當リ、安塚ト稱スル所有之、右安塚ヨリ幕田ト申處迄、凡半里許ノ間、賊兵千人許出張致シ候由相聞、本藩河田左久馬配下山國隊一小隊、歸順ノ兵大久保駿河守家來一小隊、有馬兵庫頭、戸田丹波守家來一小隊、大砲三門、土州ヨリ一小隊、安塚迄出張致シ候處、賊兵多人數、殊ニ地形深林蒼蔚、四通五達ノ曠野ニテ、出張ノ人數ミニテハ勝利無覺束ニ付、早々全軍出張可致旨、同日酉刻報知有之、依之、同夜半頃、土州兵一小隊出張、續テ同藩ノ全軍出張致シ候、其節左久馬及同人附屬ノ兵並天野祐治配下一小隊、大砲一門、砲長助役足羽篤之助一分隊、分家池田相模守人數一小隊、同廿二日曉迄、留テ壬生城ヲ守居候處、官軍殆ント不利ノ旨報知有之候ニ付、左久馬留マル處ノ諸隊ヲ率ヒ、早々進軍、安塚ヲ距ル十丁許ニシテ、砲聲烈シク相聞、續ヒテ死傷ノモノ昇歸リ、且器械ヲ損シ、彈藥ヲ盡シ候兵、追々引揚候ニ行逢ヒ、事不容易ト、蹇地ニ安塚驛中迄相進ミ候處、我先鋒苦戰最中ニ付、左久馬始メ一齊吶喊、刀ヲ揮ヒ奮擊仕居候處、賊兵始テ披靡、是時土藩トトモニ烈シク尾擊シ、幕田迄達シ候得ハ、賊兵不殘宇都宮ニ敗走ス、於是暫時憩兵、喫糧仕居候處、賊兵、雀宮ヨリ窃ニ壬生城ヲ襲ヒ、城市放火ノ趣相聞、是日、同城ニハ薩藩有馬藤太留守致シ居、賊兵ノ襲來ヲ聞、壬生藩士ヘ指揮致シ置、新田驛ヘ馳付ケ、屯在スル其藩ノ兵ヲ以テ、再ヒ壬生城ニ歸候際、賊兵此機ヲ察シ、市中少々放火致シ退去仕候由、此時有馬微セハ、壬生城殆ント賊手ニ落可申、實ニ官軍ノ一大幸ニ御座候、是ヨリ先、幕田憩兵ノ節、左久馬衆ニ議テ曰、壬生城賊ノ有トナレハ、我軍進退難谷ノ姿ニ相成可申、直チニ宇都宮城ニ進擊シ、必死ノ一戰ニ及ヒ、宇都宮城ヲ以テ壬生城ニ換ル如何、衆皆善ト稱シ、議決定ノ折柄、土藩士異見シテ曰、策善ト雖トモ、今疲勞ノ兵ヲ以テ堅城ニ臨ム、十全ノ策ニ非ス、速ニ兵ヲ壬生城ニ返シ、恢復ヲ謀ニ如カスト、其論最至當ト心得、於是午刻前、全軍壬生城ヘ凱陣仕候、此日、兩藩及附屬ノ兵ニテ討取候賊兵百人計、手負數不知、我軍最實効ヲ主トシ、且進退急速ノ場合ニ付、分捕ノ義敢テ心懸ケ不申候、山國隊司令士細木元太郎、原六郎、高室誠太郎、賊某々ノ首級討取申候、今日我軍死傷、左ノ通。

討死 山國隊 田中淺太郎 池田相模守人數 石脇 鼎
 戸田丹波守人數 尾花忠兵衛 松澤 銀齋
 野々山忠之進一手 原田留三郎 寺村好太郎 鈴木角之丞
 有馬兵庫頭人數 熊倉元吉 横地元助
 平澤源太一手 高室誠太郎 同即日死 高室治兵衛 淺手辻 肥後

手負 山國隊 深手 水口幸太郎 同 草木榮次郎
 池田相模守人數 深手 松村源之進
 大久保駿河守人數 淺手 菊地房吉 野田丹波守人數 淺手 田邊 覺左衛門
 師蹇郷輔一手 有馬兵庫頭人數 深手 廣瀬長太郎 同 西村要藏 同 久保鶴吉
 平澤源太一手 淺手 大竹作彌 同 渡邊作十郎 深手 永多 勘藏
 同 林崎 九右衛門
 同 新井兼吉
 死生不知 山國隊 菅沼富之丞 武田 右衛門七
 大久保駿河守人數 師蹇郷輔一手 武田鐘三郎 神建琢之進 武田作次郎
 戸田丹波守人數 野々山忠之進一手 山中郷太夫 神尾朝之進 秋葉啓次
 喜多山 亮一郎 田中倉藏 外ニ車夫二人 下條元春

有馬兵庫頭人數 田中倉藏 外ニ車夫二人
 右之通ニ御座候ニ付、不取敢御報知申上候、且歸順ノ兵、實効相立候段見届申候、以上。

辰四月廿二日

河田左久馬

池田輝知家記

○池田輝知家記ニ云、四月廿一日、宇都宮ノ賊千餘人、安塚驛原註、壬生ヨリ半里ヲ隔テ、幕田迄襲來ノ由相聞ヘ、未刻、我山國隊一小隊、大久保駿河守人數一小隊、戸田丹波守、有馬兵庫頭人數合一小隊、砲三門及土州兵一小隊出兵、黄昏安塚驛ニ達ス、此地タルヤ深林蔭蔭、四通五達ノ曠野ニシテ、出張ノ兵ノミニテハ戰守共ニ無覺束、早々救援ノ兵繰出シノコト、壬生城ニ及報知置、先鋒山國隊ヨリ斥候差出シ、尙地理探偵中、二三丁前路、林中ヨリ騎馬ノ賊兩三輩、斥候ト相見、味方近ク進來ル、我兵之ヲ狙撃シ、一人ヲ斃ス、餘賊狼狽介持遁走ス、是ニ於テ山國隊半隊ハ、左側茂林ヘ埋伏シ、半隊ハ驛外正面ノ田圃ニ布置シ、附屬諸隊トトモニ嚴戒守備ス、同夜半頃、土州兵二小隊、砲二門救援トシテ出兵、各所分配守備候處、丑刻頃、賊果シテ襲來發砲ス、官軍直チニ應砲、伏兵横撃ニ及ヒ、一旦勝利ノ處、賊盛リ返シ、勢更ニ熾盛、曉天戰最烈シク、短兵相接シ、努力奮戰ニ及ト雖トモ、衆寡不敵、勢殆ント危シ、時ニ河田左久馬ハ、佐分利鉄次郎原註、砲一分隊、天野祐治、小隊、池田相模守人數ト共ニ、昨夜ヨリ殘リテ壬生城ヲ守候處、官軍不利ノ趣報知有之、廿二日拂曉、右ノ諸隊ヲ率ヒテ同城ヲ發シ、迅疾進軍ノ中途、砲聲烈ク相聞、續テ死傷ノ者ヲ昇歸リ、且器械ヲ損シ、彈藥ヲ盡シテ引揚候兵ニ、連々行逢ヒ、事不容易ト蕪地ニ安塚驛中迄相進候處、我先鋒尤苦戰中ニ付、一同吶喊奮進、左久馬自拔刀、大聲シテ曰、退ク者ハ他藩ト雖トモ死ヲ不免ト、是ニ於テ官軍勢ヒ新ニ加リ、競進奮戰、一十二當ラサルナク、賊衆多ト雖トモ不能支、大ニ披靡ス、乃チ土州兵トトモニ烈シク尾撃シ、幕田ニ至レハ、賊宇都宮ニ敗走ス、於是、暫時憩兵喫糧ス、折柄賊壬生城ノ空虛ヲ慮リ、雀宮驛ヨリ窺ニ同城ヲ襲ヒ、放火ノ趣相聞候、此日同城ニハ薩藩有馬藤太居守シテ、能防禦ノ術ヲ盡シ、賊志ヲ不得、遂市中ヲ少シク放火シテ退ク、此時有馬微セハ壬生城殆ント賊手ニ陷ン、實ニ官軍ノ一大幸ナリ、我兵喫糧ノ後、徑チニ宇都宮ニ逼リ、必死決戰ノ志アリト雖トモ、士卒疲勞且終日ノ洪雨ニ、戰袍沾濡寒氣肌ニ徹ス、且土藩士ノ異見モ之アリ、乃チ兵ヲ班テ壬生城ニ歸陣ス。

○山内豐範家記ニ云、四月廿一日、賊、壬生城ヲ北ニ距ルニ里餘、幕田並ニ安塚ニ出ツルト聞クヤ、當日ノ先鋒因兵三小隊

原註、奇、遇、隔日ノ先鋒タルヲ及砲二門計、夕四時壬生ヲ發ス、吹上藩亦一小隊計、同ク發ス、我兵ニ番隊長小島捨藏、五番隊長長宮崎合介、六番隊長眞邊戒作、相次テ發ス、大石彌太郎監之、已ニ安塚村ニ至リ、先ツ村落ヲ占、之レニ據ル、因兵先鋒タルヲ以テ、北宇都宮路ニ當ル、我レ村ノ西端ヲ守ル、賊已ニ安塚ヲ引キ、未タ行ク處ヲ不知、同廿二日朝二時頃、賊幕田ノ方ニ出沒、彷彿タルヲ以テ、因兵安塚村ヲ距ル七八丁ノ所ニ進ミ、大小銃ヲ發射シ、戰ヲ挑ム、賊持滿深ク不應、然レトモ因兵頻リニ發射ス、已ニシテ賊稍ヤ應シ、漸々進テ因軍ニ迫ル、賊勢甚タ盛ナリ、賊又左右ニ開キ、三面ヨリ烈シク因軍ヲ發射ス、因軍不支、安塚村ニ退ク、賊所々ノ勝ニ狂レ、進撃甚タ疾シ、時ニ拂曉ナリ、原註、賊已ニ大舉ノ報知、壬生城ニ達スルヤ、我砲隊長平尾左金吾、半大隊長祖父江可成率之、秋澤清吉副之、徒監大石左衛門、安岡亮太郎屬之、直ニ因兵ニ代リ之ニ應ス、時ニ大霧雨、殆ト咫尺ヲ不辨、賊已ニ尾撃、村中ニ入ル、忽我軍ト相接シ、彼我ヲ不辨、第二、第六ノ隊尤奮戰、遂ニ賊ヲ驛外ニ追退ク、諸隊亦來會ス、賊喇叭ヲ吹キ、散兵ヲ收メ、頻リニ烈戰、其距離近キ者ハ、十四五間、遠キ者ハ、四五十間ニ過キス、北村長兵衛砲二門ヲ率ヒ、正面ヨリ烈敷散彈ヲ發射ス、而六番隊ハ驛ノ右ニ出テ、第二隊ハ驛ノ左右ニ配列シ、第五驛ノ左ノ堀切ニ傍ヒ、第一ハ又其ノ左ヨリ進戰フ、賊ノ兵數甚タ多ク、又且ツ能ク戰フ、激戰十時頃ニ至リ、賊終ニ支ヘスシテ敗走ス、因ノ河田左久馬、此ニ至リ初メテ會シ、共ニ追撃シテ幕田ニ至ル、賊西川田村ヲ放火シ、盡ク遁ル、此ノ日、賊ヲ殺ス甚タ多シ、我亦第二、二番隊長、第六番隊長ヲ傷シ、其他死、一番隊半田權吉、二番隊國吉榮之進、六、一番隊近藤楠馬、二番隊川田乙四郎、杉村茂久馬、三宅謙四郎、五番隊吉川清作、弘田宇之次郎、岡本兵衛、砲隊小南猿四郎、佐井松次郎、東山民、亦不少、時ニ賊別ニ奇兵ヲ出シ、壬生城ノ虛ヲ襲フ、城主已ニ退去、兵隊盡ク治杉村新作、久保田鹿彌、大石左馬司、中間鐵太郎、安塚ニ出テ、城中存スル處ノ者、只傷者及器械方等僅々而已、藩人亦至テ些少、然レトモ互ニ力ヲ盡シ、城上ヨリ砲ヲ發シ、虛勢ヲ張り、防備嚴重ノ體ヲ示ス、賊亦纔ニ一小隊計、其備ヘアルヲ疑ヒ、纔ニ町ノ一端ヲ放火シ去ル、城ノ危キ實ニ累卵ノ如シ、小島、眞邊等幸ニ虎口ヲ脱ル、ヲ得タリ、此ノ賊、途中我カ傷者一人ヲ殺シ、又我兵食ヲ奪フ、是ヲ以テ出張ノ兵皆ナ飢ユ、漸ク壬生ニ歸營シ、夕三字頃食ヲ得ルト云、始メ安塚ノ戰急ナルヤ、有馬藤太等自ラ急テ薩、長、大垣ノ東部ヲ倡ル者ニ告ク、同廿三日、薩、長、大垣ノ兵進ミ來ル。

○松本藩記ニ云、四月廿日夕刻、壬生城へ着、翌廿一日宇都宮へ進發可致旨、參謀衆ヨリ御達ニ付、午ノ刻過、因藩、吹上藩、壬生藩、我藩、大久保兵隊等、壬生藩嚮導トシテ途中斥候、追々相進候處、安塚村ニテ黄昏ニ至リ、然ル處、賊徒多人數、間近キ場所ニ潜伏之趣相聞候ニ付、軍議之上、急使ヲ以テ、壬生城へ土藩ノ進軍ヲ乞フ、安塚村前後左右へ伏兵罷在候處、同廿二日未明、双方ヨリ嚴敷發砲、賊猖獗之勢、其内追々夜モ明放レ、彌賊勢強大、諸藩發砲奮戰之處、尤土藩奮發進軍、俱ニ嚴敷及接戰、遂ニ官軍勝利、西河田迄進軍、賊宇都宮へ逃去リ、風雨烈敷、彈藥甚不便ニ付、一旦壬生城へ退軍可致、參謀衆ヨリ御達ニ付、壬生城へ歸陣ス、戰死二人、尾花忠兵衛、手負一人、田邊覺、分捕數品、同廿三日、壬生城警衛巡邏可致御達、同日、參謀河田左久馬齋ヨリ、御本陣へ罷出候様御達ニ付、則罷出候處、左之通御演舌、

昨日戰爭ニ付、働之趣致承知、勤 王實效之場、今日 總督府へ申上候間、此段及達置候。

○鳥居忠文家記ニ云、四月二十一日、賊兵宇都宮城ニ屯集ス、仍テ官兵安塚ニ進軍、我藩先鋒ノ命ヲ蒙ル、隊長高須源兵衛、物頭淵本一郎、中筒奉行等、銃手以下七拾余人先鋒、進テ夕七半時過安塚ニ著陣、驛ノ西裏ヲ衛、近傍賊在ラス、我兵西ノ方山林及ヒ驛ノ東口ニ兵ヲ配、此夜雨大ニ降、翌二十二日雨未タ止ス、曉八半時過、賊襲來由注進アリ、曉七時頃、吹上ノ兵隊大砲一發ス、其聲ニ應テ、我兵山林ノ中ヨリ齊發シ、賊ト砲戰ス、總軍進擊、雨中暗夜、彼我ヲ辨セス、宿中ノ官軍、過テ我藩ノ兵ニ向ヒ連發ス、彈丸雨ノ如ク、賊前後ニ在ニ似タリ、頗ル苦戰、一時兵ヲ宿中ニ引揚、總軍ト共ニ賊ニ當ル、拂曉掃擊シテ戰ヲ停、我藩銃手大森勇之助、所吉十郎、疵ヲ負、朝日昇ル、諸手兵ヲ引揚、于時賊壬生地ニ廻進ト聞、我兵隊可引揚トノ令アリ、直ニ兵ヲ與市ノ原ニ進、隊ヲ止テ殘兵ヲ纏、賊兵喇叭ヲ吹、壬生ニ進ノ由注進アリ、兵ヲ壬生ニ引揚、此日四時、賊ハタシテ襲來、大手口ノ隊長小笠原甚三郎、兵ヲ船町邊ニ出シ、中筒隊ヲ雄琴神社ノ裏ニ進、防戰シ、中筒士小西令作戰死、賊城下ニ入、所々放火スト雖、雨中延燒ニ至ラス、一箇大手前ニ來火ヲ放ントス、城中ノ銃手之レヲ打、賊死ス、官軍掃擊、賊慄レテ散亂シ、再來ラス、此日、大風雨、大ニ苦戰シ、兵ヲ城中ニ入ル。

○吹上藩記ニ云、弊藩人數ニ小隊、大砲貳門、四月廿一日夕、因州藩へ附屬、先手ニ相進、安塚村へ進軍、大雨中難戰、遂及勝利、追討宇都宮表ニ至リ、猶賊徒攻撃甚苦戰、死傷等御座候上、大砲貳門爲賊被打毀、其外器械多分損傷、官軍勝利之上、因州藩同様壬生表へ引揚。

○池田徳定家記ニ云、四月廿一日晝、壬生城ニ著陣、同廿二日、安塚迄本藩斥候ヲ出候處、賊兵及發砲、暫時苦戰、玉藥相盡候處、土藩ニ小隊同所へ繰出、斥候之兵ト交代仕候、本藩一小隊、弊藩一小隊、土藩ト同憤戰致候處、巳ノ刻頃、賊徒散亂ニ付、二里程追掛、弊藩手ニテ賊兵凡二十人打捨申候、殘賊宇都宮城へ逃入候ニ付、御追討可致之處、折節風雨烈敷、且亦兵士戰勞致候ニ付、一ト先壬生城へ引取申候、弊藩討死一人、脇罪、手負一人、源之進、

○大久保忠告從軍事蹟ニ云、家來共、鳥取藩ノ兵隊ニ屬シ、四月廿日夕、壬生城ニ著陣仕、細作ヲ出シ賊ノ舉動ヲ窺フニ、己ニ宇都宮城ヲ屠、市中ヲ燒キ、民間ノ金穀ヲ強奪シ、其暴逆至サル處ナク、且城外處々、番兵伏兵ヲ置キ、城頭ニハ大小砲ヲ竝へ、守備堅固ニシテ當ルヘカラサルノ勢ヲナシ、昨今官兵ノ迫ヲ偵ヒ、精兵三百人ヲシテ壬生城ヲ襲フノ形狀アルヲ回報ス、急ニ具狀シテ參謀ニ報告シ、同月廿一日午後、斥候トナリ、壬生ヲ發シ、原野ヲ過キ、晡時安塚村ニ至ル、時ニ數十軒ノ農家寂トシテ人ナシ、且怪ミ、且懼ル、幸ニ細作回リ報ス、賊兵三面ニアリ、進ムヘカラスト、急ニ陣ヲ布キ賊ノ來リ擊ツヲ俟ツ、時ニ斜陽已没シ、油然ト雲起、暴雨晦冥、咫尺ヲ辨セス、兵ヲ前面ニ配布シ、賊兵ニ備、且地圖及賊ノ形狀ヲ具シテ壬生城ニ報知シ、急ニ援兵ヲ乞フ、援兵未タ到ラス、賊遽ニ開砲來リ擊、彈丸雨集、各伍殊死シテ而通霄奮戰ス、拂曉ニ至リ賊勝地ニ據リ、彈丸三面ヨリ飛來、大小ノ砲聲實ニ雷ヨリモ激ク、兵士皆地ニ伏シテ防戰ス、且陣前ニ大砲二門ヲ据、專ラニ一方ノ賊陣ニ向ケテ連發ス、幸ニ賊長及士卒三四人ノ胸ヲ洞ス、賊ノ臟腑地ニ塗ル、一方ハ賊兵是カ爲メニ潰散シ、急ニ追テ賊五人ヲ斬、東照宮ノ旗章及刀槍、小銃、喇叭、軍器等ヲ奪フ、時ニ因、土ノ兵來リ援クルニ會シ、力ヲ戮セテ進擊ス、賊軍漸潰、賊軍本道ニ集リ、都城ニ退カントス、追擊スルコト一里許、私兵隊ニテ首級ヲ得ルコト八ツ、終ニ僥倖ノ小利ヲ得、内參謀ノ令ニ依テ、晚來壬城ニ凱陣ス、更ニ壬生城ノ守衛、近郊ノ巡邏ヲ命セラレ、殘黨ヲ捕縛ス。

○淺田惟季北戰日誌ニ云、四月二十日、我中軍宇都宮城ニ抵ル、夫レ宇都宮城ノ地形タルヤ、孤立ニシテ守ル可ラス、其土

地大城ヲ距ル三十里餘、四境一點ノ障物ナシ、二總常武毛、與羽ノ行旅盡ク往徠爲サル者無シ、人戸四五千、下野中ノ首府トス、若シ三萬ノ兵有テ、近傍ノ諸侯ヲ壓倒シ、四方ノ運輸通スル時ハ、關内ヲ爭フニ最肝要ノ地タリ、然レ共、孤軍ニシテ援路絶ヘ、四面敵ノ圍ミヲ受ル時ハ、中外斷絶、一人トシテ存スル者有可ラス、加之ニ塹塹ミ郭廢毀シテ守ル可ラス、茲ニ於テ余カ輩痛心シテ、大鳥氏ニ謂テ曰ク、今四方敵充滿シ、既ニ死地ニ陥ラントス、然レ共、幸ニ日光ノ一路未タ開ケタリ、軍ヲ收テ退クニ若カス、敵兵若シ四面ヲ圍ンテ攻ルニ至ラハ、彈藥欠乏、糧食又盡ク、十日ヲ過スシテ我軍殲ト成ン、大鳥氏諾シテ未タ果サス、既ニシテ四月二十一日ニ至ル、諜者報テ曰、薩、長、土、因、備、大垣ノ兵二千餘、昨夜壬生城ニ入ル、近國諸侯ノ兵之レニ合シ、總括三千七八百人、直チニ此地ニ進襲セントス、大鳥氏曰、兵法ニ先スレハ則チ人ヲ制シ、後レハ即チ人ノ爲ニ制セラレ、未タ彼カ備ヲ設ケサルヲ擊チテ、後ニ軍ヲ退ケン、余等最愉快トス、衆議決セス、會藩栴澤勇記、最不可也ト云、終ニ薄暮ニ至テ漸ク進襲ノ論決定ス、嗚呼、此日大鳥氏ノ説ノ如ク迅速ニ進襲セハ、必ス勝ヲ得ン、然ルチ衆論決セス、空ク好機ヲ失スルニ至ル、惜ム可キ也、四月廿二日、壬生城侵襲ノ令下リ、吾カ傳習第二大隊雀ノ宮道ヨリ進ミ、第一大隊二小隊、御領兵七聯隊、新撰組ハ幕田道ニ進ム、此等ノ兵ハ、昨廿一日既ニ出師シテ、幕田邑ニ陣シタリ、依テ時限ヲ通スルノミ也、總兵九百人、夜四更糧ヲ炊キ、喫シ終テ、我カ第二大隊整列街道ヲ進ム一里、烈風樹木ヲ鳴ラシ、大雨注カ如ク、咫尺ヲ辨セス、終ニ道ヲ失テ隘道ニ入り、幕田ニ出ル、此夜敵軍又我陣營ヲ襲ハント爲テ、幕田邑外ニ抵リ、我先鋒ト撞見ス、時既ニ寅ノ半ヲ過レ共、黑雲一天ニ滿チ、東方未タ白カラス、暗夜互ニ進退舉動ヲ辨スル能ハス、唯銃口ノ火氣ヲ標トシテ放發ス、我第二大隊、未タ此戰爭起リタルヲ知ラス、卯ノ刻、進テ幕田ニ抵ル、比時戰酣ニシテ敵鋒最銳シ、直チニ二軍ニ分チ、一軍ハ前面ノ敵ニ當リ、一軍ハ左方ノ小流ヲ涉テ、敵兵ノ横ヲ擊ントス、此時彼又軍ヲ分ツテ吾カ右ノ陣ヲ襲ハント爲ニ逢タリ、本多幸七郎直チニ令ヲ下シ放發ス、予ハ瀧川氏ト共ニ前面ニ當レリ、敵軍頻リニ榴彈原註、ハレツ丸小彈ヲ入レヲ放ツ、吾兵聞テ發シ、猛烈ニ放發令ム、我カ先鋒援兵ノ來ルヲ見テ憤激シ、均シク連發シテ進ム、敵兵終ニ退テ安塚ノ胸壁ニ據ル、我カ兵直チニ彼カ野戰礮ヲ奪ヒテ之レニ迫ル、道路骸骸横ル無數、鮮血泉ヲ爲シ、兵器ヲ棄ル事夥シ、

之ヲ收ルニ暇有ラス、等ク進ミ、彼カ捨置タル礮ヲ奪ヒ、榴彈ヲ放チ、壘堡ヲ破リ毀タント爲ス、壘内ニ大礮ヲ備テ頻ニ發彈ヲ發ス、此時既ニ天白ク辰ニ近シ、風雨愈烈ク、我兵風下ニ在テ、盡ク煙リニ蔽ハレ、敵ノ舉動ニ注目スル事能ハス、茫茫タル郊原、一面ニ煙ト成リ、唯砲聲ヲ聞クノミ也、兩軍盡ク混交シテ彼我ヲ分ツ事能ハス、眞ニ大亂戰ト成ル、予カ兵傍ニ在ル者十四五人ニ過ス、先ツ七八人ヲ分ツテ、差圖役鈴木巳太郎ニ附與シ、麥田ノ内ヲ潛ラ令メ、壘壁ノ脊ヲ襲ハントシ、予ハ民家ノ竹籬ヲ毀ツテ、壘下ニ迫ラント爲ス、瀧川充太郎又三十人ノ兵ヲ率ヒ來リ、均シク連發シタリ、敵兵屈セス、震彈ヲ放ツ、我兵死傷十餘人ニ至ル、茲ニ於テ予兵士ノ空ク損亡爲シ事ヲ憂ヒ、少ク退ケテ麥田ノ中ニ潛伏令メ、彼等ノ舉動ヲ窺ハシ爲メ、暫時放發ヲ止メ、近傍ヲ點檢爲スニ、大道ノ阪ニ十餘人ノ兵卒有リ、西南ノ叢林ニ放發ス、衆皆我兵ナラント云、一卒忽チ丸ニ當テ墜ル、其肩ノ符號ヲ見ルニ敵兵ナリ、依テ直チニ狙擊令メ、其四人ヲ殞ス、餘兵狼狽シテ麥畑ノ中ニ隠ル、予又兵ヲ進メテ頻ニ壘ヲ攻ル、敵兵二人、民家ノ竹籬ヲ潛リ、刀ヲ揮テ迫ル、予腰銃ヲ發テ其一人ヲ射殺ス、一人逃去タリ、敵、我兵ノ農兵多キヲ知テ頻ニ接戰ヲ好ム、叢ノ中ニ伏シ、或ハ麥畑ノ中ニ潛ミテ隙ヲ窺ヒ、走り出テ背面ヨリ突入セント爲ス、故ニ余等是ヲ注意シテ多ク心勞シタリ、此時已ニ辰過ルニ至レ共勝敗決セス、瀧川氏等大ニ憤發、近傍ノ兵ヲ合シ、一舉ニ胸壁ニ乘入ラント爲シ、烈ク銃ヲ發ツテ迫ル事二十歩許、壘ノ前ニ在ル所ノ民家ヲ放火爲ントス、本多氏又礮ヲ進メテ狙擊ス、一丸適度ニ至テ破裂シ、五六人ノ墜レルヲ見ル、之カ爲ニ壘内ノ二大礮暫ク發射ヲ止ルニ至ル、既ニシテ敵ノ援兵壬生城ヨリ來ル有リ、其鋒最銳ク、我軍苦戰甚シ、一丸有リ、予カ右手ニ中ル、忽チ持タル短銃ヲ墮ス、幸ニシテ重創ナラスト雖モ、瘻ヲ覺テ屈伸自由ナラス、次テ七聯隊裨將田澤淳之丞戰死シ、小花和重太郎重創ヲ被ル、又一丸予カ股ヲ傷テ奔走スル事ヲ得ス、依テ差圖役並栗原立一ニ兵ヲ托テ退ク、既ニシテ敵鋒愈烈ク、彈丸雨ノ如シ、創ツキ倒ル、者紛々トシテ道路ニ充滿ス、之ヲ助ケ逆ルニ暇有ラス、加之四更ヨリノ連戰、兵疲勞言可ラス、彈藥又盡ナントス、故ニ本多瀧川ノ二氏令ヲ下シ、烈ク放發シテ操引ニ幕田ヘ凱旋シ、漸ク軍ヲ收テ徐々ト退ク、敵兵又尾擊スル事無シ、此日、我第二大隊ノ内、七八番ノ二小隊ハ、本軍ニ離レテ雀ノ宮ヨリ壬生城ニ抵ル、拂曉河ヲ涉テ街ニ迫ル、街外麥畑ノ中ニ二百人餘ノ敵兵有リ、

大川正次郎直チニ撒隊ヲ作り、前面ニ當リテ烈ク連發シ、七番小隊ヲシテ其左右翼ヲ挟ミ擊タ令ム、敵兵忽チ敗テ城中ニ入ル、我軍進テ街家ヲ放火ス、然レ共、暴雨ニシテ僅カニ二二三戸ヲ燒ノミ也、既ニシテ後軍續カス、又安塚ノ報ヲ聞、彼カ背面ヲ襲ン爲メ、軍ヲ反シテ行進四五丁、土州兵ノ創者ニ逢フ、其三人ヲ殺戮ス、又騎馬ノ士有リ、馳セ來テ戰地ノ景狀ヲ問フ、是レ其己レカ敵ナルヲ知ラサルカ如シ、其名ヲ問ヘハ土州ノ軍監何某ト答フ、大川氏令ヲ下シテ直チニ斬首令メ、其馬ヲ奪フ、又五六人ノ敵兵有リ、之ヲ斬、總括十五級ノ首ヲ得タリ、既ニシテ安塚ノ敵軍凱旋スルニ逢フ、道ヲ轉シ隘道ヲ逸テ歸陣シタリ、此日ノ戰爭、勝敗ヲ論スレハ、幕田ノ戰ヒハ敵六分ノ利ヲ得テ、味方四分ノ不利トス、壬生街ノ捷ヲ合シテ互格トス可シ、然レ共、彼レハ衆、我ハ寡ナルヲ以テ論セハ、我軍七分ノ捷ト云可シ、如何トナレハ、先ニ敵敗シテ我軍尾擊スル事七八丁ニ至ル、彼壘壁ニ據テ漸ク支ユ、其援兵來ルニ及テ彼カ鋒又銳シ、是レ他ニ非ス、我兵數時ノ連戰ニ身心疲労、加之彈藥盡ルニ至ル、若シ此時五百人ノ遊軍有テ代ル時ハ、捷ヲ得ン事必定セリ、夫川、大久保ノ二氏彼カ空虚ヲ擊チ、其妙ニ出ルト雖共、又寡兵ニシテ全勝ヲ得ルコト能ハス、敵兵モ又其背面ヲ斷ル、ヲ懼レ、追擊スルノ閑無シ、故ニ兵ノ多少ヲ以テ論スル時ハ、我兵七分ノ勝ト云ツ可シ、此日ノ戰爭殊ニ猛烈ニシテ、更ニ寸隙無シ、我輩都下脱籍以來、未タ斯ノ如キノ戰ナシ、眞ニ愉快ノ一大戰爭ト云ツ可シ、若先ニ進擊論起リシ時、直チニ之レヲ擊タハ、敵壘未タ成ラス、又一層愉快ノ戰有ル可シ、然ルニ衆論一決セス、空ク一日ヲ遲滯爲セシ故ニ、敵ノ兵備既ニ成テ、我陣營ヲ進擊爲ントスルニ逢フ、故ニ憤戰スト雖共、功無シ、惜ム可シ、此日、吾兵戰死四十五六人、傷者七拾八人、而テ長官死スル者一人、重創ノ長官一人、原註、田澤淳之丞死、此人、廿四日ニ至テ死ス、凱陣後敵ノ間諜三人ヲ捕ヘ斬首ス。

○慶應兵謀秘録ニ云、四月廿日、七連隊、精兵隊安塚村ニ宿陣、廿一日朝五ツ時、七連隊宿陣スル幕田村ヘ、壬生城ヨリ薩長、因、土之兵隊襲ヒ來趣報者有之、依之、精共隊探索ヲ出、同村地利惡敷戰爭不便宜、防禦ニモ不利ニヨツテ、西川田村ヘ引揚ケ、幕田村ヘ前衛ヲ出シ、其他斥候、哨兵、探索ヲ出ス、二十二日、七連隊ノ内、貳中隊ヲ合シ、安塚村ヨリ壬生城ヲ襲ハシ、幕田村ヲ出發ス、敵モ亦幕田ヲ襲ハント安塚村ヲ出發ス、味方ノ哨兵壹人はニ死ス、亦壹人ハ逃歸リテ敵ノ舉動ヲ通

ス、於此七連隊小野寺守之助一小隊ヲ引卒シテ、幕田村ノ防禦ヲ爲ス、別傳習桑名士官隊安塚ヨリ西川田村ノ間道ニ伏セ、敵ノ侵襲ヲ防ク、其他ノ諸隊皆敵ニ當ル、明ケ六ツ時ヨリ雨降出シ、霧深シ、敵味方ヲ不分、細道泥土沼地歩行ノ艱難言語ヲ以演ヘカラス、我散兵隊ヲ以敵ヲ狙撃ス、亦勢ヲ分テ敵ノ横合ニ砲發ス、猶大砲隊ヲ以本道ヨリ放砲ス、敵大ニ狼狽シ大砲ヲ捨テ走ル、然リト雖トモ其砲奪フニイトマナク、終ニ亦敵ノ有トナル、此時第二傳習隊ノ頭本多幸七郎ハ手負、亦大砲護衛隊差圖役和田久太郎ハ四ヶ所手負、小花和重太郎ハ手負、翌日死、田澤淳之丞戰死、水上良次郎ハ手負、亦山瀬鉦次郎、高橋銚之助味方ヲ離レ、敵ノ屯集所ヘ切込、高橋氏終ニ戰死ス、山瀬鉦次郎ハ手負敵ノ爲ニ命ヲ失ハントスル時ニ、歩兵馳來リテシキリニ砲發ス、敵其地ヲ退去ス、終ニ助テ本陣ニ歸ル、兵隊力ヲ合シテ大ニ戰フ、敵ヲ安塚村迄追擊ス、終ニ幕田村迄引揚ル、戰死手負ニ拾人餘、數刻ノ戰ヒ味方大ニ勞ス、雨ノ車軸ヲ折カ如ク、道路一圓如沼、不得止桑名士官隊、別傳習隊ヲ後殿トシ、總軍宇都宮ヘ引揚ル、撤兵隊應援ニ來ル、合兵シテ晝九ツ半時過歸陣ス、此日大川鉦次郎ナルモノ、一中隊ヲ引卒シテ安塚村ノ裏道ヨリ壬生城下ヘ出、薩州ノ軍監ニ行逢殺之、乘處之馬並器械等奪ヒ、兵隊四人ヲ斬首シ、城下之市中ヲ放火ス、應援ナキニヨリ再雀宮ヘ出テ、宇都宮ヘ歸陣ス、此日七ツ時撤兵隊江戸海道防禦哨兵ヲ出ス、夜四時大新田ヘ出張、哨兵出ス。

○泣血錄ニ云、西軍間小山之敗、急發江戸至壬生、四月廿一夜壬生藩友平某來告曰、敵雖至守備未全、今夜襲之必有利、諸軍乃侵雨至安塚、敵已置兵共戰不利、而別軍進自間道、出其不意、敵不察其爲敵、遂大破之、奪其輜重、追至壬生、而還於是出兵于壬新田、以扼敵、請我士官督之、多賀逸之介、馬場清次應之。

○伊地知正治日記ニ云、四月二十二日、五番隊并長州大垣人數結城驛迄著陣、此中ヨリ之賊徒騷動ニ付、街道筋本橋切落シ有之候故、一里位迂リ通行、乍併市中一同官軍之通行ヲ悅ヒ、笑ヲ含ミ、或ハ落涙シテ再拜候有様、是ヲ見ルニ又催涙シ候程也、當日六番隊等ニハ大垣人數ト共ニ、雀ヶ宮驛ニ賊徒屯集之由ニ付、爲進擊發向之處、於新田驛有馬藤太并長藩熊谷某早馬ニテ馳來リ、因、土人數ハ壬生城ヨリ一里半余ナル安塚驛ニテ賊軍ト戰爭、摸樣不宜敷、且ツ賊徒其跡ヲ取切、壬生城

乘取之勢之段申來候付、俄ニ向ヲ替ヘ壬城下へ著之處、最早賊徒追退ケ、且安塚之戰モ官軍勝利、賊退散之由ニ付、壬生一宿、我手戰ニ不逢候。

○戸田氏共家記ニ云、東山道先鋒へ出張爲仕置候采女正人數之内、四月廿二日野州小山驛迄相進候處、賊兵壬生城へ襲來、甚危急之趣因州勢ヨリ申來候ニ付、不取敢同所へ驅付候得共、既ニ戰爭後ニ御座候。

○東山道戰記ニ云、薩一小隊大砲三門、吾藩二小队大砲一門、四月二十一日八間々田驛泊リ、翌二十一日ハ宇都宮へ討入ノ心組ニテ、二十二日朝間々田ヲ發シ候處、雨頻ニ降出シ候テ道路ノ步行甚難澁ニ候得共、今日攻城ノ心組故、雨中ヲ不厭馳行シニ、芋空新田ヲ半里許行過候節、壬生在陣ノ因藩ヨリ汗馬ノ使來リ申述候ハ、今朝ヨリ宇都宮ノ賊兵壬生城へ亂入致シ、諸所ヲ放火シテ攻懸リ、只今吾藩ト土藩トノ二藩ニテ防戰最中ニ有之候、何トソ早々援兵ニ來ラレ度トノ事ナリ、因テ宇都宮攻城ハ相止メ、又壬生城へ應援トシテ道ヲ急イテ馳行候、此時暫時ニシテ壬生へ到著致シ候處、早ヤ賊兵ハ引退キ、戰ヒハ止ミ候跡ニテ、死傷人等取片付ケ、同所大手前杯ハ燒殘リノ火少シ燃候ノミニテ、應援ノ詮無之候事故、各殘念ニ存候也。

復古外記 東山道戰記 第十一 終

元修史局掌記 豊原資 清纂輯

復古外記 稿本

東山道戰記 第十二

自明治元年四月二十三日 至同 二十五日

四月二十三日、壬生城勢急ナルヲ以テ、督府、參謀板垣正形、軍監西尾爲忠ニ命シ、因幡、土佐二藩兵ヲ率テ赴援セシム、山内豐誠之ニ屬ス。

○總督府日記ニ云、四月二十三日、壬生ノ戰苦艱ニ付、板垣退助、因、土ノ兵隊ヲ率ヒテ出張ス、

○西尾爲忠事蹟ニ云、四月廿三日、市ヶ谷ヲ發シ野州路ニ向フ。原註、是ヨリ先キ、板垣、河田兩氏、總督ノ命ニ因テ、因、土ノ軍各半營ヲ率ヒ、野州路ニ發向セリ、是ニ至リ、餘軍舉テ野州路ニ向フ。

○池田輝知家記ニ云、野州ノ賊徒、日ヲ追テ熾盛、其形勢不容易趣、屢江戶表へ報告有之候ニ付、江城殘留之因、土本營ノ兵へ急速出張被仰付、四月廿三日申半刻、和田壹岐、原註、家兵一小隊、宮脇縫殿助銃士一隊、佐分利九允銃士一隊、本内金左衛門、建部半之丞、藤田東、山根留次郎、井上靜雄五小队、大砲三門、池田攝津守人數及土州兵、舉テ市ヶ谷尾州邸出發、大監軍西尾遠江介同行、前日因、土兩藩ノ兵、野州出發ノ砌、兩軍先ヲ爭テ不決、圖ヲ探テ前後ヲ定ム、我藩前軍タリ、故ニ今日ハ土州藩ヲ以テ前軍トシ、則進テ武州草加驛ニ至ル、我斥候兵、戊刻過千住驛ニ至リ候處、江戶脫賊二三百人、同驛へ屯集、佐土原藩出兵、器械相渡候様談判中、驛内騷擾、人心危懼、彼是疑ハシキ舉動ニ有之旨歸報ス、依之、小塚原へ總軍ヲ停メ、徹夜嚴戒、動靜相伺候處、賊恭順、器械差出ス、廿四日早旦、野州路へ進軍候。

○山内豐範家記節略ニ云、四月廿三日、板橋督府ヨリ參謀宇田栗園、倉皇我カ市ヶ谷ノ營ニ來リ、板垣ニ面會ヲ乞フ、時ニ板垣亦板橋ニ行キ不在ナリ、乃谷守部ニ會シ云、今朝野州先ヨリ報知アリ、因、土ノ兵安塚村ニ戰ヒ、遂ニ敗走、壬生城モ賊ノ爲ニ落城セリト、確報ナラスト雖トモ、勢將ニ可然、右ニ付、東海道總督府へ援兵ヲ乞フニ決シ、右示談ノ爲メ板垣ヲ訪フ

ナリ、事軍情ニ關スルヲ以テ、敢テ群下ニ聞カ令ル勿レト、因人足立某及ヒ我隊長數名ト相議シ、板垣ノ歸ルヲ待ツ、既ニシテ砲隊ノ軍夫一人歸リ報ス、安塚ノ戰ヒ甚タ苦戰、因、土共ニ死傷不少、且壬生城ヘモ賊徒寄來リ、已ニ放火發砲セリ、勢必ス落城セント、已ニシテ二番隊三宅謙四郎亦來リ報ス、曰安塚ノ勝敗未タ決セスト雖トモ、勢甚タ難シ、而壬生ハ殆ト空虛タレハ、亦得テ保ツヘカラス、急ニ援ケサレハ官軍盡ク魚肉タラン、已ニシテ板垣反リ曰、官軍ノ敗報ヲ聞キ切齒ニ不堪、敢テ出兵ヲ督府ニ乞フ、則チ、薩、長、大、垣、因、土ノ兵皆迅速出兵ノ命アリト、即夜輕裝輜重ヲ棄テ冗器ヲ除キ、獨リ彈藥而已ヲ隨ヘ軍ヲ擧ケ尾邸ヲ發ス、山内君モ同シク發セリ、初メ戰端ノ已ニ開ケシヲ聞クヤ、先ツ命ヲ不待、彈藥護送トシテ山地忠七先ツ發ス、我前軍ノ千住近ニ至レハ、山地忠七突然來リ曰、房總ニ脫去セシ賊徒千住驛ニ來リ宿スヲ以テ、備前、佐土原ノ兵宿ヲ圍ミ、彼レノ本營ニ踏込、軍器一切差出スヘキヲ談判ス、若シ不渡ニ於テハ、打取ルヘキニ付、暫時此所ニ止リ吳レヨトノ由ニテ、事甚急ナリ、是以テ我隊未タ不進ナリト、總軍亦此ニ會シ、暫時滯陣ス、賊徒力敵セサルヲ識リ、遂ニ器械一切佐土原、備前ニ交付ス、我全軍草加ノ宿ニ休息ス。

○千住驛ノ賊兵招諭ノ顛末ハ、東海道戰記ニ載ス、參看スヘシ。

○山内豐誠家記ニ云、豐誠家兵召連加御軍列、四月二十三日下野國壬生城迄進軍。

○督府遠藤胤城ノ戸田川渡口警守ヲ罷メ、之ヲ板橋驛ニ召ス。

戸田川御固メ被 免候條、早々其人數引連板橋御陣所ヘ可致參上候、右申入候也。

總督府

執事

四月廿三日

遠藤 但馬守 遠藤胤城家記

○督府、高遠、高島二藩ノ餽餉傳遞措辦ヲ罷ム。

○高遠藩記ニ云、四月廿三日、高島藩弊藩ヘ被逢度旨西尾遠江介殿ヨリ被仰越候付、弊藩小山郡太夫罷出候處、日光街道ヘ賊徒共屯集ニ付、當御人數不殘古河表迄御出兵相成候付、御賄無滞被成 御免、且是迄盡力之段於 總督モ御大慶被 思召候段被仰聞、先頃御渡相成候玄米殘之分ハ、兩藩ヘ被下候旨新平太丞ヨリ口達有之候付、當人ヨリ御禮申上罷歸其段申聞候、御賄御免被仰付候テ御手離レ相成候得共、岡村權左衛門、河野泰司兩人ハ何方迄モ御陪從爲仕度主人若狹守存念ニ付、御供仕度奉願候處、厚志之段忝思召候得共、不及心配、其上此節信州路賊徒暴行之由松本藩ヨリ御届相成、信州大名夫夫出兵被 仰付候付テハ、片時モ早々歸國致シ、出兵之方盡力候様被 仰聞候。

米百三十拾貳石

右之通、兩藩ヘ被下置難有頂戴仕候、右御請申上候、以上。

四月

諏訪因幡守家來 高山四郎右衛門
内藤若狹守家來 岡村權左衛門

右御用相濟候ニ付、四月廿六日江戸表出立、閏四月朔日歸國仕候。

○内藤頼直家記ニ云、天朝ヨリ御下ケ金請拂高左之通、

一金壹萬千五百兩 甲州島澤宿ヨリ道中並市ケ谷 御宿陣中追々御下ケ請取高

此拂

金壹万九百四十八兩壹分壹朱

甲州島澤宿ヨリ江戸御宿陣中總御入用メ高

金三百九十八兩

高島藩取扱殘金 新平太へ上納

金百五十三兩二分

高遠藩分

錢四百八十貳文

右同藩

右之通御勘定仕分明細帳相添、殘金共西尾殿附新平太事改姓名伊賀平太左衛門ヘ夜九ツ時過罷出、兩藩ニテ上納印紙請取申候。

四月廿七日、市ケ谷御館高島、高遠御賄人數引拂致歸國候。

復古外記 東山道戰記 第十二 明治元年四月二十三日

○高島藩記ニ云、二月晦日、東山道 御總督府ヨリ御達ニ付、高遠藩申合、甲州口討手土州、因州並弊藩嚮導隊之兵食人馬賄方猿橋驛迄相勤候處、猶又御達ニ付、同所ヨリ東京尾州邸、土、因人數在陣中兵食取扱相勤、四月廿三日右取扱 御免被成下候旨御達有之、差出置候家來尾邸引拂歸邑仕候、又云、信州上諏訪町ヨリ甲州猿橋宿迄、高遠藩、弊藩ニテ官軍兵食人馬賃錢其外入費取調、辰七月岩倉殿執事中迄於東京表差出候弊藩拂高左之通、

- 一金貳千五百七拾九兩壹分
 - 一錢七拾貳貫百四拾八文
 - 一金貳百八拾三兩壹分三朱
 - 一錢七百貳拾壹文
 - 一金千五百四拾兩壹分貳朱
 - 一金三百三拾五兩三分
 - 一金百九十六兩貳朱
 - 一錢四拾八文
 - 右五口合
- 官軍御人數並御賄方休泊料人足賃錢白米
買入代金並諸雜費高遠藩ト割合弊藩拂高
嚮導隊往來休泊
料並諸雜用金共
人足五百貳人勤日數壹萬貳千三百二十三日一日一
人ニ付米貳升五合ツ、石數三百八十七升五合代
米運送並小荷駄馬百八十七匹勤日數千三百四十三日
一日一疋ニ付米五升ツ、石數六十七石一斗五升之代
御賄方出張人數並人足
百人歸道中旅籠雜用

金四千九百貳拾四兩三分三朱 錢七拾貳貫九百拾六文

○東海道ノ官軍、千住驛傍近ノ賊ト戰端ヲ開クノ聞ヘアルヲ以テ、督府、各藩隊長ヲ戒メテ、不虞ニ備ヘシム。

○大垣藩記ニ云、四月二十三日御本營へ隊長之面々御呼出ニテ御達、千住邊ニテ彌戰爭相始候趣 總督府ヨリ御達相成候間、於當地如何様之儀出來モ難計ニ付、兼テ覺悟可罷在旨被 仰聞候事。

○早旦、薩摩、大垣二藩兵、壬生ヨリ進テ宇都宮城ヲ攻ム、大鳥純彰、衆ヲ督シテ防戰シ、兵ヲ遶ラシテ官軍ノ背後ヲ衝ク、官軍勢甚急ナリ、既ニシテ參謀伊地知正治、薩摩、長門、大垣、忍四藩兵ヲ率キテ結城ヨリ、内參謀河田景興、因幡、松本、吹上三藩、及ヒ大久保忠告ノ兵ヲ率キテ壬生ヨリ至リ、合擊シテ之ヲ破ル、純彰等板倉勝靜父子ヲ擁シテ、日光山ニ走ル、官軍遂ニ宇都宮城ヲ復ス、戸田忠恕館林ヨリ復歸ス。

○慶應出軍戰狀ニ云、四月廿三日未明ニ壬生城下繰出シ、一番備六番隊兵具隊、二番備大砲隊白砲打手、三番備大垣一小隊原註、内大 都合其勢二百餘人、六番隊監軍狙擊手人數一丁計先へ進ンテ山林艸藪等ヲ探索シテ行軍シ、敵地近クナレハ總勢イヨイヨ心ヲ用ヒテ銳氣ヲ含メリ、然ルニ宇都宮城ヨリ三四丁計リナル所ノ麥島ノ端ニ、戎服ニテ鐵砲ヲ携ヘシ者兩三人見ヘタリ、即監軍小指旗ヲ約束通リ振ルアトへ受次テ次第振レリ、直ニ隊長散隊ノ令ヲナス、即隊ヲ散開シテ早足ニテ進ム、右見ヘシ者共島中へ走去リ、是注進ト見ヘタリ、無間モ賊徒共道向臺場へ大砲押出シ、左右麥島中へモ銃隊散開シテ烈敷打懸ル、大砲四五發モ打テリ、味方少シモ不恐曳王聲ニテ發射ス、三四發モ銃戰シテ間合百間計リモナリヌレハ、彼等カ臺場踏破ルヘキト決議シテ、英々聲ニテ一同ニ發射シテ神速ニ掛レハ、賊徒恐レケン、大小銃砲ヲ捨テ敗走ス、死骸纔ニ三ツ計アレリ、此時廻源五左衛門手負ス、此所ヨリ城下ナレハ、隊長喇叭ヲ吹セテ集合ス、狙擊手人數ヲ小路小路へ出シテ、アトヨリ隊ヲ散開シテ攻掛ルニ、彼等モ土手、竹山等ヲ楯ニ取テ大小銃砲ヲ打掛ル、於爰永山覺太郎戰死ス、松元清右衛門、矢野八次郎、宇宿彦之丞手負ス、總勢激發シテ追討スルニ、半隊ハ城堀涯、半隊ハカラ堀ヲ踏越土手之上マテ攻付タリ、彼等ハ土手大木ヲ楯ニシテ如雨霰發射ス、素ヨリ味方ハ少數敵ハ十倍ナレハ、討テトモ討テトモ不盡、進メノ喇叭ヲナラシ勢ヒ懸レリ、味方之兵氣強勇ニシテ曳王聲ニテ攻撃ス、シカハアレト敵ハ大勢、殊ニ要害ニ依リ防戰シケレハ急

ニ攻拔カタク、於是加納次右衛門、築地宗次郎、鶴木吉次郎、佐藤彦五郎、松井十郎兵衛土手ノ上ニテ戰死ス、伊集院小藤次、日高郷左衛門手負ス、西田要之進、岩城平右衛門、川北六左衛門、草野直太郎堀涯ニテ戰死ス、野津七二、上原八郎、菱刈七之助、伊藤正次郎、有川陽之助、横山勇藏、脇元喜之助、安田仲左衛門、市成彦右衛門、川上彦八郎手負ストイヘトモ、彼等カ勢ヒノ強キヲ不恐怖、味方ノ次第ニ損亡スルヲ不顧、兵氣勇銳ニシテ烈敷攻撃ストイヘトモ、少勢ナレハ手配シテ敵ノ攻其所不守、出其所必趨ノ策ヲナスコトアタハス、然ルニ喇叭ノ音後口之方ニ聞フ、狙撃ヲ出シテ見レハ、最初乘取シ臺場邊ヘ賊三小隊計、又大手門ヨリ右之方人家ヲ放火シテ是ヨリモ横ヲ打テリ、城内ヨリハ彌防戰ス、右之兩所ヘ纒十四五人ヲ配リテ是ニ當ル、岩切彦次郎戰死ス、凡三時餘之合戰ナレハ、彈藥モ已ニ盡ムトス、朝ヨリ糧ヲツカフニ隙ナク、敵後ヲ取切ケレバ彈藥糧ヲ壬生ヨリ送ルノ道タ、レタリ、跡ヨリ各藩之兵具我藩五番隊モ來續、大難苦戰ナリトイヘトモ兵氣不鈍、乍去先歸路之敵ヲ打破リ、味方ノ死骸手負人ヲ壬生ヘ送り、兵ヲ引揚彈藥ヲ多シ、兵之勞ヲ休メ明朝可攻落ト決議シテ靜ニ繰引ス、六番隊分隊ヲ以殿トナツテ廻源五右衛門指揮ス、此時伊地知助五郎戰死ス、稅所龍右衛門、山下喜之助手負ス、臺場堂了程ナレハ、大砲二發ヲ相圖ニシテ、當隊二分隊ハ一同ニ曳王聲ニテ迅速ニ懸破ル、賊兵散々ニ敗走ス、夫ヨリ道ノ儘ニ繰引ス、無程右ノ方畠中ヘ賊徒散兵シテ放掛ル、此方ヨリモ繰引ス、野崎善之進手負ス、原中ヘ次第第二屯集スレト、未タ當隊一分隊ハ戰ヒ果サルニ、東之方街道ヨリ彼等カ方ヘ打懸ル、銃聲相聞フ、味方ナラン哉ト小指旗ヲ振り見ルニ彼ノ方ヨリモ同ク旗振ル、五番隊ナルヘシト大キニ喜ンテ狙撃人數二人ヲ遣ス、五番隊長州等ノ勢也、當隊ヘ彈藥二荷ヲ送ル、即銘々胴亂ヘ入付タリ、無間モ壬生ヨリ因州勢モ來ル、戮力セテ可攻落ト議シテ又々當隊先鋒ス、二番ニ因州勢大垣勢次第第二城下ヘ、五番隊長州、大垣勢ハ本街道ヨリ押掛ル、賊兵城内ヘ集合シテ防戰トイヘトモ、味方人數モ増シテ嚴敷攻撃スレハ、半時計之間彼等カ銃聲衰ヘタリ、此時關ノ聲揚テ城門又ハカラ堀ヲ越攻入見ルニ、爰カシコニ夥敷死骸アツテ賊徒總テ落去リケル、一同ニ勝鬨揚テ城内ニ宿陣シテ堅ク守レリ、

兵具隊臺場ヲ討破リ、城涯迄及進擊候處、數千ノ賊兵城ヲ守リ、官賊相劣ラス發砲ニテ、八ツ時分賊後ヘ廻リ味方ヲ取卷キ、

我半隊長井上猪右衛門始トシテ諸隊ニモ戰死手負夥鋪ク、既ニ彈藥モ打盡シ、續ク味方モ無之難戰ニ相及ヒ、一先後ノ賊ヲ拂ント取テ返シ、散兵ニテ見事ニ討破リ、始ノ陣ケ原ヘ控ヘ候處、右ノ方ヨリ五番隊大砲隊大垣ト共ニ相掛リ、引續キ因州勢陣ケ原ヨリ相掛リ、彌勢ヒヲ得、我兵具隊大手ヨリ西ニ相當ル空堀ヨリ城中ヘ攻入り、城上ヨリ我隊印旗ヲ翻シ、味方是ヲ見テ發砲ヲ止、我隊戰死二人、半隊長井上猪右衛門、門伍長内藤金治、手負一人、宇都岩太郎、賊ノ斃ル者三百餘人。

○戸田氏共家記ニ云、賊兵宇都宮城ニ楯籠居候由ニ付、四月廿三日朝薩州勢ト合兵進軍之處、城下七八丁手前ニテ及接戰、頗ル苦戰ニ御座候得共、遂ニ討退ケ、賊兵不殘城内ヘ引籠候ニ付、直ニ二之丸迄討入候、然ル處薩州、長州、弊藩三手之斥候隊モ城外ニテ一小戰致シ、同所ヘ落合來候ニ付、軍議ヲ決シ、薩州勢ハ搦手ヨリ攻寄、長州勢ト弊藩人數ハ大手ヘ向ヒ及發砲、夫ヨリ必死極メ、諸手救應吶喊奮擊、因州勢モ應援致シ、遂ニ向背ヨリ城中ヘ乘入、賊兵ハ盡ク日光山之方ヘ落行申候、乃日暮ニ至リ總軍凱歌ヲ奏シ候、討死三人、大砲隊大島孝次郎、高木辰之助、先手組岩佐幸之助、手負六人、大砲隊高橋善之助、壯士隊栗田彌保次、兼用隊山田喜太郎、清水藤太郎、大橋源之助、先手組小寺庄次郎

○伊地知正治日記ニ云、四月二十二日、六番隊等壬生一宿、廿三日、六番隊等ハ大垣示談未明ヨリ宇都宮ヘ進擊之議定ナルニ、何分昨日之合戰ニ宿中人馬悉ク逃去リ差支候故、漸六ツ半時ニ至リ整列、六番隊長野津七次、御兵具方一分隊長井上猪右衛門、原註、長大右衛門、大砲半座、山彌介、白砲二挺、原註、小頭土師孫市、繰出シ、引續テ大垣一中隊大砲一門宇都宮ヘ四ツ時頃着、賊徒ハ城ヨリ十町位前廣野ヨリ町口ニ入ル處ニ砲臺ヲ構ヘ、左右ニ步兵ヲ二町計ツ、散開シテ待設タル様子故、六番隊モ如法散隊ニテ押掛、賊徒ノ大砲三發モ不打得ノ間、直ニ駈入り賊徒追散シ大砲一門分捕、夫ヨリ進テ町内ニ進入、銃砲コモコモ發シテ抗賊ヲ打拂ヒ城涯迄押詰、八ツ時分迄砲戰、兩藩屢進テ城ヲコヘ高土手ノ上ニ押詰、賊ヲ打コト數シレス、賊亦能防禦シ味方ニモ死傷不少、斯ル處ニ賊徒元來大勢ナレハ、

十九日宇都宮ヲ改陥タルノ日、會津並江戸脱走ノ歩兵等千五百ト聞ヘタルニ、尙昨日岩井ヨリノ落武者渡邊總之助以下六百位加之由也、

裏路ヨリ廻テ三方ニ散開シ、味方ノ通路ヲ絶ツ、運送ノ彈藥ヲ奪ハレタリ、味方一分隊位ツ、手分シテ度々是ヲ追散セト

モ、味方彈藥盡キントシ、兵糧路ナキカ故、大垣勢殿スレハ薩兵賊圍ヲ打破テ通路ヲ開キ、廣野ニ出テ備ヲ立換ヘ相戦フ處ニ、五番隊并長州、大垣ニ中隊本街道ヨリ押寄タルヲ以テ再度進撃ス、

五番隊ハ五ツ時結城ヲ立テ、小山驛ニテ六番隊等ト調合セントテ小山ニ着タルニ、聊間違ノ故アツテ、六番隊ハ早宇都宮ヘ打向タル由ナレハ、早ク應援セント打立ノ處、早新田邊ニ砲撃手近ク聞ヘタレハ、安塚邊ナラント云、

軍議ニテ云、大垣、因、土ノ大勢アレハ安塚ノ軍ハ掛念ナシ、速ニ宇都宮ヲ破ハ賊徒自ラ敗走シテ安塚ノ應トナルヘシト、進テ宇都宮ニ着シ、市中散布ノ賊徒不殘追散シ、六番隊長州、大垣ノ人數ト手分シテ八幡山ト城攻ニ取カ、リ、銃砲齊發進テ外郭乘落シ候得ハ賊徒城ヲ捨テ八幡山ヲ逃レテ日光邊ヲサシテ散々ニ落失タリ、時ニ七ツ半時分、

落城近ニ臨テ因州一小隊位爲應援出軍、土州ハ絶テ出兵セス。

去ル十九日、賊徒ヨリ城中并町家ハ不殘燒拂タレ共、土屋敷ハ其儘ナレハ、長州大垣ハ郭外ヲ守リ、薩、因州ハ郭内ヲ守リ其夜ヲ明ス、此日打取全ク首ヲ揚シハ百十級也、二百餘ト云分捕大砲軍馬彈藥帳留等其數ヲ不知、味方討死十五人、五番隊 上田友輔、六番隊 川北六左衛門、永山覺太郎、加納次右衛門、築地宗次郎、松井十郎兵衛、鶴木吉次郎、岩城平右衛門、西田要之進、草野直太郎、伊地知助五郎、岩切彦次郎、佐藤彦五郎、足輕井上伊右衛門、内藤金治、手負三十人、島津式部、有馬藤太、六新八郎、河野伊兵衛、美代藤之丞、野崎善之進、上原八郎、野崎吉之丞、野津七二、菱刈七之助、有川湯之介、松元清右衛門、横山勇藏、安田仲左衛門、脇元喜之介、伊藤正二郎、市成彦右衛門、宇宿彦之丞、伊集院小藤次、山下喜之助、日高郷左衛門、矢野八次郎、廻源五右衛門、川上彦八郎、上原藤十郎、税所龍右工門、龍右衛門後達ニ

死ス、足輕宇都宮太郎、町夫幸之助、人足平助、廿四日、宇都宮家老戸田三左衛門百八十人ノ兵ヲ引テ、主人越前守様ヲ守護シテ館林ニ迦シ居候處、今日歸城ニ付、郭中ノ警衛引渡、二十五日、東山道總督府ヨリ土民安堵ノ標札立、二十七日戸田越前守様御歸城。

○慶應出軍戰狀ニ云、五番隊四月廿三日二十三日ノ誤、五ツ時分境宿進軍、八時分結城城下町へ着、則致探索候處、賊三百人餘ニテ下館城ヲ乘取籠城イタシ居候段同藩申出候付、長州、大垣、申談攻撃之策ヲ定、翌廿四日二十三日ノ誤、早天ヨリ進軍之筋相決シ居

候處、無程退散之報知有之候付、廿四日二十三日ノ誤、五ツ時分結城進軍、然ルニ小山邊迄繰出候處、宇都宮之方ニ相當リ砲聲烈敷相聞得候付、速ニ進軍イタシ候得共、八九里之道程漸七ツ時分宇都宮へ着、然ルニ六番隊並二番砲隊半隊、大垣一小隊ニテ早天ヨリ及攻城候處、賊三千八百人餘籠城嚴敷致防戦、甚苦戦之様子ニテ、直様進テ町口之砲臺ヲ一時ニ追崩シ、城西之堀際迄烈敷攻付賊兵悉城中へ追込、諸隊ト合シ追追手口ヨリ攻入候處、賊防禦之術ヲ失ヒ悉散潰シ、日光街道之方へ落行候付、四番分隊ハ八幡山之賊ヲ追落シ、一里計追討イタシ、及日暮候付、人數悉ク曳揚城内へ繰入、城外ハ長州、大垣相固、城内ハ薩、因之兩藩ヲ以相固候、此日賊之百五十人餘打取候、五番隊 戰死一人。上田友輔、

○戊巳征戦紀略ニ云、四月二十三日、小山驛ニ到ル、壬生ノ官軍薩州、大垣ノ兵宇都宮ヲ攻メ、賊ノ爲メニ後ヲ絶レ苦戦スルト聞キ、我兵及薩、垣、因ノ兵直ニ驅付ケ、應後シテ城及ヒ明神、八幡ノ二山ヲ攻ム、戦尤烈、薄暮賊悉ク敗走シ城陥ル、賊死者百許、我嚮導河邨源之允、鼓手永田峰次郎死ス、嚮導百村發藏傷。

○内參謀戰報
四月廿三日、宇都宮攻城ノ後詰トシテ、早朝壬生城相發シ可申ノ處、昨日大雨中ノ戰爭ニテ多ク器械衣服ヲ損シ、彼是手間取、已半刻前壬生進軍致シ候、途上追々砲聲相聞候ニ付、差急幕田邊迄相進候處、砲聲相絶候ニ付、最早落城致シ候義ト失望仕ナカラ、殘兵ナリトモ追撃可仕ト彌急速ニ馳付、宇都宮ヨリ半里許此方ニテ兵食致サセ進軍仕候處、同所市外之曠野ニ薩藩暫時休兵ノ體ニ相見候ニ付、右同藩大迫喜左衛門、種田左門へ進撃之儀應接仕、直チニ一小隊ツ、大手搦手ヨリ取懸リ、薩藩ト、モニ一時奮撃仕候、此時長州、大垣ノ兵ヨリモ烈シク發砲致シ候ニ付、申ノ刻前賊兵日光路へ敗走致シ候、依之薩、因一齊城内へ討入、直チニ本丸ニ陣取、終夜嚴戒、翌廿四日本丸ノ陣ヲ引拂ヒ、當城老臣戸田三左衛門へ引渡シ、城外ノ市中へ宿陣仕候、其節手負討死分捕左之通御座候。

討死 佐分利鐵次郎隊 足羽篤之助 天野祐治隊 石田仁三郎
砲長助役 河田左久馬家來 元桑名脫藩 三崎次郎

復古外記 東山道戰記 第十二 明治元年四月二十三日

五三五

手負

佐分利鐵次 深手

歸營

竹内八百吉

同

後藤鉄五郎

天野祐治隊

後死

淺手 岸本又市

同

岡山忠三郎

御旗持

深手

山根榮七

分捕

一大旗 文東照

一流

一賊徒同盟書ト相見候卷物三

四宮要之助家來

一大砲一門

天野治隊

一馬 二疋

河田左久馬家來

右之通御座候此段御達仕候。

四月廿五日

河田左久馬

池田輝知家記

○輝知家記ニ云、四月廿三日早且賊再ヒ壬生城ヲ侵サントス、依之薩州、大垣兩藩ノ兵又安塚ニ迎戰シ、大ニ之ヲ破リ、追躡シテ宇都宮城ヲ攻撃ス、我藩亦早朝進軍可致ノ處、昨日大雨中ノ激戰器械損傷不少、修補等相加、已半刻河田左久馬、佐分利鐵次郎、原註、砲天野祐治、原註、一池田相模守人數ヲ率ヒ、壬生城ヲ發シ、途上砲聲相聞、急行幕田迄進軍ノ處、砲聲相絶候故、既ニ落城致シ候儀ト失望ナカラ、殘賊ナリトモ追擊セント彌迅速ニ馳付候處、宇都宮市外ノ曠野へ薩州兵休憩中ニ付、同藩大迫喜左衛門、種田左門へ應接、賊狀承り候ニ、同藩今朝宇都宮城攻撃、多勢ノ賊却テ背裏ニ出及夾擊、殆ント苦戰、漸ク一方ヲ衝破リ當所迄引揚候旨申聞、我兵一同憤懣ニ堪ス、更番進撃ノ儀申置直様進撃、天野祐治一小隊大手ヨリ、佐分利鐵次郎一分隊、原註、砲池田相模守人數擲手ヨリ攻懸リ、薩州兵モ相續キ、且長州、大垣兵モ大手ヨリ四面還擊ス、此時我兵薩州兵ト勇奮擲手ノ陣壘ヲ越へ城内ニ乘入候處、賊其根據要地タルヲ以テ必死防戰、蘆舎林藪ノ間ヨリ彈丸如雨發射候トモ、更ニ不屈益勇進短兵接戰悉ク擊破リ、直チニ本丸へ衝突ス、時ニ我士官宮川達之進菊章ノ大隊旗ヲ奉シテ先進、士卒奮勵死ヲ顧ミス進鬪ス、賊所々ニ於テ抗衛候ヘトモ遂ニ不能支、日光路ニ敗走、申半刻當城ヲ恢復ス、我兵即チ本丸ニ布營、終夜嚴戒、翌日宇都宮老臣戸田三左衛門へ城ヲ引渡シ、本丸ノ營ヲ拂ヒ市中ニ宿陣ス、當日賊ヲ斃ス其員ヲ不知、原註、此役ヲ總

督府ヨリ大垣、西大路兩藩へ兵食方命セラレ出張、廿二日安塚開爭ノ節、戰地へ糧食運送中、賊間道ヨリ侵入右糧食ヲ掠奪シ、同夜薩州、大垣兩藩宇都宮へ進軍候ヘトモ、右兵食散亂糧米相達セス、依之我カ輜重方ニテ糧米ヲ炊キ、右兩藩及ヒ土州藩へモ轉輸致候事、吾軍死七人。砲隊長足羽篤之助、河田佐久馬家來三崎次郎、天野祐次配下石田仁三、傷十人、佐分利鐵次郎配下竹内八百吉、後藤鐵五郎、岩本又市、郎、松本藩兵隊尾花忠兵衛、松澤鎮齋、吹上人數鈴木角之丞、熊倉源吉、岡山忠三郎、吹上人數久保鶴吉、永多勘藏、大竹作彌、渡邊作十郎、山岡隊草木榮次郎、旗持足輕榮吉。

○池田德定家記ニ云、四月廿三日午刻宇都宮へ押寄、諸藩相交砲戰屠城候。

○東山道戰記ニ云、薩一小隊大砲三門、吾藩一小隊大砲一門四月二十二日夜壬生町ニ泊シ候處、此夜岩井口ノ官軍ヨリ使來リ、明二十三日宇都宮へ討入ノ心組ニ付、壬生口ヨリモ同様可討入様被致度トノ事也、因テ明日ハ宇都宮攻城ト覺悟罷在候處、薩藩ヨリモ此旨達シ相成候間、專ラ其用意ヲ致シ、翌廿三日拂曉壬生ヲ立テ宇都宮へ及發向候、然ルニ此日ハ薩藩ト吾藩ノミニテ因土ノ二藩ハ出兵無之、何ノ氣色モ不相見候間、竊ニ考へ候處、是ハ岩井口ノ三藩ヲ頼ミニ致シ候事ニテ、因、土へハ少シモ不謀リシ事ト被察候也、時ニ壬生ヨリ宇都宮へハ道程四里半ノ處追々進入致シ、最早宇都宮へハ二十丁許ト相成候處、西河田村ト云所ニテ賊ノ斥候歩兵二十人許ニ行逢ヒ候間、薩兵ヨリ二三發相發シ候處、歩兵ハ悉ク逃去候、是ニ因テ俄ニ足ヲ定メテ宇都宮近ク進入候處、町ノ入口關門際ニ臺場ヲ堅ク築立、大礮並銃隊等配リ居候様子故、薩兵忽チ撒兵ニ配リ掛ケ、麥菜等生茂リ候田畑ノ中へ馳入候間、吾藩モ同シク左ノ方へ撒配致シ候、此時賊ヨリハ大小砲共夥シク打出シ、砲丸ノ來ル雨ノ如クニ候得共、官軍何レモ事トモセス、少頃ニ臺場際迄進ミ寄候處、官兵ノ放ツ玉ニテ賊兵五六人斃レ候間、賊ハ之ニ懼レ候哉、關門際ノ賊ハ皆々散テ城中へ逃入候、續テ官軍ハ城際虛堀邊迄押寄候、然ルニ賊ハ思ヒノ外ノ大勢ニ有之、官軍ハ僅二百人ニ不足ノ小勢ニテ城郭少シ許リ取圍ミ候トテ、中々此城可落トモ不被思、殊ニ岩井口ノ兵モ不入來、八ツ時頃迄打合候得共追々彈藥モ竭カケ候間、甚以テ苦戰ノ至リ、最早一人モ不殘討死ト覺悟致シ居候處、薩兵ヨリ使來リ、一ト先ツ野原迄引揚ケ可申哉ト申サレ候間、其意ニ隨ヒ繰リ引キニ退キ來リ候處、早ヤ關門際ハ賊兵廻リ居リ發砲シテ妨ケ候間、吾藩ヨリ霰彈ヲ發シ擊立候處、漸々逃去リ遂ニ野原迄引揚候也、此時少頃休憩致シ居候處、又城ノ東ニ方テ

徐々ト退キ、薄暮ニ城門ヲ出テ大澤道ニ退ク、時既ニ初更也、敵軍敢テ追ハス、我軍退ク事三里、德次郎、大澤ノ二驛ニ止マリ、兵ノ死傷ヲ筭ルニ九拾人ニ至ル可シ、小山、諸川、安塚、宇都宮總括七戰、創者百七拾餘人、死者六七十人ニ至ル、此日ノ戰爭辰ノ時ニ起テ申ノ末ニ終ル、尙防禦セハ數日ヲ支ユ可シ、然レ共既ニ退軍ノ意有ル故ニ強テ死戰ヲ遂ルモ益無シ、依テ黄昏ニ至テ軍ヲ收メタリ、苦シ外見今日ノ時機ヲ知ラサル者ヲシテ論セ令レハ、宇都宮ハ上、下野州、奥羽ノ咽喉ニシテ專要ノ地ナレハ、之ヲ卻クハ拙策ト云シカ、左ニ非ス、此時奥羽同盟未タ成ラス、會津兵又出師爲サス、加之彈藥闕乏糧亦盡ク、若因循スル時ハ敵兵治路ヲ斷テ我兵殲ト成可シ、故ニ此機ヲ知テ速ニ軍ヲ退ルハ眞ニ大鳥氏ノ神筭ト云ツ可シ、余此日銃創ノ痛ミ少ク去テ徐歩爲ス事ヲ得ル故ニ、午時本營ノ後面苦戰ノ時兵ヲ率テ戰フ、忽チ痛ヲ發シテ歩行成ラス、駕ニ乘リ兵隊ト共ニ城中ヲ出、大澤ヲ距ル半里小林邑ト云ヘル宿ル。

二十四日、朝辰時、我軍大澤驛、小林邑德次郎驛ヲ發シ、巳ノ半ニ至テ今市驛ニ達ス、會津藩日向內記、原平太夫等百三十人ノ兵ヲ率シ此地ヲ護衛シタリ、彦根藩士ノ首五級ヲ街外ニ梟シタリ、我兵暫時休憩喫飯、終テ午後出發、行軍二里日光嶽ノ半腹鉢石街原註、俗日、光街ト云ニ達ス、夫此土ノ地形タルヤ、西北ハ高嶽巍峩上、下野州、陸奥ニ連リ、東ニ高原、毘沙門ノ二嶺有リ、絹川、大谷川ノ二大河有リ、水色藍ノ如ク深サ數十仞、急流矢ノ如シ、船生、大渡ニ驛ノ下ニ至リ合テ一ツト爲リ、直チニ阿久津川ニ至リ常陸國那賀郡ニ出、水戸ニ流テ海ニ出ル、其源則チ中禪寺ノ湖ヨリ出ル者也、南方ハ今市、大澤、德次郎、宇都宮ノ郷有リ、此ノ一路通スル耳、其他上、信、陸奥、北越ノ隘道有リト雖共、絕壁削カ如ク谿壑深キコト數百丈、纒カニ一人ノ往來スルニ難シ、寡兵ヲ使テ衆ヲ拒クニ最上ノ地形タリ、此休憩廿五日辰半、我兵隊盡ク神廟ニ參詣ス、其壯麗目ヲ驚ス、二十六日、東都ヨリ脫兵鎮撫トシテ松平太郎騎兵八騎隨從シ、醫官小林文周、青木文信來ル、依テ創者ヲシテ悉ク治療令ム、吾軍既ニ多クノ創者有ト雖モ曾テ醫官ニ窮ス、幸ニ脫走中望月元有ナル者有リ、然ト雖モ貳百人ニ至ント爲ル創人豈一醫ノ能ク治療爲ス可キニ非ス、故ニ腐敗シテ聊ノ瘡ト云ヘ共盡ク腐爛ス、爰ニ於テ普ク治療ヲ施スニ至レリ。

○慶應兵謀秘錄節略ニ云、四月廿二日、撤兵隊大新田ヘ出張、廿三日、宇都宮城下ヘ敵襲來趣報告有之、依之速ニ大新田ノ

兵隊ヲ引纏ヒ應援ニ至ル、此時早ヤ砲聲頻ニシテ城下藪中ヨリ發砲、敵味方不分明、依テ撤兵隊海道口ニ相固メ、第一小隊江戸口ヲ守ル、加藤平内此ヲ指揮ス友部平四郎ハ人家ノ明家ニ入り糧食ヲ整フ、此日凌霜隊ハ江戸海道ヘ出、薩州運送ノ白砲彈藥ヲ奪ヒ城中ヘ入ル、七連隊ハ桑名士官隊ト城中ヨリ明神、八幡ノ兩山ヘ伏兵ニ出ス、晝九ツ時小野寺主稅ノ隊城中ヘ入り敵ヲ防ク、此時兵卒貳人戰死ス、大砲隊工兵ニテ下河原門ヲ防ク、此時工兵多人數戰死ス、八ツ時第二傳習隊ノ頭取大川鉦次郎城外ノ敵ヲ打ントシ出兵ス、終ニ明神山ヘ至ル、下河原門ノ脇土手ヘ薩兵四五人討入ル、此時大砲發砲、小銃烈シクシテ終ニ敵退去ス、直ニ大砲門外ヘ引出シ烈ク戰フ、總軍城中ヲ出テ八幡山ニ陣ス、此時撤兵隊第一小隊持場江戸口ハ敵大垣ヲ先鋒トシテ薩、長、因、土ノ諸藩襲來、味方ワツカニ四拾有餘人、砲發戰爭數刻、終ニ不能保兵隊過半戰死、加藤平内始殘ル土城中ニ入ル、然ルニ早已ニ大鳥氏始メ總軍城中ニ入り不有、會、桑ハ河原門ヨリ日光道ヘ引揚、夕七ツ時敵ハ八幡、明神兩山ヘ襲來戰フ、下等士官家内金六ハ兵糧ヲ城中ヨリ明神山ヘ送ラントテ大手先ニテ被打、城中ニ入り死ス、總軍終ニ城ヲ捨テ日光山ヘ引揚、此時ノ戰爭彈丸雨霰ノ如シ、諸隊不得止宇都宮ヲ出ツ、江戸口守衛ノ士官近藤安左衛門ハ行衛ヲ不知、相曾多門、田中雅樂助、岡亘ハ殘士七人ヲ引連城中ヘ入ル、然ルニ城ハ早已敵ノ有トナリ砲發如雨、不得止出城、大砲隊同護衛七連一小隊下河原門ノ内外ヲ防ク、護衛隊差圖役松葉權平ナル者本丸ヘ彈藥周旋ニ來リシ處、最早總軍日光山ノ方ヘ引揚味方壹人モナキ趣立戻リ申聞、速ニ下河原引拂日光山ノ方ヲサシテ行、此戰ヤ空シク開城スルノ云々ハ、傳習第一大隊ノ長秋月登之助並内藤隼太ハ手負ニツキ日光山ヘ差送り、第二傳習隊參謀森三ニ丞ハ戰死ニ依テ、傳習步兵心クシク奮擊突戰ノ勢ナク、撤兵隊ハ城外ニテ戰ヒ、七連隊ハ八幡、明神兩山ヘ出張、其他總軍各所夫々出張シ空城ノ如キ形勢故、敵ハ彌々銳勢ニ成リ、暫時ノ間ニ堀際迄攻來リ、已ニカラ堀ヲ越入來リ、守兵不得止日光山ヘ退ク、廿四日朝六半時、諸軍大澤ノ驛ヲ發シテ今市ノ驛ニ至ル、於是諸兵追々集リ來リテ第七連隊第貳傳習此驛ニ宿ス、撤兵隊、第一傳習大砲隊、會桑士官隊、草風隊何レモ鉢石ノ驛ヘ引揚、此驛ヲ本陣ト定ム、廿五日、日光山ハ回天隊、草風隊ニテ守ル、上州口足尾村ヲ御神領獵師隊之ヲ守ル、其勢ニ百有餘人所々屯集シ敵ノ侵襲ヲ待ツ、廿七日、江戸ヨリ松平太郎ハ兵隊鎮撫トシテ來、大

鳥氏ニ談判有之、此夜此ニ宿ス、廿八日、松平氏持參スル所ノ金ヲ大鳥氏ニ送り、并醫師松本良順、青木、小林、三浦四名ヲ引渡、終ニ南ニ歸ル。

○泣血錄ニ云、四月廿三日、敵進自間道急襲宇都宮、時諸軍守衛頗怠、敵已傳壁、我兵急與七聯隊出守明神山八幡山、城兵苦戰自辰至午、請援於我、我兵乃分入城、多賀等間城下戰聲、疾驅還救、敵遂退走、我兵出城追之、敵之援兵又至、我兵退、敵復蜚集傳城、大鳥謂、諸軍出江戸以至日光爲志、且恢復之事前途極遠、不可專致死於此、遂棄城而退、明神山爲宇都宮之要勝、我兵據險扼之、敵遂不能尾殿而退、廿四日、諸軍盡至日光、謁神席、倉田、國枝等與我隊帥皆欲一戰、張兵勢、衆方憂君側、欲速赴越後、遂辭諸軍踰高原之險、東入會津。

○板倉尙弼家記、勝靜戸田忠友ニ贈ル書東略ニ云、勝靜父子日光山宿坊へ立越、東山道御總督軍門へ罷出、降伏謝罪仕、尊藩へ御預ケ被 仰付候處、俄ニ戰爭混亂、兵火城中迄致延燒候砌、尊藩御附人之衆ヨリ早々立退候様被申聞候ニ付、奉待天裁候身分、勝手立去候儀深奉恐入候旨相斷候へ共、猶達テ被申勸候ニ付、隨意立退不苦旨證書請取、近村へ相避居候處、砲聲益烈敷、急迫之際主從分散何方ヲ心指可罷越目的モ無之、無餘儀一ト先日光山宿坊へ立戻リ、事靜リ候ハ、可訴出ト相心得山路潛行仕候折柄、脱走之徒ニ被擁去、遂ニ心ナラスモ會津表へ罷越、入寺屏居時情相伺申候。

二十四日、二督、將ニ牙ヲ忍城ニ移サントス、適賊兵館林、及ヒ忍ニ逼ルノ聞アリ、館林藩モ亦急ヲ報シテ援ヲ乞フ、因テ其進軍ヲ止ム、是日板橋驛ヲ發シ、江戸ニ入り、因幡藩邸ニ次ス、遠藤胤城ヲ留メテ板橋傍近ヲ警守セシメ、薩摩、忍、岩村、飯田四藩兵、及ヒ因幡、土佐二藩兵ノ壬生ニ赴ク者ニ令シテ、忍及ヒ館林ニ赴援セシム。

不日因州上邸へ御轉陣被 仰出候付、三藩並永崎以下之輩へモ被申合、於右邸内總軍焚出候様用意取調可致旨、御沙汰

候間、此段相達候也。

總督府

執事

四月廿日

兵糧方 大垣藩 西大路藩

加勢 河越藩 並野呂萬次郎以下

其外略之 人數 中松井康英家記

○ 不日因州上邸へ御轉陣ニ付、會計方、兵糧方等へ御用向 御沙汰ニモ相成候ニ付、同様金穀方義モ被申合、右邸へ其役局相立可申、取調等ニ出役可被致旨 御沙汰候也。

總督府

執事

四月廿日

金 穀 方松井康英家記 市橋長義家記

○ 今日午刻早々 御進軍被 仰出候間、御達シ申入候也。

御礎陣

執事

四月二十四日

薩州 長州 大垣 岩村

飯田 岩城平 右御人數中大垣藩記

○ 西大路、高須二藩兵へ達書各通

今日午刻後御進軍被 仰出候間御達申入候、尤其藩ニハ江戸因州邸御礎陣ト被定置候間、右邸中へ繰込御用物兵糧等御警衛可致候事。

四月廿四日

御礎陣 執事

市橋長義家記
松平義生家記

○總督府日記ニ云、四月二十一日、館林藩ヨリ援兵ヲ乞フ、是ハ宇都宮敗卒落行候間、賊徒迫リ來候故也、二十四日、因州上邸へ御轉陣。

○秋元興朝家記節略ニ云、四月廿日、野州宇都宮落城ニ付テハ、野州壬生夫ヨリ在所館林表へ攻寄參候趣ニ御座候處、小家之義ニテ人數少之上、所々へ出兵等御座候ニ付テハ、猶々人數モ無之、殊ニ館林城ハ至テ手薄之場所故、早打ヲ以廿一日夜東山道御總督様迄御援兵之儀歎願罷在候。

○大垣藩記ニ云、四月廿四日、忍邊へ御進軍可相成之處、俄ニ御模樣替、因州邸ニテ御出軍之御軍議ニ相成、同夜因州邸總軍到着相成候事。

○松井康英家記ニ云、四月廿日、御達ニ付即刻罷出候處、大監察藤井九成殿出會、御沙汰之趣演達有之、今般所々賊徒致峰起候處、多勢之趣ニテ結城、宇都宮、古河及落城、今晚於千住宿ニ戰ヒ相始リ、東海道、北陸道 御總督ヨリモ追々出兵相成、當所 御總督明日千住宿邊へ御進軍相成候、是迄長々御賄等之義段々御骨折御苦勞千萬、就テハ御沙汰筋モ可有之處、右御進軍ニ付其義無之、此砌金穀御扱ヒ尙又御苦勞ニ存候、御出兵無之事故御心得迄ニ申入候、當所板橋驛ハ間道モ多由ニ付、如何躰之義出來候モ難計、隨分御心ヲ被付候様被申聞候、此段宜申達候様ニト之事ニ候。

○按スルニ、賊兵古河城ヲ陥ルハ訛傳ナリ。

遠藤 但馬守

板橋驛并近在取締向申付候條、當地ニ滯陣罷在可致盡力候、萬一賊徒襲來之勢有之節ハ、當府ハ勿論 大總督府へモ申出指揮可相受候事。遠藤胤城家記

○胤城家記ニ云、四月廿四日、御總督様應接方澤井徳右衛門公被參、御總督様但馬守へ御達可被成之旨被申述、依テ即刻戎服之儘板橋御本陣へ罷出、於應接之間北島仙太郎殿面會、同人御案内被致 御總督様御列座御逢有之候處、貴藩ニハ別テ御奮發出精御満足之旨御口上拜承被仕恐入候、然ルニ今般御本陣御引揚ニ付テハ當驛並近在迄取締被 仰付、御政道之御趣意染々相心得、鎮靜方可致旨仙太郎公ヨリ右御達書被相渡。

○總督府日記ニ云、四月二十四日、薩州岩村飯田之兵隊忍、館林之兩城へ救ヒニ差出ス、賊兵忍、館林へ迫リ候趣也。

○慶應出軍戰狀ニ云、四月廿四日、四番隊總督府御警衛トシテ致滯陣候處、諸所合戰報知モ有之、已ニ總督様御出馬之御賦候處、同日ニ相成御延引ニテ、夫ヨリ當日發軍、同ク廿九日宇都宮ニ致着陣候。

○松平忠敬家記ニ云、四月岩倉殿從軍、長藩へ附屬被仰付、其後四月下旬彰義隊散亂不穩候ニ付、在所迄出兵致候様長藩ヨリ通達ニ付出張罷在候。

○松平乘命家記ニ云、四月廿四日、野州之賊武州忍城へ迫ル之聞へ有之、御進軍之御達有之、然ルニ御軍議相替リ、兩御總督一ト先江戸へ御進軍、忍城應援トシテ飯田藩、當藩一小隊ツ、忍藩半小隊進軍御達、直ニ進發ス。

○飯田藩記ニ云、三月十七日、巢鴨庚申塚邊へ斥候被仰付人數出張、四月廿四日、急御廻章ヲ以今午刻俄ニ御進軍相成候間、其藩板橋宿迄線上ケ候様可致候事、同日於板橋宿左之通御達、

御總督俄ニ御差支之儀有之ニ付、因州屋敷へ御進ミ相成候、依之、薩州、土州、因州、岩村、飯田右五藩忍迄被差出候、軍監香川敬三被差出候間都合可被談候。

○壬生應援因、幡土佐二藩兵へ達書

賊徒不日館林、忍ノ兩城へ襲來之勢相顯レ、既ニ近隣へ兵卒潜伏ノ趣ニ付、旁以右兩城ヲ御礎陣ト被定候、中山道通行今夕蕨宿御泊陣、明廿五日御入城被遊候間、其御手人數緩急應援ノ機ヲ不失様御進退可有之旨被 仰出候、此段御達申入候也。

四月廿四日

參 謀

○同上再達書

御軍議之御都合モ被爲在、今日之處兩御總督因州邸へ御入被遊候間 總テ出兵ノ藩々館林、忍兩城へ致進軍、急テ援ケ可申旨御沙汰候間、此段御達申入候也。

總督府

四月廿四日

參 謀

以上池田輝知家記

○按スルニ、因、土二藩兵二十三日ヲ以テ江戸ヲ發シ、本日粕壁驛ニ至テ前令ニ接シ、明日越ケ谷驛ニ至テ後令ニ接ス、然レトモ遂ニ忍若クハ館林ニ赴クヲ果サス、二十七日ヲ以テ壬生ニ至ル。

○池田輝知家記ニ云、四月廿三日薄暮尾州邸ヲ發シ、其夜千住宿陣、同廿五日薩州平田九十郎總督府ヨリ之御使ニ罷越候、來意昨日督府之御進軍被 仰出候處、館林、忍兩城邊へ賊徒數千潜伏致候趣相達候者有之候ニ付、御進軍須臾御見合、昨夜八代州河岸弊藩邸へ御轉陣相成候趣ニ付、早々兩藩^{因土二藩}共右館林、忍之應援可致旨之御沙汰也、依之此日武州栗橋驛へ着陣。

二十五日、二督、大總督府ヲ候ス、大總督、命シテ部兵ヲ發シ、深川、本所傍近ヲ警守シ、船舶ノ出入ヲ譏察セシム。

○總督府日記ニ云、四月二十五日、大總督公へ兩總督公御成之事。

○督府參謀、大總督府ニ遺ル書

^上略、今日登城仕候管ニ候得共、昨日被命候深川、本所川筋固並船之取締等之都合モ有之、兩國橋向ニ有之候回向院ト申寺へ出張仕リ不能登城、此段御理申上候、右川筋之儀ハ乍不及可成丈盡力仕候間御放慮奉希候、尙警衛等手配之儀ハ相定次第御書取言上仕候、此段御含奉希候、仍早々如此候也。

四月廿六日

追テ今日九時ニ出馬ニ付、急キ短文亂筆高免希入候、尙又御用之儀ハ過日來差出置候兵士へ被 仰付、右回向院へ御申越奉希候也。^{東征總督記}

○督府、監察兼應接掛岩村高俊ヲ以テ軍監ト爲シ、信濃ニ差遣シ、本州諸藩兵ヲ督シテ賊徒ヲ討セシム、初メ古屋某^{作左衛門}等ノ飯山城下ニ入ルヤ、城主本多助成、急ヲ傍近諸藩ニ報シテ援ヲ乞フ、是日松代、松本、上田、高遠、高島、田野口、小諸、岩村田、飯田、須坂十藩兵、尾張藩兵ノ中野關門ヲ守ル者ト共ニ赴キ撃ツ、城兵之ニ應ス、賊兵潰エ走ル、明日、諸藩兵追躡シテ荒井驛^越後、ニ至ル。

○岩村高俊へ達書

東山道先鋒總督府軍監被 仰付候事、但、信州表出張被 仰付候事。^{岩村高俊事蹟}
○總督府日記ニ云、四月二十五日、岩村精一郎爲監軍、多田左市爲手附信州松代へ罷越ス、信州一國之諸藩ヲ指揮シ、賊兵ヲ討ツ爲メ尤菊之御旗ヲ奉シ候、城後ヨリ信州へ賊徒多人數討出候故也。

○岩村高俊事蹟ニ云、徳川慶喜ノ恭順ヲ唱フルヤ、旗下ノ歩兵順ハサル者アリ、奥羽ノ間ニ脱走シ、會津藩ト合從幕政ヲ恢復センコトヲ謀リ、兵ヲ所々ニ出シテ煽動ス、督府越信諸州ノ各藩方向定マラサルヲ慮リ、爲ニ軍監ヲ派遣ス、四月廿五日高俊ニ命スルニ、東山道先鋒總督府軍監トシテ信州表ニ出張スヘシト、高俊即時發程、晝夜兼行松代ニ到ラントス、途ニ一騎ニ遇フ、則チ松代藩ノ使ナリ、曰ク本月廿五日賊兵ト飯山ニ戰ヒ、官軍全勝、賊越後ニ遁走スト、是ニ於テ益急行シテ閏四月朔松代ニ着ス。

○當月廿一日夕、關東脱走步兵共之由大凡四百人程越後國高田筋ヨリ領分富倉峠相掛リ、俄ニ城下押入、翌廿二日右四百人計之内百人程、高田城下ヨリ二里手前新井ト申驛ヘ立戻リ候處、廿三日又候五十人餘押來リ、城下上町眞宗寺ト申寺院屯集罷在候ニ付、家來共ヨリ及應接候處、理不盡城地借用致度旨、其他不法之事共申掛ケ、一事モ採用難仕儀ニ付嚴敷申斷候處強テ及談判候、其始末不穩候ニ付、難捨置召捕方種々心配仕候得共、何分小藩ノ儀ニテ不任心底、依之、兼々申合置候儀モ御座候間、近領眞田信濃守、堀恭之進並當時尾州御取締所中野陣屋ヘモ援兵之儀早々申遣、專防禦之術苦心罷在候、中處、昨廿五日朝尾州松代兩藩人數爲援兵千曲川向岸安田村近邊迄到着仕候處、賊徒共眞宗寺ヨリ右川邊迄繰出、川ヲ隔テ信濃守人數ト砲戰仕候内、同人別手人數上流腰卷ト申所ヨリ相渡、弊藩人數ハ城内ヨリ繰出シ、双方ヨリ相挟ミ候處、賊兵直様弊藩人數ニ打掛、城門際迄攻寄候ニ付、城内ヨリ發砲致シ打拂候處、賊兵四五十人死傷有之、一旦敗走仕候得共、猶又人數相集、城西之方ヨリ攻掛候間、是亦打拂、尾州、松代兩藩人數ト一同嚴敷追擊仕候處、町家所々ヘ放火致シ、敗兵引纏ヒ富倉峠ヨリ越後地ヘ敗走仕候、其後兩藩人數城中ヘ繰入嚴重ニ城守仕、今廿六日早朝ヨリ猶又松代並弊藩人數、富倉峠迄爲追討出張仕候。下

四月廿六日

本多豊後守

飯山藩記

○飯山藩記ニ云、四月二十日、關東脱走之賊徒共、越後國新井驛ヨリ信州松本迄通行之先觸到來之趣、同州幸禮驛ヨリ進申來候段、中野陣屋ヨリ申越候處、弊藩之儀ハ右通行之道筋ニハ無之候得共、信越境ニテ接近之地、且越後筋ヘ口々間道モ有之候ニ付、賊徒共伎來モ難計候間、近藩松代、須坂並中野陣屋詰尾州藩等申談、夫々手配仕、越後境領分口々へ弊藩固人數差出候處、右人數到着以前領分富倉峠ヘ相掛リ賊徒侵入候ニ付、出張之者共應接中多數一時ニ城下ヘ侵入仕候得共、何分微力之弊藩無謀之戰爭モ難決、右三藩ヘ援兵頼遣遷延罷在候内、同月廿五日中野陣屋詰尾州藩並松代藩援兵城下近邊迄進來ニ付、賊徒兵ヲ分配シ、一手ハ城下外ヘ繰出シ援兵ヲ拒ミ、一手ハ城ヘ攻掛リ候ニ付、援兵ニ力ヲ得テ城内ヨリ大小砲一齊發砲候處、賊徒死傷ニ辟易散亂仕、市中ヘ放火ニ及ヒ候ニ付、人數繰出シ追擊致候内、援兵之勢城下ヘ繰込候ニ付、城内ヘ繰入猶策略ヲ定一同進擊仕候處、賊徒共越後地ヘ及敗走候間、富倉峠ニ弊藩追兵殘置、援兵之勢ト共城内ヘ歸陣仕候、討死一人、物頭荒木八郎兵衛、組足輕村松孫兵衛、手負三人、士分大砲方和田金五郎、徒士都筑新平、物頭本多丑藏、組足輕田中時左衛門、生捕輕卒三人、分捕數品、

廿七日、賊徒共爲追討、高田領新井驛ヘ一小隊、大砲一門繰出シ、同所ニ滯陣仕居候。
○徳川義宜家譜節略ニ云、四月廿四日、飯山城下屯集之賊徒三百人程モ追々差迫リ、寸時モ早々可討拂旨松代藩ヘ相談致シ、晝後弊藩水野康年等人數引率中野ヨリ出張之處、賊勢追々相迫リ、彌明朝決戰之旨松代藩ト相約シ、迅ニ田上村ニ野陣相張、山手ヘ篝火ヲ照シテ賊勢ヲ伺ヒ、翌廿五日六時田上村ヘ出陣、岩井村端街路ニ付、松代藩、弊藩大砲相備、一手ハ山之後ヨリ安田村山之半腹ニ相備候處、賊徒二人乗船致シ、安田村ヘ來候處、先鋒隊ヨリ砲發一人相斃シ、一人ハ逃歸候、已ニ千曲川ヲ隔テ砲丸頻發、晝後ニ至リ砲聲止候處、飯山ヨリ使節之者差越、豊後守歎願之趣ニハ、今日迄賊徒城下ニ屯集爲致候段、誠ニ以奉恐入、少人數不得止因循致候段、何卒豊後守朝敵之御嫌疑不蒙様松代藩、弊藩執成吳候様申出候付、兩藩申合彼是應接時刻相移候處、忽飯山城中ヨリ大砲連發、弊藩ヨリモ應援之銃砲數發、一同河岸マテ討入候處、千曲川雨後ニテ漲水多ク、船ハ四五日以前賊ニ被奪、向岸ニ繫キ有之候處、弊藩ヨリ滿水ヲ游キ、向岸之舟ノ纜ヲ切取、味方ヘ相回シ、松代藩、弊

藩同船ニテ相渡リ猶追討仕候處、賊徒敗走所々放火シ、殘兵富倉峠ヨリ越後へ逃去申候、依之、松代藩、弊藩人數飯山城中へ繰込、夫々手配申談置候、翌廿六日朝柳澤ト申越後ニ屬シ候村ヲ放火イタシ候注進有之、松代藩兵士八隊、弊藩勢一手ニ相成進軍仕候。

○真田幸民家記ニ云、慶應四年戊辰四月、賊北越ヨリ信州松本ニ出ルノ郵檄ヲ傳フ、飯山藩因テ緩急應援ヲ我ニ乞フ、即チ隣藩へ其旨ヲ通シ、且出兵ノ事ヲ告ク、河原左京ヲシテ諸隊ヲ總括シ之ヲ赴援セシム、十九日、先鋒一番隊、原註、司令蟻、川賢之助二番隊、原註、司令金、兒友太郎大砲隊、原註、但シ、砲二門、司令小、宮山三吉、清水一郎、左衛門、松代ヲ發ス、廿日、中軍發程シ新町驛ニ至ル、廿一日報アリ、賊道ヲ轉シテ富倉嶺ヲ踰へ飯山ニ入り、其勢ヒ將ニ中野、原註、陣屋ア、尾藩守之ニ至ラントスト、乃チ柏原驛ニ遊擊隊、神勇隊ヲ留メ、一番、二番隊淺野渡ヲ過キ小布施ニ陣シ、中軍布野ヲ過キ福島ニ陣ス、廿二日、一番、二番隊中野ニ入り、中軍小布施へ進ム、先是飯山藩ヨリ使者來リ、我兵ノ應援ヲ辭ス、我軍之ヲ憤リ并ハセテ飯山城ヲ屠ラントス、於是大ニ軍議ヲナシ、且詳ニ賊情ヲ探ラシム、廿三日、上田藩ノ兵二小隊福島驛ニ着ス、廿四日、我間歸リ報ス、賊飯山城下ヲ根據トシ、安田渡口ノ船ヲ西岸ニ奪ヒ、川西、靜間、蓮、替佐、神代其他要地へ兵ヲ出シ、進テ我軍ニ抗セントス、然レトモ賊魁高田藩ノ後援至ラサルヲ以テ、兵ヲ分チ、其半ヲ率ヒテ高田ニ往キ、之ヲ促カスト、於之諸隊ヲ部署ス、一番、二番小隊、大砲隊並ニ七番狙擊隊、原註、隊首、前島七郎斥候隊、無双砲隊安田渡口ニ向ヒ、小幡内膳之ヲ督ス、腰卷渡口ヲ斷ツニ八番小隊、原註、司令、山田兵衛、遊軍隊ヲ以テシ、奇兵一分隊ヲ置テ今井渡ニ備ヘシム、河西ノ本道ハ五番、原註、隊首、津丈之助六番、原註、隊首、津野寬男七番、原註、司令、吉村左織四番、原註、司令、越新八郎七番、原註、司令、野功一郎小隊共ニ散兵隊、神勇隊、大砲隊等河原左京之ヲ督シ、諸道並進テ其虛ヲ擣キ、以テ之ヲ塞セントス、申牌小幡内膳所督ノ兵中野ヲ發シ、西半牌田上村ニ着陣ス、賊河西腰卷、蓮邊ヨリ飯山城下ニ至ル迄ニ、處々ニ炬火ヲ棊置シ守備ヲ嚴ニス、是ニ因リ我大砲隊岩井村へ進ミ、村外ノ地利ニ依テ備フ、又二番隊田上村ノ林中ヨリ潛登シテ安田山ノ巔ニ出ツ、廿五日、天明、賊ノ斥候船ヲ渡ツテ東岸安田渡口ニ來リ、我軍ノ山ニアルヲ知リ驚キ西岸ニ逃レントス、我斥候ノ士之ヲ銃射ス、賊或ハ水

ニ没シ、或ハ舟中ニ倒ル、河西ノ賊軍之ヲ見、飯山河原ノ堤下ニ鱗次シ我軍ヲ打發ス、我二番隊川ヲ隔テ、之ヲ烈擊ス、賊軍多ク我兵寡シ、且賊ハ堤下ニ伏シ、或ハ人家ニ隠レ、或ハ積薪之内ニアリ、以テ我ヲ狙擊ス、我兵山ニ依リ疎松枯杉ヲ楯トナスニ過キス、彼我得喪不問シテ知ルヘシ、然レトモ我諸隊齊ク進テ殊死激戰ス、又大砲ヲ連發シ勢ヒテ張ル、中軍既ニ立ケ鼻ヲ渡リ淺野驛ニ至ル、岩村田ノ兵一小隊來リ加ハル、先是賊ノ斥候此驛ニ在リ、我軍ノ渡船ヲ見テ遁逃ス、安田口苦戰ノ報知アリ、之ニ依リ腰卷ノ軍ヲ分チ、應援ヲ令シ迅速ニ進軍セシメ、中軍替佐嶺ヲ越へ、漸次ニ賊兵ヲ驅ツテ其根據ヲ擣カントス、未牌飯山藩ヨリ使介ヲ馳セ、實効ヲ表シテ前取ヲ贖ナハント請フ、安田口ノ我軍ヘモ亦如此ス、替佐邊屯守ノ賊、我軍本道ヲ行進スルノ旌旗ヲ見テ退走ス、安田口ノ賊兵モ遂ニ潰散シ、將サニ飯城ニ入ラントス、然ルニ城内ヨリ俄然ト砲擊ス、安田ニアル我軍並ニ尾藩大呼連放シテ其聲援ヲナス、賊狼狽失措シテ城下ニ放火シ、富倉嶺ヲ踰へテ越後ニ走ル、時ニ尾藩ノ兵峻流ヲ游キ、西岸ノ船ヲ取り、我軍ト俱ニ川ヲ渡リ、道ヲ兩岐ニ分チテ進ム、我兵先ツテ飯城ニ入ル、尾兵之ニ次グ、中軍モ亦至ル、城外西南山中ニ賊尙在リト云フ、則チ三番小隊之ニ備へ、且兵ヲ四方ニ出シテ餘賊ヲ追擊ス、城後諏訪社ニ賊アリ、七番小隊、遊擊隊之ヲ進擊ス、賊丸雨ノ如シ、一隊不挫奮戰賊遂ニ退キ走ル、殘賊壹人ヲ生獲ス、此夜巡邏守備ヲ嚴ニス、土人來テ賊山谷ニアリト告ク、四番小隊之ヲ進擊ス、賊將ニ狼ヲ喫セントシ狼狽逃去ス、所獲若干、此役也賊兵ヲ殺傷スル多シ、然レトモ餘賊其戸ヲ水中ニ投シ去ル、且距離遠隔シ其詳ヲ知ルヲ得ス、我軍死一人、二番小隊小傷二人、大砲隊司令清水一郎、左衛門、門、二番小隊中島熊次郎、廿六日、八番狙擊隊並ニ高島藩ノ援兵一小隊着陣ス、小幡内膳七番、八番狙擊隊、一番、二番小隊、大砲隊ヲ督シ、富倉嶺ヲ踰へ殘賊ヲ狙擊ス、此日大雨、富倉村ニ宿陣ス、奇兵隊、遊擊隊、顏戸越ヲ經追擊ス、此一手小幡内膳所督ノ兵ト猿橋ニ於テ會ス、七番、八番小隊、散兵隊、神勇隊、無双砲隊長郷村ヨリ柴澤へ掛リ、北國海道柏原ノ軍ニ會シ、荒井驛ニ至ル、此日飯城ヨリ西北山中ニ殘賊潛伏ノ由報アリ、依テ五番、六番狙擊隊、及三番、四番小隊ヲ以テ之ヲ進擊セシム、賊戰フアタハス、間道ヲ經遁逃ス、廿七日拂曉、小幡内膳兩道ノ兵ヲ督シ荒井驛ニ進軍ス、諸藩ノ兵モ亦尋ヒテ至ル。

○松本藩記ニ云、慶應四戊辰年四月、關東脫走浮浪之徒古屋左衛門兵隊千五百拾人餘、越後國出雲崎出立、信州松本迄侵入之趣先觸到來、松代藩ニテモ右賊徒爲征伐人數差出可申旨、就テハ不取敢四月十九日兵隊先鋒一小隊差出、續テ人數六小隊出張、隊長林忠左衛門也、並大砲隊輜重隊等都合五百五拾人餘、善光寺海道へ進軍、丹波島邊へ到、數度賊情及探索候處、賊徒越後國新井驛ヨリ路程ヲ變遷シ、遠運動ト號シ不意ニ飯山城下ニ迫リ、本多候ト應接之趣相聞、右ニ付信州諸藩ノ人數、松代邊へ集會及軍議、善光寺海道ヨリ弊藩隊、且高遠隊長青山七藏隊並松代分隊應援ノ兵ト、飯山城ヨリ西ノ方中山八ヶ宿海邊ヲ相押へ可申段軍議シテ、賊徒ヲ討ントス、荒町、牟禮、柏原邊へ尙續詰候處、四月廿五日、松代隊其餘信州全國之兵隊信濃川ヲ沿、兩岸ヨリ進撃、賊徒ヲ攻撃、飯山隊ニモ應戰シ、賊大ニ敗レ悉皆越後ニ走ル、其後弊藩並高遠之人數、暫時柏原、野尻邊ニ滯陣。

○上田藩記ニ云、陸軍隊歩兵頭古屋作左衛門歩兵六百餘人率致シ、越後筋ヨリ善光寺通松本表迄罷越候趣ニ付、眞田信濃守様ヨリ使者ヲ以援兵之儀御頼有之、猶又尾州家中之條、陣屋出張之仁ヨリモ同様之次第ヲ以出兵之儀御沙汰有之候ニ付、直様用意仕置候處、四月十九日彼之者共彌右之通筋へ相懸リ進候趣ニ付、早々出兵イタシ吳候様松代表ヨリ申來候間、翌廿日ヨリ追々人數二小隊、繰出シ、眞田信濃守様衆へ打合、中野表迄進軍仕候處、廿五日ニ至リ賊兵千曲川西岸ニ屯集イタシ、安田村ニ出張有之候信濃守様衆川ヲ隔戰爭相始候由注進有之、尾州様衆へ打合直様出兵、安田村迄出張仕候處、信濃守様衆既ニ川ヲ越、本多豊後守様衆右兩手ニテ攻撃、賊兵敗走越後筋へ逃去申候。

○高遠藩記ニ云、慶應四戊辰年四月十九日、松代藩ヨリ急報ニテ、幕府歩兵頭古屋作左衛門其外役々兵隊共凡千五百人餘越後出雲崎ヨリ信州松本迄橫行之趣申越、引續松本藩使番稻村小市右衛門罷越出兵之談判ニ付、同國牟禮宿へ各藩集會軍議之事報知ニ付、直ニ二小隊引率廿一日同所へ進軍、松代藩ハ既ニ高田領荒井驛へ進候ニ付、直ニ同所へ進軍。

○高島藩記ニ云、越後國新潟邊屯集關東脫走之歩兵五百人許、追々信州路へ差廻リ候報告有之ニ付、松代飯山邊へ向迅速兵隊繰出候様中之條陣屋詰尾藩ヨリ辰四月十九日申越候付、不取敢翌廿日一小隊出張、廿四日、松代領福島村迄進軍之處、

松代隊長河原左京、小布施村ニ屯在ニ付及談判候所、賊徒襲來之形跡有之、同村守衛罷在候處、翌日ニ至安田村之方ニテ砲聲相聞候ニ付、急速飯山表へ進軍候様左京ヨリ談示有之ニ付、同處前迄相進候處、賊徒敗退ニ付、同人へ打合專守衛罷在、廿六日、飯山城中へ兵隊不殘繰入守衛罷在候、同月廿七日頃、敗賊高倉峠之方へ敗走ニ付、爲追撃拂曉尾州、松代、飯山、岩村田、並弊藩齊ク進軍、越後國新井驛ニ滯陣。

○龍岡藩記ニ云、戊辰四月、賊徒北越ヨリ信州へ侵入ノ由、當國中野ニ在ル尾州藩並ニ松代ヨリ本月廿日報告ニ付、同日夕應援トシテ一小隊龍岡出兵、同廿三日、松代へ參着候處、賊徒飯山口へ屯集ノ趣ニ付、同廿四日、同所出發福島村ニ宿陣、同廿五日、同所進軍ノ所、松代藩山寺丙太郎ヲ以飯山ニ於テ今朝戰爭ニ相成候旨報告セリ、小布施村迄相進候所、右藩監察北島一二馬ヨリ示談ニハ、同所滯陣可致、且ツ、信ノ列藩通行有之候者、此所ニ滯陣可致傳達候様申聞ニ付、同所ニ宿陣ス、其日飯山ノ方ニ當テ放火ト相見へ烟熾ニ燃上リ候間、斥候差出候所、安田村渡船場ニ於テ松代藩、尾藩等激戰、味方勝利ノ由承ル、同廿六日、中野へ進軍、尾藩ヨリ談判ニ付テ、直ニ飯山へ相進候處、最早賊徒敗走ノ跡ニテ、松代藩ト打合セ同城守衛罷在候。

○牧野康民家記ニ云、四月廿二日、關東脫走之歩兵多數越後國新潟へ上陸、夫ヨリ信濃國松本迄通行之人馬先觸書面同國牟禮宿迄到來、同宿役人ヨリ訴出候趣ニテ、松代藩人數繰出候ニ付、同藩ヨリ上田藩並當藩へモ應援之人數差出候様申越候段、上田藩ヨリ使者ヲ以通達有之、且中野御陣屋詰之衆ヨリモ書面ヲ以、同斷人數差出方之義申越候ニ付、不取敢人數其向寄へ差向ケ繰出ス。

○内藤正誠家記ニ云、四月廿日、越後表賊兵歩兵隊引率、松代邊通行之由注進有之、小諸田ノ口當藩申合出兵人數三十差出ス、同廿四日、小布施之方へ相越、松代藩へ談判之上、翌廿五日飯山城へ繰込、其後追々諸藩繰込相成、軍議之上同廿七日賊徒爲追討進軍、越後荒井驛へ宿陣、諸藩申合見張所並巡邏罷在。

○堀親廣家記ニ云、關東脫走之歩兵五百人程屯集罷在、追々信州路へ向候趣相聞候ニ付、應援人數差出候様中條御取締尾州出役ヨリ申來候ニ付、不取敢一小隊差出候。

○堀直明家記ニ云、四月廿日、近領本多豊後守ヨリ以使者在所信州須坂へ申越候ハ、關東脫走ノ歩兵五百人程越後國新潟ニ屯集罷在、夫ヨリ信濃國へ差向候趣、飯山表通行可致様子ニ付、援兵之儀頼申越候間、人數一小隊差出、且領分へモ差掛リ候哉モ難計、夫々用意人數差出手配仕候、

又云、弊藩人數飯山ヨリ半里許手前八州村へ宿陣ス、然ルニ援兵一旦斷リ相成、一ト先在所近境迄引揚、松代藩出兵ト出會、談議ノ上直ニ中野表へ出張、四月廿五日曉安田口ニ於テ尾州、松代、賊徒ト砲戰相始リ、上田藩、弊藩ニハ尾州、松代申合セ、赤岩灘口ヨリ高社山裏手ヲ安田口へ押ス、賊徒竟ニ越後路へ敗走。

○奥越戰爭日記節略ニ云、三月廿五日、會津若松へ著、夫ヨリ、廿七日越後國へ出張ト相極リ、四月十六日高田城下へ著、是ヨリ三里先キ新井宿ニテ不殘下宿シ、此所ニテ逗留ニ相成候内、同廿日ニ分隊致シ、信州飯山本多美濃守ハ城下へ繰込ミ、是又降參ニ相成ル、依之徳川方一同勇ミ立、越後ハ不申及、信州路迄一吞ニト存候處へ、信濃表へ出シ置候忍之者注進ニハ、此度中之條ト申ス所ニ官軍方凡三四百人計リ屯致シ、追々繰出シ候様子之趣申候ニ付、隊長ヨリ被仰出候ハ、此度官軍方凡三千人計リ押寄候風聞有之間、第二大隊ハ飯山ニ置キ、第一大隊ト中軍隊ハ新井宿へ引戻シ、本道ヲ嚴重ニ相固メ可申、飯山へモ嚴重ニ固メ候様申遣候處、廿五日曉七ツ時頃、官軍方信州松代、同上田人數先陣ニテ、外ニ大名七頭程家々之大旗、小旗押立、川向ヨリ徳川方之番兵所へ打込、九時迄烈敷戰候處、徳川方小人數故引色ニ相成候處、新井宿ニ固メ候人數迎ニ參リ、早速引上ケ、且飯山城下へ中軍隊百人計リ新手續込候處ニ、飯山モ官軍方へ内通ニ及ヒ裏切致シ、城中ヨリ徳川固場へ大小砲打出候故、徳川方城下市中へ火ヲ掛ケ、峠迄引上候跡ニテ、城下ニ兼テ用意致置候哉ニテ、地雷火五發計リ發シ申候、其節徳川方一同ニ新井宿迄引上候所へ、高田人數五百人程同所へ出張ニ相成リ、此所ニテ一宿致シ、廿六日九時出立ニテ、高田城下ヨリ三里東之方川裏町ト申ス所ニ徳川陣屋有之、不殘人數此處へ入込、暮六ツ時著。

○督府、古河藩ニ令シテ、軍糧ヲ壬生、宇都宮地方出征ノ官軍ニ供給セシム。

壬生邊出張之 官軍糧食甚乏候趣相聞候付、其藩ニオキテ右糧食儲蓄運輸等一切相引請、御差支無之様盡力可致旨總督御沙汰候事。

戊辰 四月

東山道先鋒
大 監

土井利與家記
古河藩記

○本條、藩記二十八日ニ收ム、今家記ニ從フ。

○古河藩記ニ云、右御達ニ付、米百五拾俵宇都宮へ差出申候。

野州宇都宮其他所々へ出張之官軍糧食取扱之儀其藩へ申付候間、城中之蓄穀、及ヒ民間之穀ヲ以不之様出先々々へ運送可致候、尤右價ハ至當之相場ヲ以請取候様可致候事。

四月 廿七日

右之通被 仰出候間御達申入候、精々御盡力可有之候事。

東山道總督府

參

謀

土井 大 炊 頭 殿 總督府諸達留
土井利與家記

○古河藩記ニ云、右御達ニ付、米四百三拾俵宇都宮表へ差出申候、

復古外記 東山道戰記 第十二 明治元年四月二十五日